

上 暮 地 新 屋 敷 遺 跡

— 農桑集落道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2011

富士吉田市教育委員会
山梨県 富士・東部農務事務所

平成 23 年 3 月 31 日

関 係 各 位

富士吉田市教育委員会
教育長 秋山 勝彦
(公 印 省 略)

刊行物の訂正について

『富士吉田市文化財調査報告書 第 8 集 上幕地新屋敷遺跡』の記載に多数の誤りがありましたので、下記の正誤表のとおり、お詫びして訂正させていただきます。

正 誤 表

ページ数	項目名	行・内容	訂正前	訂正後
例言	5	2 行目	玉川文化研究所	玉川文化財研究所
P19	3 竪穴状遺構	6 行目	土坑 1~4	土坑 2~4
		7 行目	土坑 1~4	土坑 2~4
P67	3-土坑	3 行目	長軸 100cm (調査部分のみ)・短軸 91cm・深さ 10.0cm	長軸 135cm・短軸 128cm・深さ 47cm
P108	1 概要	6 行目	1 号焼土跡	10 号焼土跡
P116	1 概要	3 行目	2 号竪穴住居跡 3 号竪穴住居跡	3 号竪穴住居跡 4 号竪穴住居跡
		4 行目	1 号竪穴住居跡	2 号竪穴住居跡
		5 行目	遺構確認面が 2・3	遺構確認面が 3・4
		8 行目	1・3 号竪穴住居跡	2・4 号竪穴住居跡
	2 竪穴住居跡	5 行目	東西 3.4m・南北 2.9m	南北 3.4m・東西 2.9m
		20 行目	南北 2.9m、東西 1.2m	南北 1.2m、東西 0.75m
P118	第 80 図 3 号竪穴住居跡	縮尺	1/60	1/30
P120	第 81 図 4 号竪穴住居跡 (旧・新)	セクション図 A-A'	カマド	炉
		セクション図 B-B'	炉	カマド
P142	3 結果	5 行目	3 号竪穴住居跡 (No.29)	4 号竪穴住居跡 (No.29)
	(3) 平安時代	1 行目	2 号竪穴住居跡および 3 号竪穴住居跡	2~4 号竪穴住居跡
P150	図版 1 種実遺体 (1)	1 オニグルミ 核	4 号竪穴住居跡	4 号竪穴状遺構
P154	2 遺跡の消長	22 行目	3,500calBC	3,500calBP
		24 行目	3,730calBC	3,730calBP
P155	第 86 図 凡例	6 行目	1,500~0calBC	1,500calBC~

富士吉田市教育委員会 歴史文化課
担当 藤原武

住所 〒403-0005
山梨県富士吉田市上吉田 2289-1
富士吉田市歴史民俗博物館内
電話 0555-24-2411
FAX 0555-24-4665

上 暮 地 新 屋 敷 遺 跡

—農業集落道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2 0 1 1

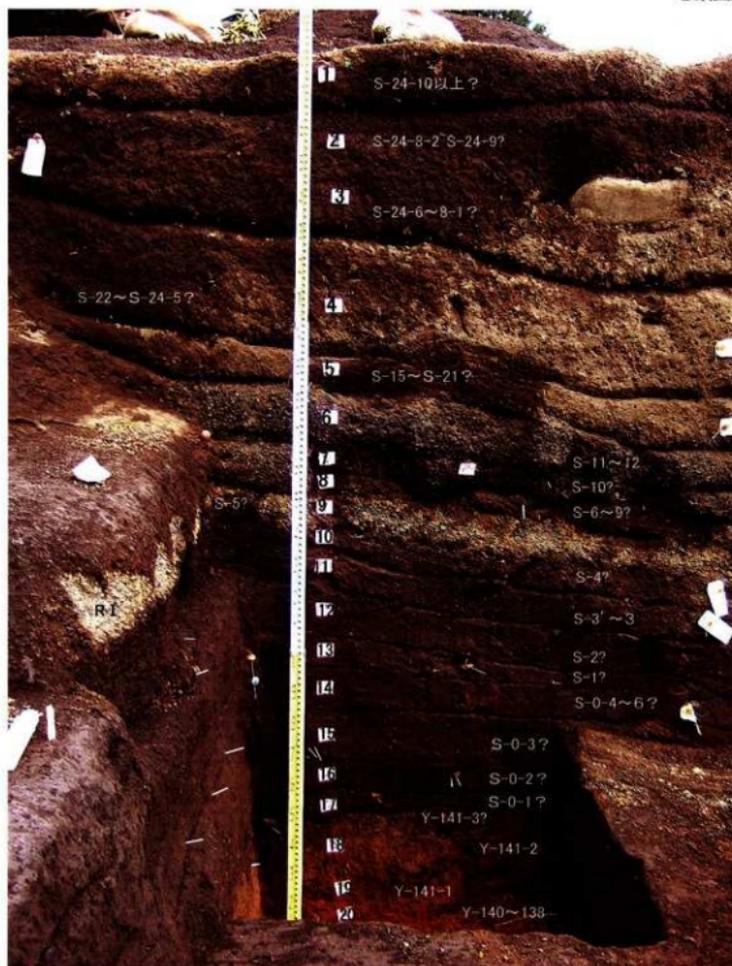
富士吉田市教育委員会
山梨県 富士・東部農務事務所



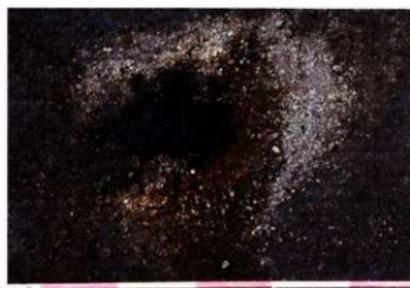
1 調査地全景（南西から）



2 出土土器



1 北東部トレンチのテフラ土層 (セクションポイント1-2)



2 362号土坑 (焼木痕)



3 362号土坑 (焼木痕断面)

発刊にあたって

富士吉田市教育委員会では、農業集落道建設工事に伴い、上暮地新屋敷遺跡の発掘調査及び整理作業を平成20～22年度の3年間にわたって進めてまいりました。

本市における数少ない大規模な発掘調査であり、今まで不明な点の多かった縄文時代～平安時代の本市の歴史を解明していく上で、非常に重要となる資料を多数得ることができました。特に縄文時代や弥生時代の上器は逸品であるとともに、周辺では数少ない時期のものであり、貝殻を用いた文様で彩られた縄文土器からは海浜部の人々との交流を、赤色顔料のベンガラで装った弥生土器からはその生産地である信濃との交流を、それぞれ伺うことができます。また、遺跡中には、富士山から噴出した多量の火山灰が堆積しており、いずれの時代においても富士山の火山活動とは無縁ではありえなかったことが分かります。特に、縄文時代の火山灰直下に埋もれていた焼失した森林の痕は、往時の火山災害の脅威を今に伝えるものです。

こうした多くの成果を取めた本書が、本市のみならず富士山麓の歴史を考えていく上で、その一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関並びに調査、整理作業に従事された方々に厚く御礼申し上げます。今後も一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。発刊のことばといたします。

平成23年3月31日

富士吉田市教育委員会
教育長 秋山勝彦

例 言

1. 本書は、山梨県富士吉田市上暮地大字新屋敷に所在する七畹地新屋敷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、中山間地域総合整備事業富士吉田北部地区農業集落道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、山梨県知事の委託を受け、平成20年5月23日から27日まで試掘調査を行い、同年7月3日から平成21年3月18日まで本調査を実施した。
3. 整理作業は、平成21年4月から平成23年3月まで実施した。
4. 発掘調査及び出土品整理においては、次に掲げる分析・鑑定を依頼した。

テフラ分析：七杉 陽（都留文科大学名誉教授）

石器石材鑑定：中井 均（都留文科大学教授）

放射性炭素年代測定：核加速器分析研究所

黒曜石原産地推定：明治大学文化財研究施設

炭化種実・炭化樹種同定：バリノサーヴェイ株式会社

5. 遺物実測の一部と遺物写真撮影は、以下の業者に委託した。

土器：株式会社 玉川文化研究所（第22図・第24図1・第51図567・568・第53図567・第54図588・第78図622～624・634）

石器：株式会社 テクノプランニング（第58～69図）

写真：株式会社 イビソク・寿福写真房（巻頭図版1～2・写真図版5～20）

6. 調査体制は以下の通りである。

事務局 富士吉田市教育委員会 歴史文化課（富士吉田市歴史民俗博物館内）

教育長 秋山勝彦・和光 泰（平成20年度）

部 長 湯山忠志

次 長 常盤 昇

歴史文化課

課 長 九川和年・広瀬久幸（平成21年度）・角田益雄（平成20年度）

博物館課長 堀内 真（平成20年度）

課 長 補 佐 奥脇和男・赤池包子・舟久保富清

主 幹 渡辺三千代（平成20年度～21年度）

副 主 幹 布施光敏・渡辺達也

副 主 査 篠原 武

臨 時 職 員 大森亜紀・高橋品子・武井邦安・占屋由美・渡辺 強・渡辺ひろみ

調査主体

発掘調査・整理担当 篠原 武

発掘調査参加者

天野智子 小俣久孝 金井 勇 茅沼ゆり子 川添重人 後藤明美 後藤すゑ子 後藤長男

小林正平 瀧口逸男 田辺秋太郎 萩原清次 堀内知子 宮下博美 山口光一 山口潤生

都留文科大学学生：池上浩徳 加藤麻弓 熊谷美奈 佐藤大介 長野荘一 那須 翔 廣橋里香

渡邊智子

京都造形芸術大学生：占屋 真

出土品整理参加者

天野智子 小俣久孝 金井 勇 川添重人 後藤明美 後藤長男 後藤すえ子 小林正平
高橋めぐみ 瀧口逸男 田辺秋太郎 中村明美 萩原清次 広瀬常之 堀内知子 山口訓生

7. 本書の執筆は、第1～5、7章は篠原が担当した。
8. 現地における写真は、篠原が担当した。
9. 編集は、篠原が担当し、図版作成は、篠原、大森竜紀、高橋晶子、布施光敏、古屋由美、渡辺ひろみを中心に実施した。
10. 発掘調査の資料は、全て富士吉田市教育委員会が保管する。
11. 調査成果の一部は、『2008年度下半期遺跡調査発表会要旨』山梨県埋蔵文化財センター・山梨県考古学協会、『富士吉田市歴史民俗博物館だより』31・33・34号で公表しているが、本書が最終報告であり、全ての記述は、本書が優先するものとする。
12. 発掘調査及び出土品整理では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
青木一男 阿部芳郎 網倉邦生 稲垣自由 上原健弥 亀井健太郎 金成太郎 櫛原功一
小池岳史 佐藤祐樹 篠原和人 末木 健 須賀博子 杉本悠樹 田口明子 千葉博俊 戸田哲也
奈良忠寿 新津 健 平野 修 保坂和博 保坂康夫 古谷 渉 正木季洋 宮内慶介 森屋雅幸
吉岡卓真（敬称略・五十音順）
13. 参考文献の一部については、以下の機関に御依頼し、図書の御恵贈を賜った。厚く御礼申し上げます。
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 清水町教育委員会 裾野市教育委員会 知多市歴史民俗博物館 長泉町教育委員会 沼津市教育委員会 東久留米市郷土資料室 日野市教育委員会 平塚市教育委員会 富士市教育委員会 富士宮市教育委員会 富士見市教育委員会

凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1. 調査区のグリッド設定は、国土座標（日本測地系平面直角座標體系）を基準に、国土座標（X座標-53718.375m、Y座標29792.355m）＝（グリッドG-5）と設定した（座標は、世界測地系に変換した数値を使用している。）グリッドの軸線は、国土座標の北東-南西軸と一致させた。グリッドは2m×2mで、各グリッドの呼称は、北角の座標名称を採用している。なお、各グリッドを4区画した1m×1mグリッド（北角側、東角側、西角側、南角側の順に1、2、3、4と区画）も併用し、遺物出土位置の記録に使用している。
2. 遺物の縮尺は、原則として、土器は1/2・1/3・1/4、石器は2/3・1/3・1/5とし、それぞれのスケールを付してある。
3. 遺構図面の縮尺は、1/40・1/60・1/80・1/100・1/200・1/300とし、それぞれのスケールを付してある。
4. 土層の色調は、『標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
5. 写真図版の縮尺はすべて任意である。

目 次

巻頭図版

発刊にあたって

例言・凡例

目 次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3章 基本層序と遺物出土状況	6
第1節 基本層序	6
第2節 層位別遺物出土状況	8
第4章 縄文時代の遺構と遺物	13
第1節 土器分類	13
第2節 縄文時代早期	17
1 概要	17
2 竪穴住居跡	17
3 竪穴状遺構	19
4 炉穴	24
5 土坑	24
6 築石遺構	27
7 土器集中	30
8 遺構外出土器	40
第3節 縄文時代前期・中期	65
1 概要	65
2 焼土跡	65
3 土坑	67
4 土器集中	67
5 遺構外出土器	71
第4節 遺構外出土の石器・焼礫	87
1 概要	87
2 石器	87

第5節 縄文時代中期後葉の焼木痕	105
1 概要	105
2 焼木痕	105
3 まとめ	107
第5章 弥生時代・平安時代の遺構と遺物	108
第1節 弥生時代中期後半・後期	108
1 概要	108
2 層序の矛盾	108
3 まとめ	108
4 遺構外出土土器	114
第2節 平安時代	116
1 概要	116
2 竪穴住居跡	116
第6章 自然科学分析	122
第1節 富士吉田市上暮地新屋敷遺跡の降下火山砕屑物層序（その1）	122
第2節 黒曜石製遺物の原産地推定	132
第3節 放射性炭素年代（AMS測定）	137
第4節 種実遺体と炭化材の同定	141
第7章 富士山の火山活動と遺跡の消長・分布について	154
1 はじめに	154
2 遺跡の消長	154
3 遺跡の分布	156
4 火山災害の一事例—縄文時代中期後葉—	156
引用・参考文献	157

写真図版

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

平成19年11月、山梨県富士・東部農務事務所（以下、山梨県）より、中山間地域総合整備事業に伴う農業集落道（以下、農道）整備地内が、埋蔵文化財包蔵地内に該当するか照会があった。本整備地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「上谷地新屋敷遺跡」に該当しているため、事前の試掘調査が必要であると回答した。その後の協議により、調査の日程については、遺跡まで重機が入るための仮設道が5月まで開通しないため、5月中旬に試掘調査を行うこととした。

平成20年5月13日、富士吉田市教育委員会は、文化財保護法第94条1項の規定に基づき、富士・東部農務事務所長から提出された「埋蔵文化財発掘の通知について」を山梨県教育委員会に送達（富20歴文発第33-2号）した。平成20年5月16日、山梨県教育委員会より、工事着工前に試掘調査をするよう通知（教学文第499号）がなされた。

試掘調査は、富士吉田市教育委員会歴史文化課職員が担当することとなり、平成20年5月23日から27日まで試掘調査を行った。その結果、縄文時代から平安時代の包含層が良好に残されていることが判明したため、山梨県と今後の方針について協議を行った。そして、本施工に伴い、原地形が改変され包含層が削平されることや道路線形の変更も困難なことが判明したため、山梨県の費用負担により、富士吉田市教育委員会が発掘調査を行うこととし、平成20年7月10日に「中山間地域総合整備事業富士吉田北部地区農業集落道工事施工区における埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。

発掘調査は、平成20年7月3日から平成21年3月18日まで行い、平成21年3月26日に山梨県へ発掘調査完了報告書を提出した。また、遺失物法に基づき、平成21年3月24日、富士吉田警察署長へ埋蔵文化財の発見届（富20歴文発第229号）を、山梨県教育委員会へ埋蔵文化財保管証（富20歴文発第229号）を提出した。

第2節 調査方法と経過

1 試掘調査

試掘調査は、平成20年5月23日から27日まで行った。2×4mのテストピットを7ヶ所設定した。調査地は、斜面地を造成した畑地で、大きく3段に分かれており、段差部には石垣が積まれ、地境には、多数の梅、柿、桑が植わっていた。そのため、調査区を、山側（西側）から川側（東側）へ向けて各段ごとにA区、B区、C区とし、A区を3ヶ所、B区を2ヶ所、C区を2ヶ所試掘した結果、遺構は検出できなかったが、B区を中心に縄文時代早期、前期、中期、弥生時代中期後半の遺物を含む厚さ2mに及ぶ良好な包含層を検出できた。また、現地にて、上杉陽氏（都留文科大学名誉教授）に土層中に含まれる火山灰を同定していただいた結果、富士山起源の火山灰を多数確認でき、遺物との上下関係も捉えることができた。

2 発掘調査

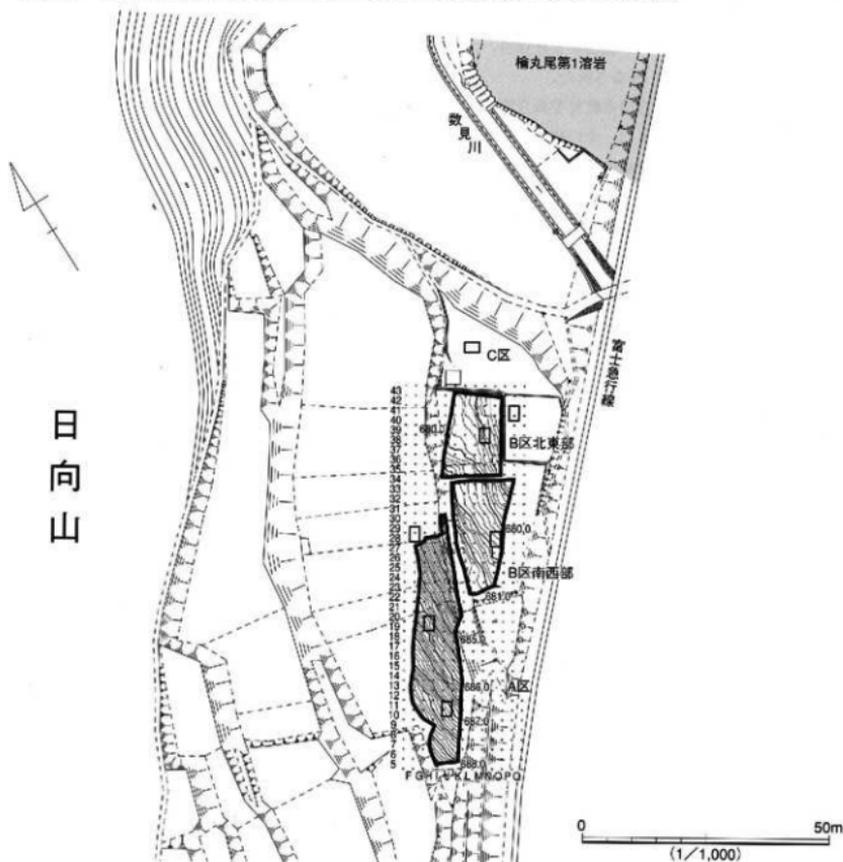
発掘調査は、平成20年7月3日から平成21年3月18日まで行った。調査は、畑地造成で、包含層の殆どが削平されていたC区を除く、A・B区を対象とした。このA・B区については、高低差が著しく、続きの調査区にはできないため分割して調査を行い、B区については、北東部と南西部に区分けした。

調査開始時には、草が繁茂していたため、まず草刈を行い、重機による表土除去後、遺構確認を開始した。調査を進めていくと、当初の見込みより遺構面が多いことが判明し、上から順に、平安時代中期、弥生時代中期後半、縄文時代中期後葉、前期末葉～中期前葉、前期中葉、早期中葉～末葉の全6面を調査することとなった。なお、ほとんどの遺物及び遺構は、A区より傾斜の緩いB区に集中していた。調査は、基本的には各面ごとに①包含層発掘→②遺構調査→③全体写真撮影の順序でおこなった。

3 整理作業

整理作業は、平成21～22年度の2ヶ年で行い、本書の刊行をもって終了した。

期間中に、出土遺物の洗浄・注記・接合・復元、浮遊選別法による土壌サンプルからの炭化物回収及び選別、各種資料分析の委託、遺物の図化作業、遺構図・遺物図の清書・編集、観察表等の作成、遺物写真撮影の委託、報告書の執筆を行った。さらにこれらを編集して報告書を作成した。



第1図 調査区位置図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の立地

上暮地新屋敷遺跡は、富士吉田市上暮地大字新屋敷に位置している（第1・2図）。富士山に真向かう本市は、富士山から流下した溶岩や土石流によって形成された火山扇状地が広がり、その東側を丹沢山地、西側を御坂山地に囲まれる。本遺跡の標高は680mで、御坂山地に属する日向山南東部の緩斜面地に広がり、調査区に沿って伸びる富士急行線の横には数見川が流下し、遺跡との比高差は約10mになる。この日向山の名称からも分かるとおり、南東向きの当地は日照時間が長く、斜面地でもあることから日光の入射角度にも恵まれた良い畑地である。富士山の麓にもかかわらず、大粒の火山灰が少なく、よく腐食した黒土に覆われ、積雪の際もこの辺りが一番早く雪解けすることからも、人間活動に適した好地であることがよく分かる。また、日向山を挟んで反対側の小字が「日影」であることも、このことを象徴している。

この数見川を挟んだ反対側は溶岩台地であるが、数見川は、この古墳時代に富士山から噴出した檜丸尾第1溶岩に沿って流れ下ることから、現在の流路は溶岩流下後のものであることが分かる。数見川の旧流路に沿って溶岩が流下したとすれば、数見川の元々の流路は溶岩台地の中央部であった可能性がある。また、昭和4年の富士急行線設置工事の際には、多数の土器が出土したと伝わることも考え合わせると、遺跡の一部は、溶岩台地の下に埋もれたであろう広大な平地に展開し、今回の調査はその縁辺部であったとも推定できる。いずれにしても、今後溶岩下については注視していく必要がある。また、檜丸尾第1溶岩下には、10,000～9,000年前にやはり富士山から噴出し、都留市十日市場まで流下した桂溶岩に覆われており、この溶岩流下後には、御坂山系を水源とする多くの川が出口を失い、山麓に堰止湖が形成されたと考えられており、本遺跡周辺でも数見川の上流域や日影地区周辺が湖になっていた可能性がある。第2図の溶岩分布を見ても分かるとおり、いずれの時代においても、富士山の火山活動の影響は無視できない問題である。このことについては、第7章において、詳述したい。

第2節 周辺の遺跡

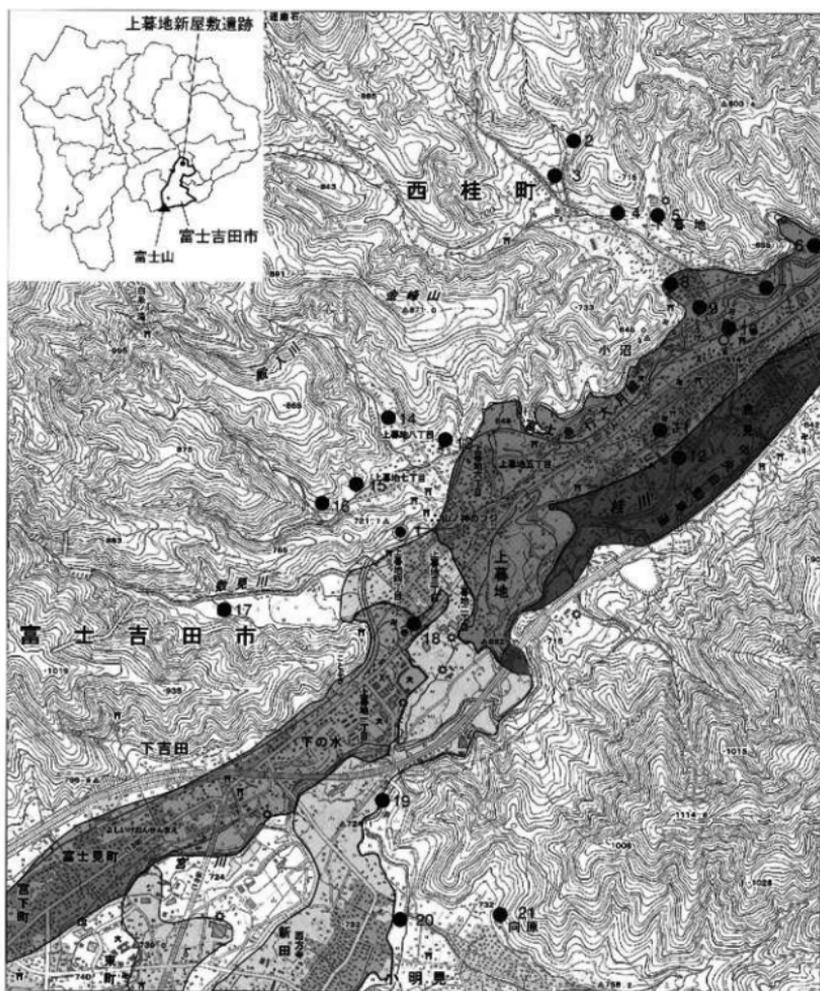
概要

現在、市街地となっている市内中心部には、平地が広がるが、土石流や溶岩で厚く覆われているため、平安時代の遺跡が溶岩下から発見されていることを除くと、遺跡の確認事例はない。逆に、山沿いには多数の遺跡が確認されており、上暮地新屋敷遺跡も山裾に位置する。ただ、本市より北側の西桂町や都留市では、縄文時代早期に流下した鏡橋溶岩及び桂溶岩によって形成された溶岩台地上に、縄文時代から中世までの多数の遺跡が確認されており、現状の遺跡分布が、往時の遺跡分布を正確には反映していないことに注意する必要がある。

上暮地新屋敷遺跡で確認できた時期について、周辺の遺跡の様相は次のとおりである。

縄文時代早期（押型文、田戸上層式、打越式）

富士北麓には、多数の早期の遺跡があるが、今回発掘された田戸上層式併行の土器と打越式については、まとまった資料が少なく、貴重な事例となる。まず、県内の田戸上層式併行の土器については、三田村氏によって詳細な報告（三田村 2005）がされており、そこで第1群とされている貝殻文を主たる文様要素とする土器群と本遺跡の資料は類似しており、山梨県東部地域（以下、郡内）では、大月市の



- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 榎丸尾第1溶岩 剣丸尾第1溶岩 桂溶岩 猿橋溶岩 | <ul style="list-style-type: none"> 1 上暮地新屋敷遺跡 2 寺野遺跡 3 城塚敷遺跡 4 大竹遺跡 5 宮作遺跡 6 下尾尻遺跡 7 尾尻遺跡 8 宮の下遺跡 9 宮の前遺跡 10 溝上遺跡 11 上町A遺跡 12 柳溝B遺跡 13 寺ノ入遺跡 14 殿ノ入遺跡 15 日影東遺跡 16 日影遺跡 17 大佐須遺跡 18 前田遺跡 19 天欠場遺跡 20 上中丸遺跡 21 上ノ山遺跡 |
|---|---|

0 1km
(1/25,000)

第2図 遺跡位置と溶岩分布図(上杉 1998, 1999により)国土地理院 1 : 25,000地形図「河口湖東部」へ加筆)

穴沢遺跡、岩殿中倉遺跡、大門Ⅰ遺跡、談合坂遺跡などで出土している。

打越式については、富士北麓はもちろん県内でもまとまった資料はほとんどなく、郡内では都留市の美通遺跡でのみ確認され、県内では北杜市の中込遺跡などがある。前後の時期については、西桂町の寺野遺跡では、堅穴状遺構のうち、第1号址で隆帯を貼付け絡条体瓦痕文を施文した打越式の前段階に位置づけられる土器が出土し、第4号址で入海式に類似する資料が出土している。

縄文時代前期（諸磯a～c式、十三菩提式）

諸磯a～c式は、富士北麓では多数の遺跡がある。市内では西沢遺跡、長日向遺跡、古屋敷A遺跡、御奥休場遺跡が、西桂町は三ツ峠山山頂遺跡、論所遺跡、寺野遺跡、大竹遺跡、下尻尻遺跡、滝入遺跡がある。遺構については、古屋敷A遺跡では集石遺構が1基、御奥休場遺跡では小堅穴1基と土坑3基が確認されているが、堅穴住居跡は確認されていない。上草地新屋敷遺跡も土器集中1基のみであり遺構に乏しい。郡内では、都留市の山梨原遺跡の堅穴住居跡が確認されているのみである。

十三菩提式は、市内では上草地新屋敷遺跡が初事例であり、西桂町でも宮の前遺跡のみで、両者とも遺構は確認されていない。郡内では、堅穴住居跡が都留市の大日影遺跡でのみ確認されている。

縄文時代中期（五領ヶ台Ⅰ・Ⅱ式、曾利Ⅰ～Ⅴ式）

五領ヶ台Ⅰ・Ⅱ式は、市内では日影遺跡のみで、西桂町では論所遺跡、尻尻遺跡、宮の前遺跡がある。遺構については、郡内では、本遺跡の焼土跡以外では、都留市の久保地遺跡で堅穴住居跡が確認されているのみである。

曾利Ⅰ～Ⅴ式は、市内では大佐須遺跡、干草場遺跡、上中丸遺跡、池之元遺跡がある。西桂町では宮の前遺跡で敷石住居跡1軒と堅穴住居跡5軒が検出されている他に、上町A遺跡、柳澤A遺跡、宮作遺跡、宮の下遺跡、尻尻遺跡で遺物が確認されている。

弥生時代中期後半～後期

弥生時代中期後半は、市内では初めてであり、郡内でも、富士河口湖町の塩橋遺跡、滝沢遺跡しかない。後期になると事例は多く、市内では、池之元遺跡、古屋敷A遺跡、西沢遺跡、泉水遺跡がある。堅穴住居跡については、郡内でも確認事例はない。

奈良・平安時代（8～12世紀）

この時期は、非常に多くの集落遺跡が確認されている。市内では、池之元遺跡、上中丸遺跡、長日向遺跡、西沢遺跡、古屋敷B遺跡で、周辺では、西桂町の溝上遺跡、富士河口湖町の滝沢遺跡、忍野村の笹見原遺跡で堅穴住居跡が確認されている。また、市内では、同時期に流下した溶岩下から多数の遺跡が確認されており、檜丸尾第2溶岩下では塚林遺跡が、剣丸尾第1溶岩下では、出口遺跡、西丸尾遺跡、御姫坂遺跡、前田遺跡がある。そのため、溶岩下に集落が広がる可能性が高い。

第3章 基本層序と遺物出土状況

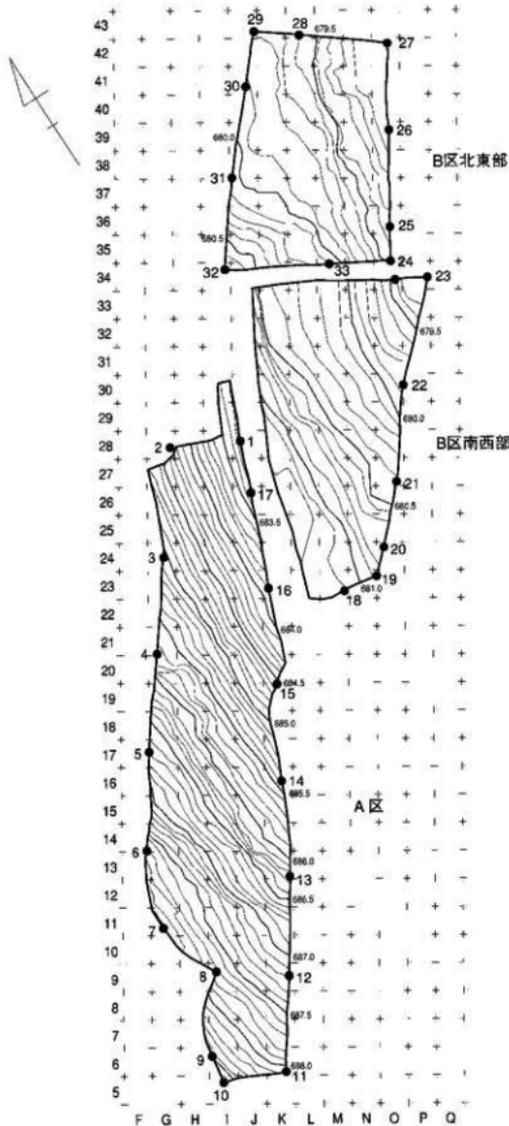
第1節 基本層序

1 地形と層位（第3図）

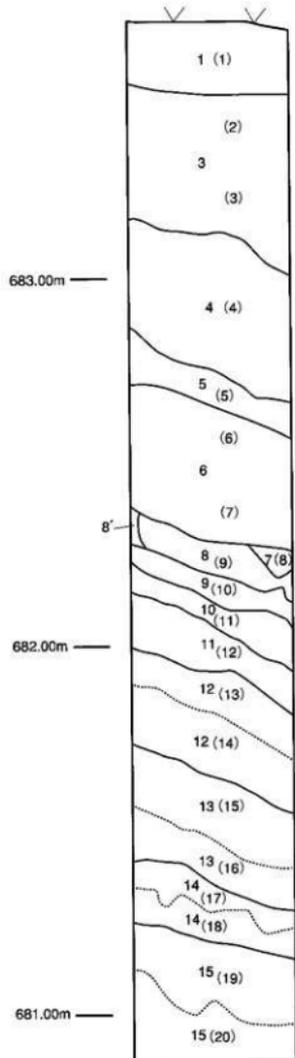
遺跡は斜面地であるが、畑地として利用するために山側を削り谷側へ盛ることで、平地を造りだしている。そのため、A・B区ともに、山側となる北西及び南西側ほどその削平が著しく、調査区の北西壁及び南西壁周辺は、表土直下が縄文時代早期の包含層となり、縄文時代前期～平安時代の包含層が削平されている。遺跡の歴史を考えていく際は、この後世の影響を考慮する必要がある。

2 基本層序（第4図）

- 1層 表土・耕作土 におい黄橙 (Hue10YR7/2)・しまり強い・粘性強い・径5～10mmの黒色スコリア多量
- 2層 1層とはほぼ同じため1層へ統合し、2層は欠番とする。
- 3層 におい黄橙 (Hue10YR7/2)・しまり弱い・粘性弱い・径5～15mmの黒色スコリア多量
- 4層 におい黄橙 (Hue10YR7/2)・しまり弱い・粘性やや弱い・径5～15mmの黒色スコリア中量
- 5層 におい黄橙 (Hue10YR7/2)・しまりやや弱い・粘性やや弱い・径5～15mmの黒色スコリア中量
下面に径1mmの灰色スコリア層が、部分的にみられる。富士山側火山の大室山から縄文時代晩期に噴出した大室スコリアに類似する。上面は、平安時代の遺構確認面。
- 6層 褐灰色 (Hue10YR6/1)・しまり強い・粘性強い・径10mmの橙色スコリアごく多量。
弥生時代中期後半～後期の包含層。上面は、弥生時代中期後半～後期の遺構掘り込み面
- 7層 におい黄橙 (Hue10YR7/2)・しまり強い・粘性強い・径5mmの橙色、黒色スコリア多量
上面は、弥生時代中期後半～後期の遺構確認面
- 8層 スコリア層・しまりなし・粘性なし・径1～10mmのスコリア純層
富士山起源の火山灰層で、S-5かS-6に該当する。縄文時代中期後葉に降下したスコリア。
8層はスコリア主体だが、7層類似の土を多く含む層。
- 9層 褐灰色 (Hue10YR5/1)・しまり弱い・粘性弱い・径1～10mmの橙色、黒色スコリアごく多量
縄文時代前期末葉～中期前葉の包含層だが、土器は小片で最も少ないため、10層の浮き上がりと考えられる。上面は、8層のスコリアにより焼失した樹木跡の形成面。
- 10層 灰黄褐色 (Hue10YR6/2)・しまり強い・粘性やや弱い・径1～10mmの橙色、黒色スコリア多量
縄文時代前期末葉～中期前葉の包含層。上面は、8層のスコリア層により焼失した樹木跡の確認面及び、縄文時代前期中葉～中期前葉の遺構構築面（生活面）。
- 11層 灰黄褐色 (Hue10YR6/2)・しまり強い・粘性強い・径1～10mmの橙色スコリア中量
縄文時代前期中葉の包含層。上面は、縄文時代前期末葉～中期前葉の遺構確認面。
- 12層 におい黄橙 (Hue10YR6/3)・しまりごく強い・粘性強い・径1～10mmの橙色スコリア多量・ローム粒子少量含む
縄文時代早期末葉の包含層。上面は、縄文時代前期中葉の遺構確認面及び、縄文時代早期末葉の遺構構築面（生活面）。
- 13層 におい黄橙 (Hue10YR6/3)・しまりごく強い・粘性ごく強い・径1～10mmの橙色スコリア多量・ローム粒子中量を含む



第3図 土層断面図位置図 (標高は6層上面)



第4図 基本土層図 (セクションポイント1-2を元に作成)

※ () 書きの数字は上杉氏の層位区分

縄文時代早期中葉・末葉の包含層。上面は、縄文時代早期末葉の遺構確認面。

14層 ぶい黄橙 (Hue10YR7/4)・ローム層に近い漸移層・しまり強い・粘性強い・径1~10mmの橙
色スコリア多量・ローム粒子多量を含む

15層 黄橙色 (Hue10YR8/8)・ローム層・しまり強い・粘性強い

第2節 層別遺物出土状況

1 型式別土器出土比率 (全破片)

試掘調査の結果、包含層が非常に厚く土器も層別的に堆積し、貝塚遺跡で行われているような層別的調査が可能であると判明したため、次の3点を目的に土器の出土層位を全て記録した。

- ① 各層の時期を特定する。
- ② 火山灰検出層位と土器出土層位を対照することで、その前後関係を特定し、火山活動と人間活動の関係を考える上での基礎データとする。
- ③ 層位ごとの土器出土状況をまとめ、土器の型式学的検討の基礎データとする。

第1表は、こうして得られたデータを元に、主体となる縄文時代早期~中期について、遺構外出土土器の全口縁部破片及びこの口縁部破片と同一個体となる全胴部破片を層位別に集計し作成したものである。土器型式については、少数しか出土していない型式を示すと傾向が見えにくくなるため、主体となる土器型式を軸として5グループにまとめた。具体的には、押型文土器をまとめた「押型文」、田戸上層式併行を主体とし鶴ヶ島台式が伴う「田戸上層式~鶴ヶ島台式」、打越式を主体とし神之木台式・下吉井式が伴う「打越式~下吉井式」、諸磯a・b式を主体とし間山式が伴う「間山式~諸磯b式」、十三菩提式・五領ヶ台I式を主体とし、諸磯c式と五領ヶ台II式が伴う「諸磯c式~五領ヶ台II式」である。

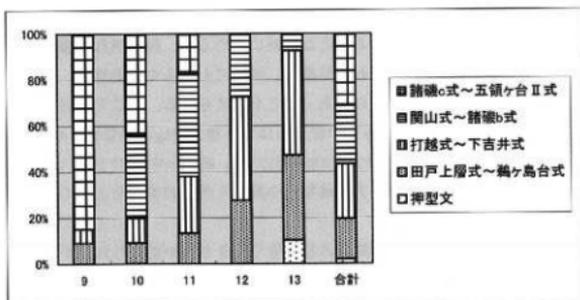
この表を見ると、層位ごとの出土比率の漸移的变化は確認できるが、土器型式の現在も多数認められる。この原因としては、2点考えることができる。1つは本遺跡が斜面地に形成されていることに起因する土壌の流出と2次堆積である。これについては、調査時にも確認しており、豪雨による土壌流出や霜の形成と融解による土壌の撈り上がりと流出には甚だしいものがあつた。また、上杉陽氏からは、層位間の火山灰の混在が著しく、層位と火山灰の対応関係を確定することは困難との所見をいただいており、このことも上層の2次堆積が著しいことを指し示すものである(第6章第1節)。もう1点は、畑地造成のための切土と盛土である。この影響は、土を盛る斜面下方側より上を削る斜面上方で顕著であり、遺跡の北西および南西側では、先述したように縄文時代前期~平安時代の包含層の多くが削平されていた。

このように注意を要するデータではあるが、①~③のための基礎データとしたい。なお、①については後述し、②については第4章第5節と上杉陽氏の分析(第6章第1節)で詳述しているが、③については、考察を深めることができなかったため、今後の課題としたい。

では、①の「各層の時期の特定」であるが、第1表から時期の特定はある程度可能である。まず、9層は十三菩提式~五領ヶ台I式を主体とし、10層は十三菩提式~五領ヶ台I式を主体としつつ、諸磯a~b式を多数含む、11層は逆に諸磯a~b式を主体とする。12層になると、諸磯a~b式をまだ含むが、打越式が主体で田戸上層式併行がそれに続き、13層では打越式と田戸上層式併行で8割を占め、押型文土器がそれに伴っている。また、これら各層位で主体となる土器型式は、土器の破片が大きくて摩耗も少なく、かつ接合率も良好であり、同一層位の遺構内にも多数含まれている。このように各層で土器型式がある程度まとまるため、前節「基本層序」のとおり層別別の時期を定めたが、ほぼ問題はないと考える。

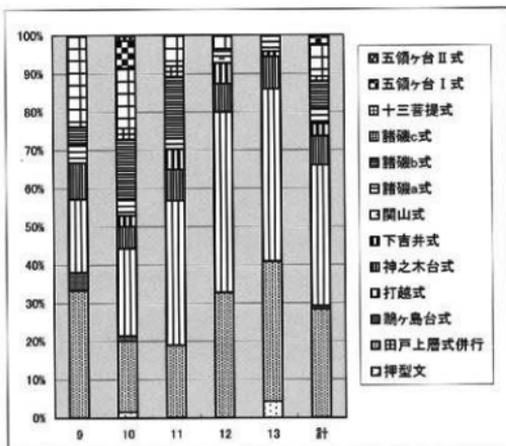
第1表 型式別土器出土比率 (全破片)

層	押型文	田戸上層式～編ヶ島台式	打越式～下吉井式	関山式～諸磯b式	諸磯c式～五領ヶ台Ⅱ式	合計
9	0	12	8	0	112	132
10	1	31	38	126	155	351
11	0	20	37	67	26	150
12	0	38	62	38	0	138
13	18	65	80	13	0	176
合計	19	166	225	244	293	947



第2表 型式別土器出土比率 (全個体)

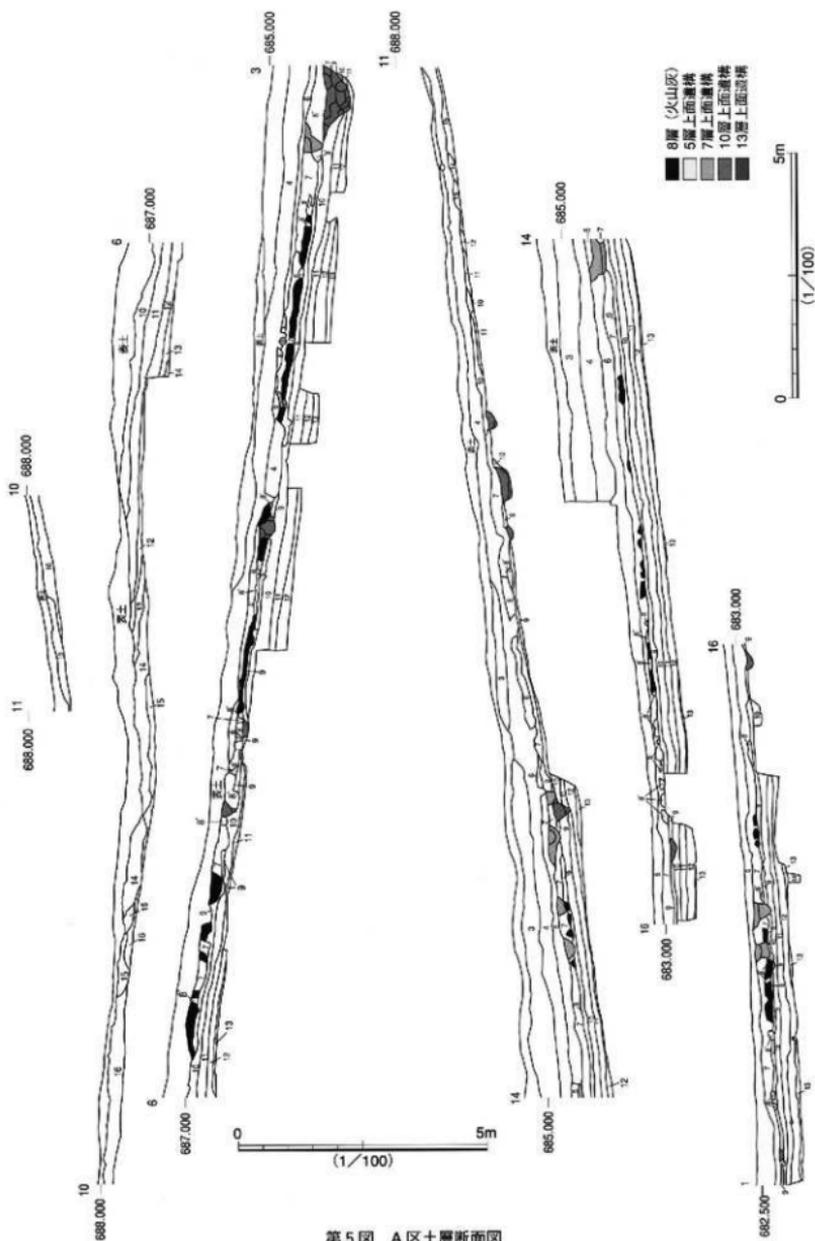
層	押型文	田戸上層式併行	編ヶ島台式	打越式	神之木台式	下吉井式	関山式	諸磯a式	諸磯b式	諸磯c式	十三菩提式	五領ヶ台Ⅰ式	五領ヶ台Ⅱ式	合計
9	0	7	1	4	2	0	0	1	1	0	5	0	0	21
10	1	13	1	16	4	2	0	3	11	2	11	5	1	70
11	0	7	0	14	3	2	0	1	6	1	3	0	0	37
12	0	18	0	26	4	3	1	1	0	0	2	0	0	55
13	3	26	0	32	6	1	0	3	0	0	0	0	0	71
計	0	71	2	92	19	8	1	9	18	3	21	5	1	234



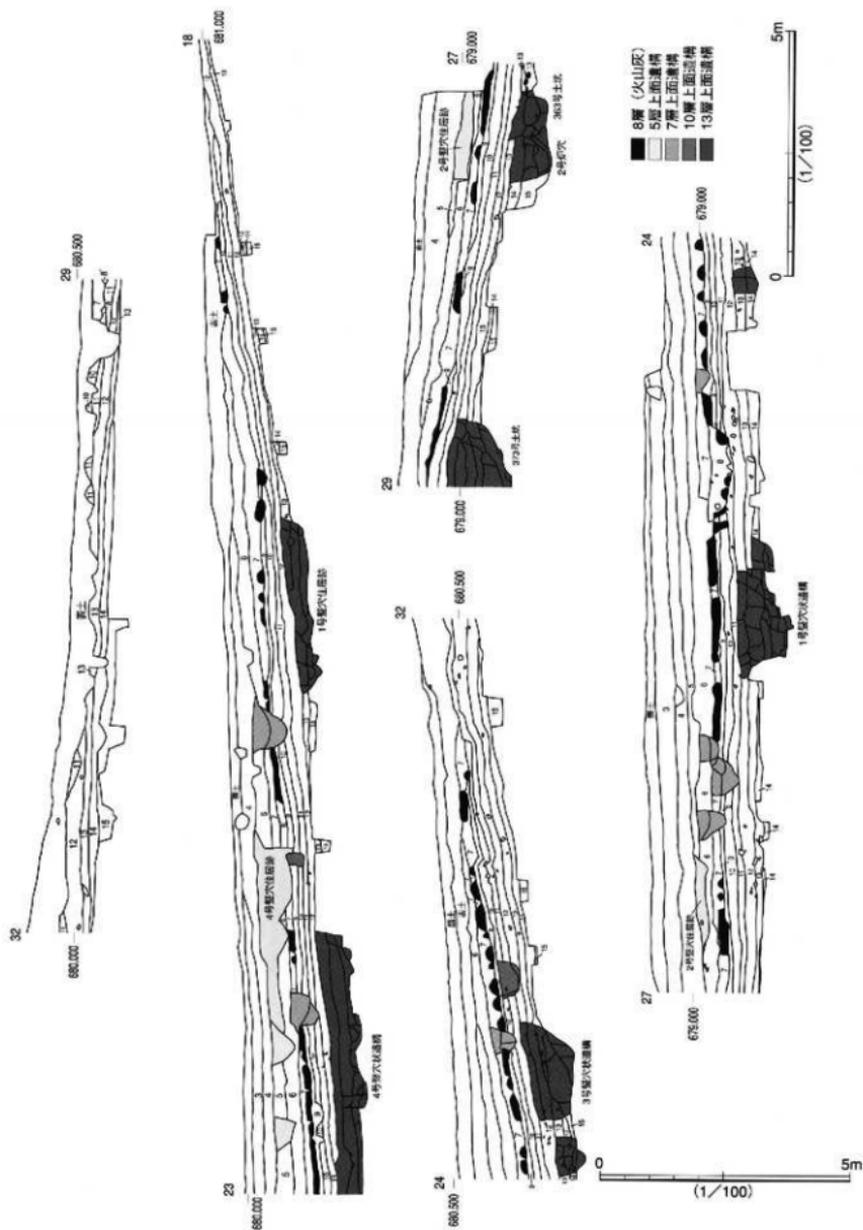
2 型式別土器出土比率（全個体）

各時期の具体的な様相については、第4章に詳述したが、ここでは型式別土器出土比率からみえる各時期の実態を考えたい。第2表では、破片数でなく個体数を用いて、型式別土器出土比率を示した。全破片の出土比率である第1表と見比べると、9層から13層にかけて土器型式の比率が漸移していく点は同じであるが、各層位で早期の凹戸上層式～打越式が多数を占め、前期～中期の関山式～五領ヶ台Ⅱ式は、破片数では主体となる層であっても、個体数では非常に少ないことが分かる。合計数でも、破片数では早期は約40%であるが、個体数では約75%を占める。このことは、同一遺跡内ではあるが、早期と前期～中期では、その活動実態に大きな違いがあり、早期については前期～中期より、多数の上器を消費していることを示している。その要因として想定できることは多岐にわたるが、検出された遺構の内容も加味すると、竪穴住居跡も含め多数の遺構が検出された早期は、長期にわたる生活を営み、土坑や焼土跡のみであった前期～中期については、短期的なものであったとも考えられる。ここで、居住期間の長短を反映するだろう焼礫の出土量もみてみよう。各層の総重量は、9層95.8kg、10層367.4kg、11層330.7kg、12層419.4kg、13層541.5kgであり、早期の12、13層は約55%、前期～中期の9～11層45%を占める。土器破片ほど顕著ではないが、やはり早期の方が前期～中期より多くの割合を占めることが分かる。

このように、早期と前期～中期では、土器の個体数や焼礫の総重量で大きさ差が認められるが、もう1点注目したいのは、前期～中期の個体数に比べての破片数の多さと、その逆となる早期の個体数に比べての破片数の少なさである。これは、前者の接合率が高く、後者の接合率が低いことの反映だが、その要因には、廃棄行動の差があると考えられる。仮定されるのは、前期～中期の廃棄行動は、今回の調査範囲内で収まるものであるが、早期については、調査範囲を大きく超えるものであるという廃棄範囲の違いや、前期～中期は土器使用後に一括廃棄をするが、早期は数次に廃棄行動を分けるといった土器使用後から廃棄に至るまでのプロセスの違いの2点であるが、これについては土器の型式学的検討とともに今後の課題としたい。



第5図 A区土層断面図



第6図 B区土層断面図

第4章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 土器分類

本遺跡で出土した土器の分類案は下記のとおりである。なお、この分類に基づき、全口縁部破片及びこの口縁部破片と同一個体となる全胴部破片の出土位置を、1m四方のグリッドにプロットしたものが、第7・8図である。

第I群 縄文時代早期中葉～末葉

- 1類 押型文土器
- 2類 田戸上層式併行
 - a種 貝殻腹縁文を施すもの
 - b種 刺突列を施すもの
 - c種 沈線を施すもの
 - d種 格子目文を施すもの
 - e種 条線を施すもの
 - f種 燃糸文を施すもの
 - g種 条痕を施すもの
- 3類 縄ヶ島台式
- 4類 絡条体圧痕文を施すもの
- 5類 条痕を施すもの
- 6類 縄文を施すもの

第II群 縄文時代早期末葉

- 1類 打越式
 - a種 口縁部に条痕文を施し、更に貝殻腹縁による山形文を重ねて施すもの
 - b種 口縁部に条痕文を施すもの。その下端に貝殻腹縁による山形文を施すものもある。
 - c種 隆帯を貼付けるか、口唇端部を突出させ、口縁部には条痕文を施すもの。その下端に貝殻腹縁による山形文を施すものもある。
 - d種 隆帯を貼付けるか、口唇端部を突出させ、山形文を施すもの
 - e種 貝殻腹縁による山形文を施すもの
 - f種 貝殻腹縁文を施すもの
- 2類 神之木台式
- 3類 下吉井式
- 4類 塩原中層 A～C 式
- 5類 隆帯文土器
- 6類 条痕を施すもの
- 7類 縄文、燃糸文を施すもの

第4章 縄文時代の遺構と遺物

第Ⅲ群 縄文時代前期前葉～中葉

- 1類 関山式
- 2類 諸磯a式
 - a種 平行沈線文や爪形文を施すもの
 - b種 円形刺突文を施すもの
 - c種 縄文を施すもの
- 3類 諸磯b式
 - a種 平行沈線文や爪形文を施すもの
 - b種 浮線文を施すもの
 - c種 縄文を施すもの

第Ⅳ群 縄文時代前期後葉～中期前葉

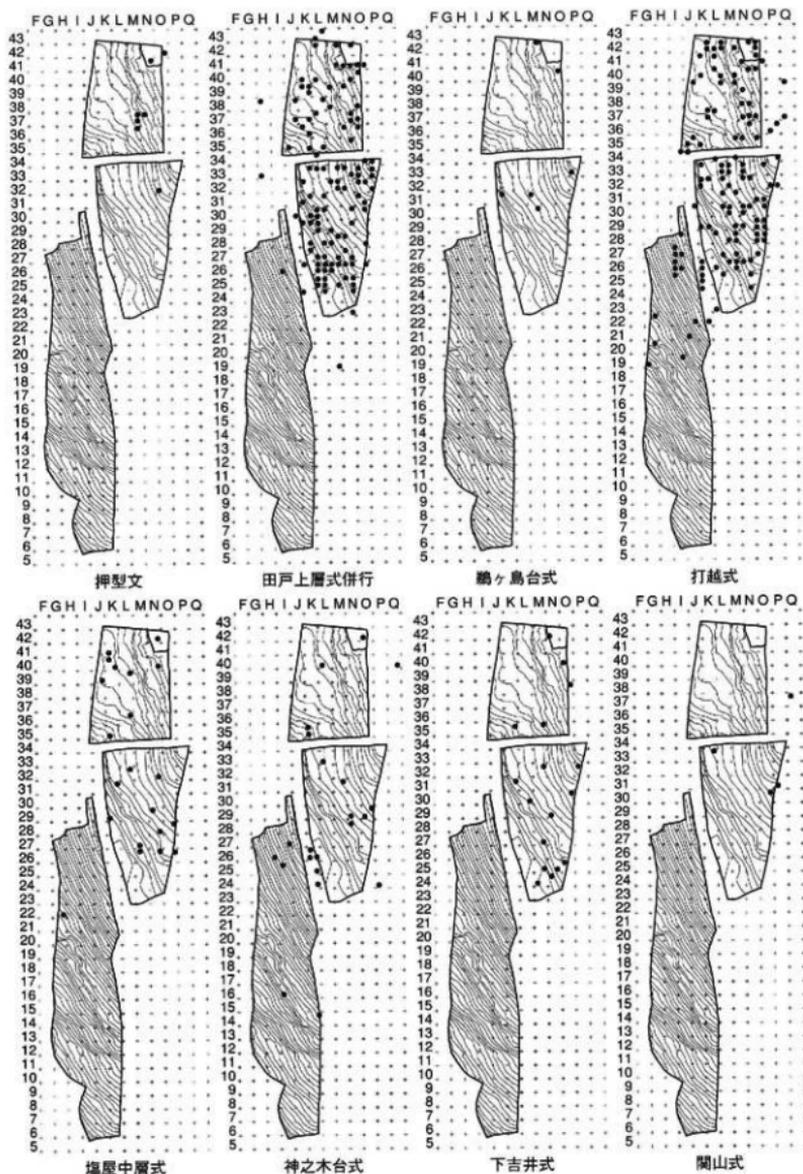
- 1類 諸磯c式～五領ヶ台Ⅰ式
- 2類 五領ヶ台Ⅱ式
- 3類 陸帯を施すもの

第Ⅴ群 縄文時代後期

第Ⅵ群 弥生時代中期～後期

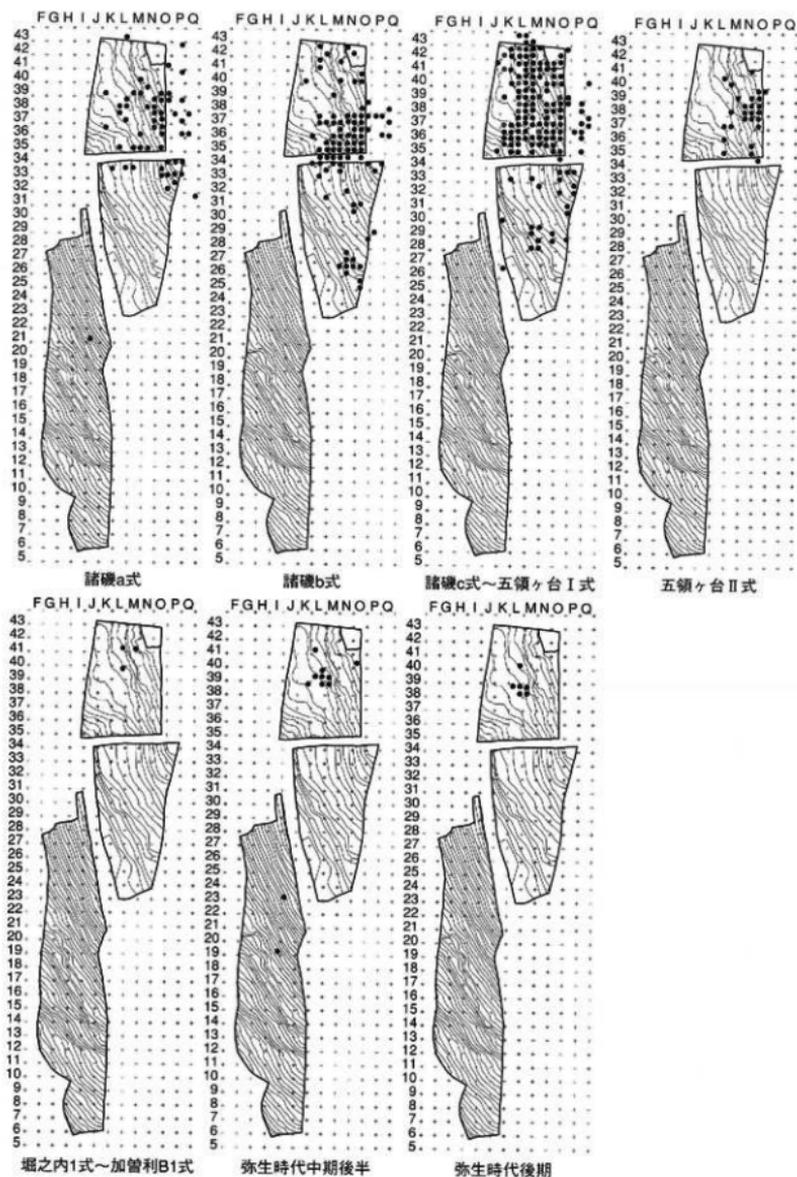
- 1類 弥生時代中期後半
- 2類 弥生時代後期

第Ⅶ群 平安時代



第7図 土器型式別分布 (押型文~関山式)

第4章 縄文時代の遺構と遺物



第8図 土器型式別分布(諸磯a式~弥生時代後期)

第2節 縄文時代早期

1 概要 (第9図)

A区では、遺物及び遺構は少なく、そのほとんどはB区で検出された。その内訳は、竪穴住居跡1基、竪穴状遺構4基、炉穴2基、土坑9基、集石遺構9基、土器集中3基である。遺構の上面を覆う包含層中の土器分布もこれらの遺構の位置と重なる(第7図)。この包含層は基本土層12・13層で、遺構確認面は、遺構形成面と考えられる基本土層12層上面としたが、検出が困難を極めたため、途中から基本土層13層上面とした。その帰属時期は、遺構内の床面～下層の遺物が少ないことや、多数の型式が混在することから判然としなが、遺構形成面及び確認面の土器の多数を打越式が占めることから、その多くは打越式に帰属すると考えられる。

2 竪穴住居跡

調査区内で炉の検出はできなかったが、柱穴と床の硬化面が認められたため、竪穴状遺構と区別して、竪穴住居跡とした。遺構数は1基である。

1号竪穴住居跡・1号炉穴 (第10図)

概要：調査区外へ入り込んでいるため、1/2～2/3しか調査はできなかったが、北東-南西を長軸とする楕円形になると考えられる。ただ、北東側は、1号炉穴やP1～5で切られていることから、形状が著しく乱れている。なお、遺物分布も南西側を中心とし、P1～5のある北東側にはみられない。

位置：B区南西部O・27～29グリッド

重複関係：1号竪穴住居跡→1号炉穴・P1～P5

確認面：13層上面

規模：竪穴住居跡-長軸370cm・短軸170m(調査部分のみ。約280cmになると推定される。)・深さ60cm

炉穴-長軸108cm・短軸50cm・深さ65cm

床：貼床はなく、基本土層13～15層を床面とする。硬化の度合は、第10図のとおりだが、住居中心部と推定される箇所が著しく硬化している。

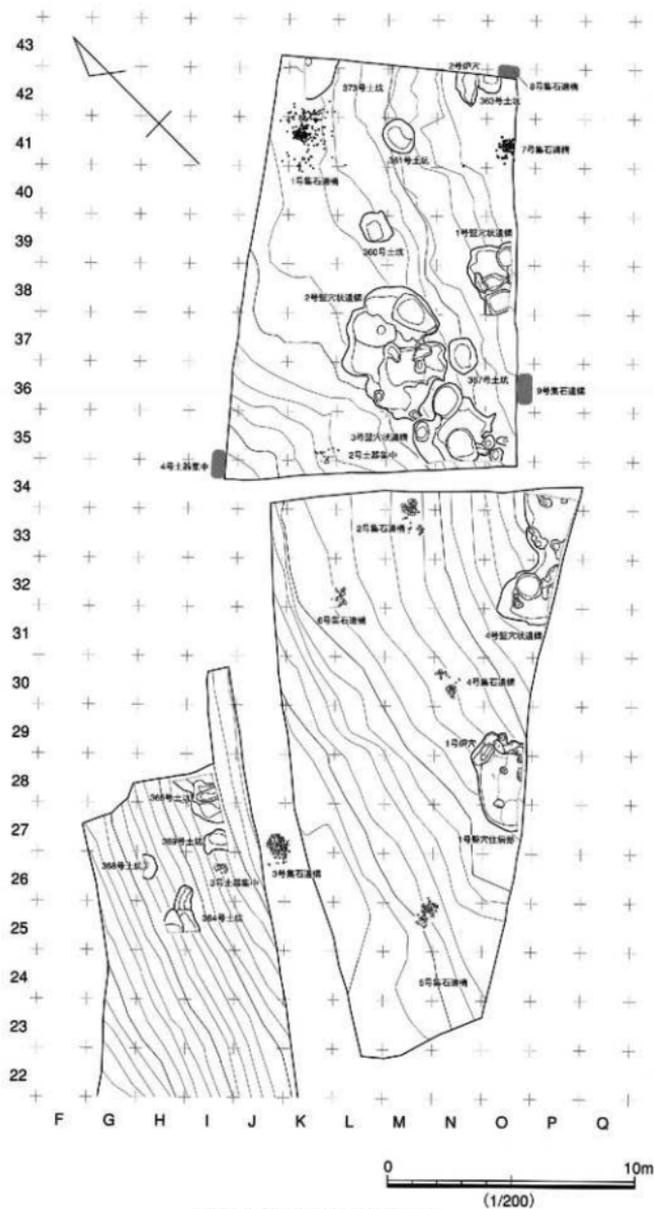
炉・炉穴：床面で焼土ブロックを確認した。ただし、床が被熱せず、掘り込みもないため、地床炉に伴うものではない。また、1号炉穴が住居を切って構築されている。炉穴西側に焼土が集中し、地山の赤化も著しい。炉穴東側に赤化はなく、硬化のみ認められる。

柱穴：可能性があるのは、P6(深さ8cm)・P7(深さ18cm)・P8(深さ61cm)だが、P6・7はやや浅い。P1(深さ25cm)・P2(深さ29cm)・P3(深さ40cm)・P4(深さ32cm)・P5(深さ19cm)は、住居を切るため、柱穴とは考えにくい。

遺物(第17図)：遺構南西側を中心分布する。1群は、2類a種の1と5類の2・14のみで、他はⅡ群に属する。Ⅱ群1類は、b種の3、b・c種の4・5、e種の6で、他は3類の15、6類の7～13である。いずれも小片で、床上5cmまでで出土したのは11・14、5～20cmまでは4・5・8・10・13で、他はそれより上層である。P1内からは、12が出土している。石器はないが、上層を中心に焼燼23.432kgが出土した。

時期：遺物の主体が打越式であり、本遺構も同時期と考えられる。

第4章 縄文時代の遺構と遺物



第9図 縄文時代早期遺構配置図

3 竪穴状遺構

炉と柱穴を伴わず、床の硬化もなく、やや掘り込みの深いものを竪穴状遺構とする。床面が平坦でなく、別の遺構が重複する傾向があり、竪穴状遺構機能時か廃絶直後に構築されたと考えられるものも多い。遺構数は4基である。

1号竪穴状遺構（第10図）

概要：遺構内に4基の土坑がある。その切合い関係から、竪穴状遺構構築後に土坑1～4が構築されたと考えられるが、土坑1～4の構築が、竪穴状遺構廃絶後なのか竪穴状遺構機能中なのかで、遺構の性格は大きく変わる。まず、土坑1については、14層上面が遺構構築面であり、竪穴状遺構及び土坑2の遺構構築面が12層上面であるのに対し、かなり下面であることから、最初に構築された遺構と考えられる。次に、竪穴状遺構と土坑2～4であるが、土層堆積上では、竪穴状遺構と土坑の切合い関係を確認できなかったため、遺物の堆積状況から前後関係を考えたい。竪穴状遺構床面の10cm上で、竪穴状遺構廃絶後に廃棄されたと考えられる大量の焼礫が出土したが、土坑2～4の上面にも分布していた。そのため、竪穴状遺構の廃絶と土坑2～4の廃絶にほとんど時間差はなかったと考えられ、同時に機能していた可能性もある。いずれにしろ、竪穴状遺構廃絶後、ほとんど間を置かずに土坑2～4が廃絶されたことは確かである。

なお、土坑2はやや特殊な遺構であり、土坑南西側に細長く3段のテラスが伸び、焼土がその上を覆う。また、土坑底面には、被熱した礫が1面分敷詰められるとともに、その上下面には灰起源と考えられる土が堆積している。その性格については今後の課題としたい。

位置：B区北東部O-38・39グリッド

重複関係：土坑1→竪穴状遺構→土坑2・3・4（土坑3→土坑4）

確認面：12層上面

規模：竪穴状遺構－長軸200cm（残存部分のみ）・短軸130cm（残存部分・調査部分のみ）・深さ75cm

土坑1－長軸110cm（調査範囲のみ）・短軸85cm・深さ78cm

土坑2－長軸165cm・短軸65cm（調査部分のみ）・深さ91cm

遺物（第15図）：先述したとおり、大量の焼礫が床面～下層で出土したが、土器と石器は、上層からしか出土していない。1～6はI群で、1は1類、2・3・5は2類で、2はc種、3はa種、5はf種である。4は5類で、6は6類である。7～10はII群で、7は1類b～c種、9は1類b・c種、8は6類、10は4類である。石器は、11の石皿（玄武岩溶岩（富士山）の他に、磨石3点が出土している。焼礫は、上層のものも含めて174.1kg出土した。

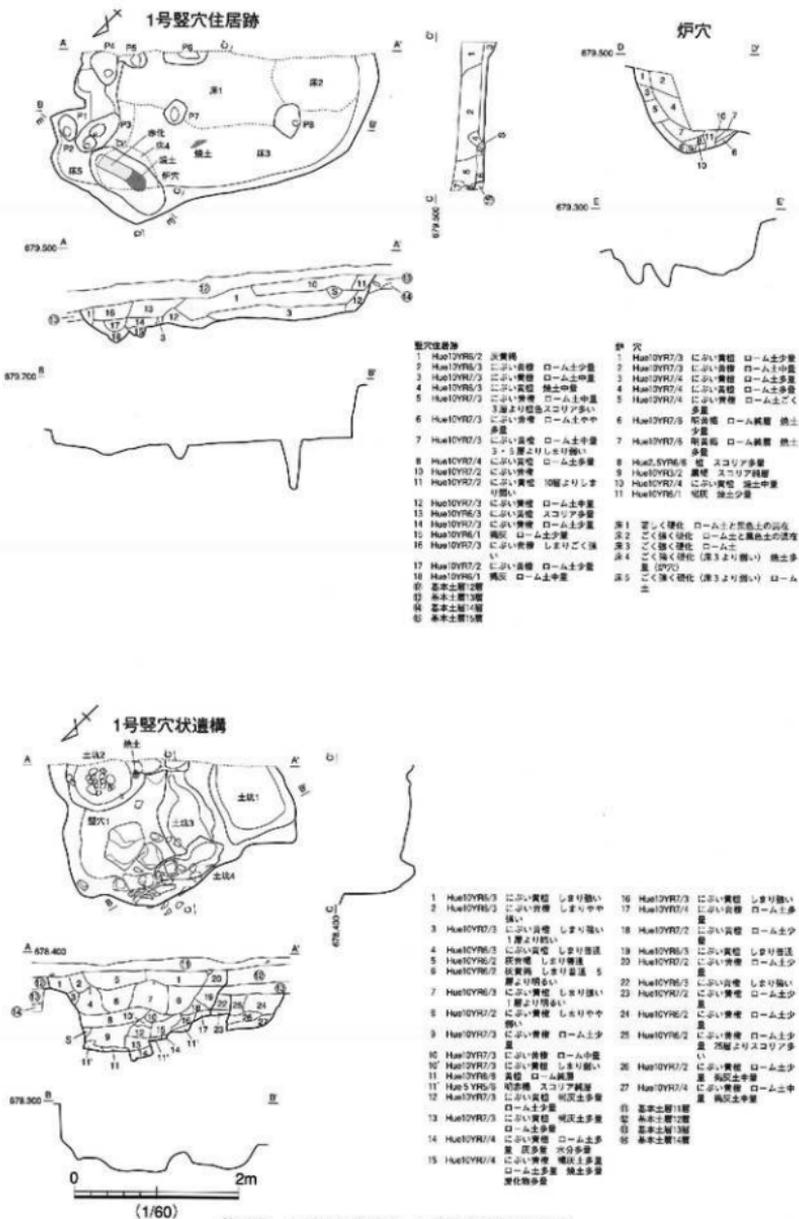
時期：遺構に確実に伴う遺物がないため断定はできないが、基本土層12層の時期に基づいて、打越式に比定する。

2号竪穴状遺構（第11図）

概要：竪穴状遺構に複数の遺構が重複して構築される。竪穴状遺構1・2、土坑1～6、集石1・2が、上だった遺構であるが、土坑1・2は、その形状や規模が土坑367等と類似するため、同一の性格のものと考えられる。まず、土坑1・3・6は、上層断面A-A'で、竪穴状遺構埋没後に構築されたことが、土坑4は、土層断面C-C'で、埋没前に構築されたことが分かる。また、土坑4によって切られる土坑5も竪穴状遺構埋没前の構築である。

位置：B区北東部L-36～38・M-36～38グリッド・N-36、37グリッド

重複関係：竪穴状遺構1→竪穴状遺構2→土坑5→土坑4・集石2→土坑1～3・6



第10図 1号竪穴住居跡・1号竪穴状遺構実測図

確認面：12層上面

規模：竪穴状遺構1 - 北東-南西軸135cm・北西-南東軸160cm・深さ69cm

竪穴状遺構2 - 北東-南西軸140cm・北西-南東軸180cm・深さ121cm

土坑1 - 長軸200cm・短軸180cm・深さ104cm

土坑2 - 長軸200cm・短軸150cm・深さ112cm

遺物（第15・16図）：土器・石器は、いずれも上層から出土したものである。1～10はI群で、1～3は2類a種、4～6はc種、7はg種、8・9は5類、10は6類である。11～16はII群で、11・12は1類b種、13は1類b種か6類、14は4類、15・16は6類、17はIII群1類である。18は磨石（玄武岩溶岩（富士山））、19は磨石・凹石（砂岩）で、他に楔型石器1点・剥片5点・磨石2点・凹石2点・石皿1点が出土している。焼礫は、159.395kg出土している。

時期：遺構に確実に伴う遺物がないため断定はできないが、基本上層12層の時期に基づいて、打越式に比定する。

3号竪穴状遺構（第12図）

概要：竪穴状遺構1基に十坑5基が重複して構築される。土坑1・2は、2号竪穴状遺構の土坑1・2と同じく、土坑367等と類似するため、同一の性格のものと考えられる。また、重複はしないが、土坑6・7が隣接して構築される。

位置：B区北東部M-35・N-35、36・O-35グリッド

重複関係：竪穴状遺構→土坑3→土坑1・2・4・5

確認面：12層上面

規模：竪穴状遺構 - 南北軸140cm・東西軸190cm・深さ119cm

土坑1 - 長軸150cm・短軸110cm・122cm

土坑2 - 長軸140cm・短軸113cm・126cm

遺物（第16図）：土器・石器は、いずれも上層から出土したものである。1～5はI群で、1・2は1類、3は2類c種、4・5は5類である。6～9はII群で、6は1類b～e種、7は6類、8・9は7類である。石器は、石核1点、楔型石器1点、磨石2点が出土している。焼礫は、71.654kg出土している。

4号竪穴状遺構（第12図）

概要：竪穴状遺構2基・土坑6基・ピット1基で構成される。2基の竪穴状遺構は、重複部分がわずかであるため、新旧関係は土層堆積でも確認できなかった。セクションで土層堆積を観察できた土坑4・5は、土坑上面より上の覆土が竪穴状遺構と同じであるため、竪穴状遺構機能時か埋没以前に構築され、竪穴状遺構と同時に埋没したことが分かる。土坑1～3・6についても、発掘時の所見では、土坑上面より上は竪穴状遺構と同じ覆土であるため、やはり竪穴状遺構埋没以前に構築されたと考えられる。なお、土坑2については、土坑の立上り部分に焼土が2～3cm堆積し、土坑4・5は、覆土最下層で炭化物が多量に検出された。

位置：B区北東部M-35・N-35、36・O-35グリッド

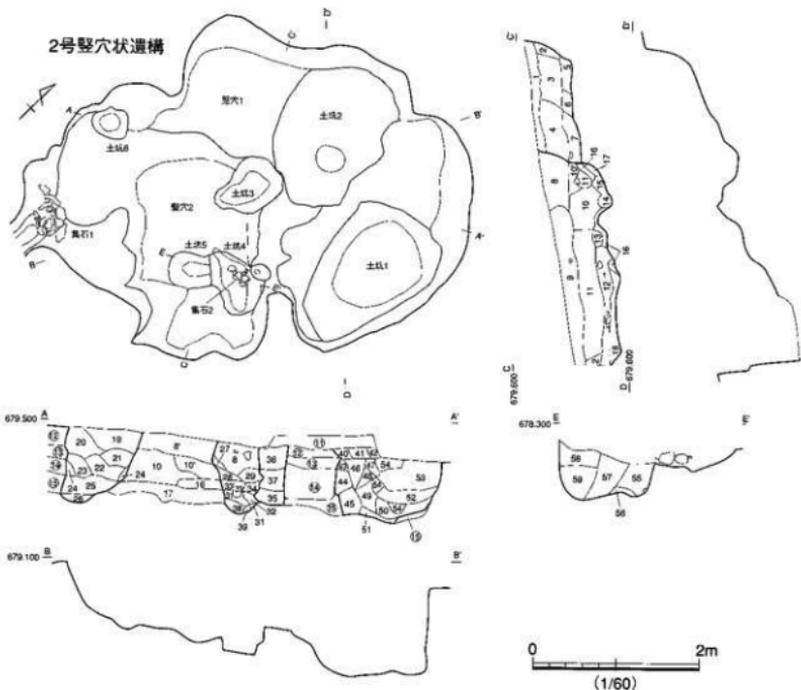
重複関係：竪穴状遺構1・2→土坑1～6・ピット1

確認面：12層上面

規模：竪穴状遺構1 - 長軸270cm・短軸220cm・52cm

竪穴状遺構2 - 長軸260cm・短軸200cm・66cm

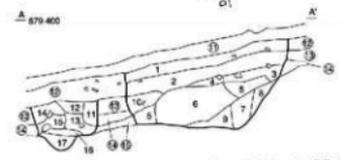
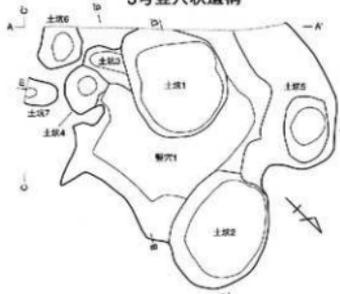
第4章 縄文時代の遺構と遺物



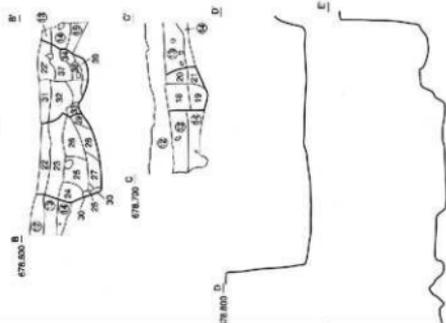
- | | | | | | |
|---------------|-------|--------------------|---------------|-------|---------|
| 1 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまり強い | 30 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 2 Hae12YR6/6 | にじい遺構 | しまり普通 | 34 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 3 Hae12YR6/5 | にじい遺構 | しまり普通 | 35 Hae12YR6/4 | にじい遺構 | しまり強い |
| 4 Hae12YR6/2 | にじい遺構 | 褐色スクリア2層より多い | 36 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 5 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | 褐色スクリア2層より多く層より少ない | 37 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 6 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまり普通 | 38 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 7 Hae12YR6/2 | 竪穴跡 | しまりや中強い | 39 Hae12YR6/9 | 竪穴跡 | しまり強い |
| 8 Hae12YR6/6 | にじい遺構 | しまり強い | 40 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 9 Hae12YR6/5 | にじい遺構 | しまり強い | 41 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 10 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまり強い | 42 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 11 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまりや中強い | 43 Hae12YR6/4 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 12 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 44 Hae12YR7/6 | 竪穴跡 | しまり強い |
| 13 Hae12YR6/5 | にじい遺構 | しまり強い | 45 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 14 Hae12YR6/2 | 埋没跡 | しまり強い | 46 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまり強い |
| 15 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまり強い | 47 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 16 Hae12YR7/6 | 埋没跡 | しまり強い | 48 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 17 Hae12YR7/3 | 埋没跡 | しまり強い | 49 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 18 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 50 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 19 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 51 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 20 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 52 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 21 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまり強い | 53 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 22 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 54 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまり強い |
| 23 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまり普通 | 55 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 24 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまり普通 | 56 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 25 Hae12YR6/2 | にじい遺構 | しまりや中強い | 57 Hae12YR6/1 | 竪穴跡 | しまりや中強い |
| 26 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまり普通 | 58 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 27 Hae12YR6/4 | にじい遺構 | しまり普通 | 59 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い |
| 28 Hae12YR6/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 60 基本土層1層 | | |
| 29 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 61 基本土層2層 | | |
| 30 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 62 基本土層3層 | | |
| 31 Hae12YR7/4 | にじい遺構 | しまりや中強い | 63 基本土層4層 | | |
| 32 Hae12YR7/3 | にじい遺構 | しまりや中強い | 64 基本土層5層 | | |

第11図 2号竪穴状遺構実測図

3号竪穴状遺構

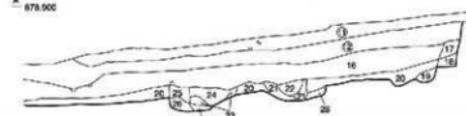
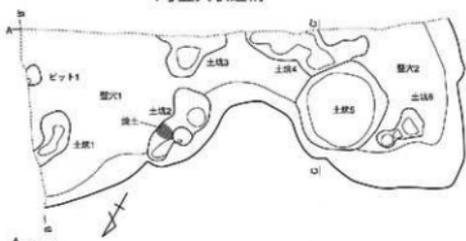


- | | | |
|--------------|--------|----------|
| 1 Hs10YR6/2 | にがい黄褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 2 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 3 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 4 Hs10YR6/2 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 5 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 6 Hs10YR6/2 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 7 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 8 Hs10YR6/2 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 9 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 10 Hs10YR6/2 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 11 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 12 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 13 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 14 Hs10YR6/2 | 褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 15 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 16 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 17 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 18 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 19 Hs10YR6/2 | 褐色 | 褐色スクリヤ中層 |

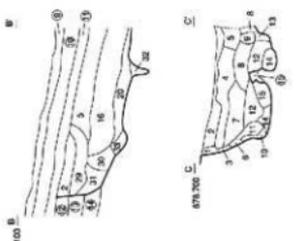


- | | | |
|--------------|--------|----------|
| 20 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 21 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 22 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 23 Hs10YR6/2 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 24 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 25 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 26 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 27 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 28 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 29 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 30 Hs10YR6/6 | 高粘 | ローム土少量 |
| 31 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 32 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 33 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 34 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 35 Hs10YR6/2 | 褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 36 Hs10YR6/2 | 褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 37 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 38 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 39 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 40 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | ローム土少量 |
| 41 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 42 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 43 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 44 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | 褐色スクリヤ中層 |
| 45 基本土層1層 | 褐色 | ローム土ごく少量 |
| 46 基本土層2層 | 褐色 | ローム土ごく少量 |
| 47 基本土層3層 | 褐色 | ローム土ごく少量 |
| 48 基本土層4層 | 褐色 | ローム土ごく少量 |

4号竪穴状遺構



- | | | |
|--------------|--------|---------|
| 1 Hs10YR6/3 | にがい黄褐色 | しまり中や強い |
| 2 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり強い |
| 3 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 4 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 5 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 6 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 7 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 8 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 9 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 10 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 11 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 12 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 13 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 14 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 15 Hs10YR6/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 16 Hs10YR6/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 17 Hs10YR6/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 18 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 19 Hs10YR6/2 | 褐色 | しまり中や強い |
| 20 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 21 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 22 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 23 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 24 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 25 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 26 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 27 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 28 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 29 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 30 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 31 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |
| 32 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり中や強い |



- | | | | |
|--------------|--------|---------|----------|
| 26 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり強い | ローム土少量 |
| 27 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり中や強い | ローム土少量 |
| 28 Hs10YR7/4 | 褐色 | しまり強い | ローム土ごく少量 |
| 29 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり強い | ローム土少量 |
| 30 Hs10YR7/3 | にがい赤褐色 | しまり強い | 褐色スクリヤ多量 |
| 31 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い | ローム土多量 |
| 32 Hs10YR7/2 | にがい赤褐色 | しまり中や強い | ローム土多量 |
| 33 Hs10YR7/4 | にがい赤褐色 | しまり強い | ローム土ごく少量 |
| 34 基本土層1層 | 褐色 | | |
| 35 基本土層2層 | 褐色 | | |
| 36 基本土層3層 | 褐色 | | |
| 37 基本土層4層 | 褐色 | | |
| 38 基本土層5層 | 褐色 | | |
| 39 基本土層6層 | 褐色 | | |
| 40 基本土層7層 | 褐色 | | |
| 41 基本土層8層 | 褐色 | | |
| 42 基本土層9層 | 褐色 | | |
| 43 基本土層10層 | 褐色 | | |
| 44 基本土層11層 | 褐色 | | |
| 45 基本土層12層 | 褐色 | | |
| 46 基本土層13層 | 褐色 | | |
| 47 基本土層14層 | 褐色 | | |
| 48 基本土層15層 | 褐色 | | |

第12図 3・4号竪穴状遺構実測図

遺物(第16図):土器・石器は、いずれも上層から出土したものである。1~10・12はI群で、1・2は1類、3は2類a種、4~7は2類c種で、6と7は同一個体である。8は2類f種、9は2類、10・12は5類である。11・13~21はII群で、13は1類b種、14は4類、15~18は6類、19は3類、11・20・21は7類である。22・23はIII群2類a種で、24は繊維を多量に含む底部で、III群1類の可能性もある。石核2点・剥片2点・磨石2点が出土している。焼礫は125.083kg出土している。時期:遺構に確実に伴う遺物がないため断定はできないが、基本土層12層の時期に基づいて、打越式に比定する。

4 炉穴

底面に赤化と硬化があり、焼土を伴うものを炉穴とした。2基検出されているが、1号炉穴については、1号竪穴住居跡で詳述したので、ここでは2号炉穴のみ扱う。

2号炉穴(第13図)

遺構の南西側半分に硬化と赤化がみられ、その末端には焼土が2~3cm堆積している。また、363号土坑と重複し、8号集石遺構が隣接するため、両者もここで扱う。

位置: B区北東部 N-42グリッド

規模: 炉穴-長軸130cm(調査部分のみ)・短軸78cm・深さ87cm

土坑-長軸65cm(調査部分のみ)・短軸93cm・深さ54cm

集石遺構-幅45cm(セクションで検出したため、奥行きは不明)

重複関係: 2号炉穴・8号集石遺構→363号土坑

確認面: 13層上面

遺物: なし

5 土坑

9基の土坑を検出している。この内の360・361・367・373号土坑は、長軸130~170cm、短軸110~140cm程度の楕円形を呈し、深さが60~130cmと深い点で共通するが、2号竪穴状遺構の土坑1・2と3号竪穴状遺構の土坑1・2も、規模や形状が類似している。それだけでなく、これらの土坑は、等高線に沿ってほぼ等間隔に分布しており、その性格は不明だが、共通の目的で構築された可能性が高い。なお、364・365・368・369号土坑は、土坑底面のローム層の赤化が著しいことから、炉穴の可能性もある。

各土坑の時期であるが、打越式期と考えられる竪穴状遺構を切る土坑と類似する360・361・367・373号土坑は同時期の可能性が高い。364号土坑も早期末葉の土器を伴出することから同時期と考えられ、365・368・369号土坑についても隣接する打越式の3号土器集中と確認面が同一のため、やはり同時期と考えられる。

なお、北東側から南西側へむかって記載するため、土坑番号順にはなっていない。

373号土坑(第13図)

位置: B区北東部 K-42、43グリッド

規模: 長軸173cm・短軸139cm・深さ128cm

確認面: 12層上面

遺物: なし

361号土坑（第13図）

位置：B区北東部M-41グリッド

規模：長軸145cm・短軸121cm・深さ92cm

確認面：12層上面

遺物：なし

360号土坑（第13図）

位置：B区北東部L-39グリッド

規模：長軸130cm・短軸110cm・深さ68cm

確認面：13層上面

遺物（第18図）：底面から焼炭9.242kg出土。また、上層から1が出土している。燃糸文を施すもので、Ⅱ群7類である。

367号土坑（第13図）

位置：B区北東部N-36、37グリッド

規模：長軸145cm・短軸110cm・深さ91cm

確認面：13層上面

遺物（第19図）：上層から土器と石器が出土している。1はⅡ群1類c種、2は石核（緑色凝灰岩）、3は磨石（砂岩）である。

365号土坑（第13図）

土坑1～4が重複している。土層堆積状況や切合い関係から土坑1・土坑4→土坑3→土坑2の順に構築されたと考えられる。なお、土坑1～3の底面はローム層であるが、著しく赤化しており、被熱の痕跡と考えられる。焼土や炭化物はないが、炉穴の可能性はある。

位置：A区I-27、28グリッド

規模：全体-長軸203cm・短軸160cm・深さ60cm

土坑1-長軸110cm・短軸80cm・深さ40cm

土坑2-長軸105cm・短軸60cm・深さ78cm

土坑3-長軸85cm・短軸50cm・深さ70cm

土坑4-長軸160cm・短軸42cm・深さ49cm

確認面：13層上面

遺物：なし

369号土坑（第13図）

底面はローム層であるが、やや赤化しており、被熱の痕跡と考えられる。焼土や炭化物はないが、365号土坑と同じく、炉穴の可能性はある。

位置：A区I-27グリッド

規模：長軸92cm・短軸83cm・深さ26cm

確認面：13層上面

遺物：なし

364号土坑（第14図）

上坑1～3が重複している。上層堆積状況や切合い関係から土坑3→上坑1→土坑2の順に構築されたと考えられる。なお、土坑1・2の底面はローム層であるが、著しく赤化しており、被熱の痕跡と考えられる。焼上はないが、底面に多量の炭化物もあり、炉穴の可能性がある。また、土坑3は、底面が著しく硬化しており、炉穴の足場であった可能性がある。

位置：A区I-25・I-25グリッド

規模：土坑1－長軸90cm・短軸67cm・深さ41cm

土坑2－長軸95cm・短軸71cm・深さ63cm

土坑3－長軸100cm・短軸68cm・深さ14cm

確認面：13層上面

遺物（第18図）：下層からⅡ群6類の1が、上層から同じくⅡ群6類の2と捻糸文を施すⅡ群7類の3が出土している。石器も上層から多数出土しており、4（緑色凝灰岩）・5（緑色凝灰岩）は削器、6は磨石（花崗閃緑岩）である。他に石核2点・剥片6点・削器1点・礫器1点・磨石1点も出土している。

368号土坑（第14図）

底面はローム層であるが、著しく赤化しており、被熱の痕跡と考えられる。焼上はないが、365・369号土坑と同じく炉穴の可能性がある。

位置：A区H-26グリッド

規模：長軸99cm・短軸56cm・深さ63cm

確認面：13層上面

遺物：なし

6 集石遺構

基本土層12層上面で、被熱した礫で構成される集石遺構を9基検出したが、8・9号集石遺構は、調査区外のため、セクション上でのみ確認したものである。集石遺構の認定にあたっては、調査範囲内に大量の焼礫が出土していたため、2面以上で構成されるものに限定した。また、集石遺構内、集石遺構間及び集石遺構外の焼礫との接合を試みたところ、集石遺構内での接合例は少数認められたが、集石遺構間及び集石遺構外との接合は、2号集石遺構の1例を除いて皆無であった。このことから、集石遺構は、集石遺構ごとに礫を管理し、複数の集石遺構間で礫を使い回すことはなかったと考えられる。なお、礫が複数面堆積するにも係らず、明確な掘り込みは認められなかったことから、平地かごく浅い窪みで礫を用いたようである。なお、集石遺構の時期は、早期中葉～末葉の土器が伴出し確認面が基本土層12層上面であることから、いずれも早期末葉の可能性が高い。

1号集石遺構（第14図）

位置：B区北東部K-41グリッド

規模：長軸120cm・短軸74cm・総重量95.163kg

遺物（第20図）：1はⅠ群5類、2はⅡ群7類、3～5はⅡ群6類、6はⅤ群である。7は石蘇（緑色凝灰岩）、8は磨石（花崗閃緑岩）である。他に磨石がもう1点出土している。

2号集石遺構

位置：B区南西部M-33、34グリッド

規模：長軸178cm・短軸70cm・102.599kg

遺物（第20図）：1～4はI群で、1・2は2類g種、3は2類d種、4は2類a種である。5～8はII群で、5～7は6類、8は3類である。

3号集石遺構（第14図）

大量の炭化物が遺構の全層で認められた。放射性炭素年代測定を依頼したところ、3359～3121calBCという測定結果であった（第6章第3節）。これは、縄文時代中期中葉にあたる年代であり、本遺構に伴出する土器が縄文時代早期末葉であるのと相反するものであった。上層からの混入の可能性もあるため、今後、別の炭化物による年代測定を行う必要がある。

位置：B区南西部J-26、27グリッド

規模：長軸124cm・短軸90cm・114.195kg

遺物（第21図）：1～3はII群で、1は1類b～e種、2・3は6類である。4は石皿（玄武岩溶岩（富士山））。

4号集石遺構（第14図）

位置：B区南西部N-30グリッド

規模：長軸132cm・短軸84cm・総重量22.311kg

遺物（第21図）：1は、I群5類である。

5号集石遺構（第14図）

位置：B区南西部M-24グリッド

規模：長軸116cm・短軸68cm・総重量31.757kg

遺物（第21図）：1・2はI群2類a種、3はI群5類、4はII群7類、5はII群1類b～e種である。

6号集石遺構（第14図）

位置：B区南西部L-32グリッド

規模：長軸92cm・短軸66cm・総重量43.524kg

遺物（第21図）：1はI群5類、2はII群1類b種、3はII群1類b～e種、4・5は同一個体でII群6類、6は燃糸文を施すII群7類である。

7号集石遺構

位置：B区北東部O-41グリッド

規模：長軸110cm・短軸70cm・総重量162.382kg

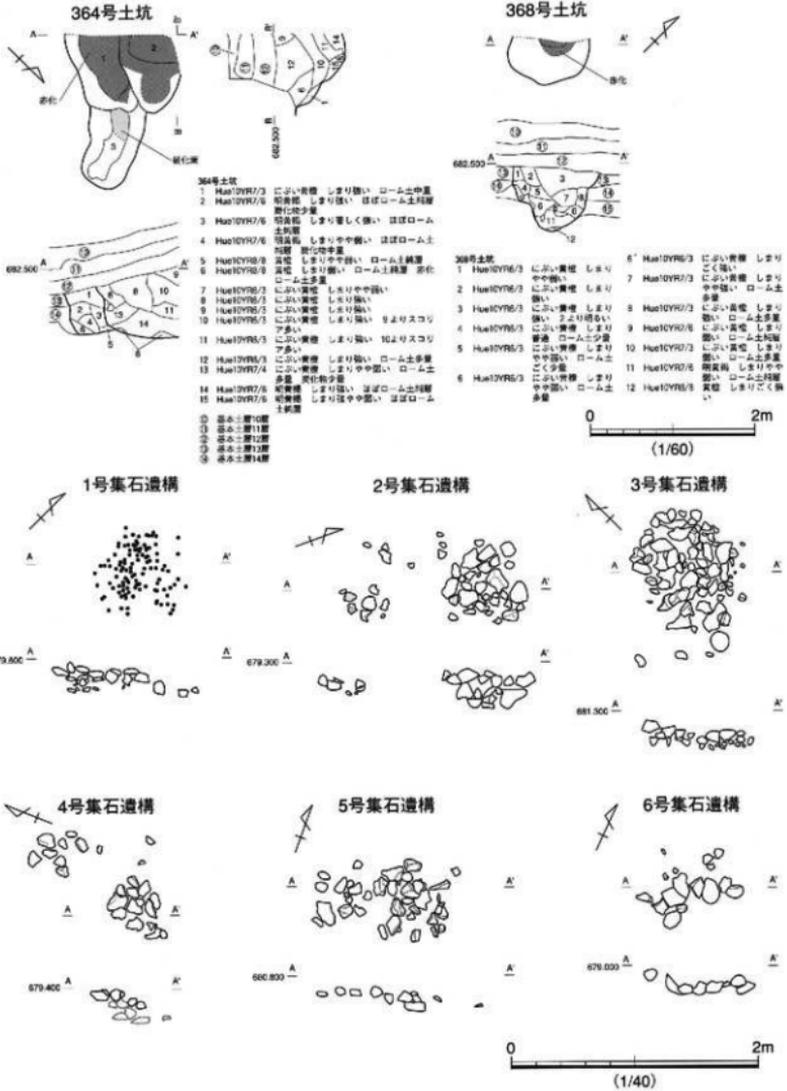
遺物：なし

8号集石遺構

位置：B区北東部O-42グリッド

規模：幅50cm・奥行きはセクション上のため不明。

確認面：13層中



第14図 土坑・集石遺構実測図

9号集石遺構

位置：B区北東部O-36グリッド

規模：幅50cm・奥行きはセクションのため不明。

確認面：12層中

7 土器集中

土器1個体の破片が、集中して出土したもので、3基検出した。

2号土器集中

位置：B区北東部K-35グリッド

規模：長軸30cm・短軸20cm

確認面：13層上面

遺物（第22図）：4単位の波状口縁だが、波頂部以外は平縁となる。右下がりの条痕を施しつつ、山形文の左下がり部分を2段押捺した後、右下がり部分を押捺している。そのため、山形文左下がり部分は、列点状でなく、貝殻腹縁をやや引きずっている。口端部には、貝殻腹縁の押し引きによる刻目を施す。内面は、条痕調整の後、ナデ調整を行うため条痕は残らない。

3号土器集中（第13図）

位置：A区1-26グリッド

規模：長軸50cm・短軸40cm

確認面：13層上面

遺物（第22図）：4単位の突起をもつ。口端に刻目、口唇部へ隆帯を施し、突起部分へ瘤状の隆帯を貼付ける。隆帯貼付け後、口唇部には横位の条痕、口縁部には矢羽根状に交差する条痕を施しその下端に貝殻腹縁文による山形文を3段巡らす。器面調整は、右下がりの条痕を施すが、その後丁寧なナデ調整を行うため、条痕は浅く残るのみである。内面は、横位条痕を巡らした後、横位のナデ調整を施す。口縁部は条痕が消える程度にナデアるが、胴部は条痕をそのまま残している。底部は一部のみ残存し、尖底になる。なお、口縁部には少量であるが、オコゲが付着し、胴部は著しく赤化している。

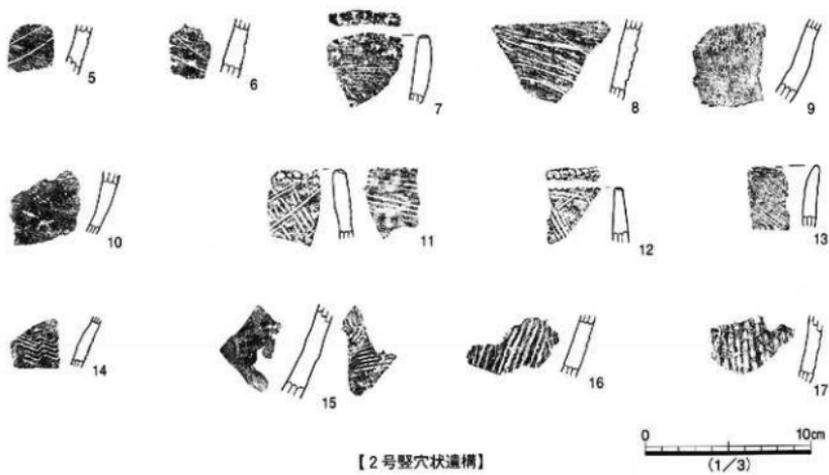
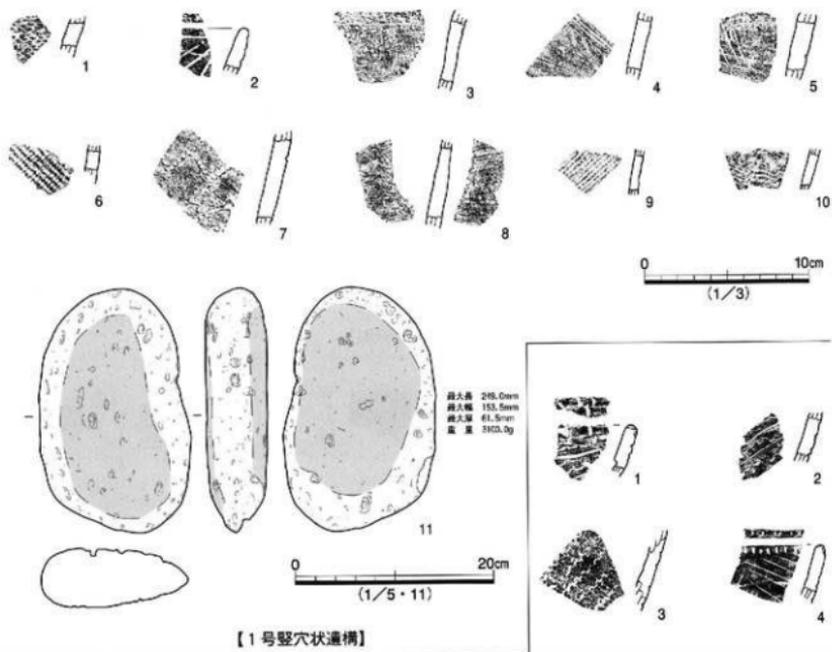
4号土器集中

位置：B区北東部I-34グリッド

規模：幅50cm・奥行きはセクションのため不明。

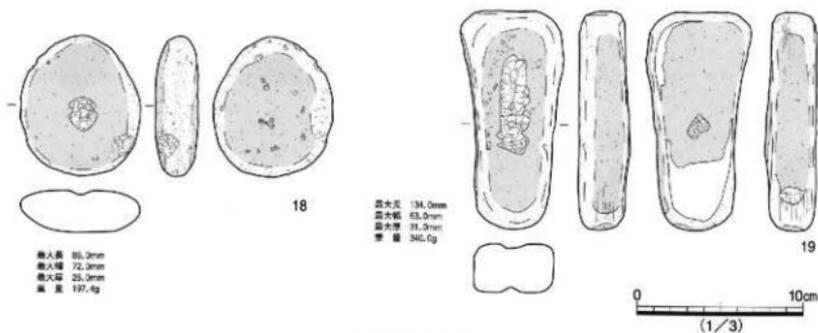
確認面：13層上面

遺物（第23図）：胴部から底部にかけての破片がまとまるが、接合は部分的にしかしらない。外面には、斜位の条痕を施した後、山形文を巡らせ、内面には横位条痕を施す。

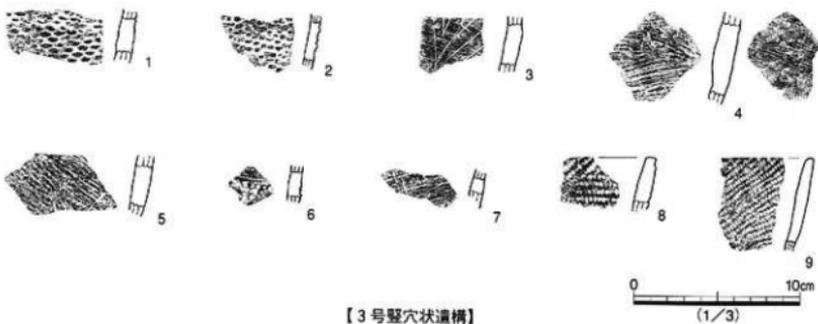


第15図 1・2号壺穴状遺構出土遺物

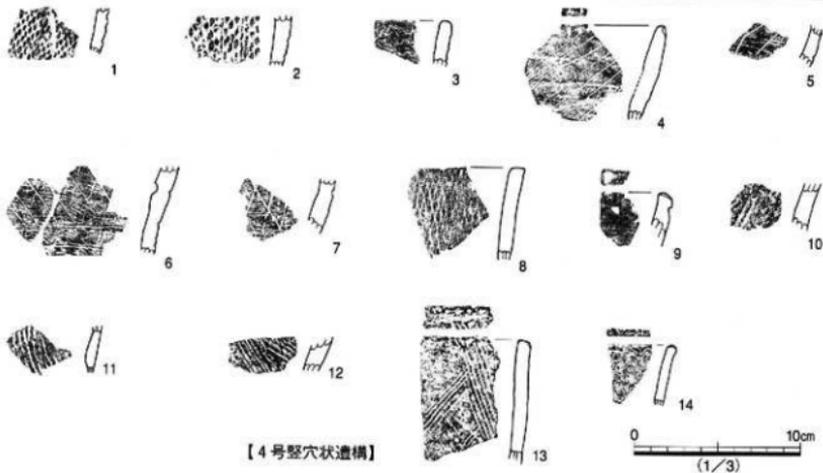
第4章 縄文時代の遺構と遺物



【2号竪穴状遺構】

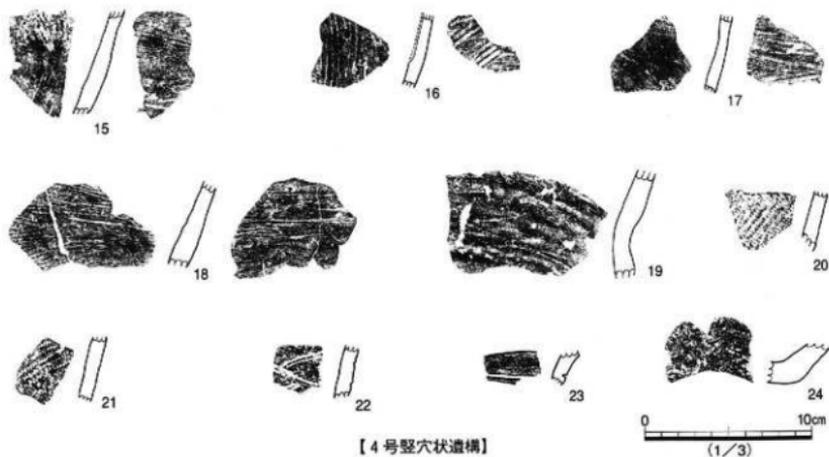


【3号竪穴状遺構】

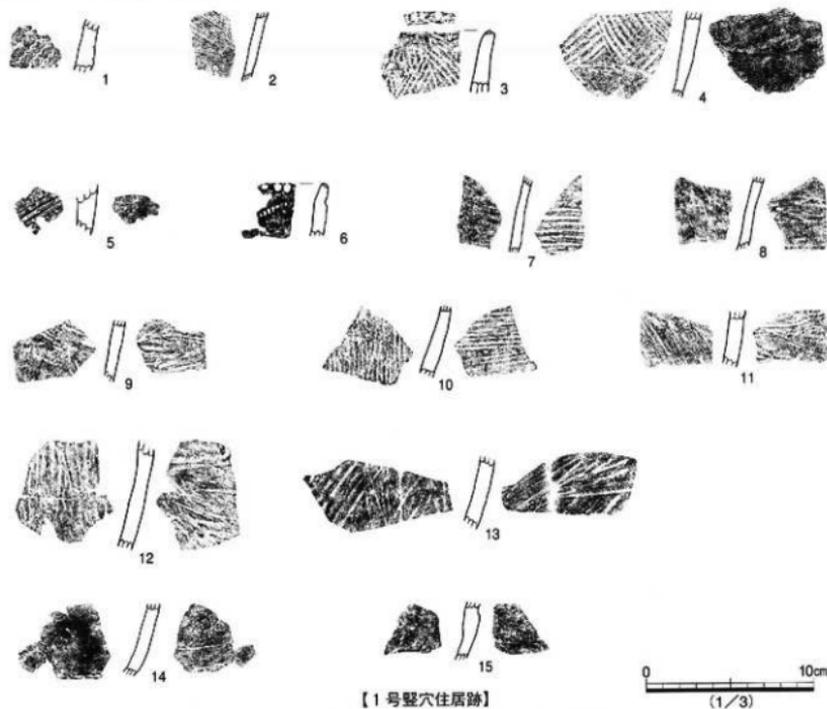


【4号竪穴状遺構】

第16図 2～4号竪穴状遺構出土遺物



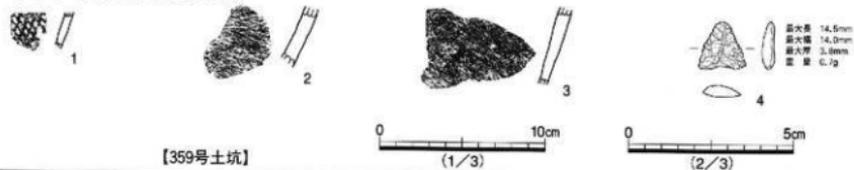
【4号壑穴状遺構】



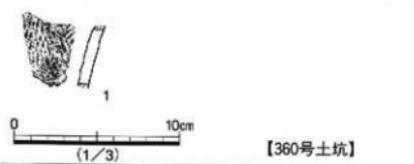
【1号壑穴住居跡】

第17図 4号壑穴状遺構・1号壑穴住居跡出土遺物

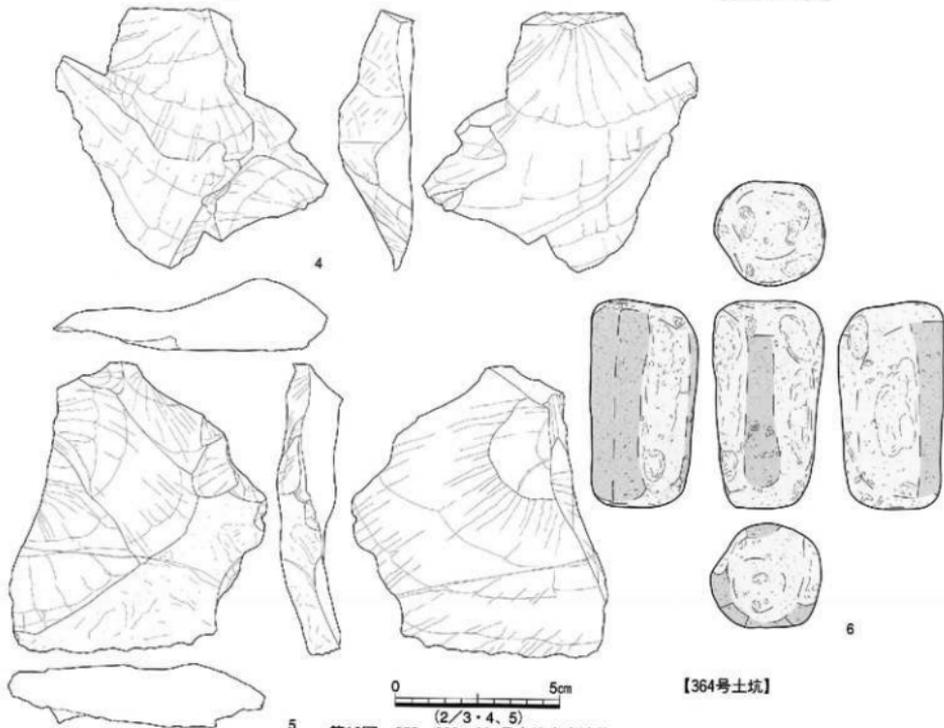
第4章 縄文時代の遺構と遺物



器大長 14.5mm
器大幅 14.0mm
器大厚 3.0mm
重 量 6.7g



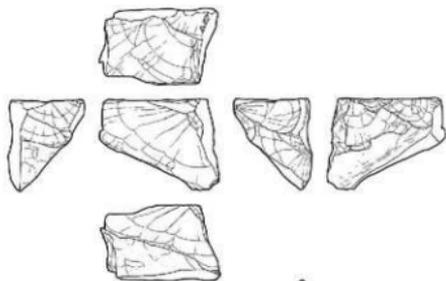
4	器大長 75.5mm	5	器大長 85.0mm	6	器大長 127.0mm
	器大幅 62.4mm		器大幅 77.5mm		器大幅 87.0mm
	器大厚 22.0mm		器大厚 18.0mm		器大厚 54.0mm
	重 量 67.1g		重 量 116.0g		重 量 300.3g



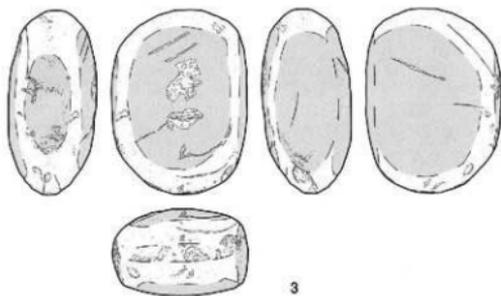
第18図 359・360・364号土坑出土遺物



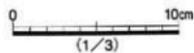
2	最大長 96.0mm	3	最大長 113.5mm
	最大幅 72.0mm		最大幅 85.0mm
	最大厚 47.0mm		最大厚 53.0mm
	重量 176.9g		重量 798.0g



2



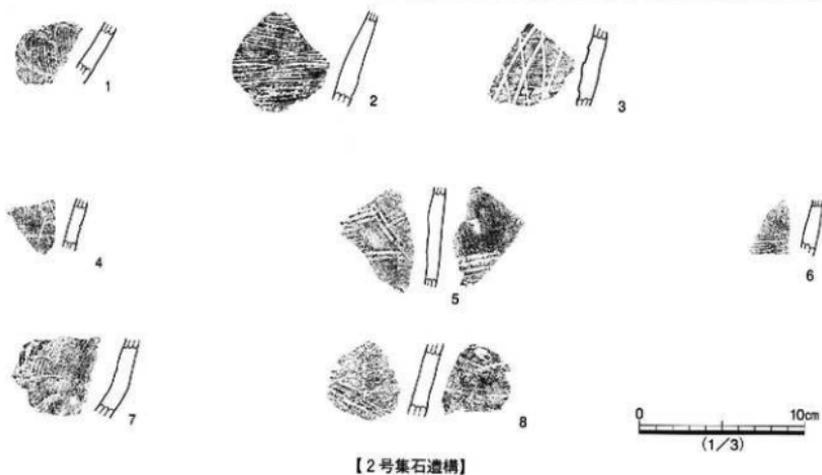
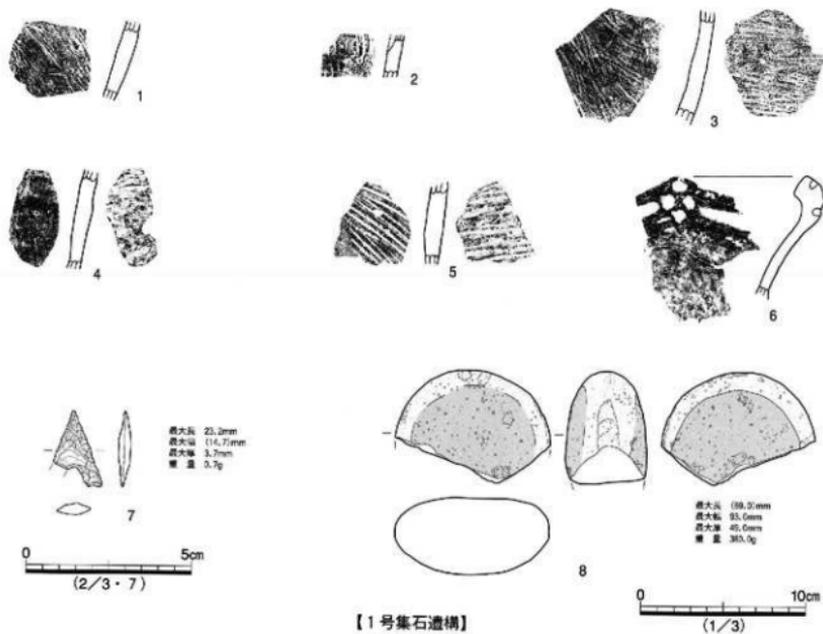
3



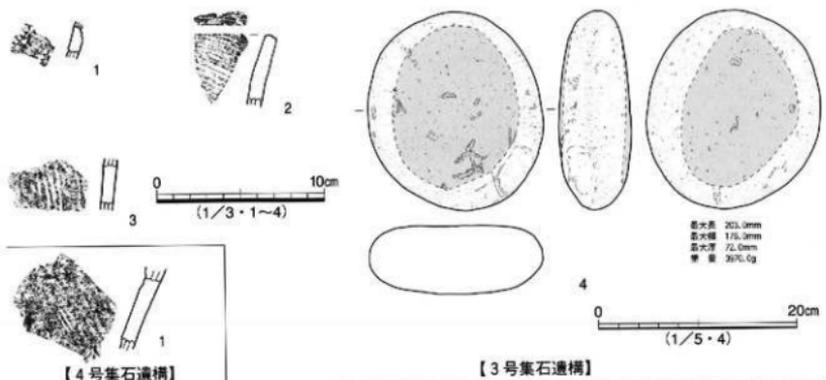
【367号土坑】

第19圖 367号土坑出土遺物

第4章 縄文時代の遺構と遺物

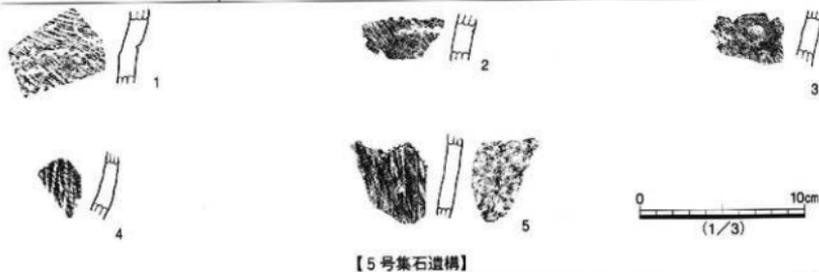


第20図 1・2号集石遺構出土遺物

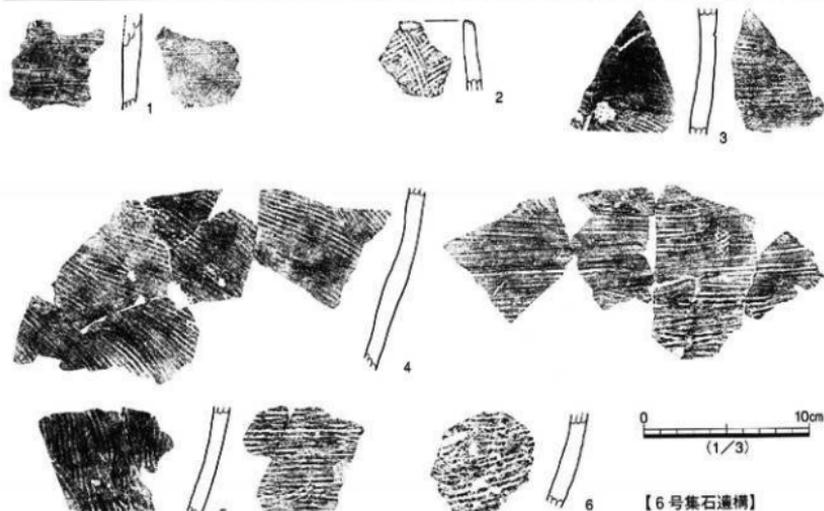


【4号集石遺構】

【3号集石遺構】

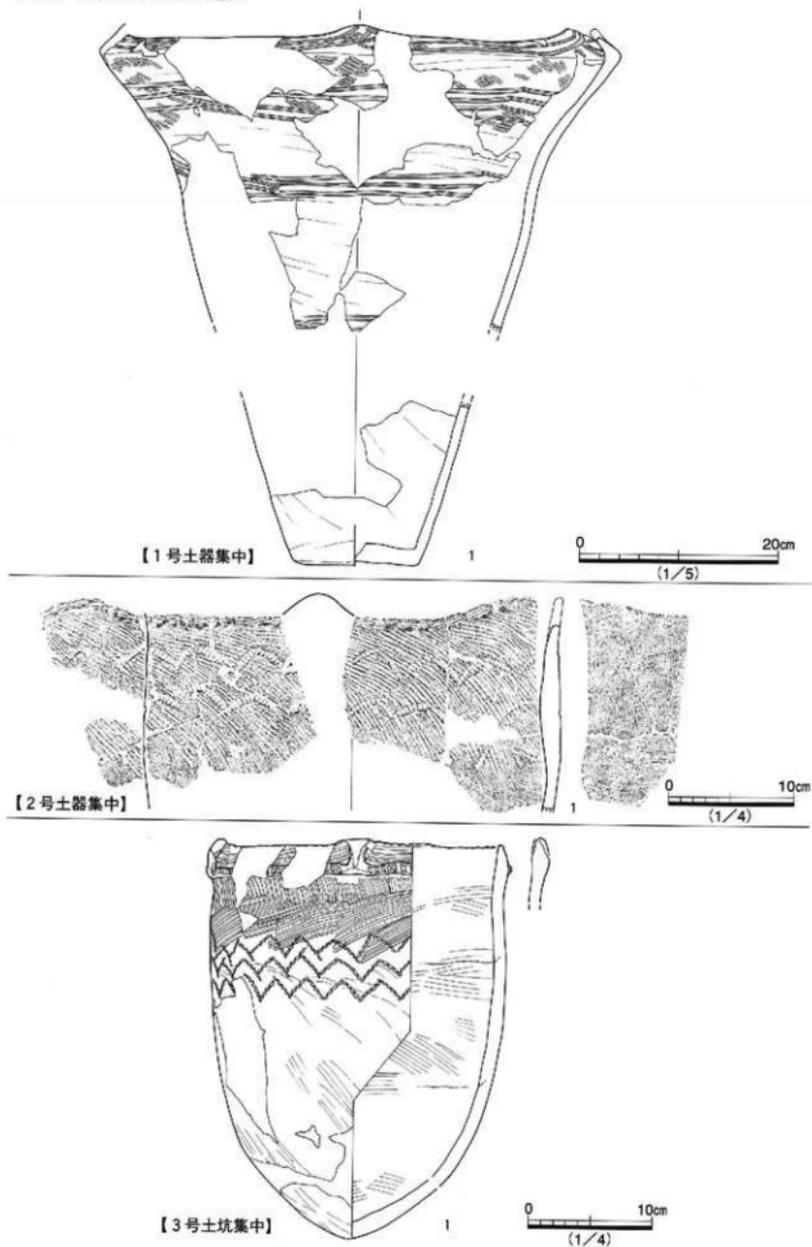


【5号集石遺構】

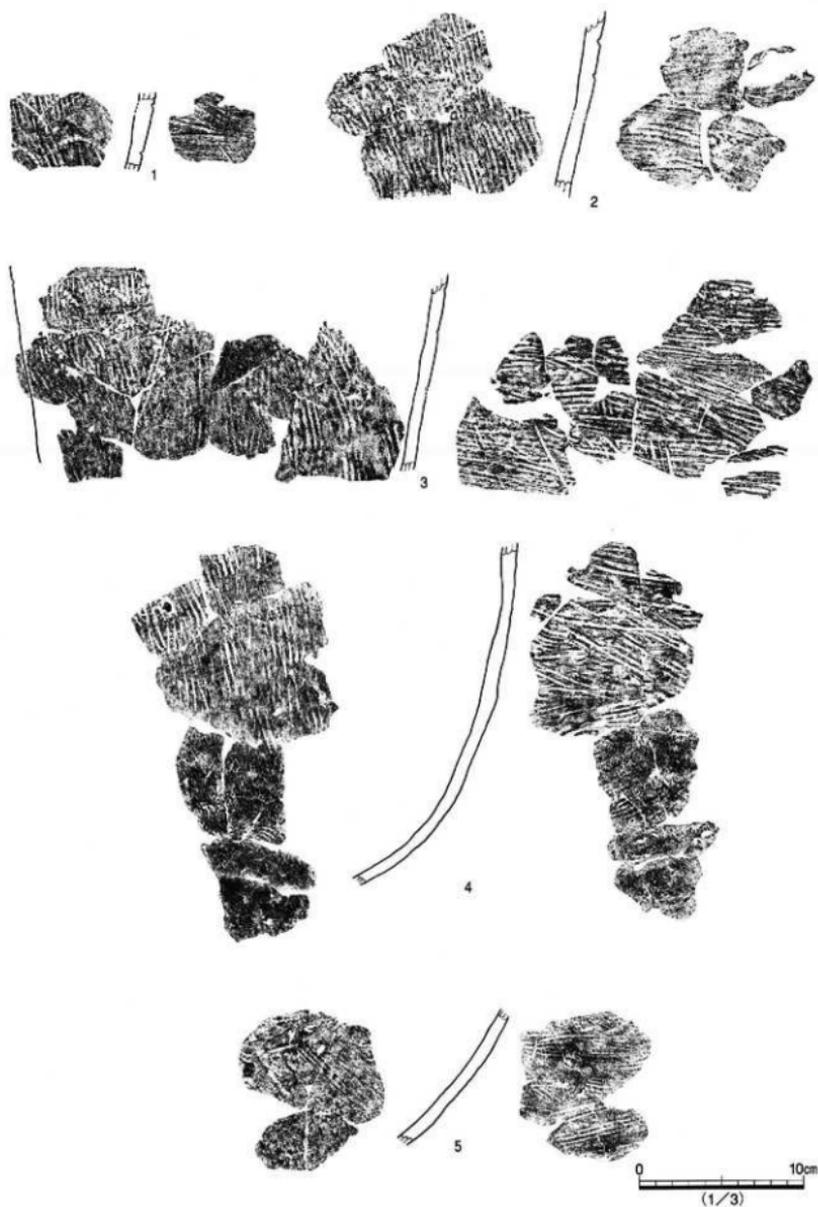


【6号集石遺構】

第21図 3~6号集石遺構出土遺物



第22図 1～3号土器集中出土遺物



第23図 4号土器集中出土遺物

8 遺構外出土土器

第I群 縄文時代早期中葉～末葉

1類 押型文土器（第24図1～28）

押型文を施すものをまとめた。胎土は石英が多く、金雲母も目立つ。内面には丁寧な磨きが行われている。

1は、楕円押型文を全面に横走させたものである。口縁部が欠如しているが、他はほぼ完形である。2は、3段の横位帯状施文を施し、下端は無文部で終えている。3～6は、2と同一体で、4・6は、横位帯状施文直下に縦位施文が見られ、2の下部を構成すると思われる。

7～11は同一個体で、楕円押型文を全面に縦走させたものである。12・14～21は楕円押型文を横走させ、13・22～23は楕円押型文を縦走させている。24は、楕円押型文の横位施文下位に縦位施文がみられる。25は山形押型文、26～28は格子目押型文である。

2類 田戸上層式併行（第25図29～第27図151）

田戸上層式に併行すると考えられる土器をまとめた。その多くは、口縁部が角頭状で、口端に刻目を、口縁部から頸部に種々の文様を施す。調整は、内外面に植物質のもので条痕を施した後、内面を丁寧に磨いているものが多く、繊維は少なく、非常に硬質である。これらの土器を、文様に基づいて7種に分類した。

a種 貝殻腹縁文を施すもの（第25図29～第26図82）

29～49は貝殻腹縁文のみを施す。破片が揃っている29をみると、頸部に屈曲部があり、そこから外反しつつ、口縁部ですぼまっている。口端に棒状工具による刻目を、口唇部にはハの字状の刻目を、口縁部には右下りと左下りの貝殻腹縁文を交互に施文し、頸部の屈曲部には逆三角形の刻目を施している。頸部以下は無文で、条痕を施した後、磨いている。30～35も、口唇部に刻目を施すもので、30と32は29と同じくハの字状を早する。36～41には刻目はみられない。40は繊維が多く厚手で、41は貝殻腹縁文の間隔が狭く、他と様相が異なる。44～47は口縁部付近で、斜位の貝殻腹縁文が施される。42・43・48・49は頸部で、文様下端の区画文をみることができる。42は刻目、43・48・49は横位貝殻腹縁文により文様下端を区画する。

50～83は、29～49とは貝殻腹縁文を沈線間に施す点で異なる。器形と文様構成が分かる50をみると、頸部で屈曲して外反しつつ口縁部ですぼまり、口端に刻目をいれ、口縁部には斜位の沈線と貝殻腹縁文を施し、その下端に横位の貝殻腹縁文を施文しており、29と類似する器形と文様構成をもつ。ただ、67・69・70・72のように沈線が屈曲するものや、68・71のように頸部の屈曲部で文様の施文方向を変えているものなどもある。73～77も頸部で、文様下端区画がなされており、73・74は平行沈線間に波状沈線、75は横位沈線、76・77は平行沈線間に貝殻腹縁文を山形に施している。79～81は沈線間に斜位貝殻腹縁文を施し、82は口唇部に貝殻背圧痕を施すものである。

b種 刺突列を施すもの（第26図83～86）

斜位沈線間に貝殻腹縁文でなく、刺突列を施すものである。この刺突列は、一見すると貝殻腹縁文に見えるが、半円の刺突が列状に連なっており、半截竹管等を用いたものである。頸部の文様下端を横位沈線で区画するなど文様構成は、a種と同様である。

c種 沈線を施すもの（第27図87～109）

沈線のみを施すものをまとめた。87～97は、平行沈線を施すもので、93のみ沈線間に波状沈線を施文する。87～93は、口唇部に刻目を施すが、94～103は刻目がみられない。97～100は、屈曲する数条の沈線を施す。101は、他より沈線が深く幅広く様相が異なる。103は地文縄文上に平行沈線を施している。107～109は、頸部で、文様下端を横位沈線により区画している。特に、107・109は、文様下

が器形の屈曲部となっており、a・b種の文様構成・器形と類似する。

d種 格子目文を施すもの（第27図110～115）

格子目文を施すが、口縁部が角頭状を呈し、口端に刻目がみられる点や、器面に条痕調整を施す点は、他種と共通する。110・111は同一個体である。112は口唇部に横位沈線を施す。

e種 条線を施すもの（第28図116・117）

細密な条線を施すもので、口唇部には刻目を施す。文様構成が共通するため、Ⅱ群2類としたが、非常に薄手で、他種とは全く様相が異なるため、他群の可能性もある。

f種 燃糸文を施すもの（第28図118・119）

角頭状の口端部に刻目を施し、全面に燃糸文を施すもの。口端部の特徴が他種と共通する。

g種 条痕を施すもの（第28図120～151）

条痕調整をそのまま残すのが本種の特徴だが、ナデ消すものも多くみられる。口縁部が角頭状を呈し、口端部と口唇部に刻目を施す点で、やはり他種と共通する。120～124は同一個体で、口端部と口唇部に刻目を施し、器面には条痕調整をそのまま残すが、内面は丁寧にナデがはいる。口唇部の刻目が「ハ」の字を呈する点は、a種と酷似する。125～130も、同様に口唇部に刻目が施されるが、131～151にはみられない。口縁部が角頭状となる125～139・142～145の口端部には刻目が施される。146～148は、口唇部をやや突出させることで、角頭状の口縁にしている。149は、他に比べてやや薄手で、150は、口唇部に隆帯の淵痕がみられる。151は、口縁が尖頭状で、他とやや様相が異なる。

3類 鷗ヶ島台式（第29図152～161）

やや厚手で、胎土中には繊維と金雲母を多く含み、内外面には条痕調整が施される。

文様は、152～157・160のように、幅広い凹線を施した後、凹線に沿って凹形文を刺突し、凹線に囲まれた空白部に押し引き文を充填するものと、158・159のように斜位の沈線を施すものがある。161は、多条の沈線を施すもので、やや様相が異なるが、胎土が類似するため3類とした。

口縁部形状は、152・153のように、内割ぎの尖頭状となり、器形は、154・155・157・158・159のように、頸部を屈曲させる。

4類 絡条体疳痕文を施すもの（第29図162～165）

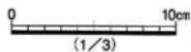
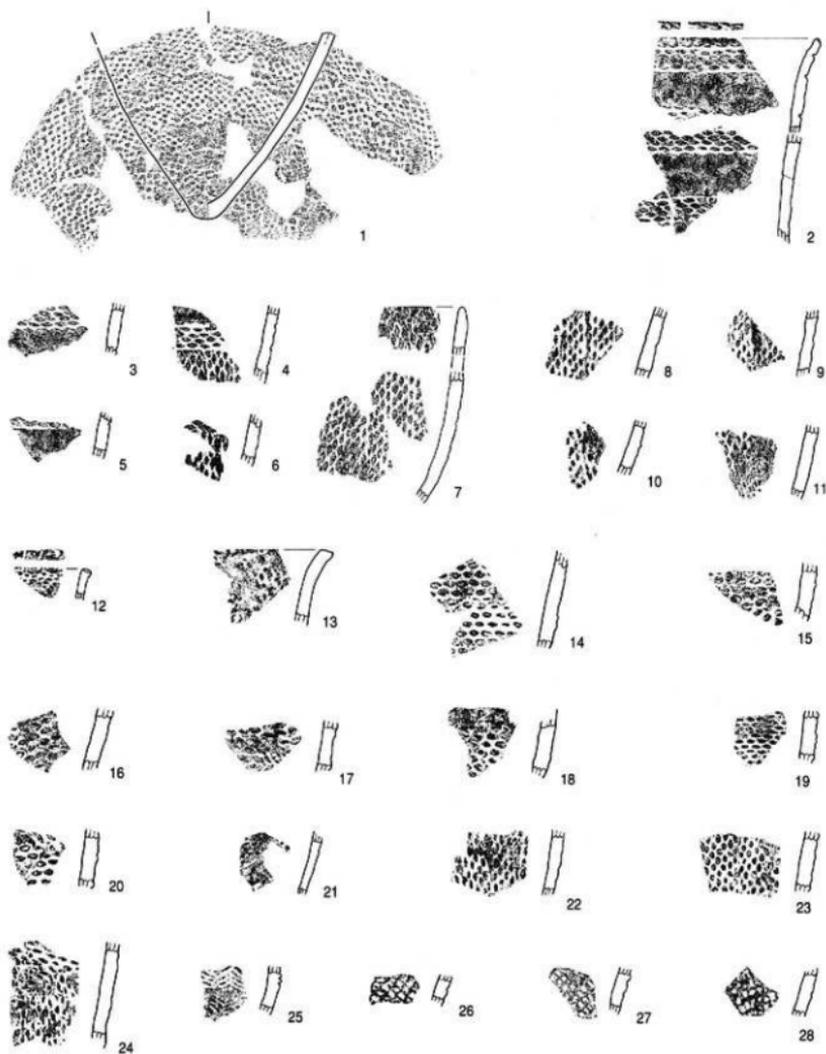
162・163は絡条体疳痕文を全面に施す。164・165は文様下端を区画するように施し、弱い屈曲のみみられる。

5類 条痕を施すもの（第29図166～第30図191）

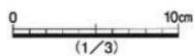
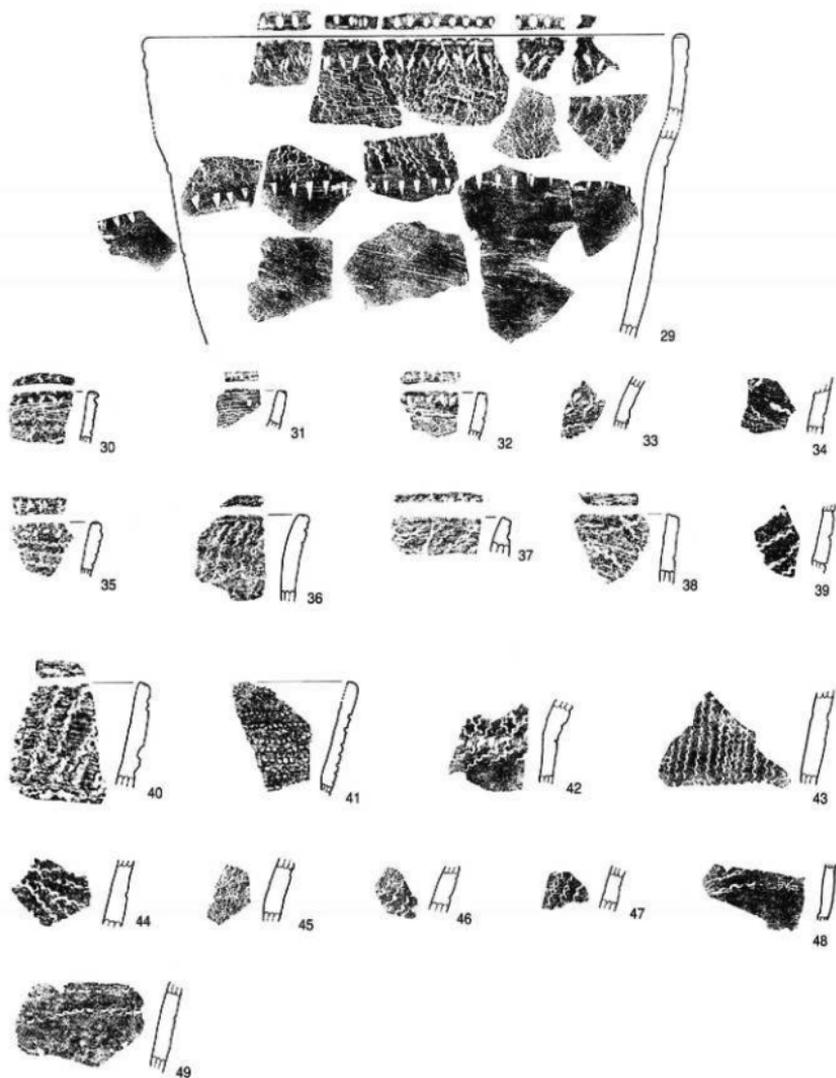
条痕を施す胴部破片をここにまとめた。外面調整の条痕が植物質で、内面には丁寧にナデが施される点で、2類と同様であることから、そのほとんどは2類の胴部であろう。条痕に只殻腹縁部を用い、内面に条痕を残すことが多い早期末葉の条痕文土器とは、大きく様相が異なるものである。

6類 縄文を施すもの（第30図192～194）

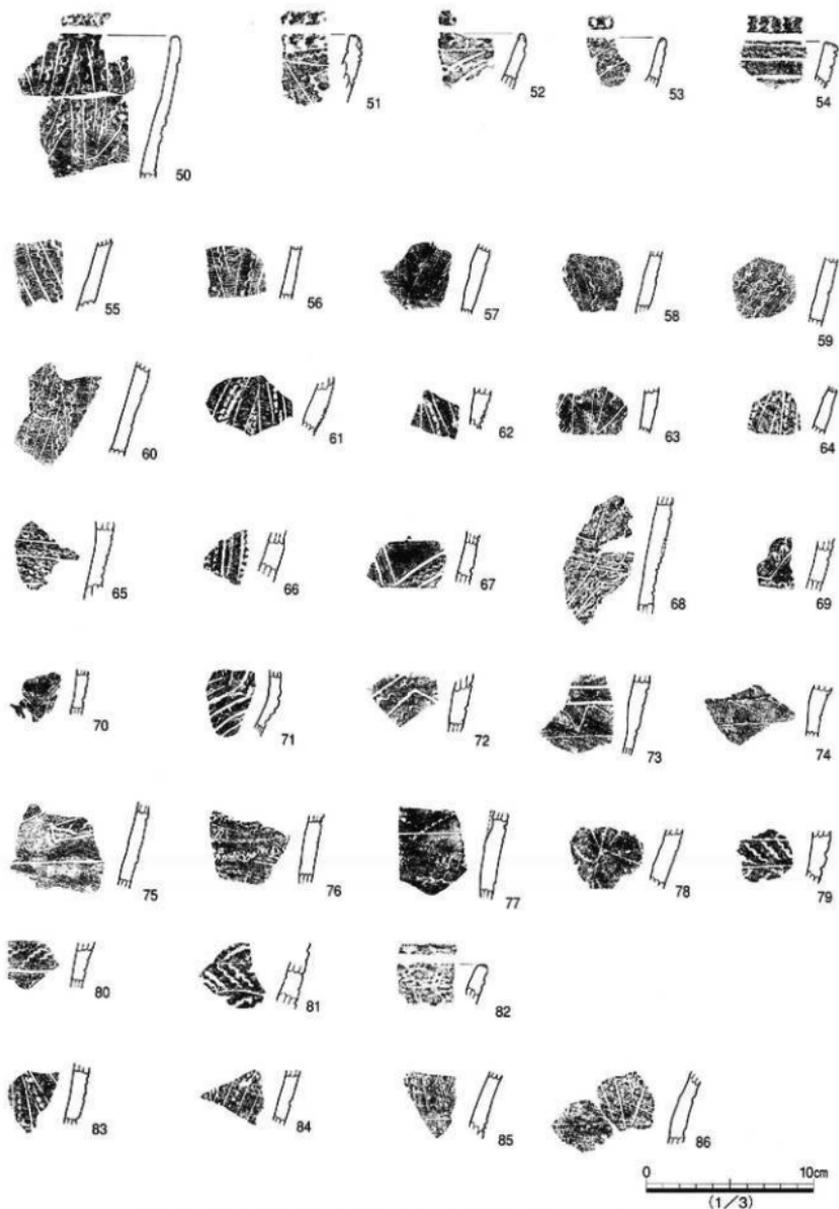
縄文を施し、ナデ調整により内面に明瞭な条痕を残さず、繊維を含むものをここにまとめた。192は、内面の条痕調整後のナデ調整や胎土などが、5類と類似する。193は、内面が風化しているため、判然としないが、胎土が他類と類似するため、6類とした。194は、内面へ丁寧に磨きが施されており、5類のナデ調整とはやや様相が異なる。



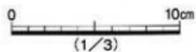
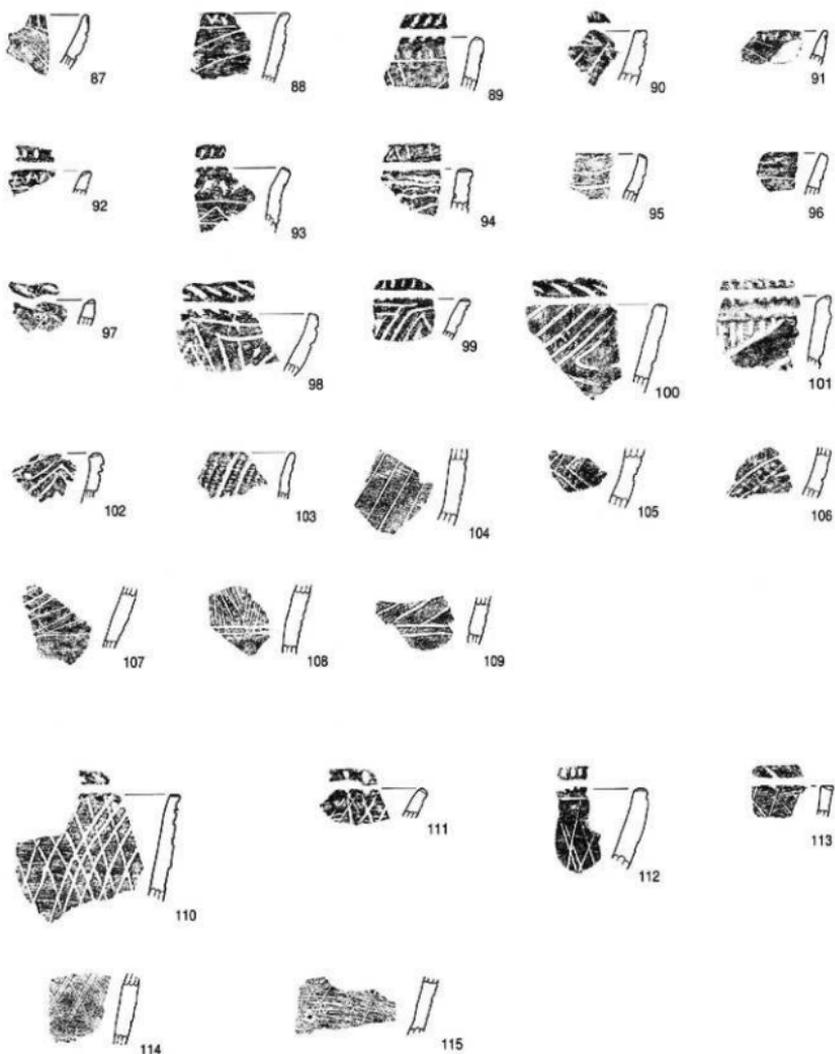
第24図 遺構外出土土器 第1群1類



第25図 遺構外出土土器 第Ⅱ群2類a種

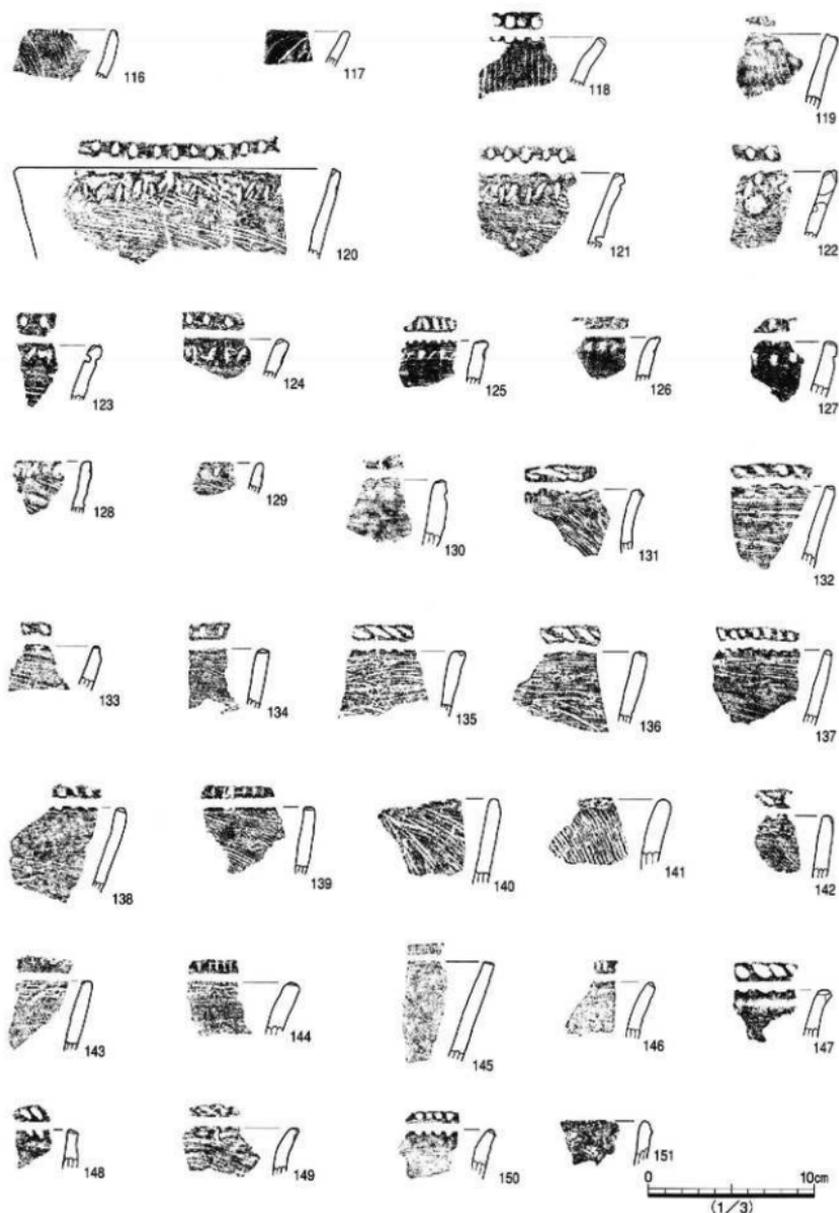


第26図 遠構外出土土器 第II群2類 a・b種 (a種-50~82、b種-83~86)

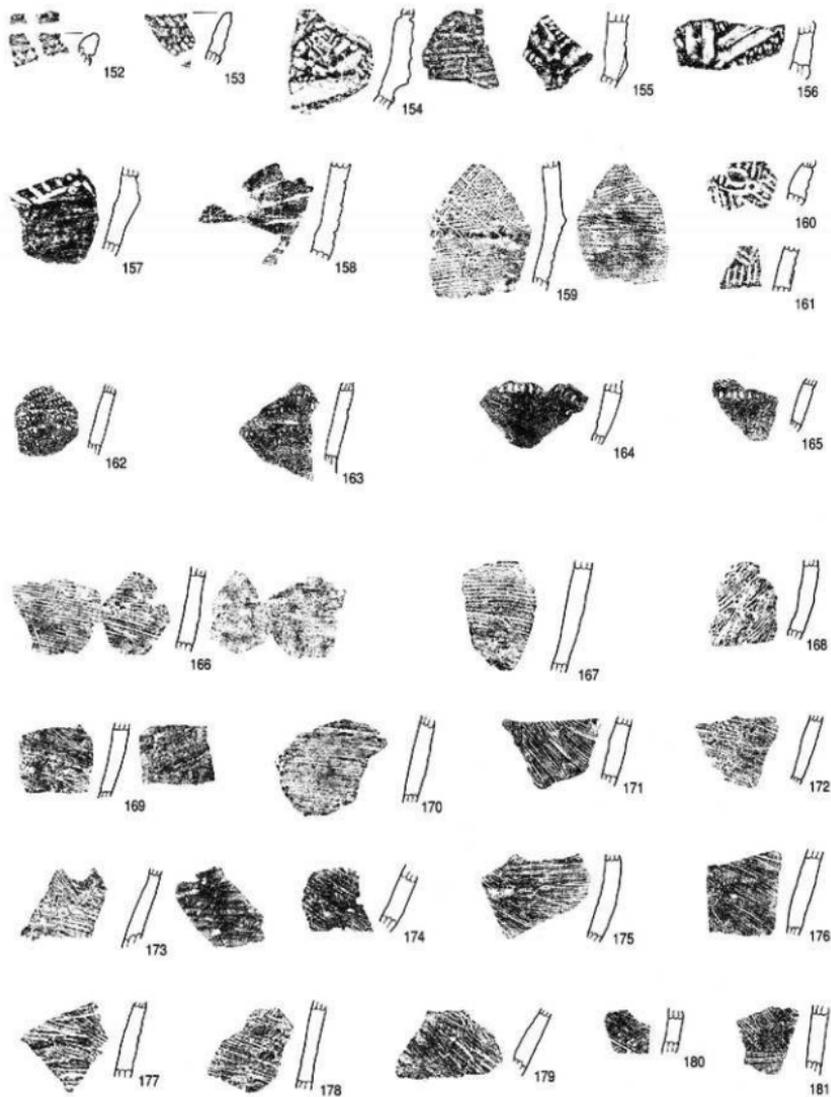


第27回 遺構外出土土器 第I群2類c・d種 (c種-87~109、d種-110~115)

第4章 縄文時代の遺構と遺物



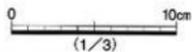
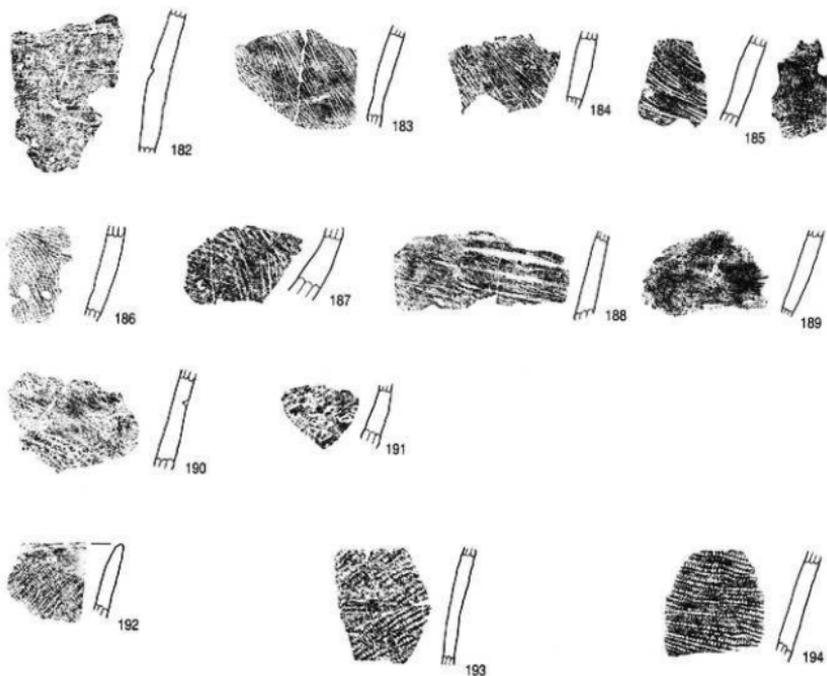
第28図 遺構外出土土器 第I群2類e・f・g種 (e種-116・117、f種-118・119、g種-120~151)



0 10cm
(1/3)

第29図 遺構外出土土器 第I群3・4・5類(3類-152~161、4類-162~165、5類-166~181)

第4章 縄文時代の遺構と遺物



第30図 遺構外出土土器 第1群5・6類 (5類-182~191、6類-192~194)

第3表 遺構外出土土器 第1群 観察表

海峽 番号	グロッド	形状	備考	海峽 番号	グロッド	形状	備考	海峽 番号	グロッド	形状	備考
1	M 30 2 12			01	O 31 4 13			高取	G 43 3 10		
	M 30 7 13			02	N 30 7 13	60と同		143	L 33 1 13		
2	M 37 4 11			03	K 30 4 13	50と同形		144	M 27 4 13		
	M 36 7 11			04	L 30 1 12			145	O 32 1 13		
	M 36 5 11			05	L 37 1 11			146	M 26 1 15		
3	M 37 4 12	2と同		06	N 30 2 12			147	K 26 1 12	雑形丸	
4	N 37 1 12	2と同		07	K 30 4 13			148	L 33 1 13		
	M 36 2 12			08	L 30 7 13			149	O 33 3 13		
5	M 30 2 12	7と同		09	L 30 7 13			150	P 34 4 10		
6	M 30 2 13	7と同		10	N 31 4 12			151	L 25 3 13		
	M 37 4 13			11	M 30 2 11			152	M 35 3 9		
7	M 37 4 13			12	O 30 3 11			153	M 31 3 10		
	M 37 5 13			13	M 28 2 13			154	K 31 1 13		
8	M 36 3 11	7と同		14	M 43 4 11			155	P 33 5 11		
9	N 37 3 12	2と同		15	K 36 1 11			156	O 40 1 11		
10	M 37 4 12	7と同		16	M 36 5 11			157	O 40 1 11		
11	O 32 2 13	7と同		17	N 37 1 13	76と同		158	N 31 1 12		
12	N 41 7 13			18	L 30 3 13			159	L 30 3 13		
13	O 43 3 10			19	K 30 4 10			160	M 42 2 9		
	P 37 4 11			20	L 25 1 12			161	M 31 1 10		
14	N 37 4 11			21	N 43 4 11			162	N 35 5 11		
15	K 37 2 11			22	M 36 3 11			163	I 50 5 11		
16				23	L 30 4 11			164	N 33 4 12	雑形丸	
17	I 37 2 12			24	L 25 5 11			165	K 30 3 12	50と同	
18	空E 27 1			25	J 30 4 12	66と同		166	M 20 4 10		
19	N 38 1 10			26	L 36 4 13			167	L 24 3 11		
20	N 35 4 11			27	M 39 3 13			168	O 32 1 13		
21	N 37 9 11			28	K 30 1 10			169	L 40 4 9		
22	N 31 2 13			29	O 32 2 13			170	L 36 4 13		
23	L 38 4 11			30	K 38 4 11			171	K 36 2 12		
24	L 29 3 11			31	O 37 3 9			172	I 24 1 12		
	I 37 2 12			32	K 31 7 11			173	K 32 3 12		
25	P 32 2 11			33	N 35 7 9			174	K 24 1 11		
26	O 35 3 11			34	L 39 3 11			175	L 29 1 13		
27	O 41 3 11			35	L 35 4 9			176	L 27 4 13		
	N 30 1 11			36	P 32 3 12			177	K 30 1 10		
	M 21 2 11			37	M 32 1 11			178	N 37 1 11		
	N 33 1 11			38	K 32 4 13			179	M 26 7 11		
	N 33 4 11			39	M 42 2 11			180	O 36 7 11		
	N 33 4 11			40	L 34 3 12			181	O 32 5 11		
	K 36 1 11			41	K 40 3 11			182	L 36 1 13		
	N 27 4 11			42	N 38 1 11			183	L 35 5 12		
	M 36 2 11			43	J 30 2 11			184	L 20 1 11		
	K 31 2 10			44	N 38 5 11			185	K 20 2 10		
	M 20 7 11			45	L 43 5 10			186	K 30 2 11		
	M 20 7 11			46	K 30 7 13			187	O 21 3 11		
	M 20 7 11			47	J 37 4 11			188	O 21 3 11		
	N 36 1 11			48	N 41 3 11			189	K 25 1 11		
	M 19 4 11			49	L 35 4 10			190	L 43 4 10	雑形丸	
	M 38 1 11			50	K 29 2 11			191	O 36 1 11		
	N 33 4 11			51	N 41 5 11			192	M 37 3 11		
	O 33 1 11			52	M 44 4 11			193	N 32 2 11		
30	L 31 2 12			53	O 41 4 13	130と同		194	K 43 4 11		
31	K 32 1 12			54	L 47 1 10			195	N 25 1 11		
32	O 34 4 13			55	P 33 3 13			196	O 21 2 11		
33	N 37 9 13			56	L 31 4 13			197	M 21 1 10		
34	K 31 1 12			57	O 35 2 12			198	O 25 7 11		
35	T 9 5			58	O 35 2 12			199	L 31 3 10		
36	N 30 1 11			59	M 28 5 11			200	L 31 1 11		
	L 38 2 11			60	M 28 5 11			201	L 33 3 11		
37	M 39 1 11			61	K 29 1 11						
38	N 25 4 11			62	L 37 7 11						
39	P 33 1 11			63	L 35 4 11						
40	N 37 7 13			64	L 35 4 11						
41	O 49 1 9			65	O 41 4 13	130と同					
42	L 35 3 12			66	N 25 1 12						
43	O 49 1 9			67	L 24 2 10	130と同					
44	N 37 2 12			68	N 25 1 12						
45	J 35 2 11			69	L 26 4 11						
46	L 38 2 12	雑子付直		70	O 36 1 10						
47	O 38 2 11	雑子付直		71	L 30 5 11						
48	O 38 2 11	雑子付直		72	P 31 3 11	130と同					
49	M 30 2 13			73	P 33 3 11						
50	M 30 1 13	雑子付直		74	L 31 4 13						
51	M 33 2 11			75	K 27 2 13						
52	M 35 2 11			76	N 23 4 12						
53	M 35 1 11			77	O 31 1 13						
54	P 33 1 9			78	K 31 2 10						
55	M 28 3 11	雑子付直・50と同		79	L 35 1 11						
56	M 28 2 11	雑子付直・50と同		80	K 31 7 11						
57	L 36 1 13	雑子付直・50と同		81	L 30 7 11						
58	M 36 9 13	50と同		82	L 27 4 12						
59	L 35 1 13	50と同		83	N 42 2 13						
				84	L 42 2 13						

第Ⅱ群 縄文時代早期末葉

1類 打越式 (第31図195～第34図316)

打越式に相当すると考えられる上器群をここにまとめた。口縁部形状は、角頭状と尖頭状のものがあるが、両者とも口端に刻目を施す点では共通する。また、内外面に貝殻腹縁による条痕調整がなされているが、そのほとんどは、その後ナデ調整が加えられている。外面は、文様としての条痕を目立たせるためか、ナデ消す傾向があり、内面は、ナデ調整がはいりながらも、条痕調整の痕を残しているものが多い。また、繊維は少なく、胎上は緻密であり、硬質なものが多い。

文様は、2方向の条痕を交差させる条痕文と1方向のみの条痕文を基本とし、それに隆帯や貝殻腹縁による山形文を加えることでバラエティを生じさせている。隆帯を貼付けるものは、貼付け後に条痕文を施文するものが多い。また、貝殻腹縁文は、列点状のものを主体としつつ、貝殻をやや引きづり短線状とするものも作る。

これらの文様の組合せと配置から以下の6種に分類をした。

a種 口縁部に条痕文を施し、更に貝殻腹縁による山形文を重ねて施すもの (第31図195～200)

条痕文下端の区画文としてでなく、条痕文を地文として貝殻腹縁文を施すことを特徴とする。

b種 口縁部に条痕文を施すもの。その下端に貝殻腹縁による山形文を施すものもある。(第31図201～第32図239)

201のように条痕文下端の区画文として、貝殻腹縁による山形文を施すものと、204のように条痕文のみの2タイプがある。条痕文の幅は一定でなく、208・227のように狭いものと201のように広いものがある。なお、条痕文部分しか残存していない土器については、下端区画の有無を判断できない。

201～226・237～239は2方向の条痕を施し、227～236は1方向の条痕を施している。

c種 隆帯を貼付けるか、口唇端部を突出させ、口縁部には条痕文を施すもの。その下端に貝殻腹縁による山形文を施すものもある。(第32図240～270)

口唇端部を摘み出すことで突出させる240～245と、隆帯を貼付ける246～270に大きく分かれる。また、後者のうち、246～259は口端部に沿って隆帯を貼付け、260～270は、口端部からやや幅を置いて貼付けている。隆帯は、幅が広く高さのあるものが多い。240～259は、口端部が幅広くなっているため、そこに条痕調整を加えるものが多い。口縁部の条痕文は、2方向のものが多数を占め、1方向のものは少ない。なお、258は、外面に付着した炭化物により年代測定を実施している。詳細は、第6章第3節のとおりである。

b・c種 (第33図271～285)

口唇部が欠け、隆帯の有無を確認できないため、b・c種以上の細別ができなかったものをまとめた。271～275は、貝殻腹縁による下端区画がみられ、276～281・285はみられない。282～284は、下端区画部分が欠けているものである。

b～e種 (第33図286～299)

貝殻腹縁による山形文施文部分の破片で、b～e種以上の細別ができなかったものをまとめた。これらは、条痕上に山形文を施文していないため、a種ではないが、条痕文や隆帯の施文部分を欠くため、山形文が文様下端区画文として施されたものなのか、口縁部文様として施されたものなのかは特定できない。

d種 隆帯を貼付けるか、口唇端部を突出させ、山形文を施すもの (第34図300～303)

条痕文を伴わずに、山形文を施すものである。尖頭状の口縁のみで、角頭状の口縁はみられない。

e種 貝殻腹縁による山形文を施すもの (第34図304～314)

隆帯と条痕を伴わずに山形文のみを施すものである。口縁形状は、尖頭状か、角頭状でも口端部の

幅が狭いものが多い。貝殻腹縁文は、列点状のもの以外に、304・305・314のように貝殻腹縁をやや引きづるものもある。

f 種 貝殻腹縁文を施すもの (第34図315、316)

貝殻腹縁文を施すが山形文を早さないものをまとめた。315は、斜位の貝殻腹縁文の傾きを交互に入替えて施文している。316は、左ドリの貝殻腹縁文を連続して施している。

2 類 神之木台式 (第34図317～333)

口縁部は、内削ぎの尖頭状か、口端の狭い角頭状を呈し、隆帯を貼付け、それ以下に条痕文を施すものが多い。このように打越式と文様構成は似るが、隆帯の幅が狭く高さも低いことや、条痕文の影りが浅く器面調整に近い点で、大きく相違する。また、施文順位も、条痕→隆帯であり、隆帯→条痕が多い打越式とは逆となる。繊維が少なく、内外面に条痕調整を施す点は、打越式と同様であるが、隆帯や口端に施す刻みが、貝殻腹縁や棒状工具によらず、貝殻背圧痕によるものが多いのも、打越式との相違点である。

3 類 下吉井式 (第35図334～347)

繊維を多く含み、やや脆い土器が多く、指ナアによる凹凸が残ることを特徴とする。334・335は幅広で厚みのある隆帯を貼付けるもので、同一個体である。隆帯より上には2条の波状文を施し、下には縄文を施す。336・338・339は、同じく隆帯を貼付けるが地文はなく、337・340・341は無文である。342～344は、胎土や調整が類似することから、これらの胴部破片と思われる。345～347も胎土は類似するが、条痕調整が施されており、やや様相が異なる。

4 類 塩屋中層A～C式 (第35図348～第36図371)

東海系の土器をまとめた。薄手で繊維が少なく、内面の凹凸が多いことを特徴とする。特に、色調が青灰色で雲母を多く含む354・357～370は非常に異質であり、塩屋中層C式に共通する胎土となっている。348～353は列点を施すもので、348・350・352・353は列点の縦幅が短く、349・351は長い。前者については、船型式かもしれない。354・355は、波状文を施すもので、354は波状文が幅広であり、355は幅が狭い。356～361も同じく波状文を施すが、櫛歯状工具を用いるため多条であり、中でも356は条間が狭い。

362～371は、これらの胴部と思われるもので、内外面にケズリによると思われる擦痕が目立つ。

5 類 隆帯文土器 (第36図372～384)

隆帯文土器をまとめたが、早期に該当するのは372～377で、378～384は、前期に属すると考えられ、本来であればⅢ群にしなければならない土器である。372～374は、口唇部を突出させるもので、372・373は外面に指ナア痕を残し、374は剥離しているが貼付文を施している。375は、やや厚手で繊維を多く含み、口唇部に隆帯を貼付け、その下に条線を施す。376は、頸部で強く内側へ屈曲させ、口唇部に瘤状の貼付文を施し、377も一部破損しているが、口唇部に瘤状の貼付文を施す。372～374・376は神之木台式に、375は下吉井式に属すると考えられる。

378は、口縁部に隆帯を貼付け、隆帯より下に条線を施し、379・380は同一個体で、地文縄文上に隆帯を貼付け、隆帯上に縄文を施す。いずれも、諸磯b式の浮線文系土器にあたりと考えられる。

381～384は同一個体で、内側に口縁を折返し、口縁部に隆帯を貼付け、隆帯より下と内面折返し部分に縄文を施す。前期の関西系の土器と考えられる。

6類 条痕のみのもの（第37図385～第41図463）

385は、口縁部が角頭状を呈し、口端と外面に条痕文を施し、内面は条痕調整後にナデ調整を行い、条痕を磨消している。386～389は、口縁部が尖頭状を呈すが、386・387は内削ぎ状となり、388・389は口唇部に隆帯の剥離痕がある。390～392は、角頭状の口縁部で、390・391は口端に貝殻背圧痕が施され、392は貝殻腹縁が押捺される。393は擦痕のみ、394・395は類似個体で、外面に指ナデ痕を明瞭に残す。385は打越式、386～389は神之木台式であろう。他も打越式～神之木台式に属すと考えられる。396は、緩やかに波状する小型の鉢で、内外面に指ナデ痕を残す。やはり、打越式～神之木台式であろう。

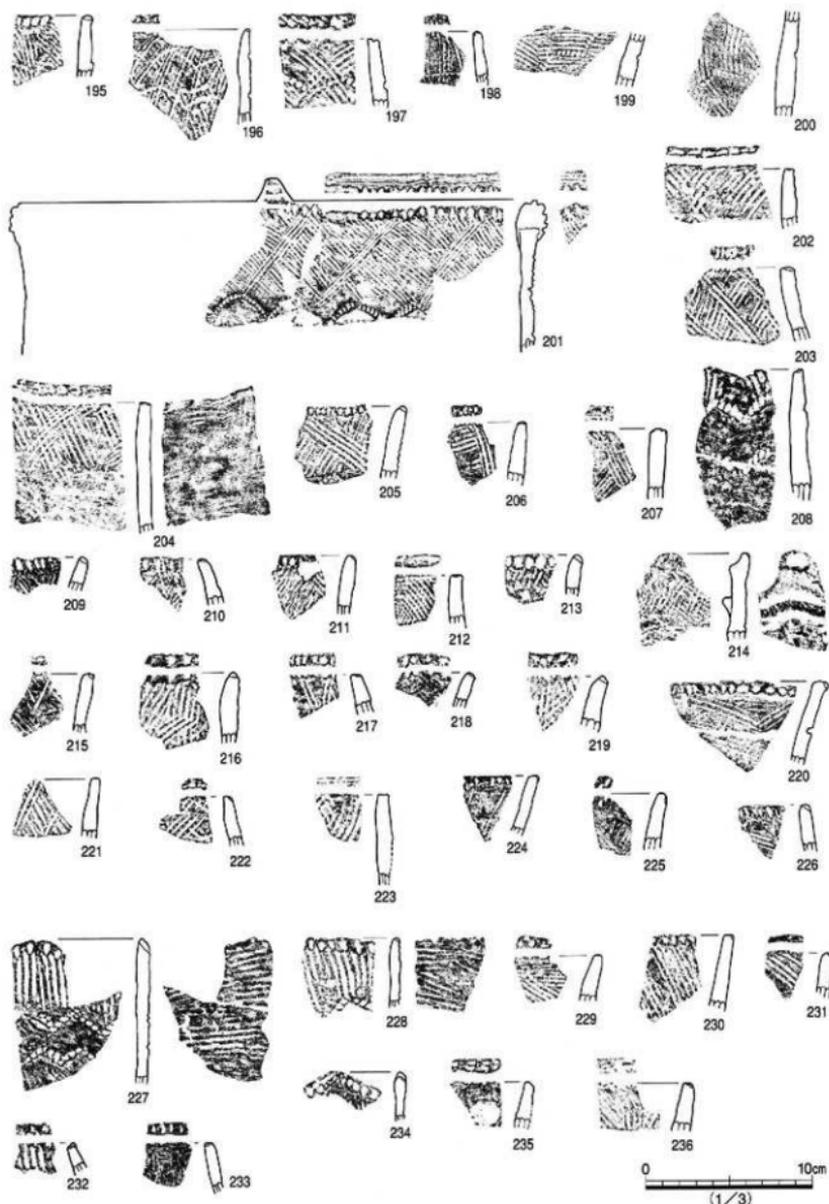
397～452は、繊維が少なく、内外面に条痕調整を施す胴部破片で、打越式～神之木台式と考えられるが、口縁部については打越式が多数を占めるため、これらの胴部破片についてもその多くは打越式に属すると思われる。外面は右下りの条痕、内面は横位条痕のものが多く、内外面とも条痕調整後にナデ調整がはいるが、外面の方がやや丁寧にナデられ、条痕調整を消すものも多い。また、433～441に明瞭に残るが、外面については、幅広い条痕による調整後に、細密な条痕による調整をおこなうものが多くあり、幅広い条痕→細密な条痕→ナデという調整順序をみることができる。内面については、幅広い条痕→ナデという調整順序が多い。442～452は、胴部下半～底部付近の破片である。

453～456は、繊維を多く含み、外面に条痕調整を施し、内面はナデ調整とするものである。胎土は、下吉井式に類似する。457～463は、外面の条痕調整がやや深く入り、その後のナデ調整による粘上の覆いかぶさがり著しいものである。463については、条痕調整後に3条の凹線を施している。また、460～463は繊維を多く含む。457～463に類する上器は一定量みられるが、これらは早期末葉でなく、早期中葉に位置づけられるかもしれないが、断定はできなかった。

7類 縄文、燃糸文を施すもの（第41図464～479）

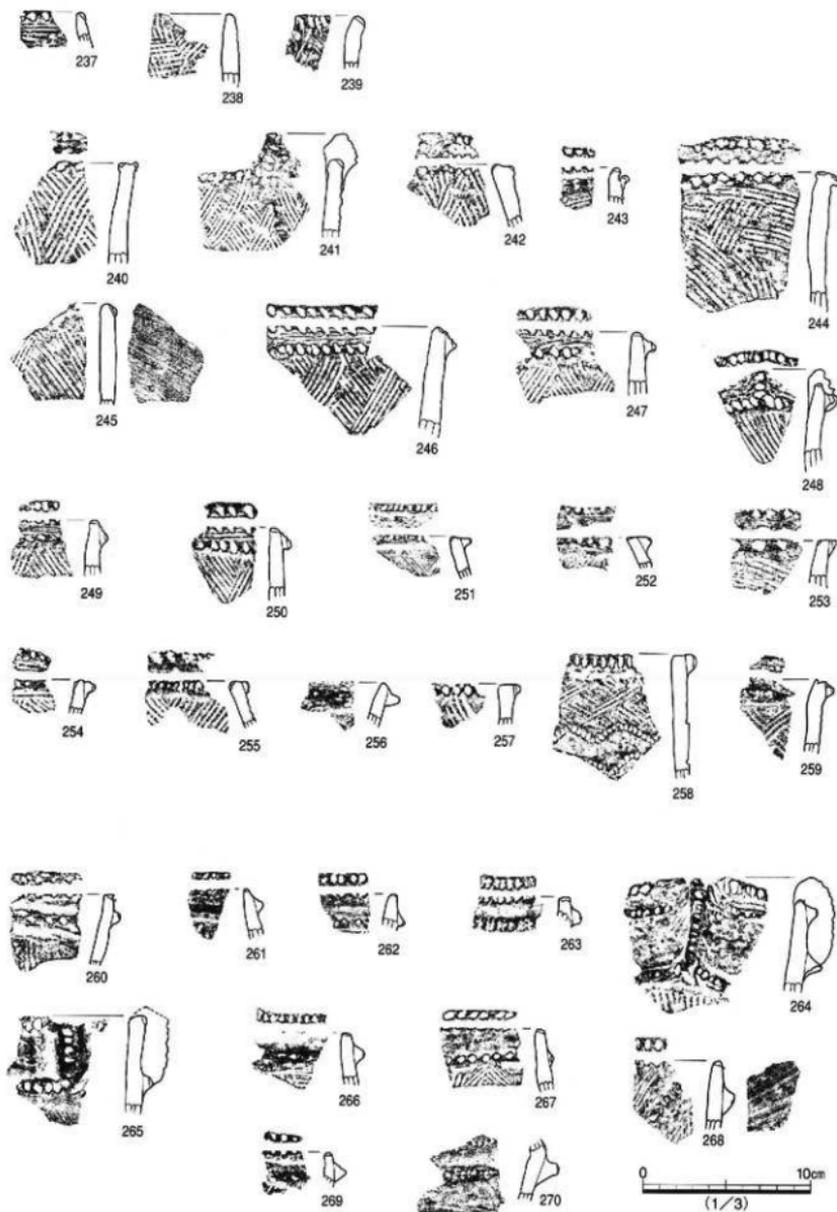
464～471・473～475は縄文を施すもので、縄文の節がやや大ぶりなものが多い。464・465・467・468・471・473は、内面に条痕調整が施され、469・470は指ナデ痕が残る。475は繊維を多く含み、縄文施文後に凹線を施している。472・476～479は、燃糸文を施すもので、繊維を多く含む。

本類は、時期の特定が困難であるが、繊維を多く含み、条痕や指ナデによる調整をおこなうことから、早期末葉のものが多いと考えるが、6類と同じく、やはりその一部は早期中葉と位置づけられるかもしれない。

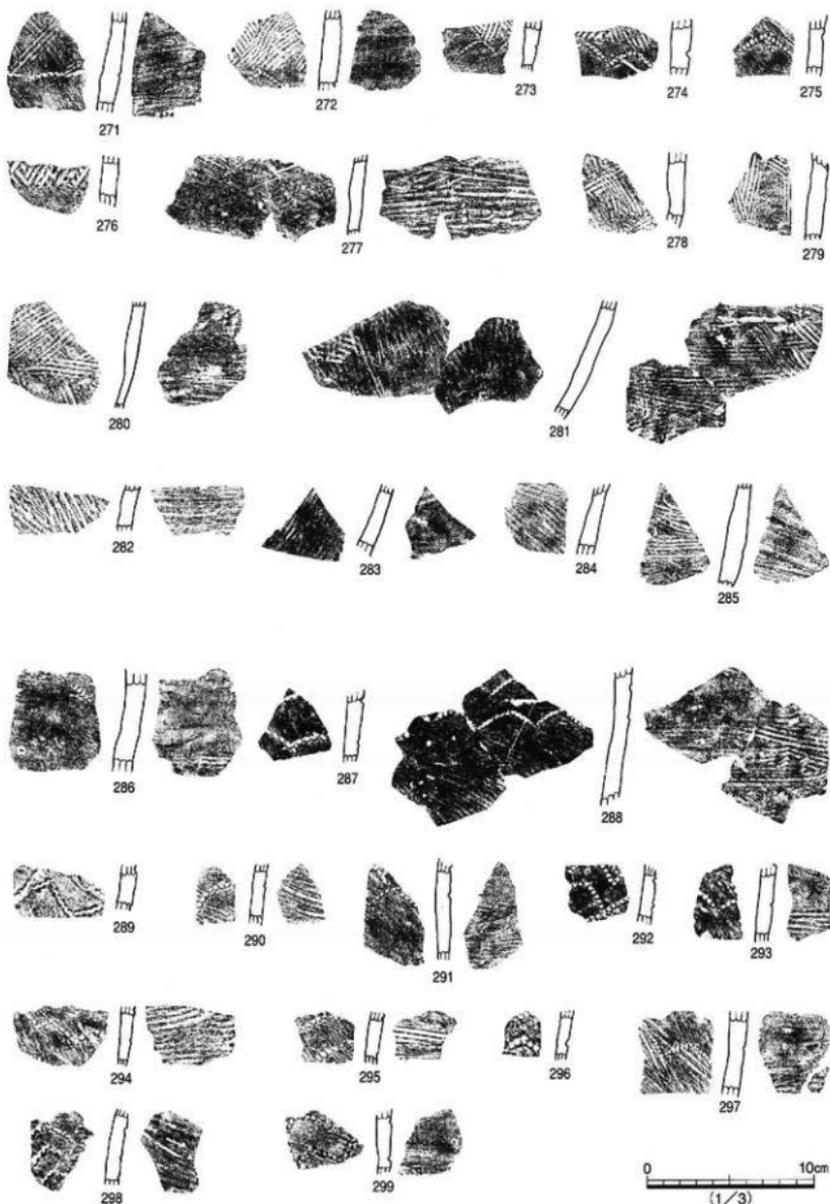


第31図 遺構外出土土器 第Ⅱ群1類 a・b種 (a種-195~200、b種-201~236)

第4章 縄文時代の遺構と遺物

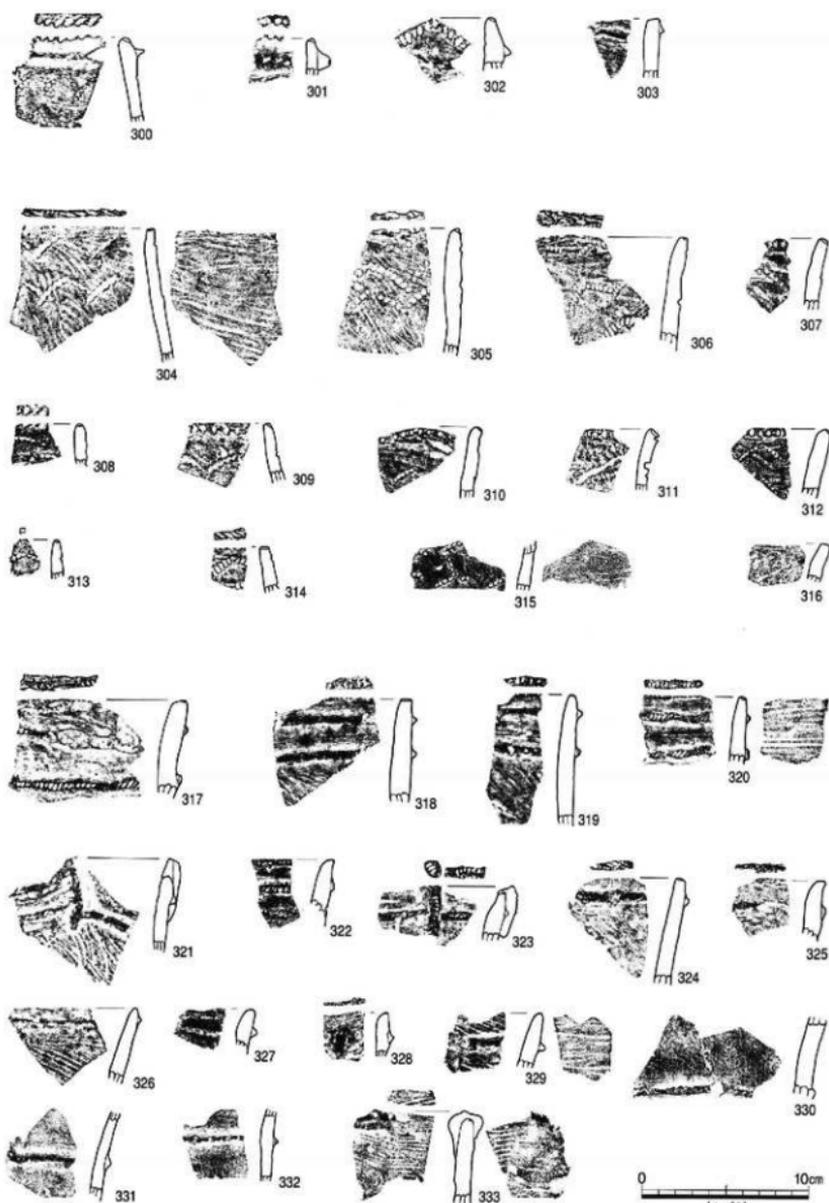


第32図 遺構外出土土器 第Ⅱ群Ⅰ類b・c種 (b種-237~239、c種-240~270)

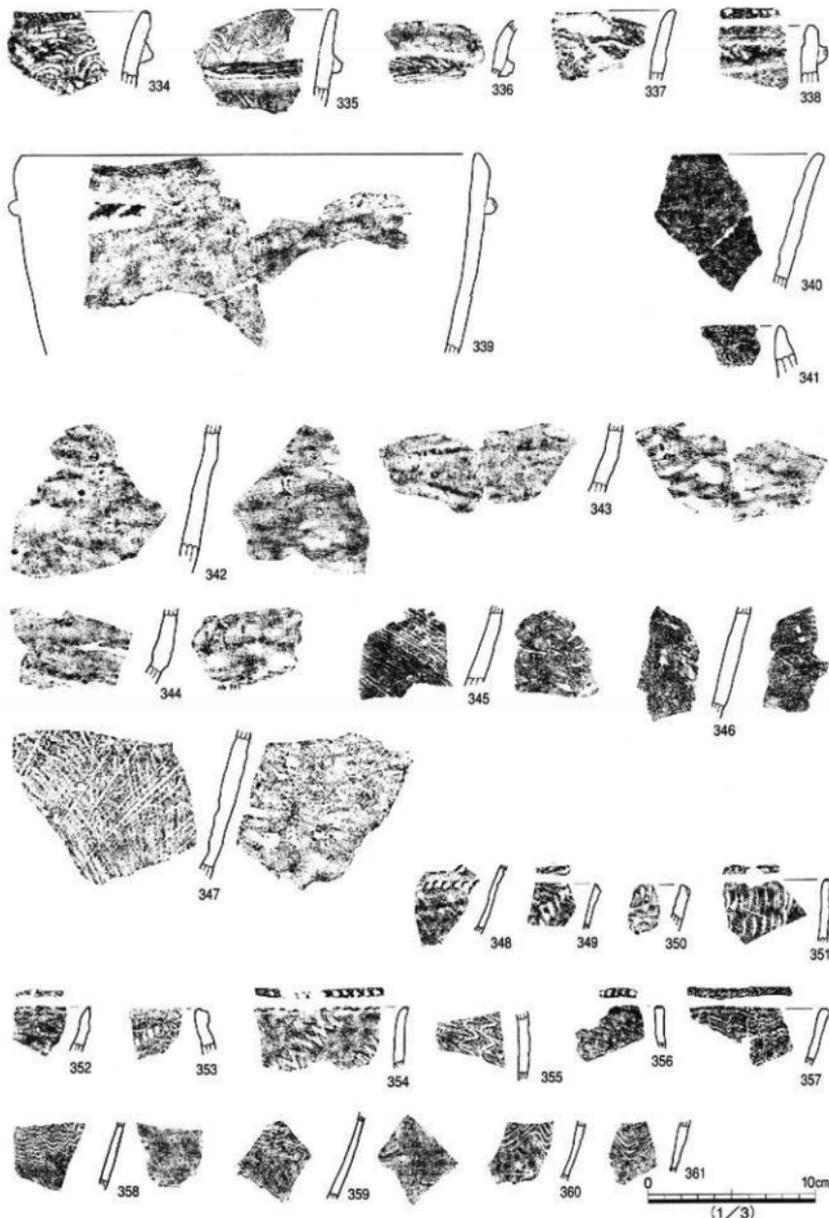


第33図 遺構外出土土器 第Ⅱ群1類b~e種 (b・c種-271~285、b~e種-286~299)

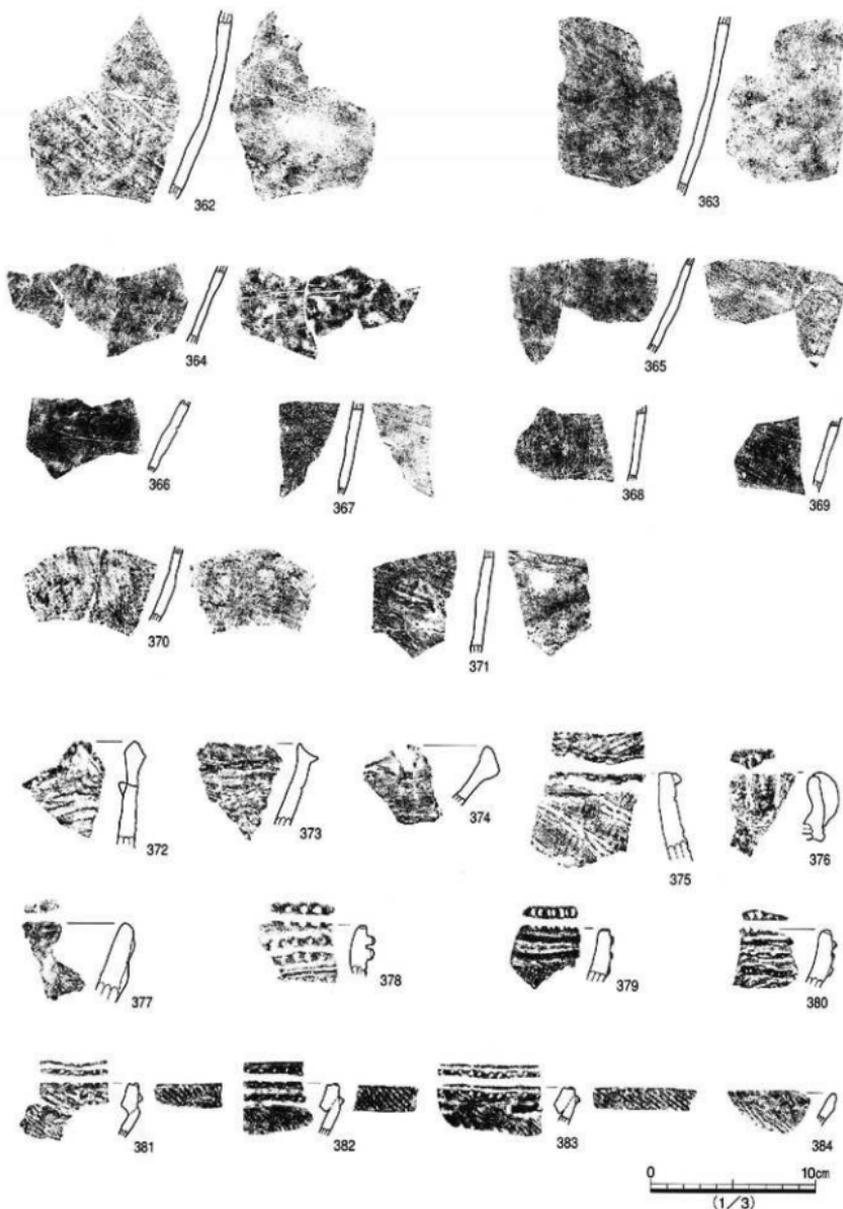
第4章 縄文時代の遺構と遺物



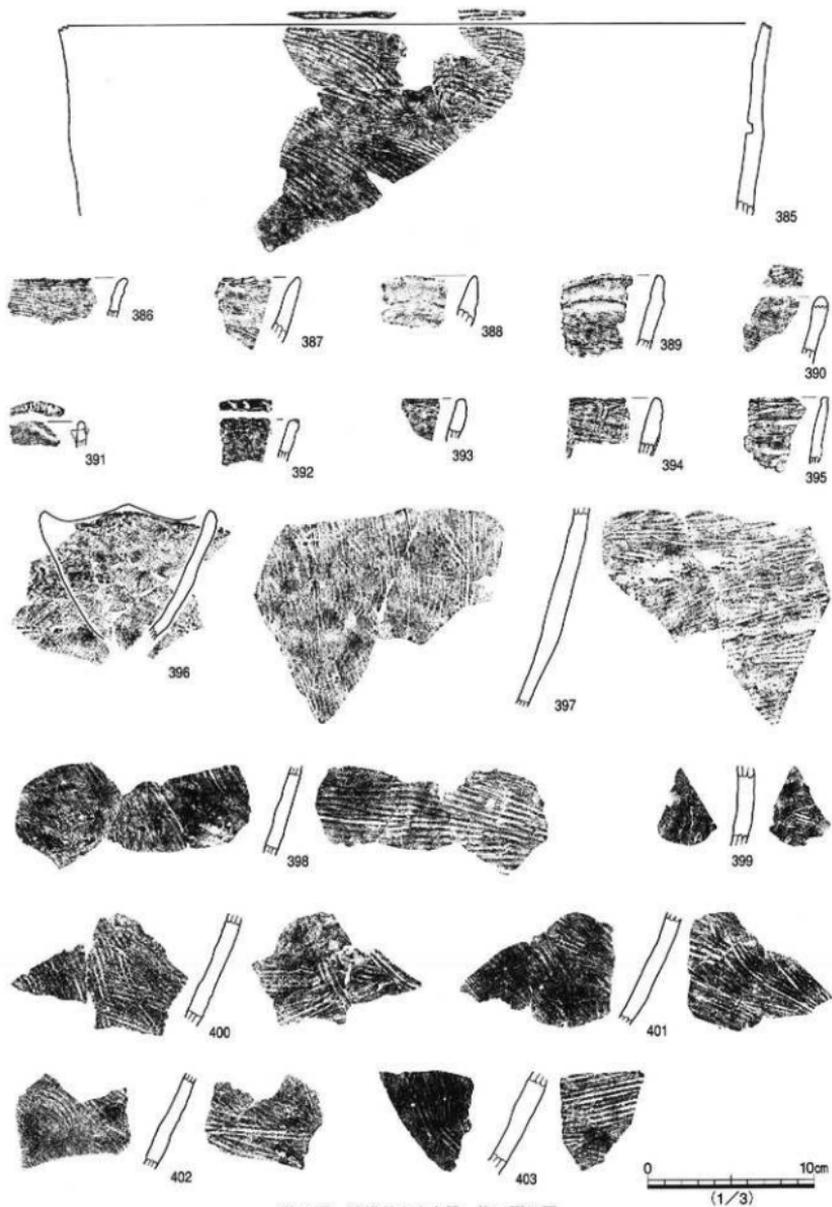
第34図 遺構外出土土器 第Ⅱ群1類d～f種・2類
 (d種-300～303、e種-304～314、f種-315・316、2類-317～333)



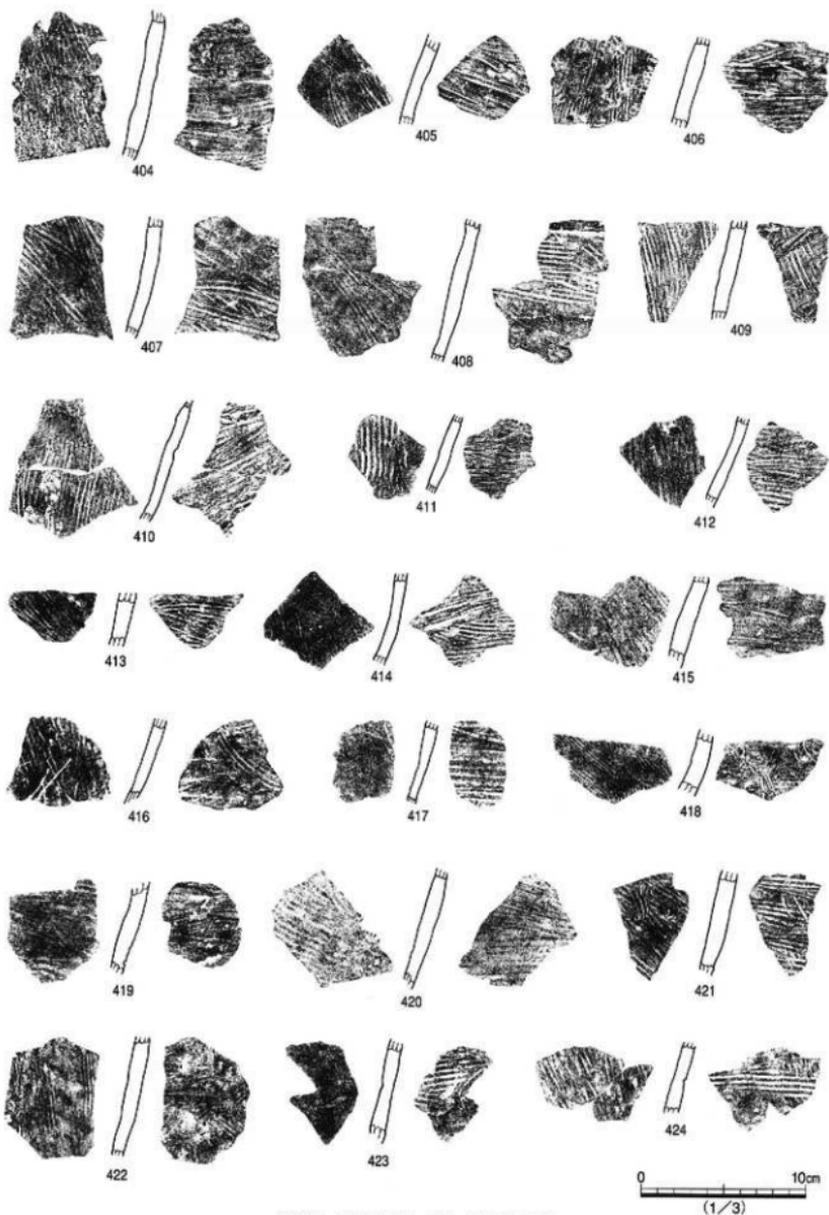
第35図 遺構外出土土器 第II群3・4類 (3類-334~347、4類-348~361)



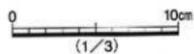
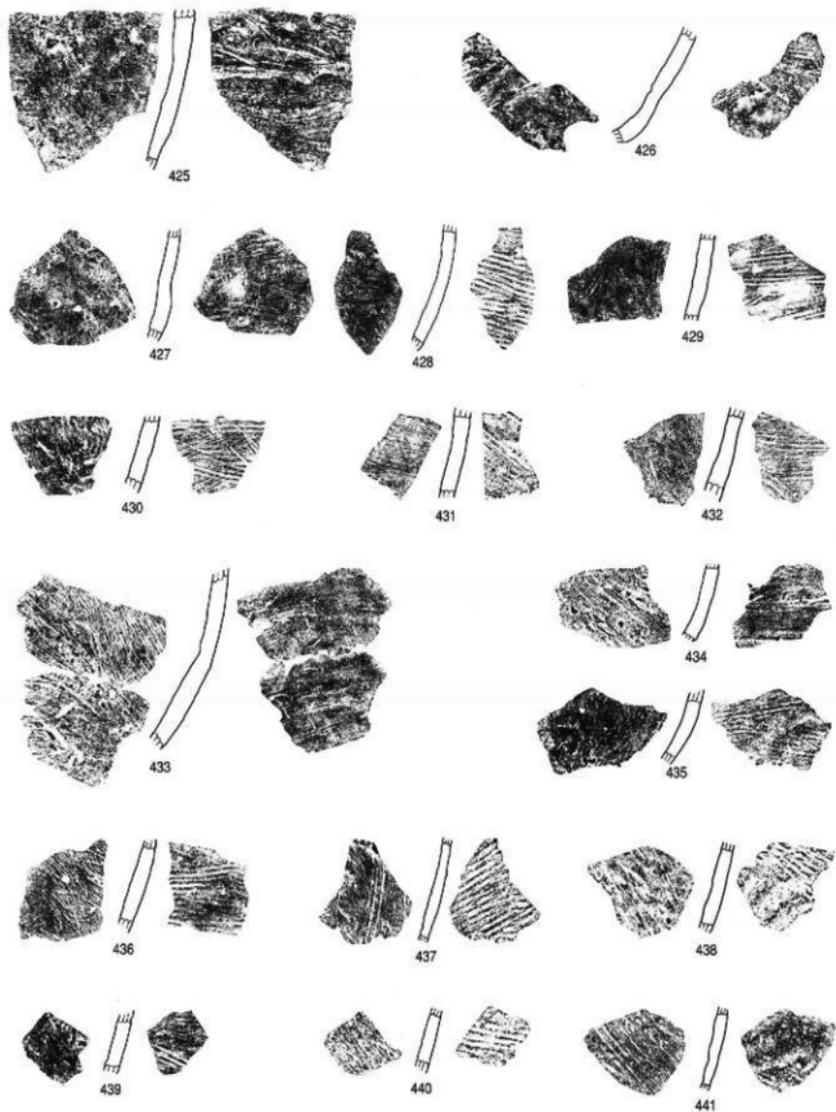
第36図 遺構外出土土器 第Ⅱ群4・5類 (4類-362~371、5類-372~384)



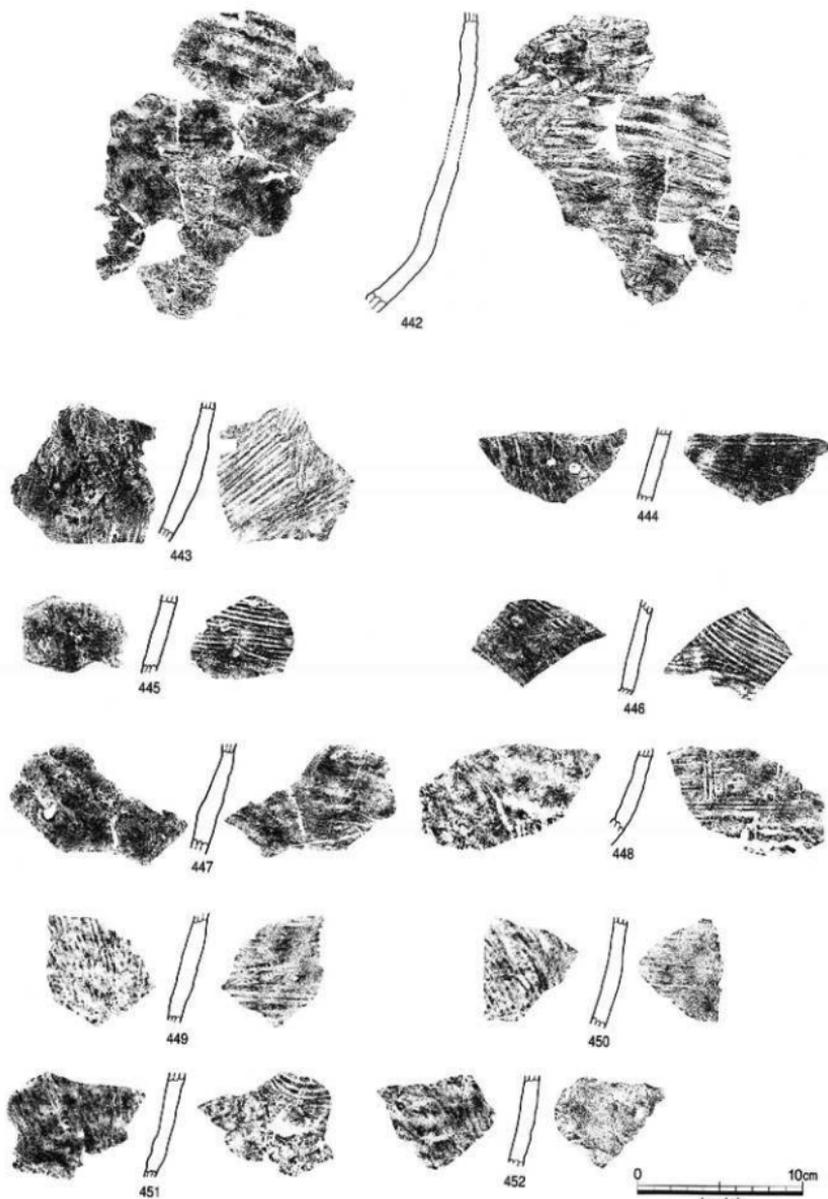
第37図 遺構外出土土器 第II群6類



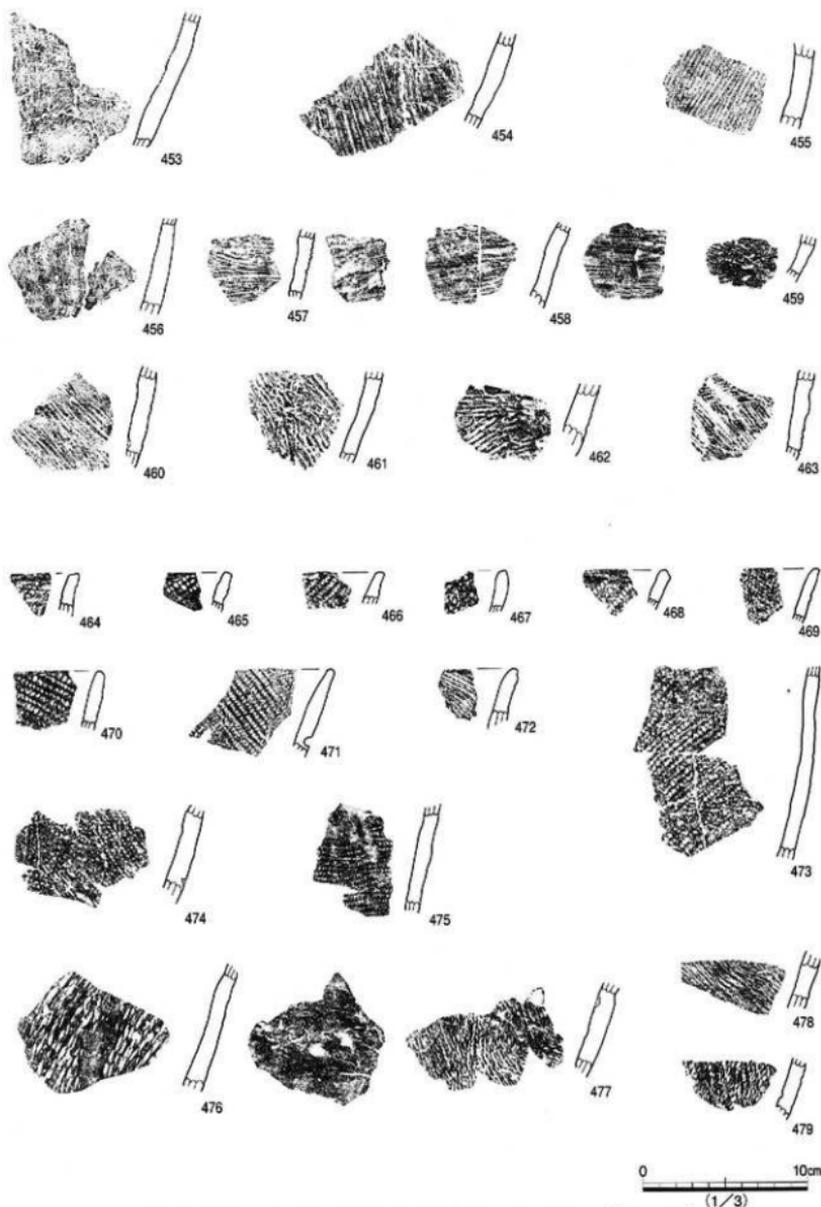
第38図 遺構外出土土器 第Ⅱ群6類



第39圖 遺構外出土器 第II群6類



第40図 遺構外出土土器 第II群6類



第41圖 遺構外出土土器 第Ⅱ群6・7類 (6類-453~463、7類-464~479)

第4表 遺構外出土土器 第II群 観察表

発掘 番号	グランド 層位	形状	備考	発掘 番号	グランド 層位	形状	備考	発掘 番号	グランド 層位	形状	備考
195	M 39 2	10		271	K 25 1	12		346	O 36 2	11	
196	L 25 2	12		272	K 25 1	12		347	K 35 1	11	
197	L 31 2	10		273	K 40 2	10		348	K 42 1	11	
198	L 39 2	12		274	K 36 2	13		349			
199	K 34 2	13		275	K 36 3	11		350	L 36 2	10	
200	M 29 4	12		276	K 35 3	12		351	N 49 4	11	
	L 42 3	11		277	M 31 3	13		352	K 41 3	9	
	L 42 4	11		278	K 22 4	13		353	K 35 3	10	
	L 42 5	11		279	K 44 1	11		354	K 46 4	10	
	L 42 6	11		280	L 49 1	9		355			
	I 20 3	12		281	L 35 3	13		356	N 47 4	13	
	TP 4	5		282	M 38 3	11		357	G 22 4	12	
	L 27 4	13		283	L 35 3	12	灰化層付着	358	N 29 1	10	
	O 29 4	13		284	L 30 3	10		359	N 23 4	6	
	K 23 1	13		285	L 35 2	11		360	K 41 2	12	
	O 40 1	11		286	G 19 3	12		361	L 39 2	13	362と同一
	L 25 1	13		287	L 32 3	12		362	K 28 4	11	
	M 42 4	10		288	M 38 1	12		363	K 29 3	12	
	M 26 5	12		289	K 23 1	13		364	L 39 4	10	367と同一
	O 29 3	13		290	K 26 2	10		365	L 39 3	10	367と同一
	O 29 1	10		291	N 37 3	11		366	K 40 4	10	367と同一
	P 32 4	7		292	K 19 3	12		367	O 29 2	12	368と同一
	K 23 2	13		293	K 29 1	12		368	L 27 2	13	369と同一
	O 29 2	12		294	N 25 1	10		369	N 28 4	11	
	M 42 4	10		295	M 38 1	12		370	K 29 3	12	
	M 26 5	12		296	K 23 1	13		371	L 39 4	10	367と同一
	O 29 3	13		297	K 26 2	10		372	L 39 2	9	
	O 29 1	10		298	O 40 1	12		373	N 36 3	10	
	P 32 4	7		299	O 40 1	12		374	L 39 3	9	
	K 23 2	13		300	L 32 3	12		375	O 29 3	10	
	O 29 2	12		301	O 39 1	15		376	L 39 2	9	
	N 33 1	11		302	L 32 3	12		377	M 39 1	9	
	N 35 1	11		303	L 31 3	12		378	K 40 3	10	
	O 29 2	13		304	L 27 5	12		379	O 29 4	10	
	N 33 2	11		305	M 28 4	10		380	L 41 1	10	
	K 32 3	13	227と同一	306	O 29 3	12		381	O 25 4	6	
	O 30 2	13		307	O 28 1	12		382	N 32 2	13	227と同一
	N 28 2	13		308	L 35 3	11		383	K 23 3	10	
	L 26 3	12		309				384	M 30 2	10	
	F 25 3	13		310	N 36 2	11		385	M 29 3	10	381と同一
	M 25 2	12		311	K 42 4	12	灰化層	386	L 39 3	10	381と同一
	O 27 3	11		312	L 32 3	13		387	L 39 2	13	381と同一
	N 29 3	12		313	M 32 3	11		388	L 39 3	10	381と同一
	L 22 4	10		314	L 27 3	10		389	M 29 2	10	381と同一
	L 35 3	13		315	O 42 1	12		390	M 29 1	11	
	N 39 3	13		316	L 34 4	12		391	L 32 4	13	
	N 37 4	10		317	K 26 4	12		392	K 29 2	11	
	L 15 3	5		318	L 28 4	11		393	M 27 4	12	
	K 41 3	9		319	L 25 1	12	328と同一	394	I 22 2	12	
	I 42 4	12		320				395	I 26 3	12	
	N 30 2	13		321	K 35 3	13		396	H 27 4	12	
	N 25 1	12		322	K 35 1	13		397	L 27 3	12	
	O 28 3	13		323	K 14 2	10		398	H 27 4	12	
	O 28 4	13		324	L 24 4	12		399	I 27 3	12	
	K 25 3	13		325	K 24 4	12		400	M 26 3	10	
	K 24 1	11		326	K 26 5	12		401	K 25 4	12	
	K 27 1	12	242と同一	327	O 29 3	12		402	L 32 4	12	
	O 28 2	12	242と同一	328	K 39 3	12		403	L 22 2	10	
	M 28 1	10	242と同一	329	M 26 1	12		404	K 19 3	12	
	O 27 3	12	242と同一	330	O 42 5	11		405	K 25 2	12	
	O 28 4	12		331	P 24 3	12		406	L 32 3	12	
	M 28 2	5		332	L 40 5	9		407	K 25 2	12	
	I 39 3	12		333	O 29 2	12		408	L 32 4	12	
	N 28 4	12		334	K 36 2	12		409	I 27 1	13	
	L 41 1	12		335	M 25 3	10		410	I 22 4	12	
	F 26 2	11		336	M 24 3	12		411	L 26 1	12	
	M 49 4	10		337	O 29 2	12	321と同一	412	L 29 1	11	
	K 42 2	10		338	O 49 3	11		413	I 26 1	12	321と同一
	M 28 3	13	灰化層付着・年代確定不明	339	K 29 3	12		414	K 26 2	13	
	K 29 4	15		340	M 27 4	12		415	K 26 2	13	
	I 27 4	12		341	L 24 1	11		416	L 29 1	11	
	I 41 3	13		342	L 30 4	10		417	I 30 1	12	
	N 41 3	11		343	P 32 1	12		418	M 26 7	12	
	K 37 2	12		344	X 31 2	10		419	I 10 2	9	
	K 15 3	13		345	K 42 3	10					
	K 42 2	10									
	O 35 1	13									
	K 32 1	12									
	M 40 1	12									
	N 39 3	11									

第3節 縄文時代前期・中期

1 概要

基本土層11層上面で、焼土跡9基・土坑1基を検出した。第3章で詳述したとおり、同層上面は、縄文時代前期末葉～中期前葉の遺構確認面であるため、焼土跡・土坑も同時期と考えられる。この時期以外の遺物も多数出土しているが、それらは混入と判断している。

基本土層12層上面では、縄文時代前期の遺構確認をしたが、11層中から土器集中1基が検出されたのみで、他の遺構は確認できなかった。

2 焼土跡

焼土跡内の焼土は、全体に散漫に分布しつつ、やや焼土が多い部分もあり、前者は薄いトーン、後者は濃いトーンで示した。セクション図では明確な掘り込みがあるようにみえるが、下層になるにつれ、焼土が薄くなるため、基本土層との判別は困難であり、平地で燃焼行為をする過程で、焼土が地山へ浸透していったような状況である。また、焼土純層が広範囲に広がることはなく、径5～10cmのプロック状を呈して、焼土跡内に散漫に分布しており、常時火を燃し続けていたのではなく、燃焼終了後に焼土を攪拌するような行為が行われていたようである。なお、基本土層10層からは、焼罌が多数出土していることから、それらを用いた調理行為等による使用も推定される。

1号焼土跡（第43図）

位置：O-36グリッド

規模：長軸100cm（調査部分のみ）・短軸91cm・深さ10cm

出土遺物：なし

2号焼土跡（第43図）

位置：M-36グリッド

規模：長軸118cm・短軸45cm・深さ10cm

出土遺物（第45図）：1は口縁部で、Ⅱ群2類である。

3号焼土跡（第43図）

位置：L-35、36グリッド

規模：長軸137cm・短軸120cm・深さ22cm

出土遺物（第45図）：1は石鏃（黒曜石）、2は槌型石器（ホルンフェルス）、3は磨製石斧（緑色凝灰岩）である。

4号焼土跡（第43図）

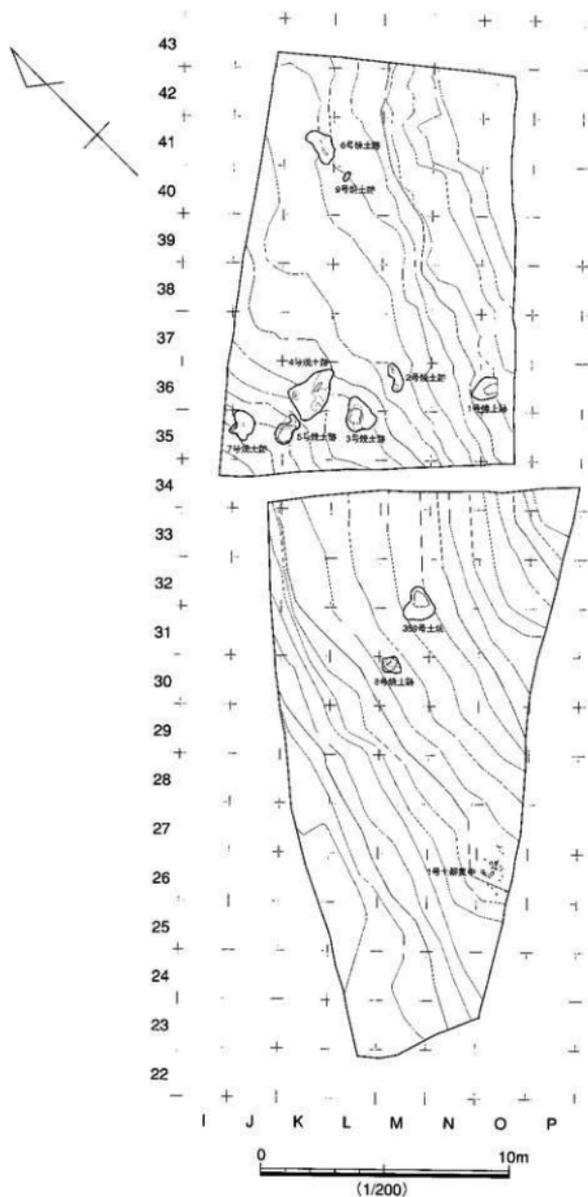
2基の焼土跡が重複している。切合いが判然としないため、前後関係は不明である。

位置：K-36グリッド

規模：4-1-長軸235cm・短軸155cm・深さ27cm

4-2-長軸47cm・短軸37cm・深さ10cm

出土遺物（第45図）：1～4はⅣ群1類で、1は条線を施し、2～4は縄文を施文する胴部破片である。5は口縁部で、Ⅱ群1類c・d種である。6は、石鏃（黒曜石）。他に、第54図588の破片が集



第42図 縄文時代前期・中期遺構配置図

中して出土するとともに、第51図567の破片2点、第52図571の破片2点・573の破片1点も出土している。

5号焼土跡（第43図）

位置：J-35・K-35グリッド

規模：長軸133cm・短軸55cm・深さ20cm

出土遺物：第52図569、第53図583の破片が1点ずつ出土している。

6号焼土跡（第43図）

位置：K-41グリッド

規模：長軸150cm・短軸80cm・深さ15cm

出土遺物：第52図569の破片2点が出土している。

7号焼土跡（第44図）

位置：J-35グリッド

規模：長軸123cm・短軸82cm・深さ3cm

出土遺物（第45図）：1は縄文を施すもので、Ⅲ群2～3類かⅣ群1類である。

8号焼土跡（第44図）

位置：M-30グリッド

規模：長軸90cm・短軸73cm・深さ14cm

出土遺物（第45図）：1はⅠ群2類g種の口縁部で、2はⅡ群7類で、外面に縄文を、内面に条痕調整を施す。3は、打製石斧（ホルンフェルス）。

9号焼土跡（第44図）

位置：L-40グリッド

規模：長軸41cm・短軸21cm・深さ5cm

出土遺物：なし

3 土坑

359号土坑（第44図）

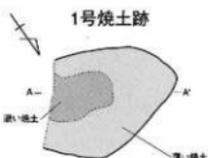
位置：M-31、32グリッド

規模：長軸100cm（調査部分のみ）・短軸91cm・深さ10.0cm

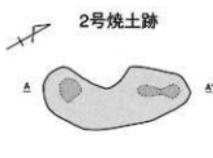
出土遺物（第18図）：1はⅠ群1類で、格子目押型文を施すもの。2・3はⅡ群6類で、内外面に条痕調整を施している。4は、石礫（黒曜石）。

4 土器集中

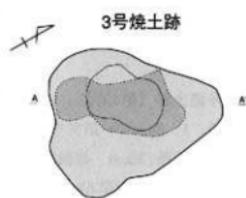
土器1個体の破片が、集中して出土したものである。底部を中心に、内面を上にして花が開くように土器が散在し、外側に口縁部、そのやや内側に胴部が分布する。このように破片の分布が土器の形状と一致することや、底部穿孔土器であることから、遺構は検出できなかったが、意図的に安置されたものである可能性が高い。



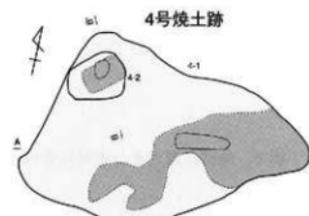
- 1 Hae5YR7/9 薄 焼土跡層
- 2 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土中量
- ① 基本土層11層
- ② 基本土層11層



- 1 Hae5YR7/9 薄 焼土跡層
- 2 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土少量
- ① 基本土層11層
- ② 基本土層11層



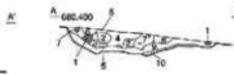
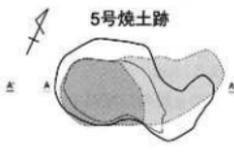
- 1 Hae5YR7/9 薄 焼土跡層
- 2 Hae10YR7/4 に近い黄褐色 焼土中量
- 3 Hae10YR7/9 黄褐色 焼土多量
- 4 Hae10YR7/7 に近い黄褐色 焼土ごく少量
- 5 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土ごく少量
- 6 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 5層よりしりしり焼土 焼土ごく少量
- 7 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土少量
- 7' Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土中多量
- 8 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土少量 7層よりしりしり、焼土跡



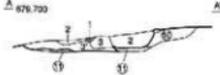
- 1 Hae5YR7/9 薄 焼土跡層
- 2 Hae10YR7/4 に近い黄褐色 焼土多量
- 3 Hae10YR7/4 に近い黄褐色 焼土少量 基本土層11層底辺
- 4 Hae10YR7/4 に近い黄褐色 焼土少量
- 5 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土ごく少量
- 5' Hae10YR7/3 に近い黄褐色 5層よりしりしり焼土 焼土ごく少量
- ① 基本土層11層 焼土ごく少量
- ② 基本土層11層 焼土少量
- ③ 基本土層11層 焼土ごく少量



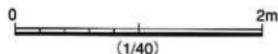
- 1 Hae5YR7/9 薄 焼土跡層
- 2 Hae10YR7/4 に近い黄褐色 焼土多量
- 3 Hae10YR7/4 に近い黄褐色 焼土中量
- 4 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土ごく少量
- 5 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土少量 基本土層11層底辺



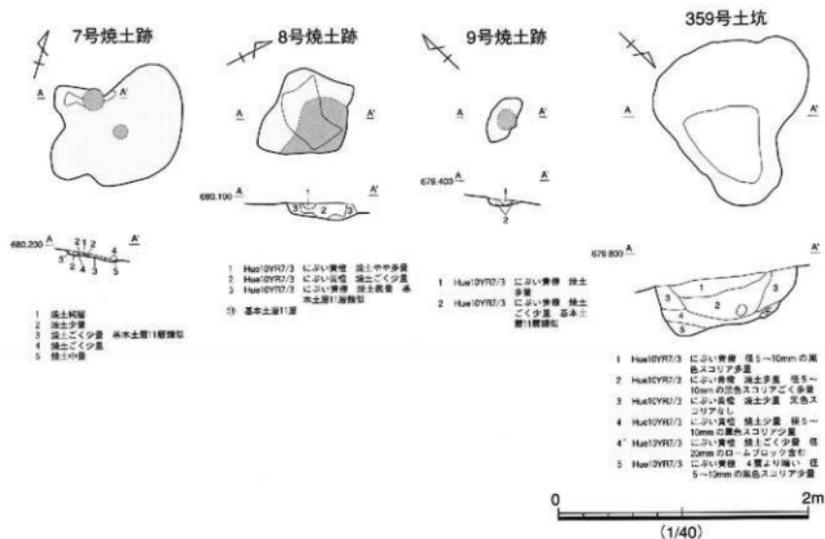
- 1 焼土跡層
- 2 焼土多量
- 3 焼土少量
- 4 焼土少量 しりしり層より焼土
- 5 焼土中量
- 6 焼土やや少量 しりしり層より焼土
- 7 焼土ごく少量
- 8 焼土ごく少量 しりしり層より焼土
- 9 焼土ごく少量 基本土層11層底辺
- 10 焼土ほとんどと含まない 基本土層11層底辺



- 1 Hae5YR7/9 薄 焼土跡層
- 2 Hae10YR7/4 に近い黄褐色 焼土中多量
- 3 Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土少量
- 3' Hae10YR7/3 に近い黄褐色 焼土少量 3層
- ① Hae10YR7/3 に近い黄褐色 基本土層11層 焼土ごく少量
- ② Hae10YR7/3 に近い黄褐色 基本土層11層 焼土ごく少量
- ③ Hae10YR7/3 に近い黄褐色 基本土層11層 焼土ごく少量



第43図 1～6号焼土跡実測図



第44図 7～9号焼土跡・359号土坑実測図

1号土器集中 (第42図)

位置：O-26グリッド

規模：長軸200cm・短軸100cm

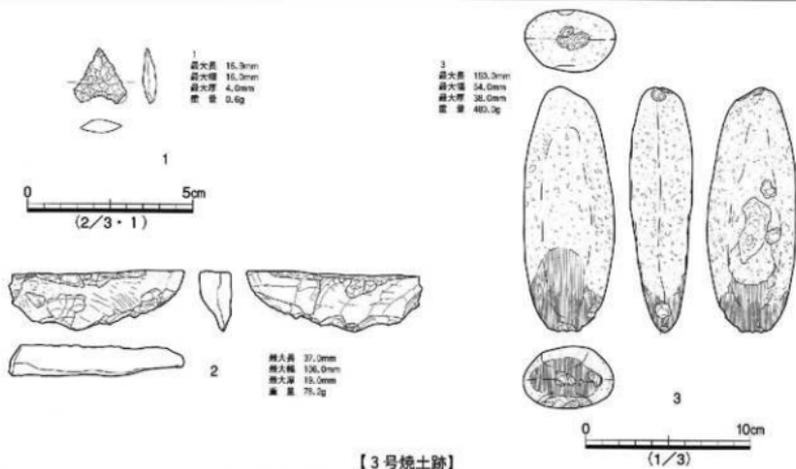
出土遺物 (第22図)：第Ⅲ群3類a種。口縁部は4単位の緩やか波状口縁で、口唇部が強く屈曲する。

全面に縄文を施したのち、口唇部、口縁部、胴部上半、胴部下半に2～4条ずつ半杖竹管による平行沈線を施す。底面は磨きのみで、最大径2.8cmの孔が空くが、外面から打撃を加えた意図的な穿孔痕と考えられる。また、胴部下半は赤化して、胴部上半は黒化するとともに、内面は底部から4cm上に帯状にオコゲが付着することから、調理等に使用したことが分かる。

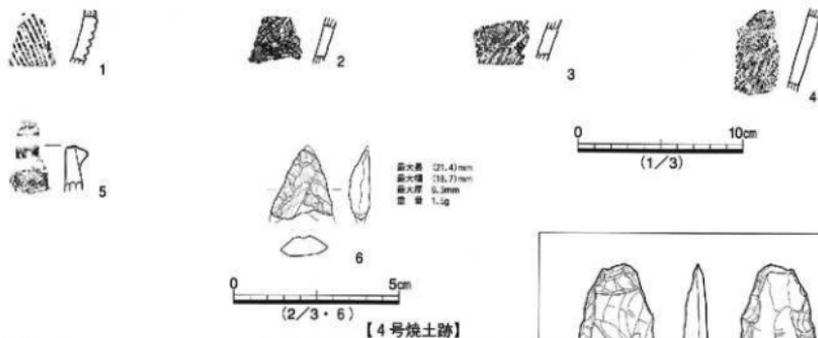
第4章 縄文時代の遺構と遺物



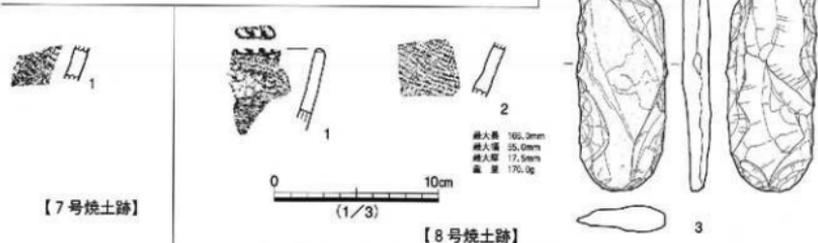
【2号焼土跡】



【3号焼土跡】



【4号焼土跡】



【7号焼土跡】

【8号焼土跡】

第45図 2～4・7・8号焼土跡出土遺物

5 遺構外出土土器

第Ⅲ群 縄文時代前期前葉～中葉

1 類 関山式 (第46図480～483)

4点とも、縦線を多く含み、内面には丁寧な磨き調整を施す。480は、地文縄文上に波状沈線を施し、481は、環付末端の押捺をおこなうものである。482は481と同一個体、483は480と同一個体である。

2 類 諸磯a式 (第46図484～505)

諸磯a式に相当するものを、文様に基づき、3種に分類した。全般的に、内面の磨きは丁寧な施され、金雲母を含むものも多い。

a 種 平行沈線文や爪形文を施すもの (第46図484～498)

484は、口唇部に鋸歯状工具による4本1単位の列点を、その下に同一工具によると思われる4本1単位の波状条線を施すものである。485・486・488・489・492は、押し引き手法の爪形文を施すもの、487・490・491は、連続刺突による爪形文を施すものである。文様構成が分かる485をみると、地文に縄文を施した後、口縁部と胴部にそれぞれ、爪形文を2条ずつ施し、爪形文間を磨削して無文部としている。486～492も、少なくとも口縁部については、これと同様の文様構成になると考えられる。

493～497は、爪形文や平行沈線文による木葉文を施す胴部破片である。494が爪形文により文様上端を区画していることから、口縁部文様が485～492と同様になるものもあるであろう。

498は、平行沈線文間に刺突文を施すもので、ややこれらと様相が異なる。

b 種 円形刺突文を施すもの (第46図499～504)

499は、口縁部の内外面両端を突出させ、両方に半裁竹管状工具により刻目を施すもので、口縁部には、円形刺突文を起点として平行沈線文を施している。500・501は地文縄文上に円形刺突文を施すもので、502～504は、木葉文内に施すものである。501は、文様上端を爪形文により区画することから、口縁部文様は、485と同様になるであろう。

c 種 縄文を施すもの (第46図505)

505は、波状口縁である。外反する口縁形状から諸磯a式とした。

3 類 諸磯b式 (第47図506～第49図545)

諸磯b式に相当するものを、文様に基づき、4種に分類した。

a 種 平行沈線文や爪形文を施すもの (第46図506～第49図530)

506～513は、平行沈線文を施すものである。506～508は同一個体で、口縁部が強く内湾する。4つの文様区画があり、口縁部には横位の平行沈線文、頸部には緩やかな波状文、胴部上半には矢羽根文、胴部下半には横位の平行沈線文を施す。509は、口縁部を外反させ、口唇部は横位の平行沈線文とし、それ以下は弧線とする。510は、緩やかな波状口縁で、頸部で強く屈曲し、口縁部、頸部ともに横位の平行沈線文を描く。511は、口唇部に横位の平行沈線文を施し、それ以下に、上向きと下向きの弧線を描く。512・513も、口唇部に横位の平行沈線文を施すものである。

514～530は、爪形文を施すものである。514は、口縁部と胴部上半に、それぞれ横位の爪形文を描き、その合間に対向する弧状の爪形文を施すものである。胴部下半については、判然としないが、弧状の爪形文を描くようにみえる。515～520は同一個体である。

521は、514と異なり、4単位の波状口縁だが、口縁部に横位の爪形文を、胴部に弧状の爪形文を描く点では同じである。522は、これらと異なり、口唇部から、爪形文を弧状に描いている。523は、口縁部が強く内湾する。口唇部には浮線文を施し、口縁部にはやはり弧状の爪形文を描く。524・525は

胴部破片である。526～530は、同じ爪形文でも幅が狭いもので、528～530は、押しき手法で描くなど、やや様相が異なるが、文様構成は、514～525と同様になると考えられる。

b種 浮線文を施すもの（第48図531～537）

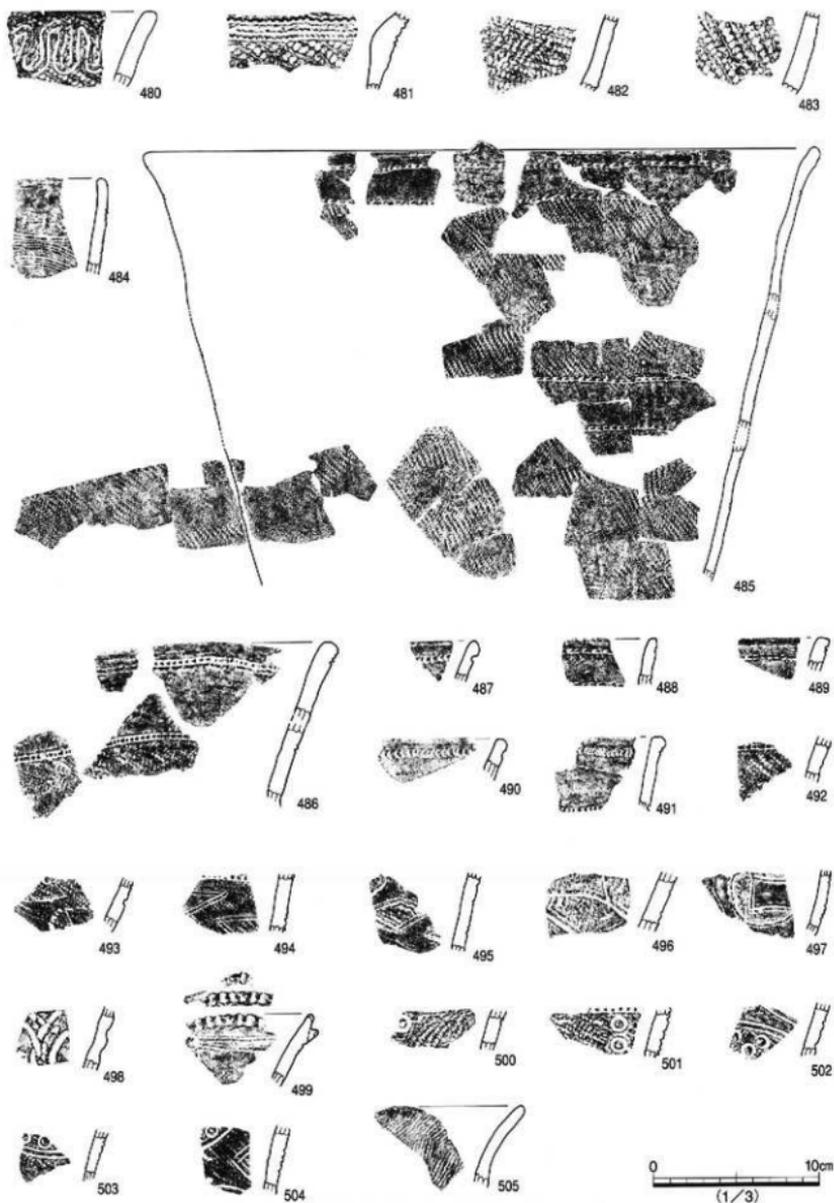
531・532は、口縁部で、地文縄文上に浮線文を施している。531は、波状口縁である。533は、同じく浮線文を施すものだが、十三芒提式と考えられ、IV群に属するものである。534～537は、同一個体と思われるもので口縁部から頸部にかけての破片であろう。

c種 縄文を施すもの（第48図538～545）

538・539は同一個体で、緩やかに内湾する器形で、口端部に指頭による刻目が施される。541は、口唇部を欠くが、同じく緩やかに内湾するものである。542～545は、同一個体で、結節縄文が施される。514と胎土が酷似しており、514の胴部下半を構成すると考えられる。

2・3類（第49図546～550）

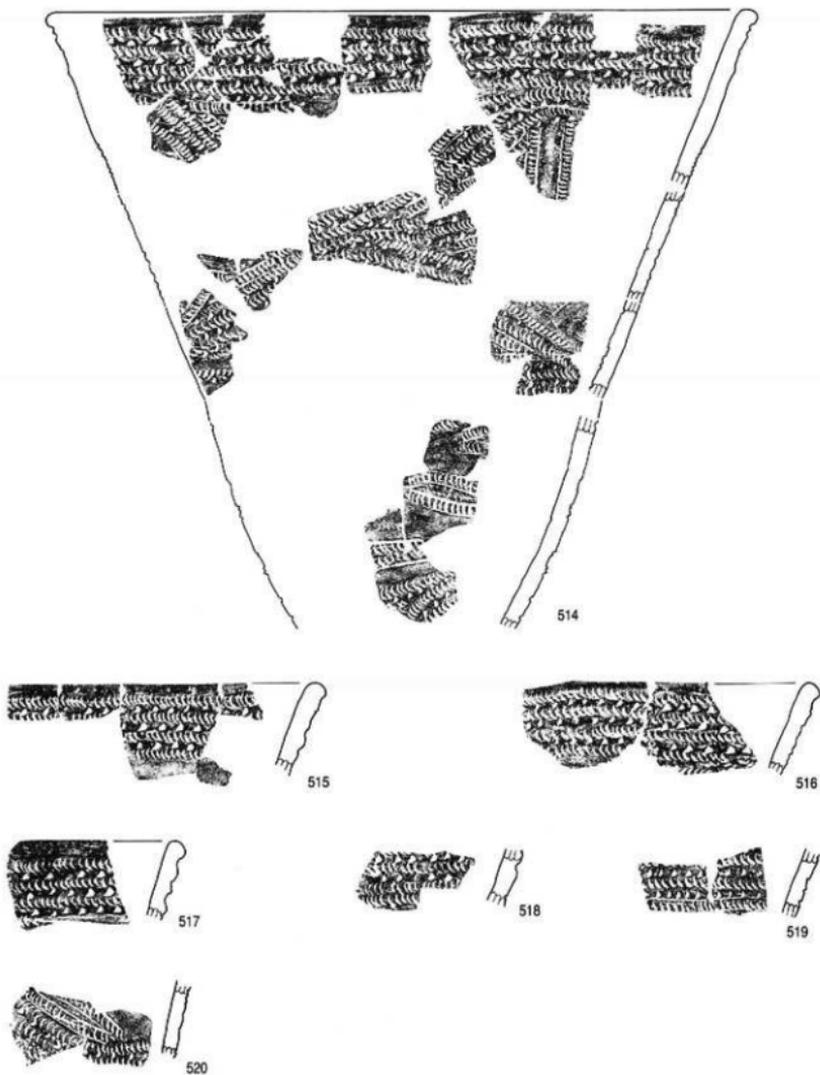
口縁部が無文のものをまとめた。全て丁寧な磨き調整がなされており、残存部位より下に、平行沈線や爪形文による文様が施されると考えられる。諸器a～b式であろう。なお、547は、口端に小型の瘤状突起を貼付け、瘤部分には赤彩が残存する。



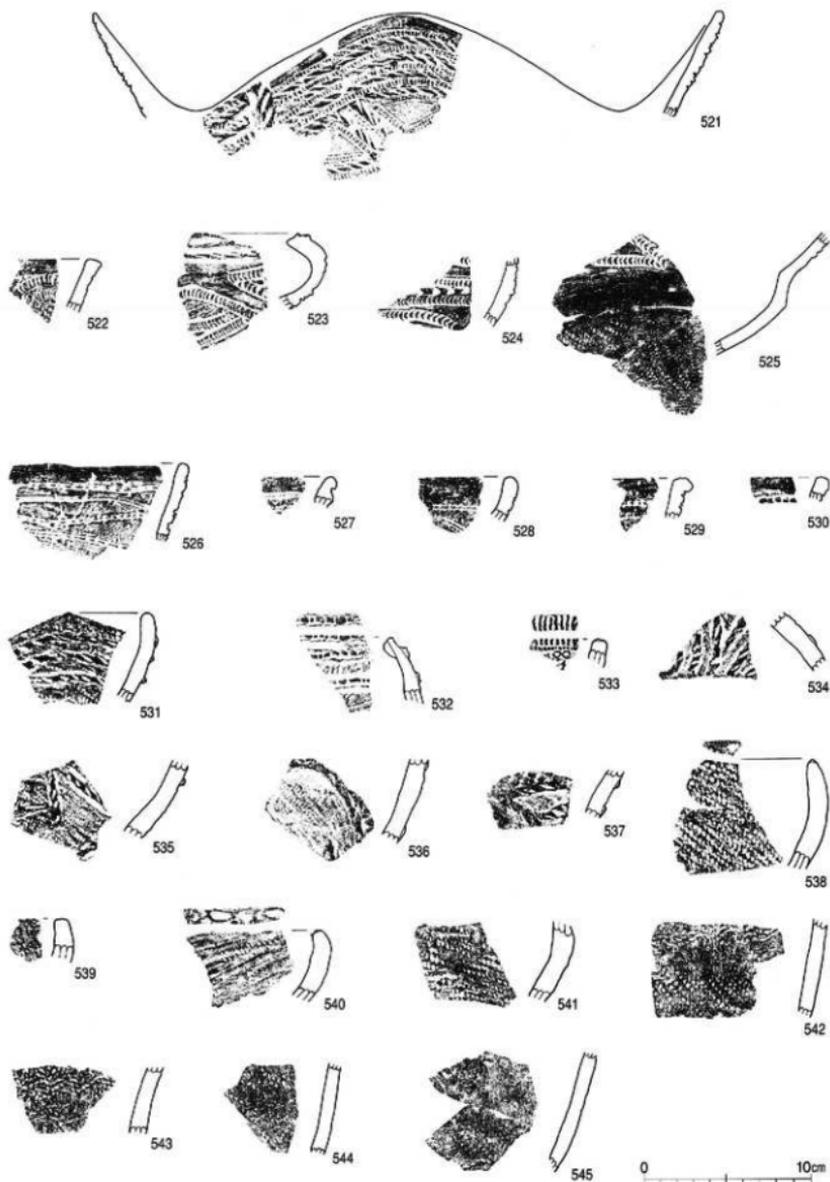
第46図 遺構外出土土器 第Ⅲ群1類・2類a～c種
(1類-480~483、2類a種-484~498、2類b種-499~504、2類c種-505)



第47図 遺構外出土土器 第Ⅲ群3類a種



第48図 遺構外出土土器 第Ⅲ群3類a種



第49回 遺構外出土土器 第Ⅲ群3類 a～c種 (a種-521～530、b種-531～537、c種-538～545)

第5表 遺構外出土土器 第Ⅲ群 観察表

調査番号	アグリ	解址	層 号	検出番号	アグリ	解址	層 号	アグリ	検出番号	層 号	調査番号	アグリ	解址	層 号	検出番号	アグリ	解址	層 号	
484	A 33 7	12		L 35 7 13	483上層-	294	P 34 4 12		526	O 21 1 30	534上層-								
484	P 31 5	12		N 25 8 9	483上層-	505	N 26 2 10		527	L 20 8 12	534上層-								
487	O 36 7	12	487上層-	O 25 2 10	483上層-	507	O 25 2 10		528	L 27 2 10	534上層-								
488	Q 37 1	11	488上層-	P 26 1 10	483上層-	508	O 36 3 10		529	N 29 3 10	534上層-								
484	O 39 4	10		500	P 27 1 10	509	Q 42 1 9		530	P 40 1 11	534上層-								
	O 41 4	11		501	P 40 2 10	510	Q 42 1 9		531	L 40 1 11	534上層-								
	L 38 2 9			502	L 22 1 10	511	P 42 4 10		532	L 39 2 10	534上層-								
	M 30 3 9			503	L 43 3 10	512	P 40 2 10		533	L 37 1 11	534上層-								
	L 37 1 11			504	P 36 2 10	513	L 37 1 11		534	L 36 3 10	534上層-								
	L 37 4 10			505	L 31 3 9	514	L 37 1 11		535	L 35 3 10	534上層-								
	L 38 3 10				L 25 3 10		L 25 3 10		536	M 35 1 10	534上層-								
	P 46 2 12				L 22 1 10		L 22 1 10		537	M 43 2 9	538上層-								
	M 25 4 10				L 22 1 10		L 22 1 10		538	L 39 3 10									
	K 25 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10		539	L 39 3 10									
	485 35 3 9				L 22 1 10		L 22 1 10		540	L 38 3 10									
	O 35 3 12				L 22 1 10		L 22 1 10		541	L 37 2 12									
	O 39 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10		542	P 38 2 10									
	P 32 1 12				L 22 1 10		L 22 1 10		543	L 36 2 10									
	K 25 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10		544	L 35 2 10									
	O 39 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10		545	L 34 2 10									
	P 34 3 12				L 22 1 10		L 22 1 10		546	L 33 2 10									
	O 35 3 10				L 22 1 10		L 22 1 10		547	L 32 2 10									
	O 32 1 11				L 22 1 10		L 22 1 10		548	O 36 2 11									
	K 39 3 10				L 22 1 10		L 22 1 10		549	L 31 2 10									
	L 36 3 10				L 22 1 10		L 22 1 10		550	L 30 2 11									
	V 35 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 36 1 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	P 33 3 12				L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 33 4 12				L 22 1 10		L 22 1 10												
	Q 36 3 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	Q 11 4 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	P 37 4 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	N 36 1 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 29 1 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 36 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	N 36 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	N 37 4 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 36 1 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	P 37 1 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 42 1 11				L 22 1 10		L 22 1 10												
	P 42 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 37 2 11				L 22 1 10		L 22 1 10												
	P 36 4 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
487	M 40 4 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
488	O 33 4 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
489	L 35 3				L 22 1 10		L 22 1 10												
490	P 35 1 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
491	深心部				L 22 1 10		L 22 1 10												
492	O 39 3 11				L 22 1 10		L 22 1 10												
493	P 36 1 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
494	L 36 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
495	O 37 2 12				L 22 1 10		L 22 1 10												
496	L 35 2 10				L 22 1 10		L 22 1 10												
497	N 37 4 11	御仁部			L 22 1 10		L 22 1 10												
498	N 37 6 7				L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 36 4 11	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	Q 31 2 12	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	M 28 1 12	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 36 8 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 36 9 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 34 4 12	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 35 3 13	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 37 1 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 36 1 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 36 2 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 37 1 11	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 38 2 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 39 2 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 38 3 11	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 37 1 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 37 1 11	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	K 37 4 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 36 4 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	O 39 2 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 38 3 11	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 37 1 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	L 37 1 11	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												
	K 37 4 10	485上層-			L 22 1 10		L 22 1 10												

第IV群 縄文時代前期後葉～中期前葉

1類 諸磯c式～五領ヶ台I式(第50図551～第53図586)

551～553・555は、同一個体である。口端部に瘤状の突起と楕円状の突起を貼付け、後者には幅広く深い沈線を施す。口唇部には、円形と三角形の印刻文を施し、その下に横位平行沈線を巡らせている。554は、横位平行沈線と矢羽根文を交互に施し、頸部には2条の隆帯を巡らせるものである。この2個体とも十三井提式であろう。

556は2個1単位の貼付文を施すもので、口唇部に平行沈線を巡らせている。557は1個1単位の貼付文を施すもので、口唇部に斜位の平行沈線を施し、口縁部には横位平行沈線を巡らせた後、斜位の平行沈線を浅く施文している。558は、2個1単位の貼付文を施し、口縁部には平行沈線を巡らせ、その中間部に斜位の平行沈線を施し、胴部には対向する弧状の平行沈線を縦位に施文している。559は、矢羽根文と横位平行沈線を交互に施文するものである。561～566は、同一個体で、558と同じく縦位の弧線を施し、合間には格子目文を充填している。556～566は、諸磯c式であろう。

567は、4単位の波状口縁で、口縁部に浮線文を巡らせ、それに沿って三角形の刻みを施し、口唇部の浮線文間には細密な条線を縦位に施文し、頸部には橋状把手をつける。五領ヶ台I式であろう。

568～573は、口唇部に無文部を巡らせ、文様には平行沈線多用するものである。568は、口縁部に横位と縦位の平行沈線文を交互に施し、頸部以下を縄文とする。569は、口唇部に欠状の印刻文を、口唇部下端と頸部に三角形の印刻文を巡らせる。後者の印刻文は、口縁部パネル文の上下端を区画するものである。胴部上半には、楕円状のパネル文と三角形の印刻文が施され、胴部下半には帯状のパネル文が巡らされる。パネル文内は、斜位の平行沈線を交差させ、格子目文とするが、左下がりが深い彫りであれば、右下りはごく浅くするという施文手法をとる。570は、口唇部に平行沈線を、口縁部に斜位の平行沈線を格子目状に施し、頸部には隆帯を巡らせ指頭で押捺し、胴部は縄文とする。571は、口縁部から頸部にかけて、横位平行沈線と斜位平行沈線による格子目文を巡らせている。なお、570・571の格子目文も、569と同様の施文手法をとる。572・573は、口縁部に斜位の平行沈線を施し、573は胴部に縄文を施した後、平行沈線を等間隔に垂下させる。568～573は、十三井提式と考えられる。574～581は口縁部で、568～573と同じく口唇部を無文とするか平行沈線を施すもので、頸部破片の582も含めて同時期と考えられる。583～585は同一個体で、口縁部は半裁竹管を押しきすることで、瓦状の文様にしている。頸部以下の文様は判然としないが、平行沈線が巡ると考えられる。586は口唇部に細密な条線を施し、口縁部は583と同じく瓦状の文様とし、頸部に逆三角形の区画文を巡らせ、胴部には結節縄文を施している。583～586は、五領ヶ台I式であろう。

2類 五領ヶ台II式(第53図587)

典型的な五領ヶ台II式は、この587のみであるが、ほぼ完形に近い形まで復元できた。口端部には2個1単位の突起が、1/4周間隔で2単位のみつき、4単位にはならない。口唇部には、縦位の条線を施し、口縁部には隆帯を4単位の波状に巡らせ、隆帯の両側を沈線でなぞるとともに、波頂部には渦巻文も付す。また、空白部には押し引き文を充填させる。頸部には横位の隆帯を1状巡らせ、やはり4単位の隆帯をそこから垂下させ、垂下隆帯間には結節縄文を施している。

3類 隆帯を施すもの(第54図588～601)

口唇部に隆帯を巡らせるものをまとめた。588は、口縁部から底部まで残存するもので、口唇部に幅広い隆帯を貼付けるとともに、口端部にも同様の隆帯を波状に巡らせるものである。口縁部以下は縄文を施す。589と590は同一個体で、隆帯を貼付けるのではなく、口唇部を折返すものである。口縁部以下は、

588と同じく縄文を施文する。591は、幅の狭い隆帯を貼付けるもので、これも同じく口縁部以下は縄文である。また、同一個体である592は、隆帯が剥離しており、隆帯貼付→縄文施文という施文順位が分かる。593・594も同じく幅の狭い隆帯を貼付けるものだが、口縁部以下の文様は、593は横位沈線で、594は縄文である。595～599は同一個体で、波状口縁となる。口唇部の隆帯は、589と同じく口唇部を折返すものだが、幅が非常に狭い。口端部の一部と口縁部以下に縄文を施している。601は、同じく折返し口縁であるが、内側へ折返すもので、口縁部には縄文を施している。

以上のように、隆帯を施すものといっても、多種多様であるが、時期については十三菩提式～五領ヶ台Ⅱ式と大きく区切っておきたい。

1・2類 (第54図602～609)

時期細別が困難な胴部及び底部破片をまとめた。602は頸部と考えられ、口縁部側に斜位の平行沈線、胴部側に弧状の平行沈線を施す。603も同じく頸部で、パネル文を描き、604は胴部上半で、縦位に平行沈線を施している。605と606は同一個体で、底部の際まで条線を縦位に施文する。607と608も同様に条線を施し、609は結節縄文を施すものである。これらの時期も、十三菩提式～五領ヶ台Ⅱ式と大きく区切りたい。

Ⅲ・Ⅳ群 (第54図610～第55図615)

Ⅲ群かⅣ群になる底部破片をまとめた。610～612は縄文を施すもので、613～615は無文である。615は内外面に丁寧なミガキを施すことから、縄文時代後期に比定されるであろう。

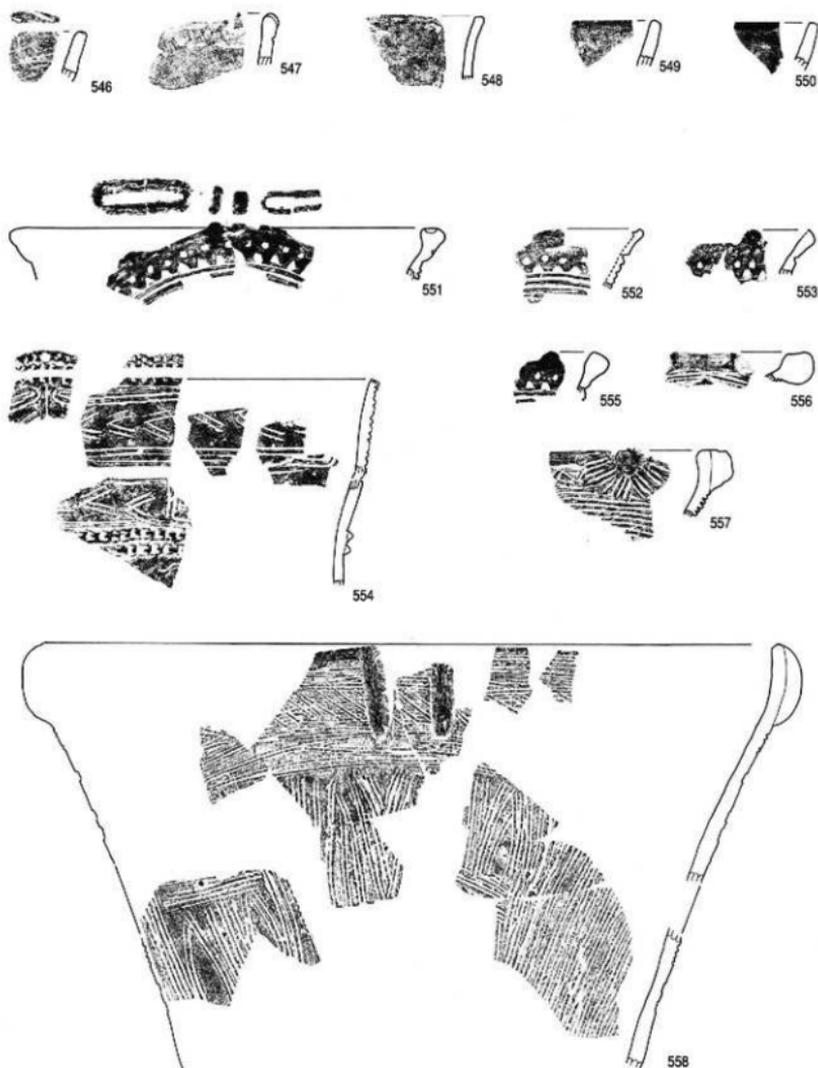
第Ⅴ群 (第55図616～618)

616・617は、堀之内Ⅰ式で、616は口縁部、617は口縁部付近である。618は、横位の磨消縄文に区切り文を、その下位に凹形刺突文を施すことから、加曾利BⅠ式であろう。

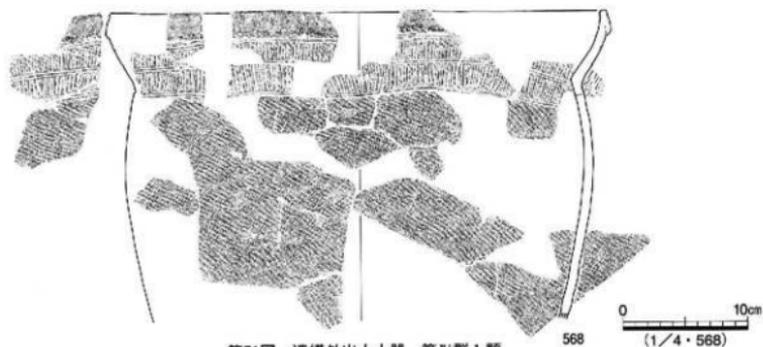
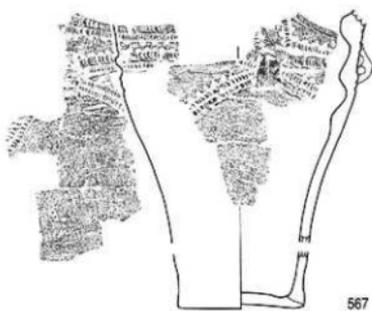
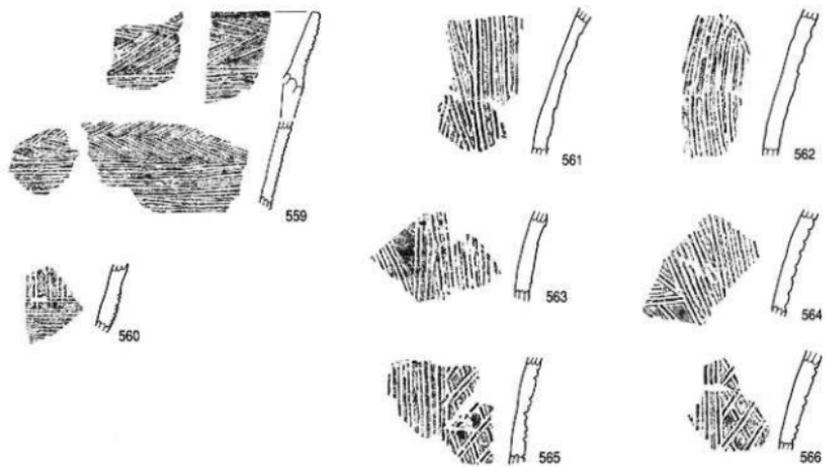
その他の土器 (第55図619～621)

型式が判別できなかったものをまとめた。619は繊維を多く含む土器で、幅広で深い平行沈線を弧状に施す。620・621は同一個体で、薄手で内面に輪積痕を残し、地文縄文上に細い条線で文様を描くものである。

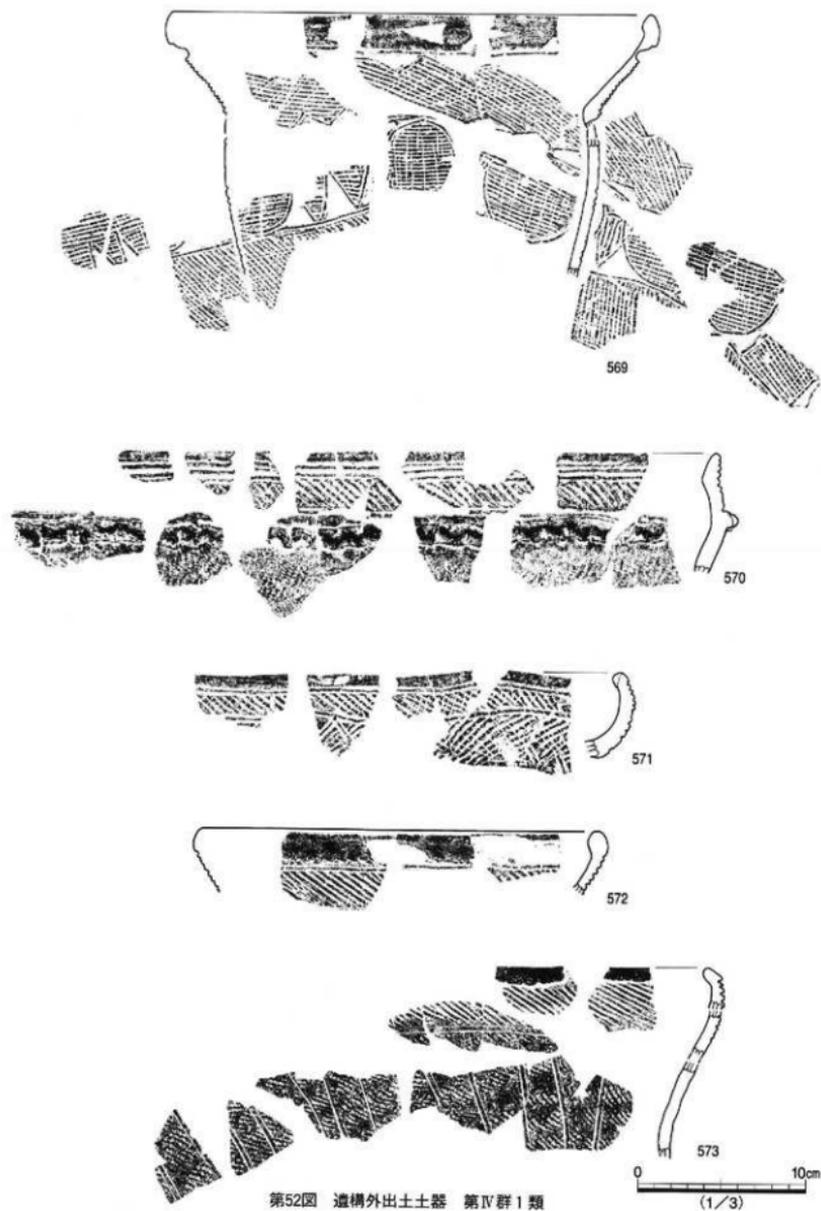
第4章 縄文時代の遺構と遺物



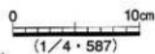
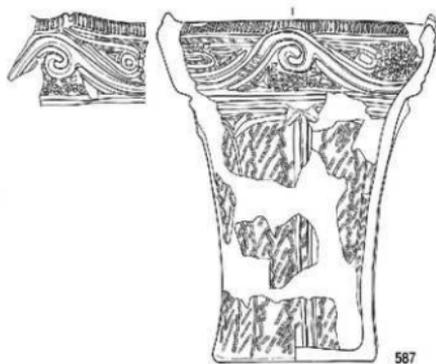
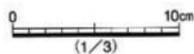
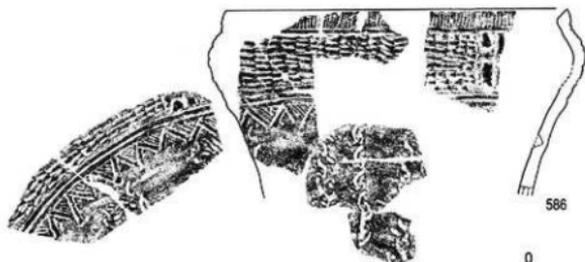
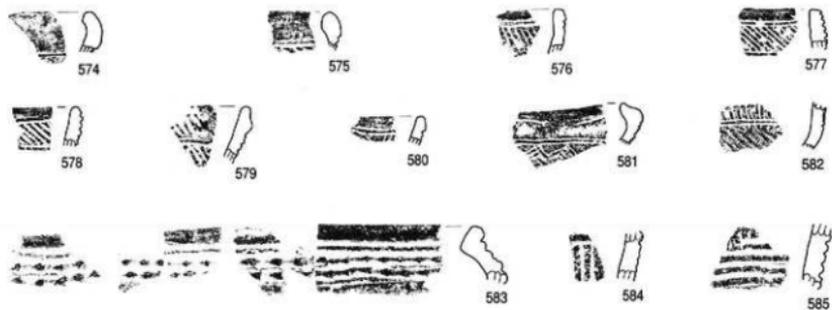
第50図 遺構外出土土器 第Ⅲ群2・3類 (546~550)・第Ⅳ群1類 (551~558)



第51圖 遺構外出土土器 第IV群1類

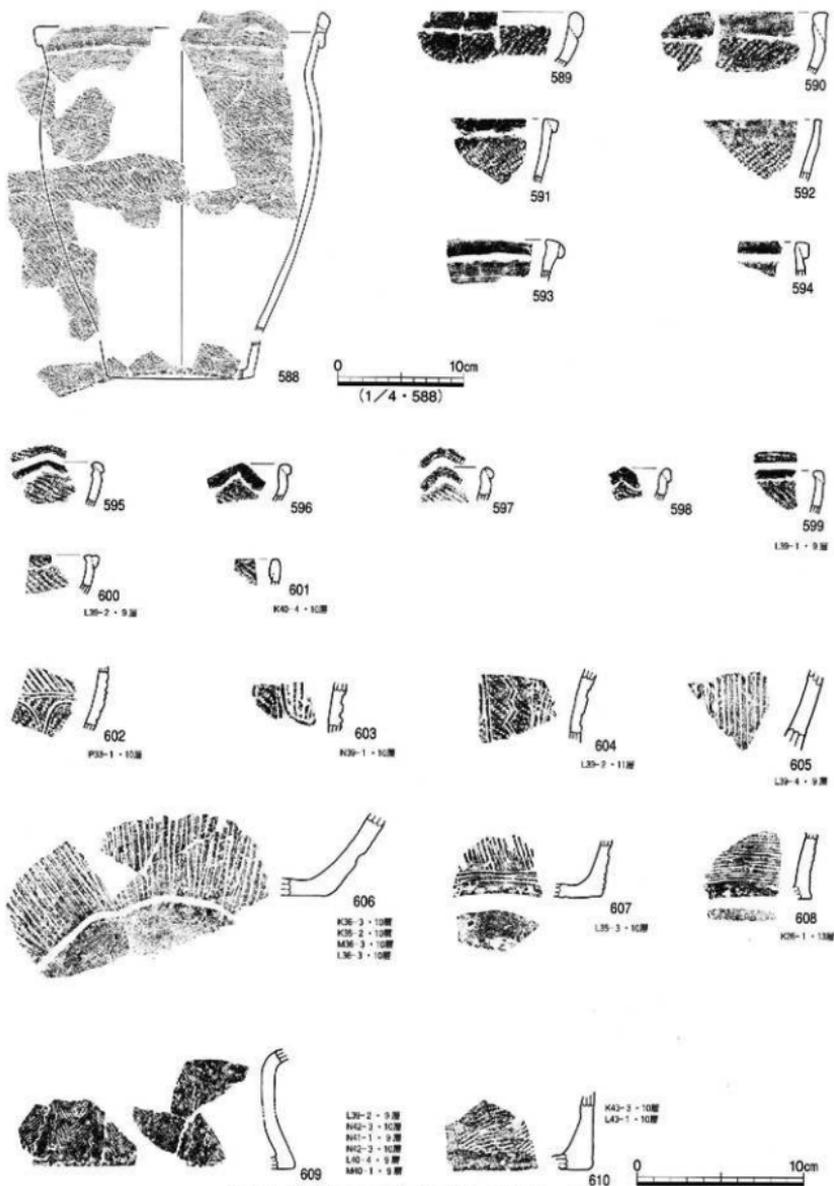


第52図 遺構外出土土器 第IV群1類

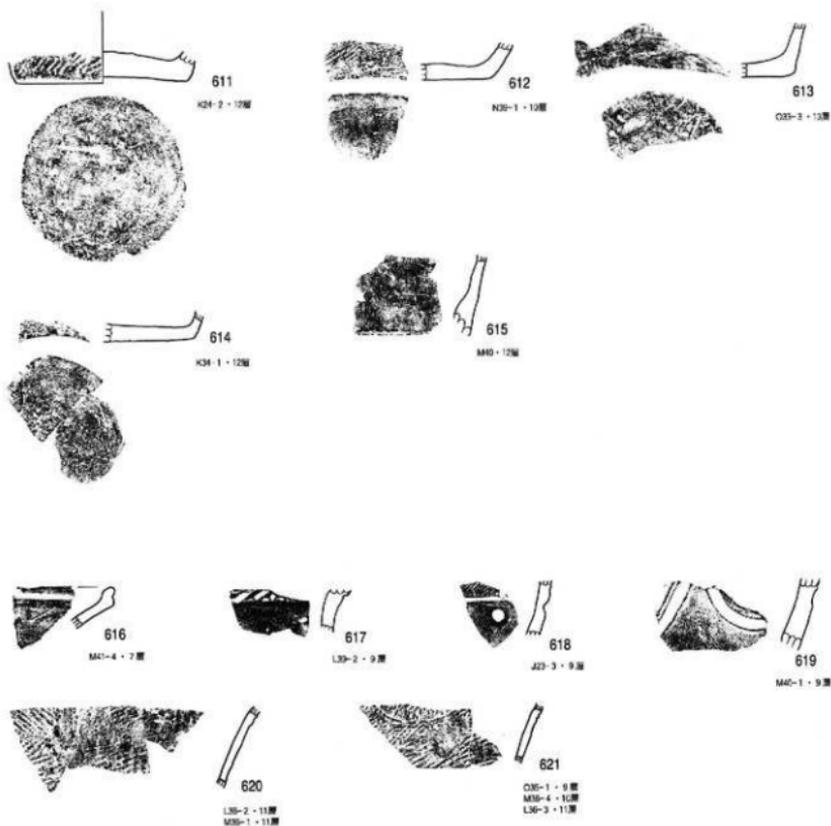


第53図 遺構外出土土器 第IV群1・2類 (1類-574~586、2類-587)

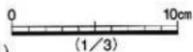
第4章 縄文時代の遺構と遺物



第54図 遺構外出土土器 第Ⅲ群・第Ⅳ群1～3類
(第Ⅳ群3類-588～601、1・2類-602～609、第Ⅲ群・Ⅳ群-610)



第55図 遺構外出土土器 第Ⅲ～Ⅴ群・その他
 (第Ⅲ・Ⅳ群-611～615、第Ⅴ群-616～618、その他-619～621)



第4節 遺構外出土の石器・焼礫

1 概要

石器は、器種・層位・石材の順に掲載した。1,915点の石器が出土したが、全点の図化はできなかった。層位別の出土傾向は第8・9表のとおりである。第9表を見ると、12・13層で磨石と剥片が多く石鏃がやや少なく、9・10層で磨石と剥片が少なく石鏃が多い傾向がある。前者では、竪穴住居跡や竪穴状遺構が多く検出され、後者では、焼土跡のみであり、こうした生活活動の差が、石器の出土比率に反映しているのかもしれない。また、第7・9表のとおり、多くの石核・剥片が出土しており、各時期をとおして盛んに石器製作が行われていたことが分かるが、その内で剥片については黒曜石を筆頭に、緑色凝灰岩・チャート・水晶・ホルンフェルスで構成される(第11表)。その比率は、各層位でほぼ同じであり、剥片石器については、利用する素材がほぼ一定であったようである。また、緑色凝灰岩・ホルンフェルスは在地で採取でき、黒曜石・水晶・チャートは在地には全くないか希少であり、各時期を通じて、在地和遠方の石材を組み合わせて利用し続けたことも分かる。ただし、その採取地については変化があり、黒曜石の産地分析によると、13層から9層にかけて、恩馳烏系が減少し、西霧ヶ峰系や他の産地が増加している。

磨石などの礫石器については、表では示さなかったが、火山岩や堆積岩を各層で用いており、やはり利用傾向に大きな変動はない。また、ほとんどの石材が在地で採取可能なものである。この礫石器の石材は、焼礫の石材とその多くが同じであるだけでなく、その多数に被熱痕を確認することができる。これは、剥片石器の石材に被熱痕が少ないことと好対照をなしており、焼礫を用いた調理の際に、礫石器が利器として用いられ、その場で破損した石器については、焼礫へ使い回すという一連のサイクルがあったのかもしれない。

黒曜石と焼礫については、グリッド別重量分布図(第56・57図)を示したが、両者とも10層から13層にかけて、その分布の中心がB区北東部からB区西南部へと移行している。これは、各層の遺構や土器の分布とも一致していることから、10・11層は前期中葉～中期前葉、12・13層は早期中葉～末葉の生活活動を反映したものと考えられることができる。石器分布図は作成できなかったが、石器についても各層位の出土比率が、黒曜石や焼礫と同じく各時期の生活活動を反映していると考えたい。

2 石器

1 石鏃(第58図1～24)

石鏃54点・石鏃未製品43点が出土した。主な石材は黒曜石である。

2 異形石器(第58図25)

1点のみ出土したもので、周縁に抉部をもつ石器である。下端が破損している。

3 石匙(第58図27～29)

5点出土している。緑色凝灰岩を用いるものが多い。

4 石錐(第58図30～32)

3点出土している。30は片側のみを、31・32は両端を尖頭状に加丁している。

5 削器(第58図33～第61図62・第64図81)

93点出土している。側縁に多少でも刃部をもつものは全てここにまとめたため、刃部が明瞭に形成されるものから、使用痕程度のもので含んでいる。石材は、緑色凝灰岩が多数を占める。

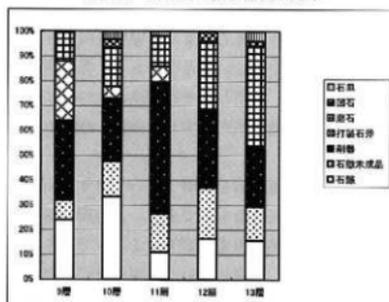
6 搔器(第62図63)

短辺に急斜度の刃部をもつ63を搔器とした。先端に著しい磨耗を確認できる。

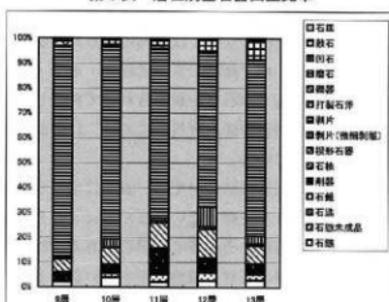
第7表 層別別石器集計表

	石鏃	石 鏃 未成品	石匙	石鏃	削器	原石	石核	楔形 石器	剥片	剥片 (微細剥離)	打製 石斧	礫器	磨石	凹石	燧石	石皿	合計
9層	6	2	0	1	8	1	15	1	242	2	6	0	3	0	0	0	287
10層	21	9	1	1	16	1	36	1	414	18	3	0	10	2	0	2	535
11層	7	10	0	1	34	4	34	3	227	4	4	0	8	0	1	1	338
12層	12	15	4	0	23	2	54	4	288	37	0	2	20	3	0	0	464
13層	8	7	0	0	12	5	21	2	203	9	0	0	21	1	0	2	291
合計	54	43	5	3	93	13	160	11	1,374	70	13	2	62	6	1	5	1,915

第8表 層別別主要石器出土比率



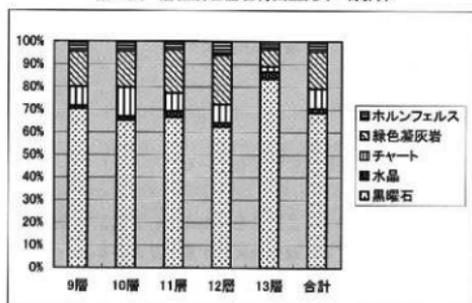
第9表 層別別全石器出土比率



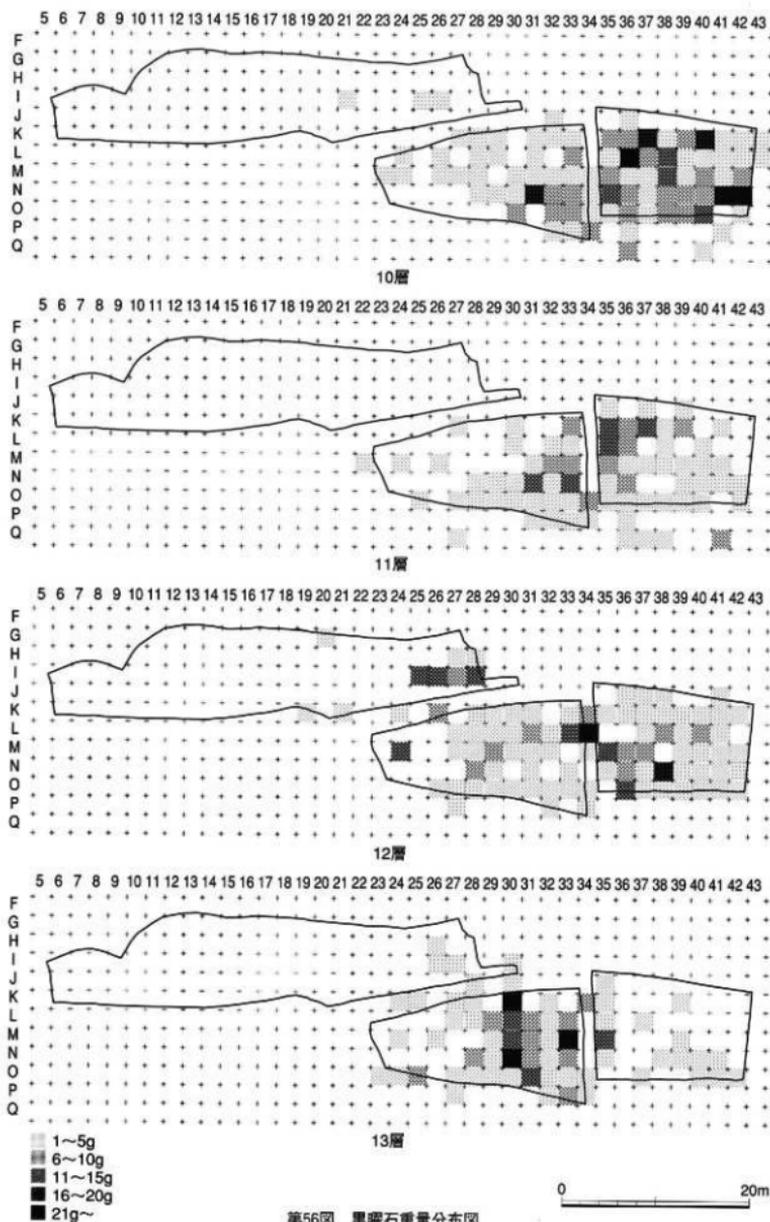
第10表 層別別石材集計表 (剥片)

	黒曜石	水 晶	チャート	緑色凝灰岩	ホルンフェルス	合 計
9層	158	3	19	35	10	225
10層	255	6	51	62	17	391
11層	149	6	18	43	8	224
12層	168	5	22	59	16	270
13層	167	6	5	15	7	200
合計	897	26	115	214	58	1,310

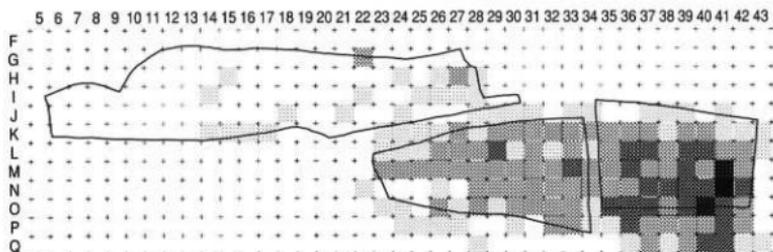
第11表 層別別石器石材出土比率 (剥片)



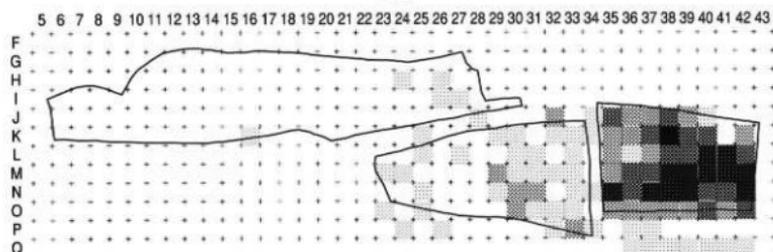
- 7 原石 (第62図64~66)
13点出土している。明瞭な剥離痕のないものをまとめた。
- 8 石核 (第62図67~69)
160点出土している。図示したものは黒曜石裂のみだが、緑色凝灰岩も多数を占める。
- 9 楔形石器 (第63図70)
11点出土している。
- 10 剥片・剥片 (微細剥離あり) (第63図71~73)
剥片以外に、使用痕の可能性のある微細な剥離を伴うものを剥片 (微細剥離あり) とした。剥片は1,374点、剥片 (微細剥離あり) は70点出土している。71・72は剥片で、73は微細剥離のある剥片である。
- 11 打製石斧 (第63図74~第64図80)
9~11層で13点出土している。いずれも楕形か短冊形で、76・78~80は刃部が破損している。
- 12 礫器 (第64図82~第65図84)
3点出土している。礫の周縁を打ち欠き、刃部を削出するものをまとめた。
- 13 磨石 (第65図85~第69図110)
62点出土している。表裏のみを磨面とするものと、表裏だけでなく側面も磨面にするものがある。また、97のように石の稜部を磨面とするものもある。106は、側面に敲痕がある。
- 14 磨石・凹石 (第69図111~114)
5点出土している。磨面と敲打による窪みの両方をもつものをまとめた。砂岩製が多い。
- 15 凹石 (第69図115)
図示した115の1点のみ出土している。軽石製で、表裏が窪んでいる。
- 16 石皿 (第69図116)
5点出土している。大型の石で磨面をもつものをまとめた。
- 17 不明石器 (第69図117)
器種が特定できないものをまとめた。117は、非常に脆い軽石で、全面に磨耗が及ぶ。磨石とするには硬度が足りないため、別の用途に用いたと考えられる。



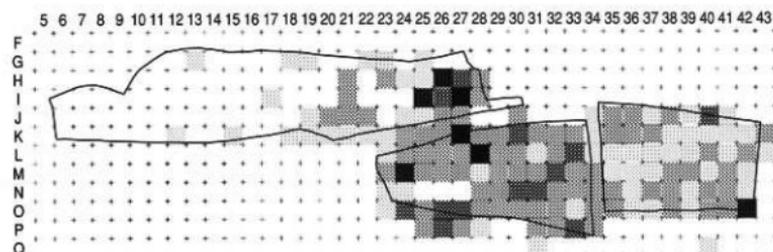
第56図 黒曜石重量分布図



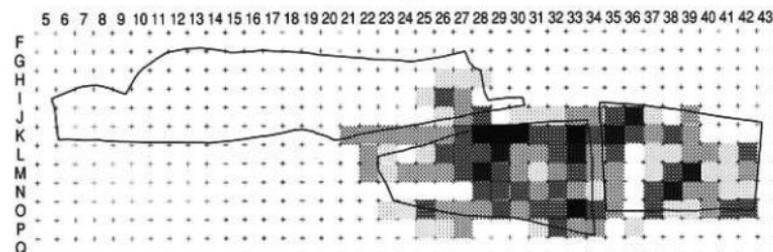
10層



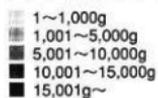
11層



12層

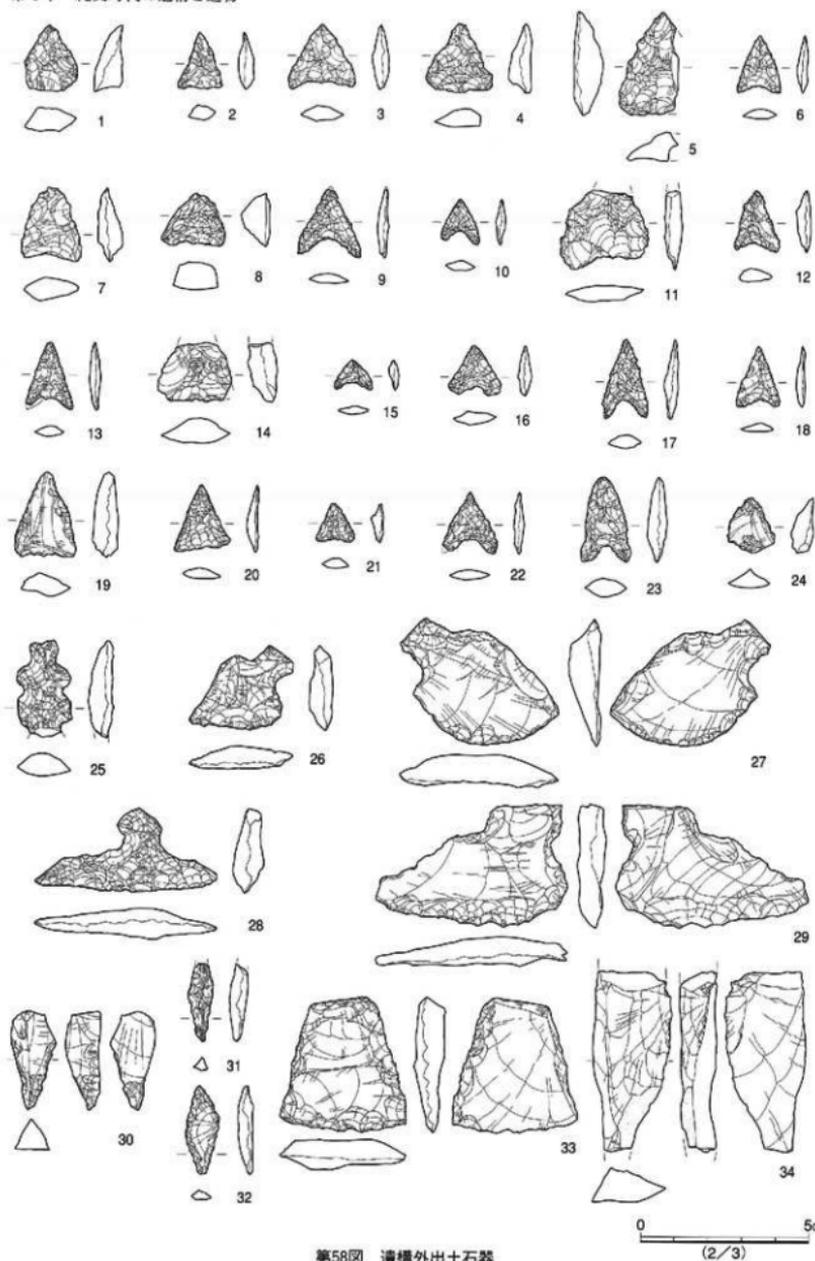


13層

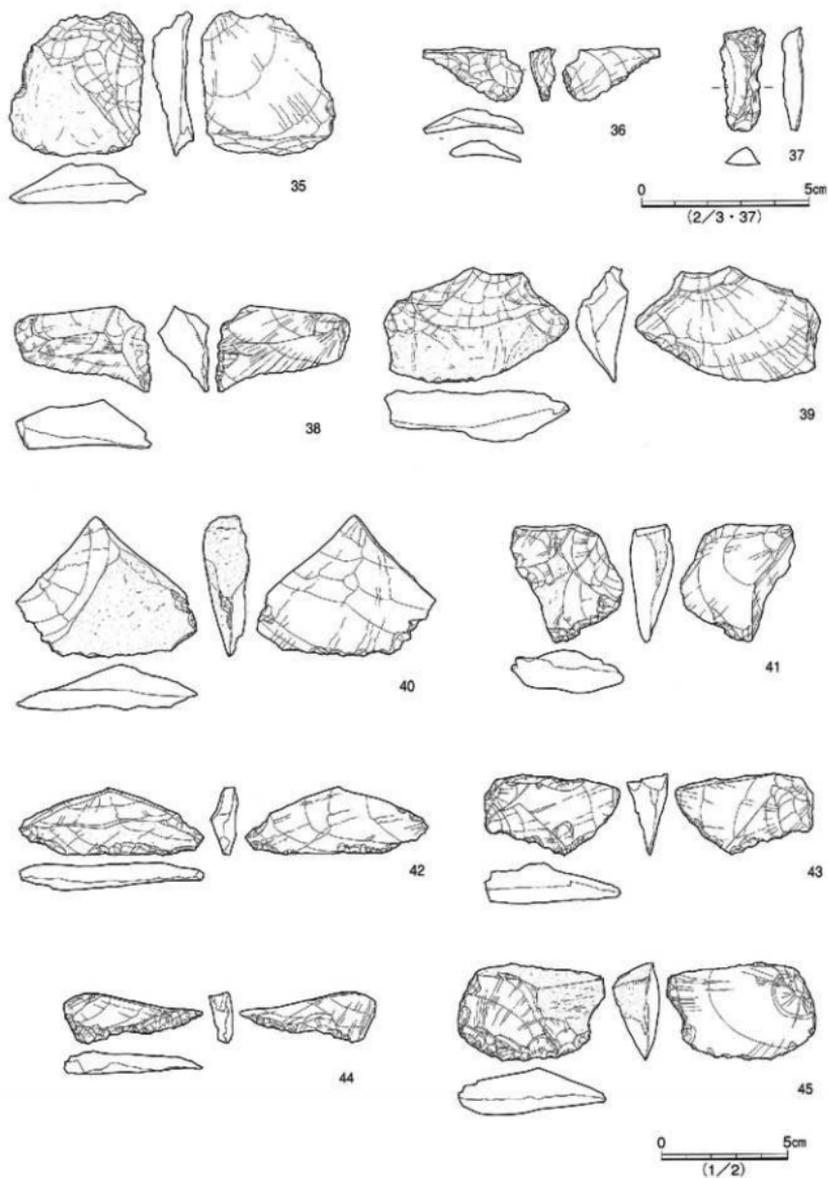


第57図 焼礫重量分布図

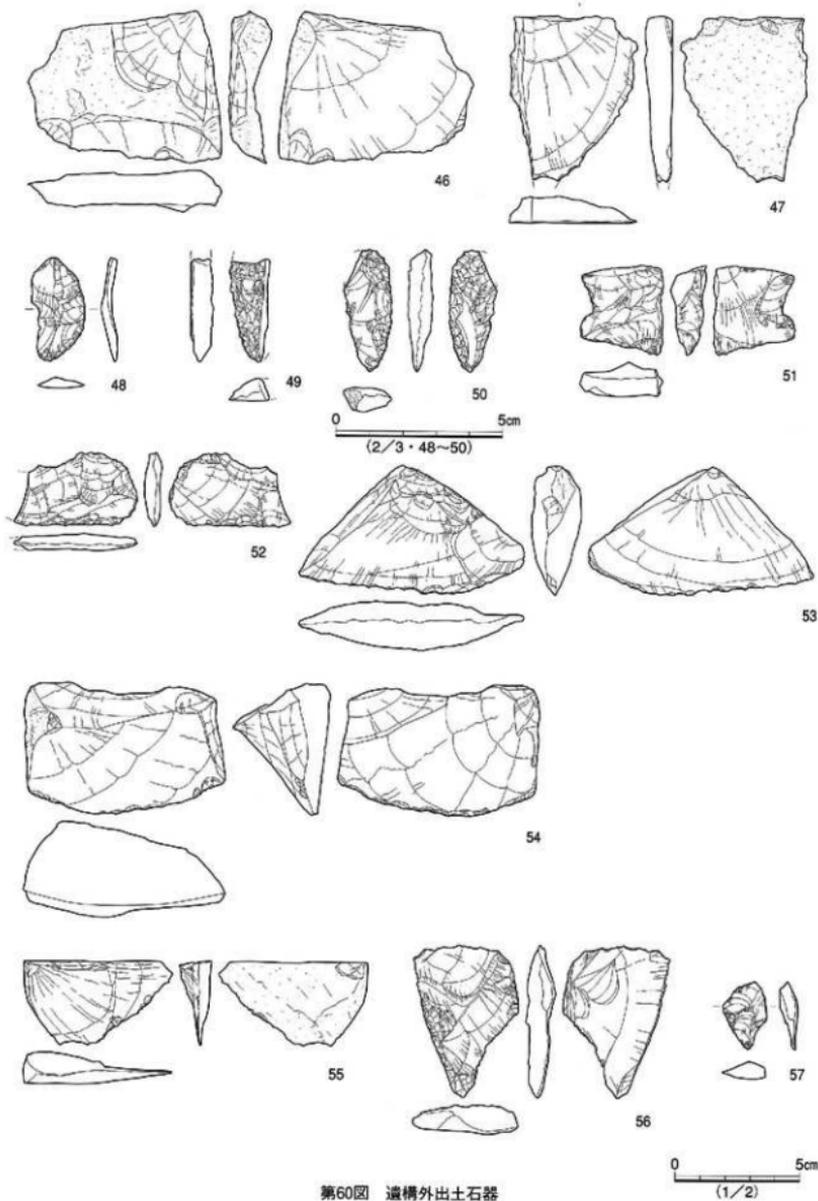
第4章 縄文時代の遺構と遺物



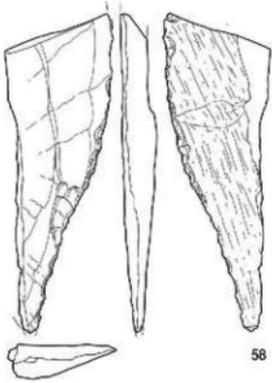
第58図 遺構外出土石器



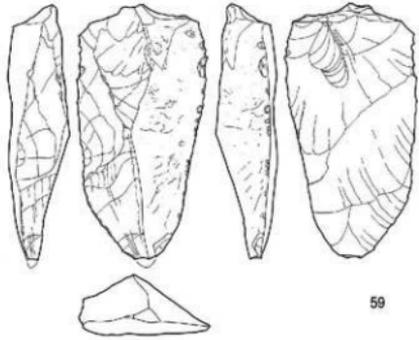
第59図 遺構外出土石器



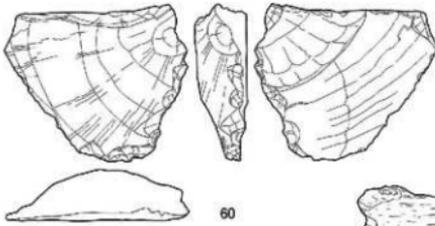
第60図 遺構外出土石器



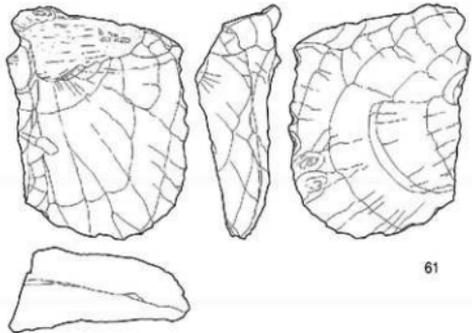
58



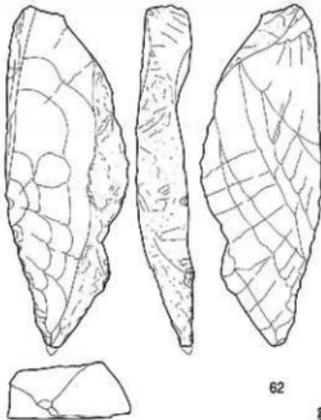
59



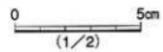
60



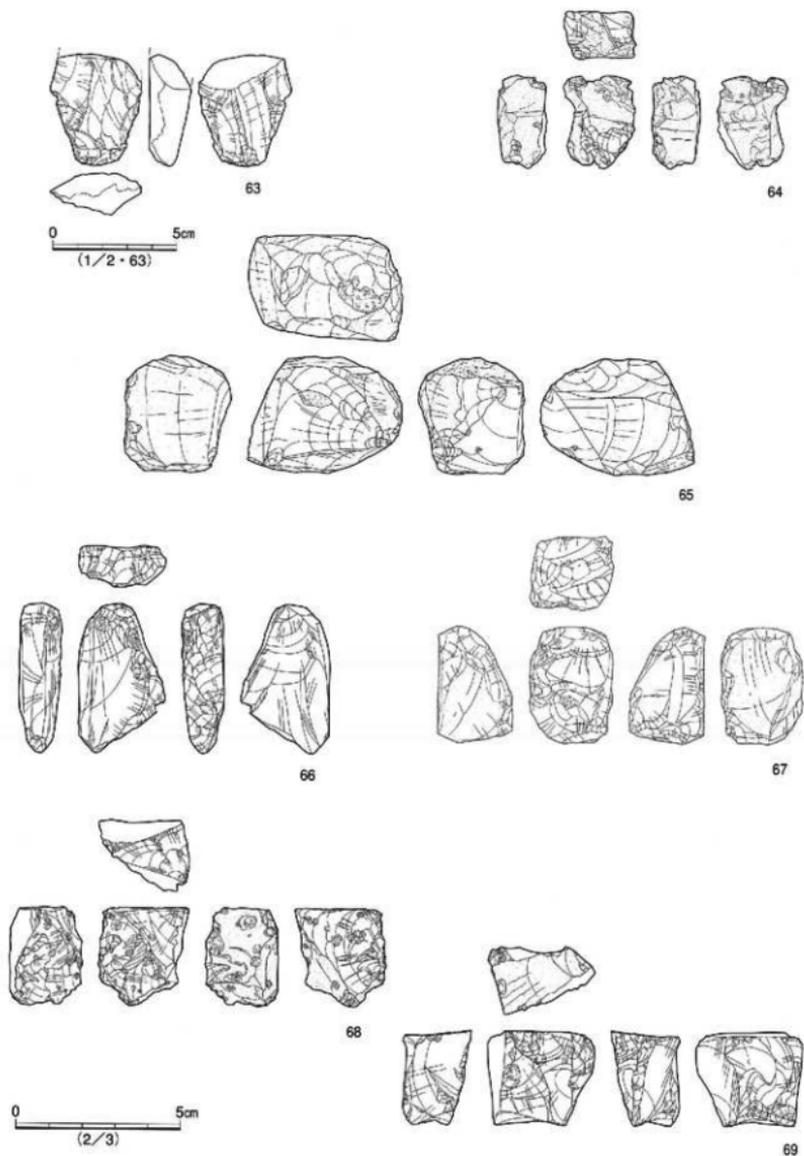
61



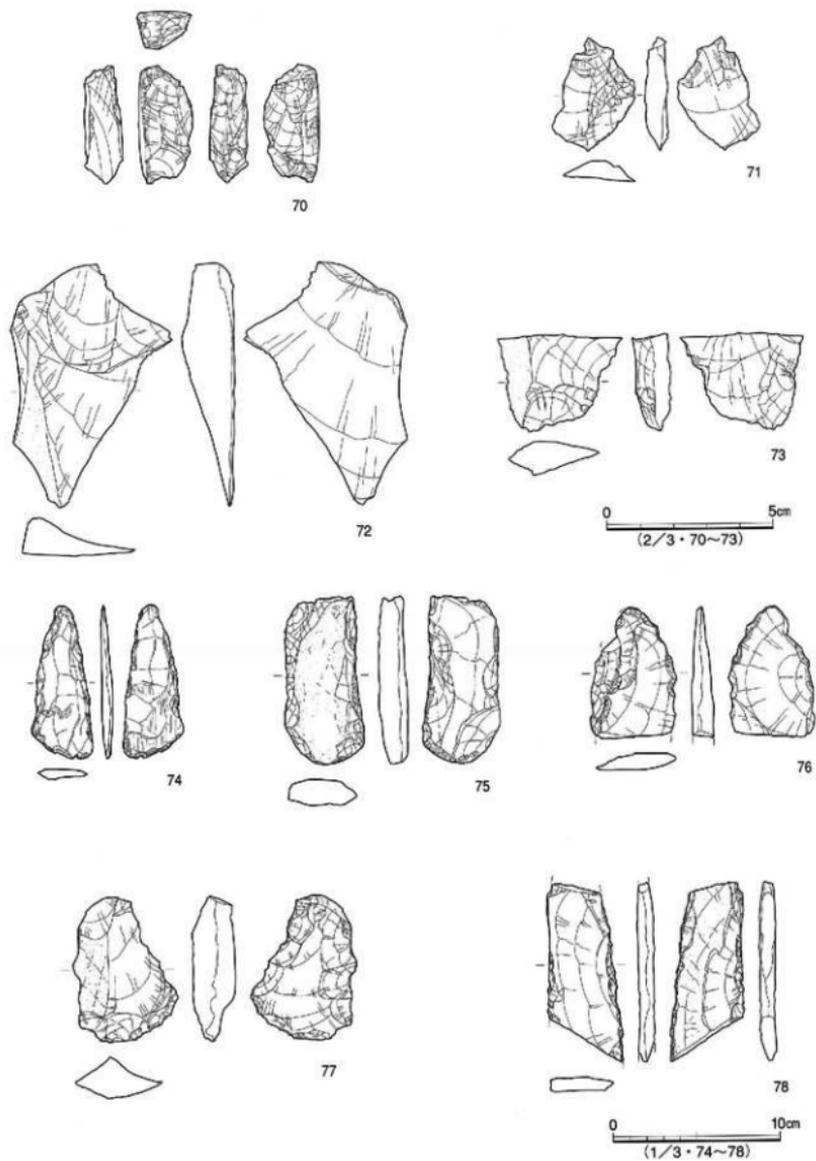
62



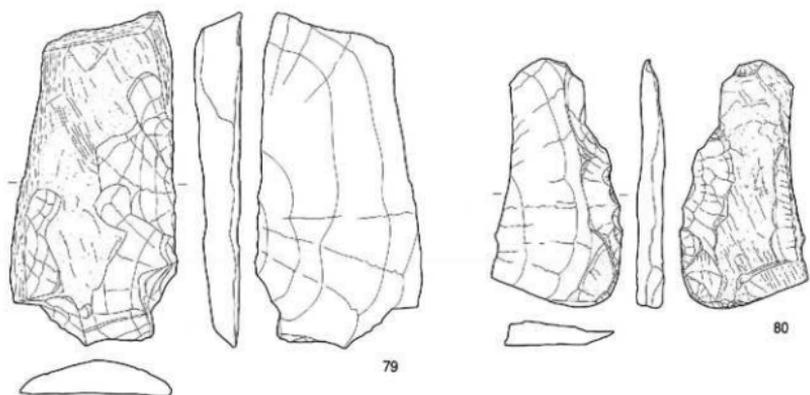
第61図 遺構外出土石器



第62図 遺構外出土石器

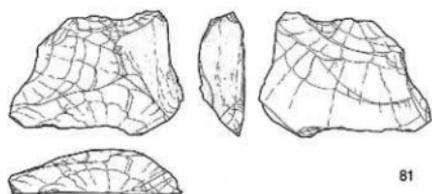


第63図 遺構外出土石器

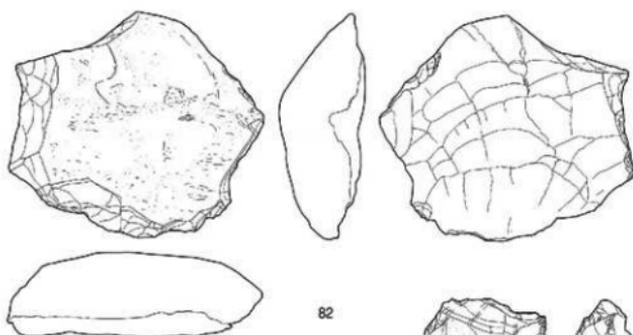


79

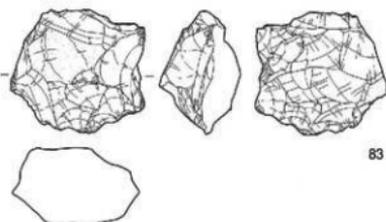
80



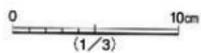
81



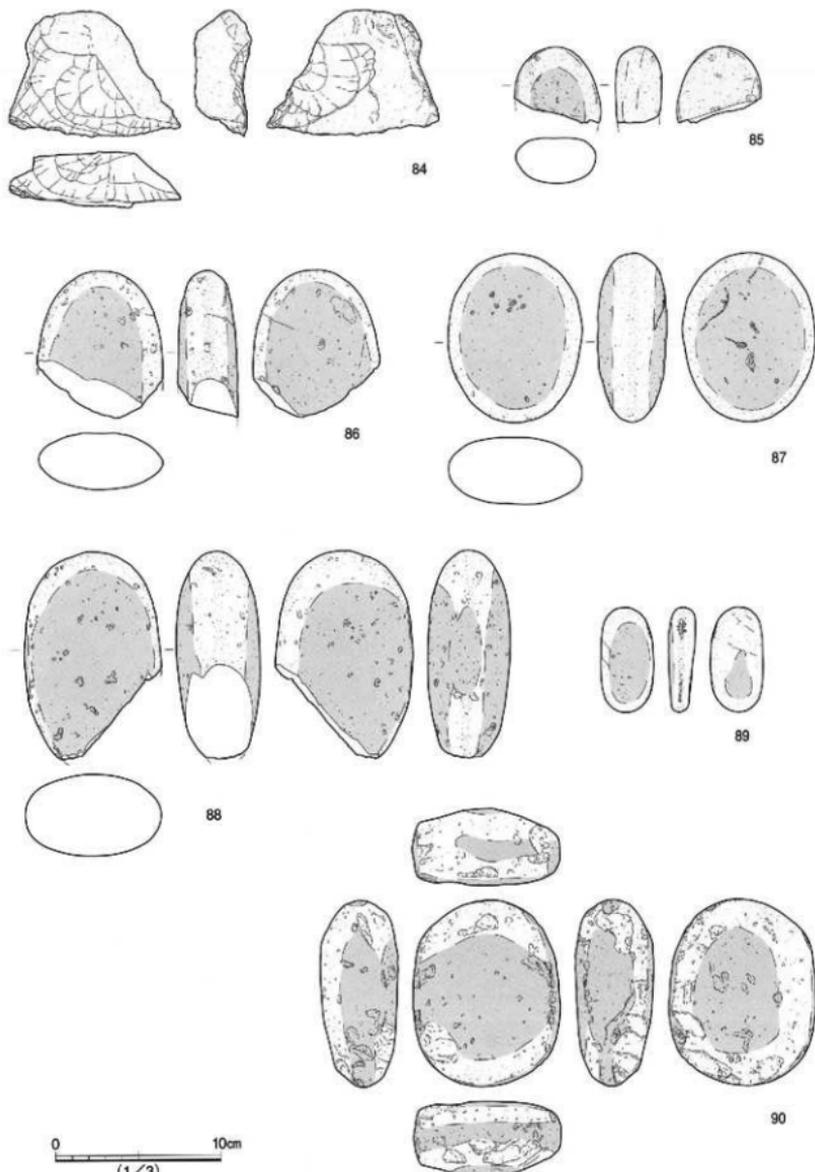
82



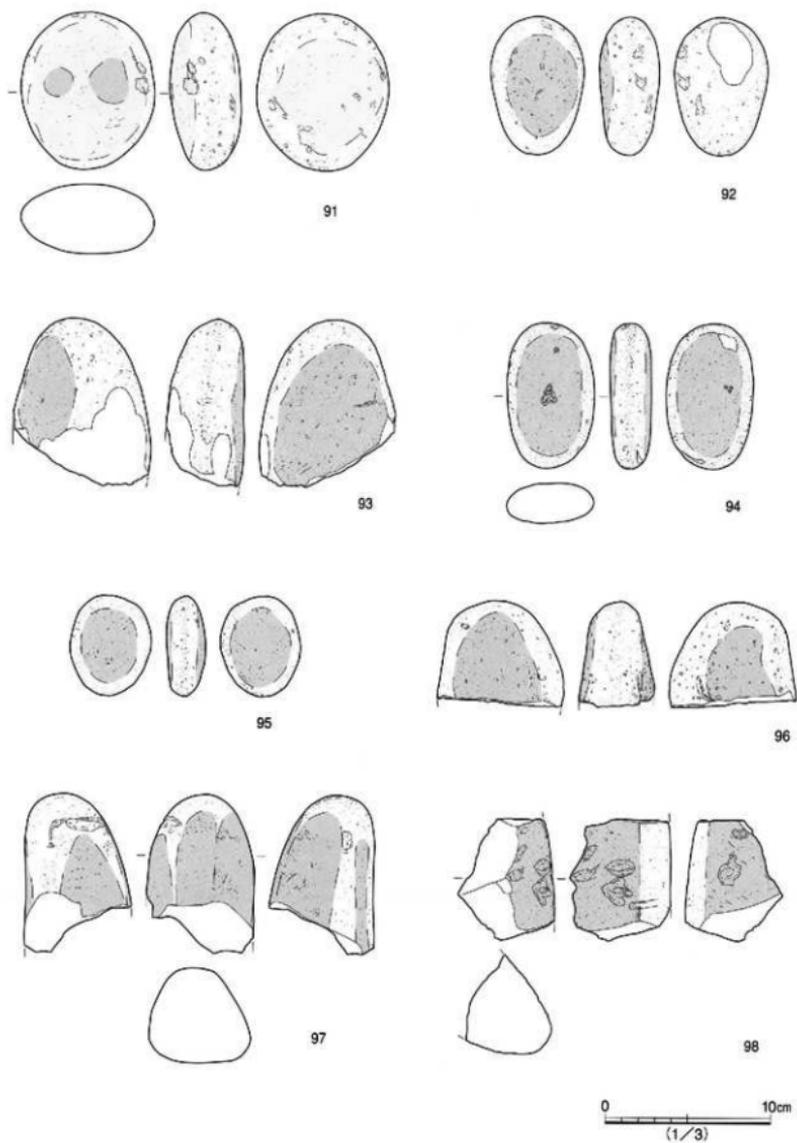
83



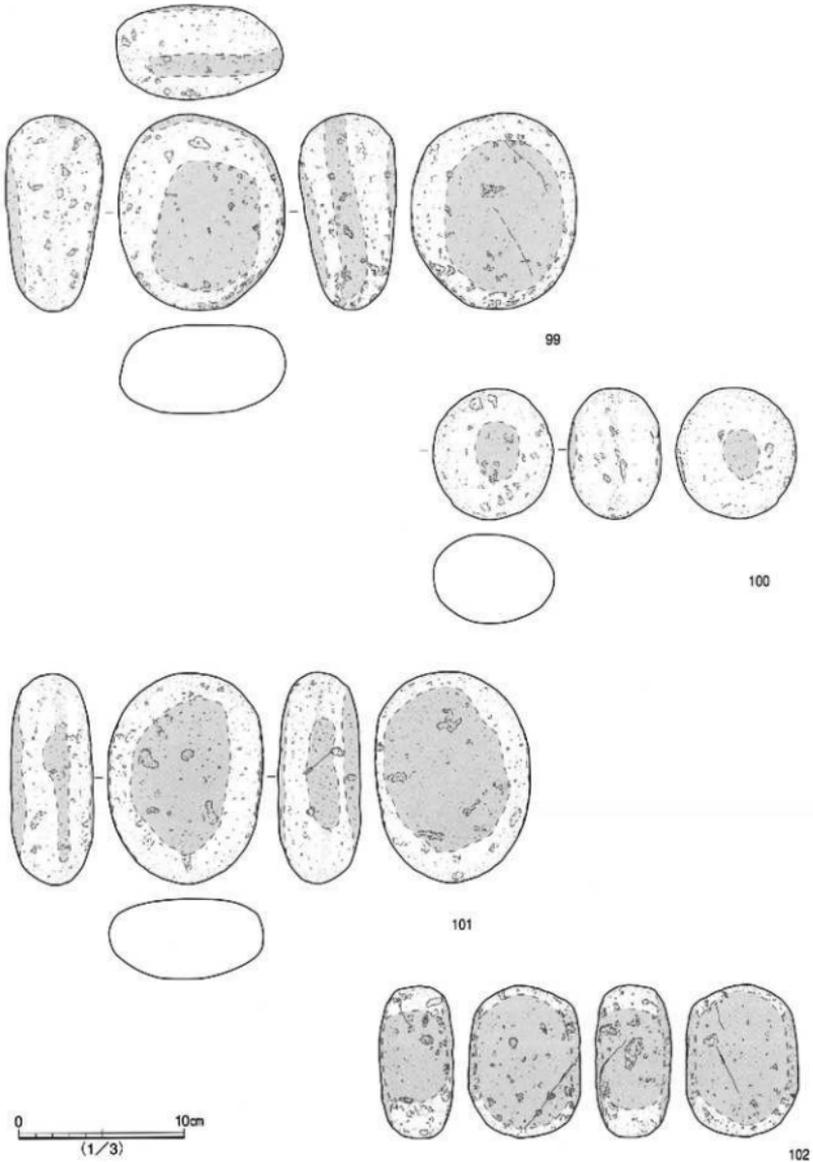
第64図 遺構外出土石器



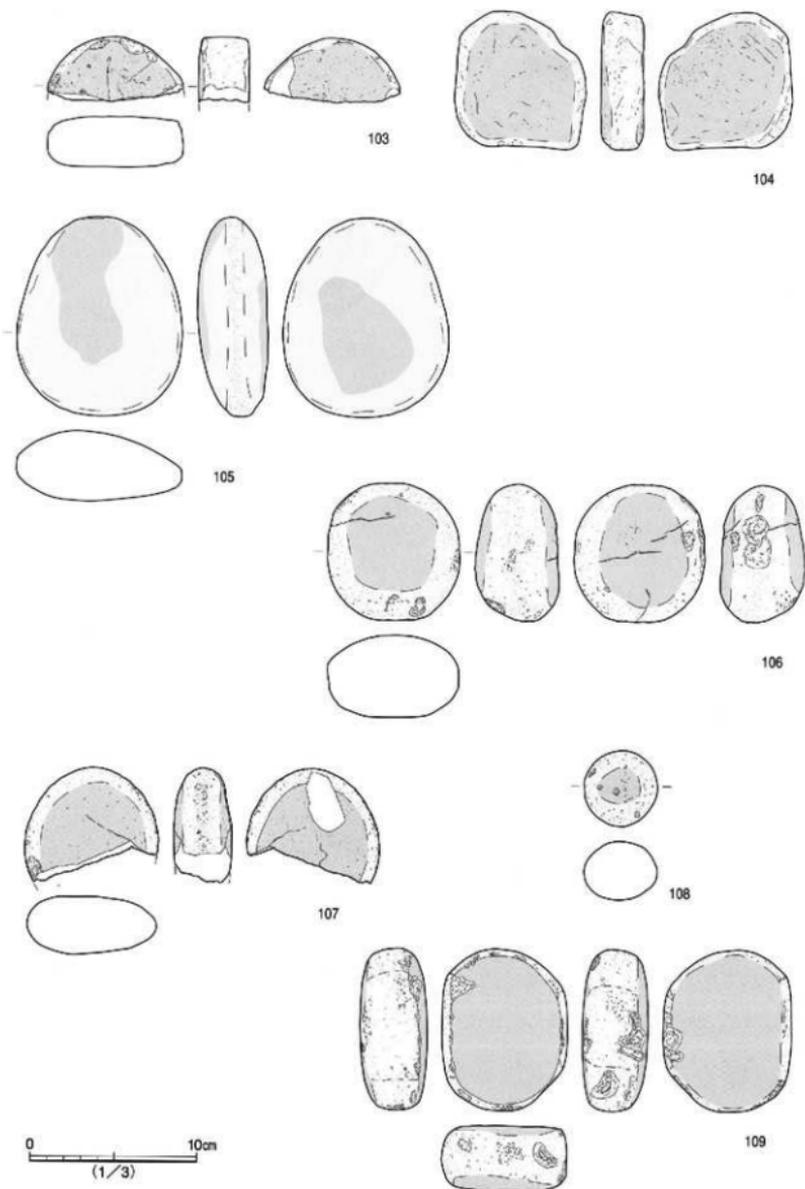
第65図 遺構外出土石器



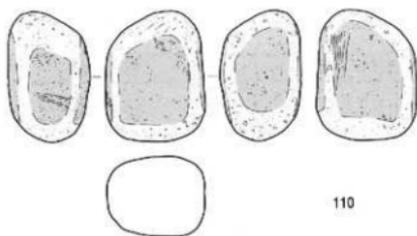
第66図 遺構外出土石器



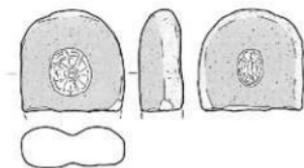
第67図 遺構外出土石器



第68図 遺構外出土石器



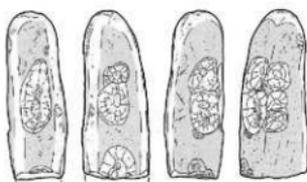
110



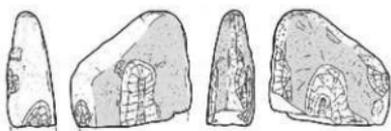
111



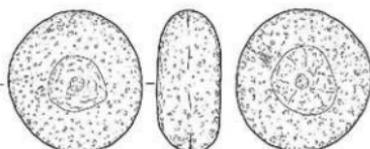
112



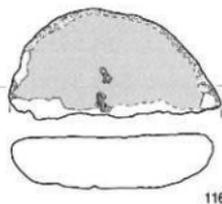
113



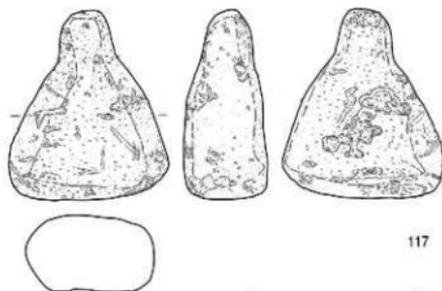
114



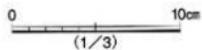
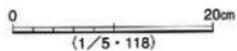
115



116



117



第69図 遺構外出土石器

第4章 縄文時代の遺構と遺物

第12表 実測石器一覽表

※黒曜石以外の石材は、都留文科大学教授中井均氏に内儀鑑定いただいたものである。

器物番号	種別	アフリッド	器名	石 材	長さ (mm)	最大径 (mm)	重量 (g)	器物番号	種別	アフリッド	器名	石 材	長さ (mm)	最大径 (mm)	重量 (g)		
1	5	K-04	石錐	黒曜石 (西宮+柳本)	55.5	16.0	8.5	2.3	60	13	F-22	削器	緑色凝灰岩	64.0	22.0	21.0	95.4
2	10	L-36	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	17.5	13.5	4.8	0.7	61	13	M-59	石鏃	玄武岩質岩 (富士山)	36.0	23.0	26.0	210.0
3	10	M-23	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	15.8	20.0	5.0	1.1	62	13	O-4	削器	石高砂岩質岩	159.0	49.0	35.0	194.5
4	10	M-30	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	21.0	20.0	5.9	3.2	63	13	M-23	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	36.0	44.0	22.0	43.9
5	10	N-37	石鏃 (破損)	黒曜石 (野田+小)	35.0	38.0	9.9	3.3	64	13	M-30	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	46.0	25.7	13.0	17.8
6	10	N-30	石鏃	ホルンフェルス	12.7	12.9	3.4	0.2	67	9	M-17	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	34.0	25.0	23.0	25.8
7	10	M-30	石鏃	緑色凝灰岩	22.8	18.2	7.5	5.4	68	10	K-40	石鏃	黒曜石 (柳本)	30.0	27.0	35.0	15.4
8	10	N-30	石錐	黒曜石 (野田+小)	16.3	19.4	8.7	2.4	69	12	L-34	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	29.1	21.3	21.0	16.3
9	11	M-37	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	31.0	19.0	3.4	0.7	70	13	L-29	彫刻石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	36.0	19.5	11.6	7.1
10	11	M-30	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	14.0	11.5	3.0	0.2	71	9	M-47	透片	チャート	35.0	28.0	7.0	4.0
11	11	M-34	石鏃 (破損)	緑色凝灰岩	24.6	25.5	5.4	2.9	72	9	M-47	透片	黒曜石 (野田+小)	73.0	49.0	16.0	55.6
12	11	O-40	石鏃	黒曜石 (野田+小)	19.0	13.5	4.5	0.8	73	9	F-20	透片	ガラス製	35.0	38.0	12.0	16.0
13	11	N-30	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	18.0	14.2	3.4	0.6	74	9	J-27	打製石鏃	ホルンフェルス	142.0	56.0	13.0	83.0
14	12	K-37	石鏃 (破損)	黒曜石 (黒部池田)	38.3	25.5	9.0	2.4	75	9	K-17	打製石鏃	ホルンフェルス	104.0	47.0	15.0	108.0
15	12	K-40	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	9.3	11.4	3.0	0.2	76	9	N-41	打製石鏃	ホルンフェルス	86.0	55.0	14.0	49.0
16	11	M-39	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	13.0	16.0	4.2	0.6	77	9	N-21	打製石鏃	安山岩	39.0	44.0	25.0	113.0
17	11	M-39	石鏃	チャート	31.5	13.9	4.3	3.9	78	10	M-30	打製石鏃	ホルンフェルス	139.0	45.0	30.0	64.0
18	12	K-38	石鏃	緑色凝灰岩	18.8	12.9	2.7	0.2	79	10	M-17	打製石鏃	ホルンフェルス	235.0	101.0	28.0	100.0
19	12	K-35	石錐	緑色凝灰岩	25.2	38.5	7.8	5.3	80	10	Q-36	打製石鏃	ホルンフェルス	132.0	75.0	17.0	90.0
20	11	K-27	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	25.0	17.2	3.0	0.7	81	12	J-27	透器	ホルンフェルス	78.0	104.0	28.0	195.1
21	11	K-39	石鏃	黒曜石 (黒部池田)	11.8	13.9	3.7	0.3	82	6	J-24	透器	玄武岩質岩 (富士山)	138.0	154.0	32.0	1,120.0
22	11	L-12	石鏃	黒曜石 (西宮+柳本)	15.0	16.5	3.3	0.5	83	12	N-31	鏝器	緑色凝灰岩	72.0	96.0	47.0	230.4
23	11	L-33	石鏃	安山岩	25.2	15.4	4.0	2.1	84	12	F-23	鏝器	灰岩質	73.0	110.0	24.0	298.0
24	13	F-23	石錐	黒曜石 (西宮+柳本)	47.0	14.0	2.8	1.1	85	9	K-42	磨石	緑色凝灰岩	12.0	23.0	28.0	22.4
25	13	N-38	打製石鏃	黒曜石 (黒部池田)	29.8	16.5	2.0	0.2	86	9	J-20	磨石	玄武岩質岩	96.0	17.0	26.0	230.0
26	10	O-30	石鏃	緑色凝灰岩	36.0	31.8	7.1	4.8	87	9	M-33	磨石	緑色凝灰岩	139.0	61.0	42.0	494.0
27	12	L-35	石鏃	緑色凝灰岩	39.0	48.0	16.0	12.5	88	13	L-4	磨石	砂岩	57.0	85.0	43.0	409.9
28	12	L-38	石鏃	緑色凝灰岩	25.9	35.0	9.5	7.2	89	10	P-38	磨石	砂岩	34.0	20.0	16.0	43.0
29	12	M-36	石鏃	緑色凝灰岩	38.0	56.0	9.8	17.8	90	10	N-37	磨石	花崗岩質岩	114.0	85.0	47.0	253.0
30	9	K-40	石鏃	緑色凝灰岩	30.0	34.0	11.0	5.0	91	10	L-40	磨石	花崗岩質岩	127.0	83.0	50.0	220.0
31	13	M-38	石鏃	ホルンフェルス	31.0	7.7	3.7	0.8	92	10	O-36	磨石	角閃石岩	45.0	37.0	37.0	254.0
32	11	M-40	石鏃	緑色凝灰岩	27.1	9.0	4.1	0.9	93	10	L-39	磨石	砂岩	355.0	83.0	47.0	543.0
33	9	H-21	石鏃	緑色凝灰岩	53.0	56.0	13.0	24.0	94	10	L-29	磨石	玄武岩質岩 (富士山)	45.0	53.0	75.0	187.6
34	9	K-42	磨器	緑色凝灰岩	73.0	32.0	13.0	39.0	95	10	O-38	磨石	玄武岩質岩 (富士山)	45.0	49.0	24.0	153.8
35	9	K-38	磨器 (破損)	緑色凝灰岩	66.0	54.0	15.0	46.0	96	10	O-24	磨石	玄武岩質岩 (富士山)	65.0	26.0	45.0	211.0
36	9	M-35	磨器	緑色凝灰岩	55.0	49.0	10.0	5.0	97	12	K-40	磨石	緑色凝灰岩	91.0	61.0	64.0	409.0
37	10	N-29	磨器	安山岩	32.0	13.5	4.0	2.2	98	12	N-27	磨石	玄武岩質岩	75.0	58.0	41.0	280.0
38	10	N-26	磨器	砂岩	35.0	34.0	20.0	29.0	99	12	O-32	磨石	花崗岩質岩	138.0	103.0	58.0	1,060.0
39	10	L-01	磨器	緑色凝灰岩	47.0	74.0	21.0	58.0	100	12	L-29	磨石	花崗岩質岩	86.0	73.0	55.0	414.0
40	10	L-31	磨器	緑色凝灰岩	37.0	73.0	19.0	49.0	101	11	K-33	磨石	花崗岩質岩	129.0	94.0	49.0	350.0
41	10	L-33	磨器	緑色凝灰岩	48.0	45.0	18.0	16.0	102	11	K-38	磨石	石高砂岩質岩	53.0	68.0	46.0	486.0
42	10	M-41	磨器	緑色凝灰岩	28.0	74.0	11.0	16.0	103	12	K-30	磨石	玄武岩質岩	45.0	81.0	31.0	127.2
43	10	M-40	磨器	緑色凝灰岩	33.0	55.0	17.0	21.0	104	12	J-25	磨石	玄武岩質岩 (富士山)	85.0	86.0	26.0	246.0
44	10	M-35	磨器	緑色凝灰岩	29.0	26.0	9.0	8.0	105	13	M-25	磨石	砂岩	222.0	99.0	42.0	730.0
45	10	N-36	磨器	緑色凝灰岩	49.0	39.0	19.0	45.0	106	13	N-38	磨石	玄武岩質岩	84.0	79.0	31.0	300.0
46	10	O-40	磨器	安山岩	42.0	28.0	17.0	75.0	107	13	磨石	砂岩	75.0	48.0	26.0	589.0	
47	10	O-21	磨器	新山安山岩	66.0	31.0	11.0	40.0	108	13	L-33	磨石	石高砂岩質岩	47.0	45.0	35.0	165.5
48	11	N-31	磨器	黒曜石 (西宮+柳本)	20.0	16.0	5.0	1.2	109	13	O-32	磨石	花崗岩質岩	99.0	76.0	40.0	353.0
49	11	O-30	磨器	玄武岩質岩	21.7	12.2	2.6	2.8	110	13	M-27	磨石	玄武岩質岩 (富士山)	86.0	60.0	69.0	400.0
50	12	N-31	磨器	黒曜石 (西宮+柳本)	37.7	16.4	7.5	3.5	111	15	N-58	磨石	砂岩	53.0	63.0	25.0	131.0
51	12	J-25	磨器	玄武岩質岩	27.0	25.0	16.0	13.5	112	10	M-31	磨石	砂岩	29.0	64.0	31.0	310.0
52	12	J-37	磨器	緑色凝灰岩	36.0	49.0	7.0	3.4	113	12	M-30	磨石	砂岩	103.0	41.0	36.0	236.0
53	12	K-38	磨器	緑色凝灰岩	13.0	36.0	20.0	77.1	114	17	L-26	磨石	砂岩	71.0	73.0	28.0	129.4
54	12	N-28	磨器	緑色凝灰岩	54.0	41.0	28.0	196.0	115	15	K-30	磨石	砂岩 (富士山)	82.0	28.0	29.0	296.0
55	12	O-27	磨器	緑色凝灰岩	24.0	46.0	13.0	17.0	116	10	L-11	磨器	玄武岩質岩 (富士山)	115.0	25.0	55.0	1,086.0
56	12	F-24	磨器	緑色凝灰岩	42.0	43.0	12.0	24.0	117	12	N-33	磨器	砂岩	115.0	36.0	31.0	352.2
57	13	M-30	磨器	黒曜石 (西宮+柳本)	27.5	18.0	7.5	2.2									
58	13	O-29	磨器	ホルンフェルス	133.0	43.0	18.0	33.7									
59	13	M-21	磨器	緑色凝灰岩	194.0	53.0	35.0	135.7									

第5節 縄文時代中期後葉の焼木痕

1 概要

基本土層10層上面から217基の上坑が検出された。確認面は10層上面であるが、実際の掘込み面は、基本土層9層上面であり、直上を基本土層8層のスコリアによって覆われている。上坑の覆土は、全土坑で共通し、2層に分層される。1層（上層）は、基本土層8層のスコリアを多量に含み土が少なく、2層（下層）は、基本土層8層のスコリアはほとんどなく、土が主体となる。また、多くの土坑の1層には、樹木由来と考えられる径1～5mmの炭化物が多量に含まれている。

土坑の形状は、不定形なのが大半で、底面も凹凸が甚だしく、第71図で示したように、土坑下面が窄まらず、末広がりとなるものも多い。その分布も、第70図のとおり、規則性はなく調査区全域に広がり、遺物も認められない。

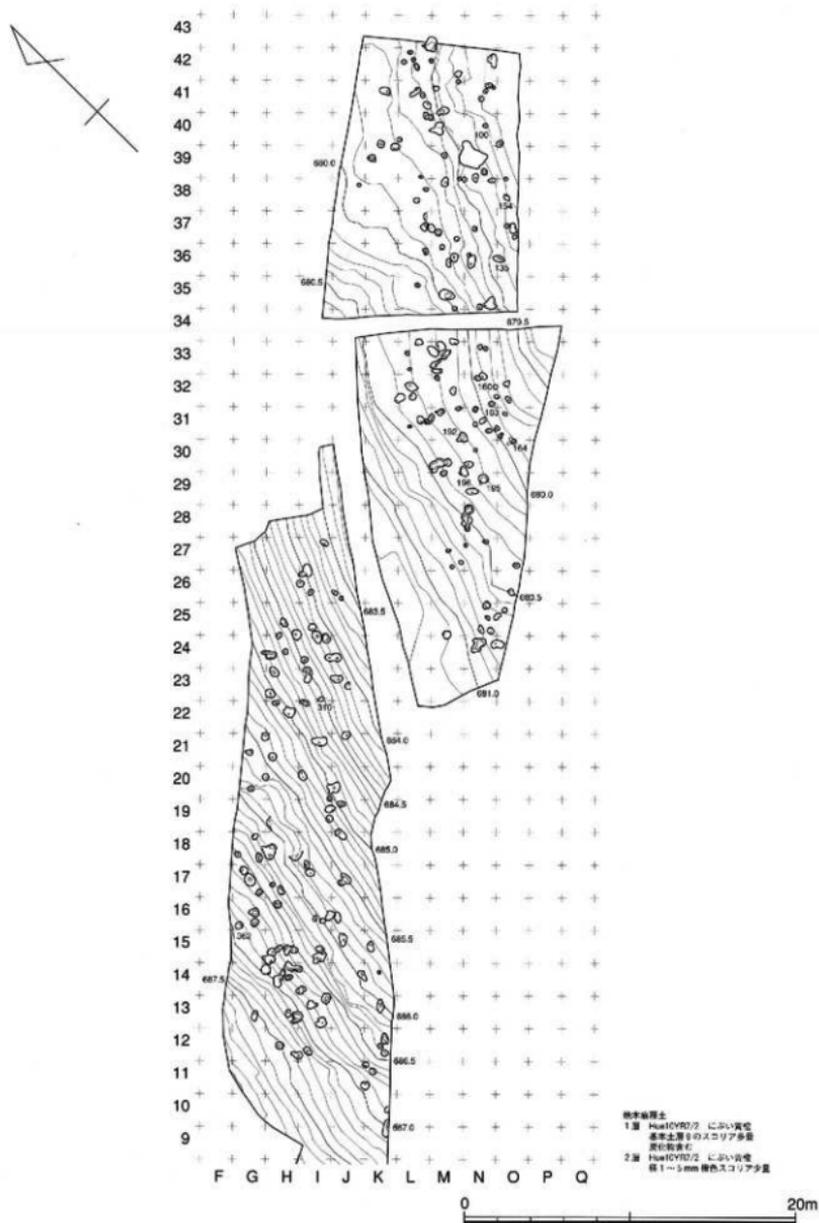
ここで、10層上面の土坑の共通点をまとめると、以下ようになるが、人為的な要素が非常に希薄である。

- ① 掘込み面は、基本土層8層のスコリア直下であり、1層はこのスコリアで充填される。
- ② 1層に多量の炭化物を含む。
- ③ 遺物を伴わない。
- ④ 形状が不定形で、底面に凹凸がある。
- ⑤ 分布に規則性がない。

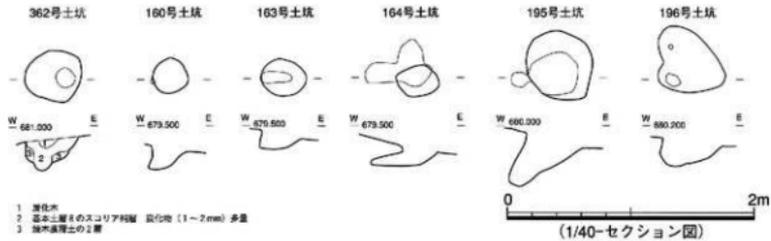
2 焼木痕

ここで、10層上面の上坑の形成過程について、1つの仮説を提示したい。その概要は、第72図のとおりであるが、これらの土坑は、基本土層8層を構成する富上山起源の火山灰により、樹木が焼失した結果形成された「焼木痕」と考えるものである。その論拠は、前述した共通点で示したとおり、全く人為性がないことと、上坑中にスコリアを充填するだけでなく、多くの炭化物を含むことである。特に、362号上坑（第71図）では、上坑中央部上層に樹木の幹とも考えられる直径約15cmの炭化物を確認することができた（口絵図版2-2・3）。そして、この362号上坑や他の土坑中の炭化物の同定を依頼したところ、樹木由来であると判明し、種別ではクリが多数を占め、一部にオニグルミも含むものであった（第6章第4節）。更にその年代であるが、炭化物2点の放射性炭素年代測定値を暦年校正した年代は、100号土坑の炭化物は2,891～2,760calBC、9層上面で検出し第74図で示したI-14-4炭化物集中は、2,878calBC～2,701calBCで、両者とも非常に近い年代を示した（第6章第3節）。この年代は、土器型式でいうと曾利Ⅰ～Ⅴ式に該当し、なかでも曾利Ⅱ式～曾利Ⅳ式の年代に近いようである（菅原2008）。また、基本土層8層についても、上杉陽氏に分析を依頼した結果、曾利式期の遺跡で確認されること多いS-5若しくはS-6との所見をいただいた（第6章第1節）。

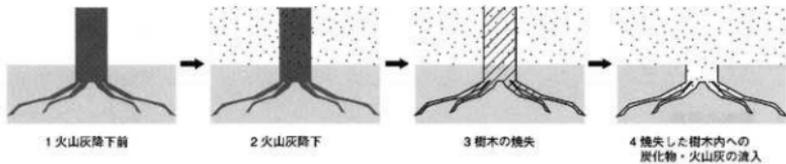
このように、炭化物と火山灰の分析結果は、その年代観において非常に整合性の高いものであり、炭化物が樹木起源であることや火山灰直下に土坑が形成されていた事実も考え合わせれば、火山灰降下に起因する森林火災により、これらの土坑が形成されたとの仮説は、今後の議論に耐えうるものと考えている。なお、樹木の多くが、縄文時代において重要な有用植物と認識されていたクリやオニグルミであることから、近隣に集落が形成されていた可能性が出てくるが、これらの樹木が生育していたころの縄文土器は全く出土していない。但し、半径1km以内に宮の前遺跡やト申丸遺跡など曾利式期の集落が存在することから、これらの集落の人々が、当地を、堅果類採集などの活動地の1つとしていたとも考えられる。



第70図 11層上面焼木痕分布図



第71図 焼木痕実測図



第72図 焼木痕形成過程

3 まとめ

最後に、S-5とS-6の他の遺跡での検出状況について確認したい。まず、都留市の久保地遺跡では、S-5とされる火山灰で埋まる曾利Ⅲ式期の竪穴住居跡が確認されている(奈良1984)。また、先述した宮の前遺跡についても、同じく火山灰で埋没する曾利Ⅳ式期の竪穴住居跡が確認されているが、その状況から、この火山灰もS-5かS-6の可能性が高い。これら各遺跡の火山灰と本遺跡の火山灰が同一噴火によるものであるか否かについては、今後の研究を待たなければならないが、火山灰の同定結果や炭化材の年代値から、本遺跡の焼木痕も、これら周辺の遺跡と同様に曾利Ⅲ~Ⅳ式期の富士山噴火により形成されたものと考えたい。なお、同時期の遺跡の消長については、第7章で改めて検討したい。

第5章 弥生時代・平安時代の遺構と遺物

第1節 弥生時代中期後半・後期

1 概要

基本土層7層上面で、90基の土坑を検出した。大きく4群に分かれるため、ここでは「十坑群」と呼称したい。

各土坑は、形状や深度の規格性に乏しいが、その分布には規則性がある。まず、1～3号土坑群は、バラつきはあるが、等高線に沿って分布するようにみえる。4号土坑群については、これらと対照的に、等高線に直交して分布する。また、十坑群の際に沿って、弥生時代中期後半～後期の土器が、6・7層中から出土するとともに、7層上面で、1号焼土跡も確認されている。ただ、この焼土跡中からは、遺物は確認されていない。

2 層序の矛盾

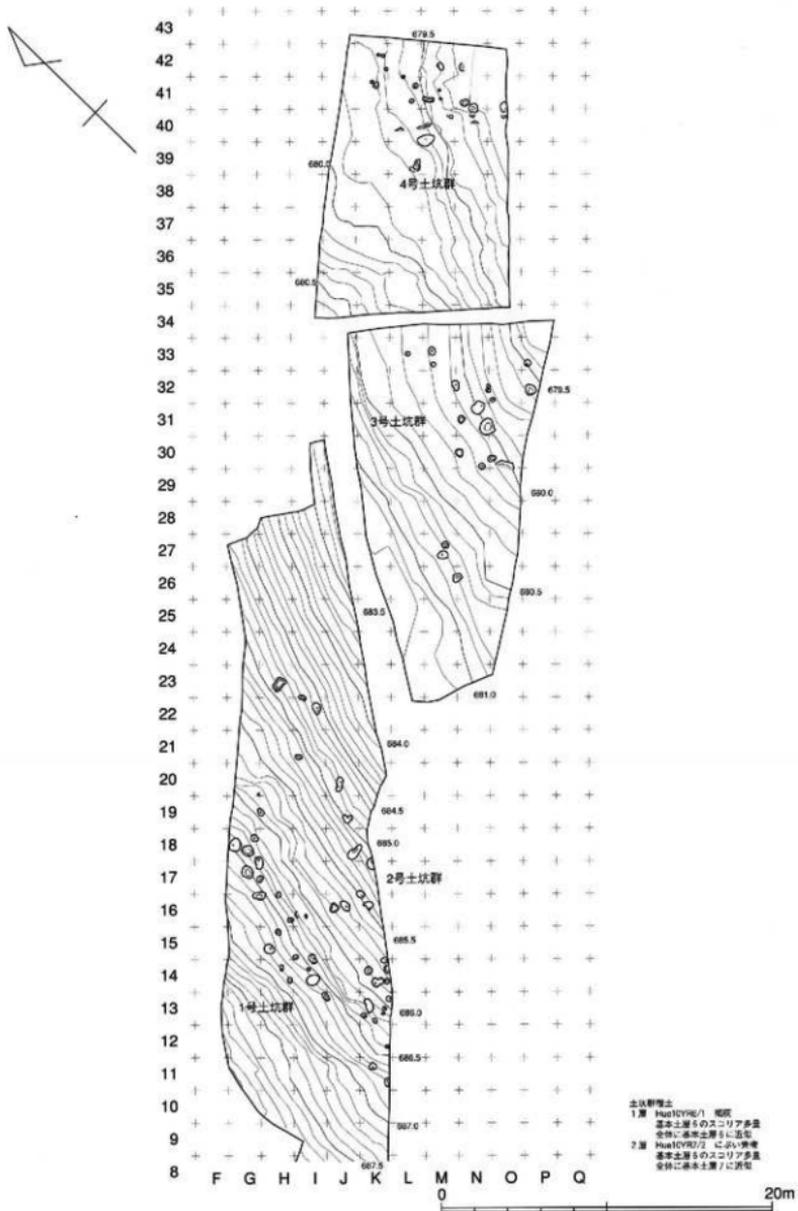
調査時から問題になっていたのが、これら土坑群の確認面の層位と火山灰層序との矛盾である。まず、確認面は7層上面で、掘込み面は6層上面であり、覆上は、第73図に示したとおりで、基本土層6層と7層に近似するものであった。そして、問題点は、基本土層5層下面において、縄文時代晩期に降下したとされる大室スコリア(S-12')が、上杉氏によって確認されていたことである。また、今回の上杉氏の論考によっても、同火山灰が大室スコリアと改めて同定され、発掘時の所見との矛盾が指摘されている(第6章第1節)。この層序の問題の解釈としては、以下の4点が考えられる。

- ① 十坑群は、縄文時代に形成されたものであり、同一層位から出土している弥生土器は、発掘時には認識できなかった上層から掘り込まれた遺構に伴うものか、全くの混入物である。
- ② 上杉氏も指摘するように、基本土層6～7層の火山灰を縄文時代後期～晩期のS-10～S-12'でなく、縄文時代晩期～弥生時代のS-18～S-22と考える。
- ③ 弥生時代に、畑地の造成等何らかの目的により、6・7層上面までの削平が行われたため、遺構や遺物も6・7層中に残されることになった。
- ④ 土坑群の覆土中に遺物は認められず、確認面中から弥生土器が出土しているのみであることから、これらの十坑群は、火山灰の浸食などにより自然形成されたものである。

3 まとめ

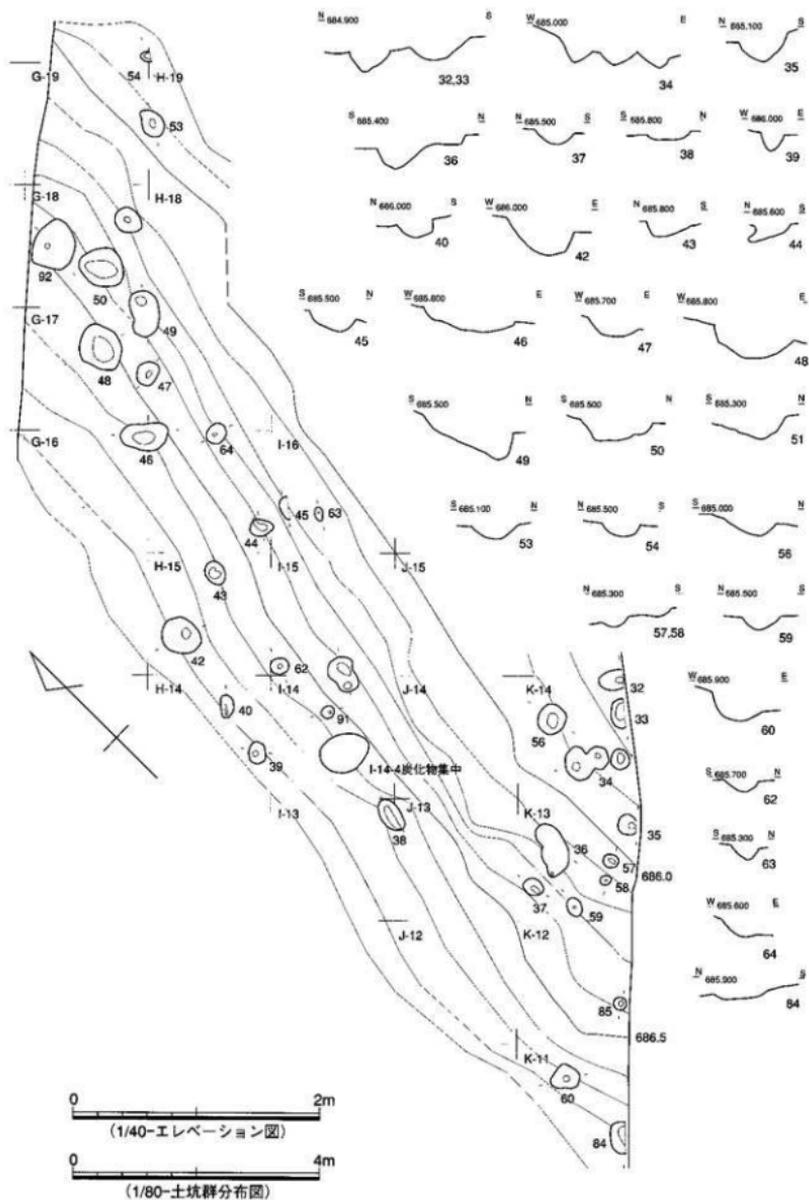
これら4つの仮説のうち、①については、弥生土器の出土状況が、第78図622・623のように混入と認められるものでなく、これら弥生土器の出土層位である6～7層から土坑が掘り込まれていることから、土坑が縄文時代のものであるとも考えにくい。②については、この考えをとった場合、他の遺跡の土層の解釈とどう整合させるかという問題がでてくる。

現実的な仮説は、③か④と考えるが、まず④については、土坑群の分布に規則性があることから、自然に形成されたものとは考えがたい。次に③であるが、第6図のセクション24-32でみられるように、斜面上方においては、表土直下が6層若しくは7層上面となっている場合が多い。ここでは、弥生時代に何らかの営力により、6～7層上面まで土層が削平され、その後土坑が形成された可能性を指摘したい。なお、十坑群の性格については、類例を集めておらず、今後の課題としたい。

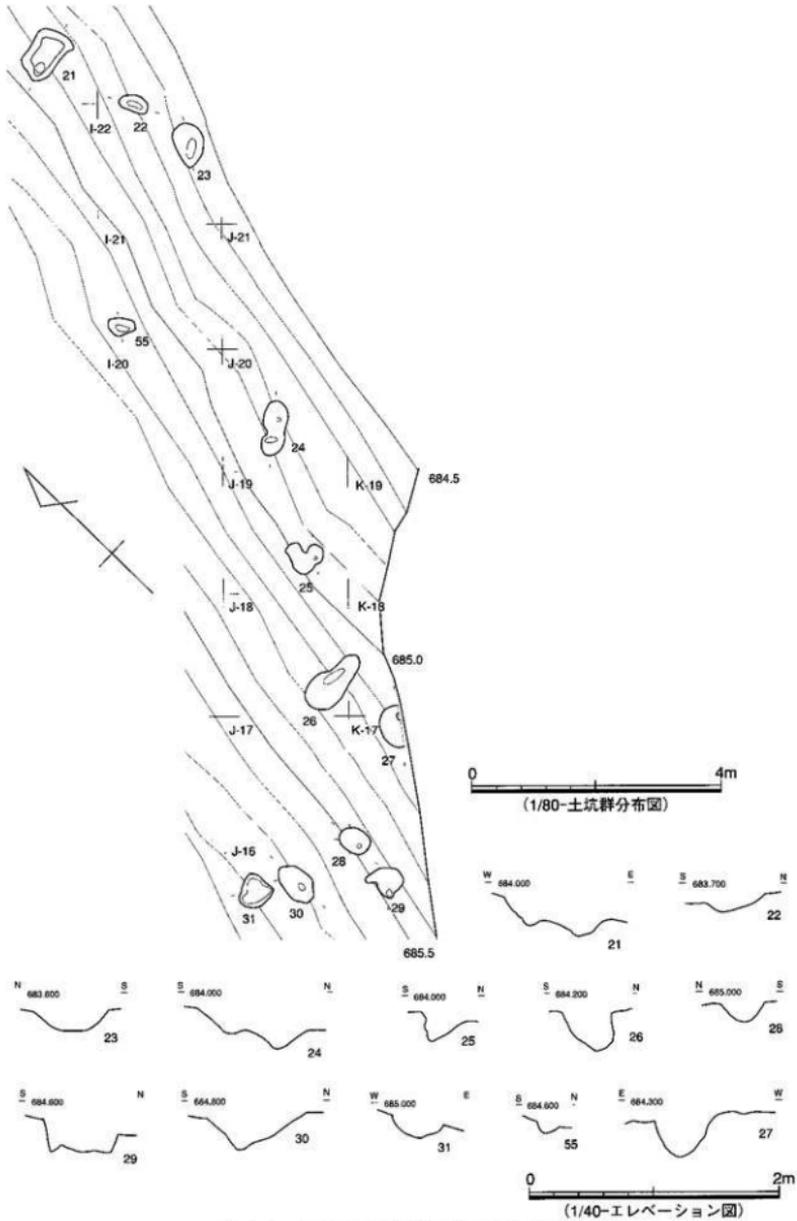


第73図 7層上面土坑群配置図

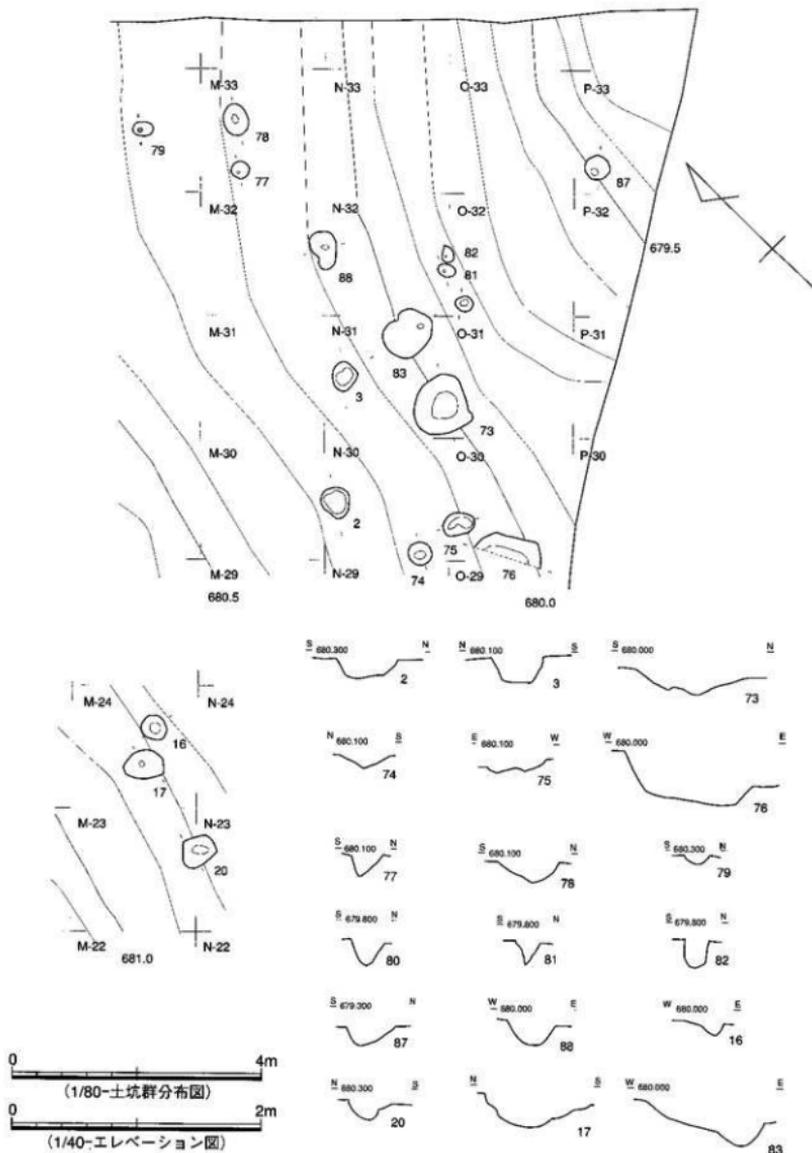
(1/300)



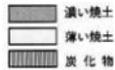
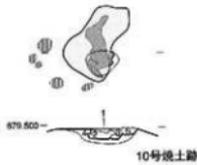
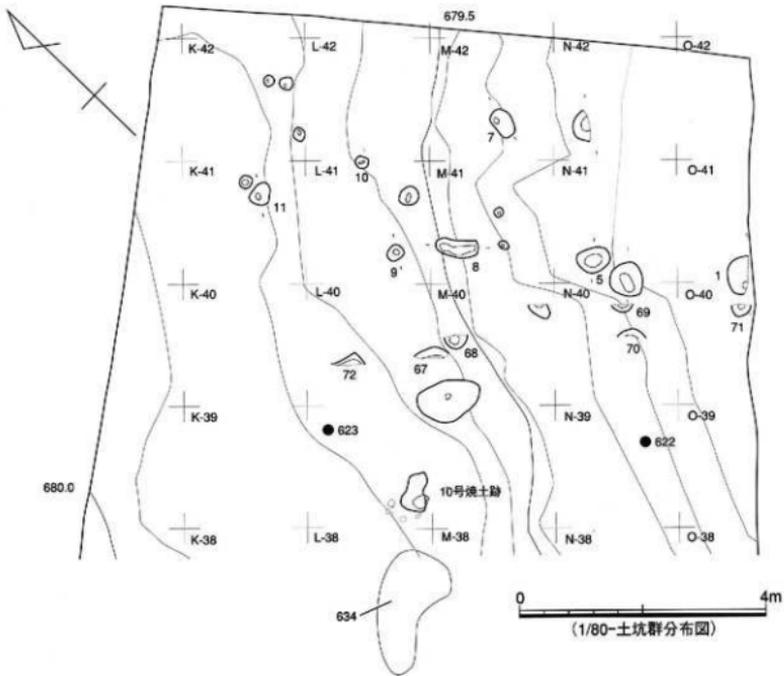
第74図 7層上面1号土坑群配置図(A区南西側)



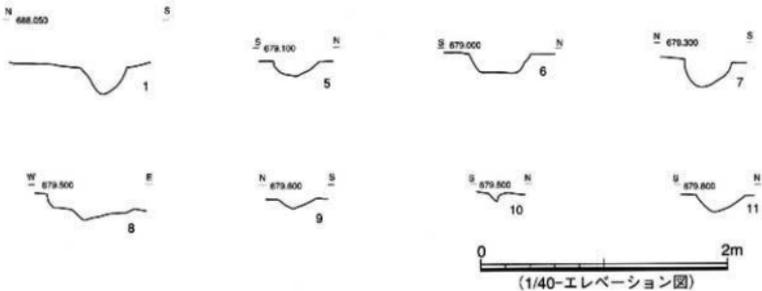
第75図 7層上面2号土坑群配置図(A区北東側)



第76図 7層上面3号土坑群配置図(B区南西部)



- 1 Hae10YR7/2 に近い黄褐色 焼土粒子中量 炭化物中量
- 2 Hae10YR7/2 に近い黄褐色 焼土粒子多量
- 3 Hae10YR7/2 黄褐色 炭土の層
- 4 炭土の層の層



第77図 7層上面4号土坑群配置図(B区北東部)

4 遺構外出土土器

第Ⅵ群 弥生時代中期後半～後期

1類 弥生時代中期後半（第78図622～630）

622は、小型の壺で、ほぼ全面に赤彩が施される。頸部と胴部屈曲部に逆三角形を連ねた鋸歯状の文様を施し、内部に横位沈線を充填しており、この部分のみ赤彩をしていない。胴部下半には、小さな突起を貼付け、横位に孔を2つ穿っているが、上側の孔は、天井部分の粘土が剥落している。この突起部分の赤彩は、底部の側面と同程度に剥落が進んでおり、使用時に頻繁に摩れる状況にあったことが分かる。剥落は、突起の根元側は少なく、孔周辺を含む突起頂部側で著しいため、紐状のものを結わえたと考えることもできる。また、底部が穿孔されているが、孔は内面から外面へ向けて広がっているため、内面側から打撃を加えて穿孔をしたことが分かる。なお、口縁部も欠落しているが、半周分遺存している頸部の剥離面をみると、外面側はやや下が剥離の起点となり、内面側はそれよりやや上が終点となる斜位の剥離面となっており、外面側から打撃を加えて割ったようにもみえる。残念ながら、近世以降の擾乱中からの出土であったが、他の類例を勘案すると、土坑墓や方形周溝墓の副葬品であった可能性もあるであろう。

623は、口縁部と底部を欠くが、頸部から胴部は完存しており、口縁部側と底部側の割れ目は、ほぼ水平に・巡りする。口縁部と底部が、発掘範囲内で出土していないことや、器の両端を輪切りにしたかのように割れていることから、意図的に打ち欠いた可能性が高い。口縁部側は判然としなが、底部側は、622と同じく、斜位の剥離面となっており、やはり外面側から打撃を加えたようにみえる。また、出土時には、中に土が詰まっていたことからほぼ形状を保っており、横位の状態ではあったが、傾きもほぼ水平であった。このように、意図的に安置したような出土状態であったことから、遺構は検出できなかったが、622と同じく副葬品の可能性もあるであろう。文様は、頸部に、5本1単位の鋸歯状工具を等間隔に押し引くことで、1条の縷状文を横位に巡らせ、胴部にもやはり5本1単位の鋸歯状工具を用いて、縦位の羽状文を施している。工具幅が一致することから、同一工具であろう。内面は、丁寧に横位のミガキを施している。なお、外面には、頸部から胴部上半にかけて多量の炭化物が付着して、器面も黒化し、胴部下半も赤化しているため、調理等に用いたと考えられる。なお、この炭化物により放射線炭素年代測定を実施しており、詳しくは第6章第3節のとおりである。

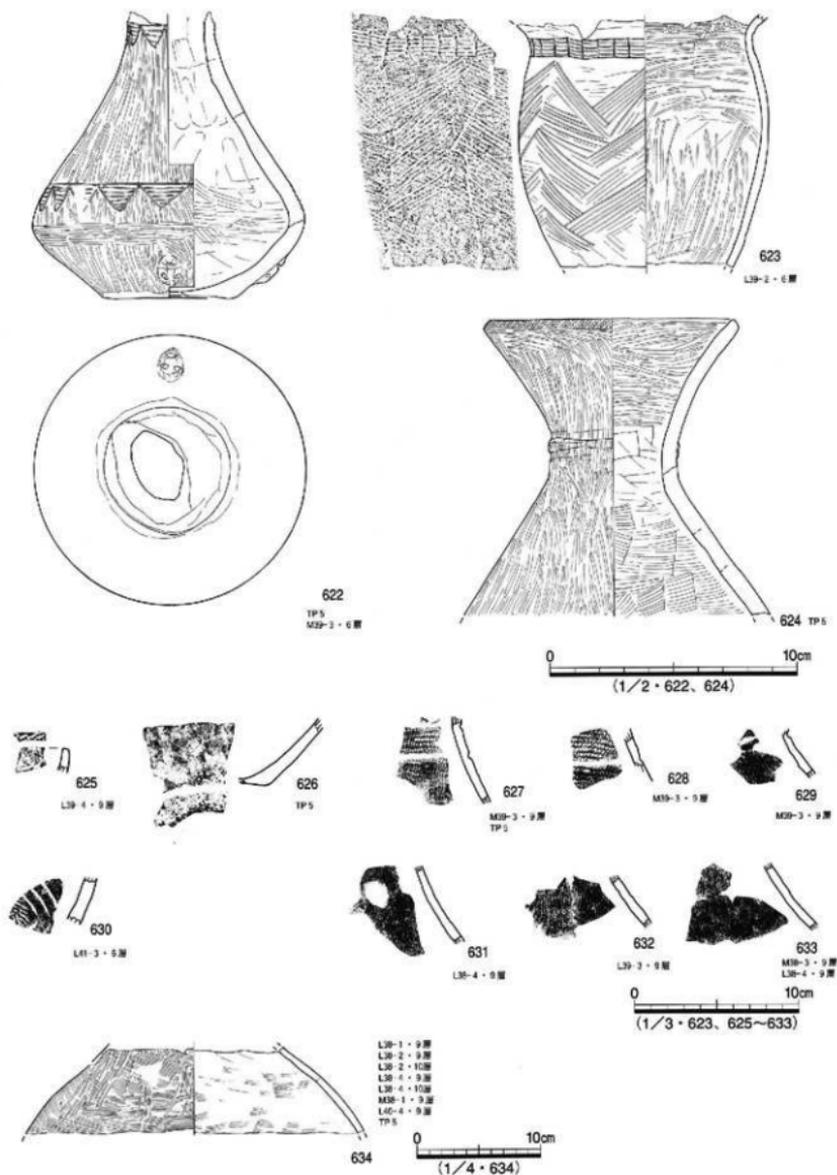
624は、壺の口縁部から頸部である。外面は全向に、内面は口唇から頸部の屈曲部までに赤彩を施している。口端には、縄文を施し、頸部屈曲部には、少し幅をおいて2条の沈線を巡らせることで、その間を隆起させ、隆帯とする。隆帯上の文様の有無は、風化が著しいため不明である。赤彩後に外面には、口唇部に横位のミガキ、口縁部に縦位のミガキ、内面の頸部屈曲部より上には横位のミガキを施し、赤彩をしていない内面の頸部屈曲部より下については、横位のハケ調整をおこなっている。

625は口唇部で、内外面を赤彩し、口端には縄文を巡らせる。胎土や厚みが異なるため、622とは別個体と考えられる。626は底部で、同様に赤彩を施してあり、胎土は624と近似する。ただ、内外面に赤彩が施してあり、内面の頸部屈曲部以下に赤彩を施さない624とは様相が異なる。627～629は同一個体で、いずれも頸部である。縄文を施し、横位の沈線を2条巡らせ、沈線より下は縦位のハケ調整とする。630は、胴部破片で、3条の平行沈線を引き、内部に縄文を施すものである。

これらの時期であるが、622・623は、栗林2式と考えられ、624～629も同じ頃であろう。

2類 弥生時代後期（第78図631～634）

壺が1個体のみ出土している。631～634で、631～633は胴部上半から頸部にかけての破片で、634は胴部上半である。頸部側には縦位のハケ調整、胴部側には横位のハケ調整を施す。内面は剥離が著しいが、横位のハケ調整をおこなっている。



第78図 遺構外出土土器 第IV群1・2類 (1類-622~630、2類-631~634)

第2節 平安時代

1 概要

基本土層5層上面において、竪穴住居跡3軒を検出した。なお、2号竪穴住居跡については、試掘の際に削平してしまったため、カマドとその周辺しか調査できなかった。

いずれの竪穴住居跡も遺物は少なく、2号竪穴住居跡から甕の胴部～底部破片が2点、3号竪穴住居跡から坏の口縁部破片2点が出土したのみである。なお、1号竪穴住居跡からは、弥生時代中期後半～後期の上器が床面から出土し、弥生時代の竪穴住居跡である可能性も考慮したが、遺構確認面が2・3号竪穴住居跡と同一であり、形状も弥生時代中期～後期特有の隅丸長方形や小判形でなく、平安時代に多い方形とみられるため、平安時代の竪穴住居跡と判断した。

なお、1・3号竪穴住居跡については、床とカマドの土を全て回収し、浮遊選別法により炭化物を抽出し、その分析を委託した。詳細は、第6章第4節のとおりだが、アワ（近似種）を主体に、イネ、ムギ類、キビ、マメ類を多数確認している。ただ、2号竪穴住居跡床土9（9-3）のイネ胚乳（No.22）と4号竪穴住居跡カマドのオオムギ胚乳（No.89）の放射性炭素年代測定をしたところ、No.22はMod-ern、No.89は 170 ± 20 yrBPという非常に新しい年代値がでた（第6章第3節）。そのため、全てではないにせよ、その多くに後世の混入の可能性がある、調査地が畑地であることがその一因になっていると考えられる。このように、検出された炭化種実が、竪穴住居跡に確実に伴うものと判断できないため、平安時代まで遡る年代値が他資料で測定されるまでは、その評価を保留したい。

2 竪穴住居跡

2号竪穴住居跡（第80図）

位置：B区北東部（N-41、42・O-41、42グリッド）

確認面：基本土層5層上面

形状：方形

規模：東西3.4m・南北2.9m（調査部分のみ）・深さ30cm

床：基本土層6、7層を床面とする。硬化の度合は、第80図のとおりだが、特に東側の硬化が著しい。カマド・炉：床5で径3～5cmの焼土を確認したのみで、カマド及び炉はない。東側の未調査地にある可能性が高い。

柱穴：明確な柱穴は検出できなかった。7基のピットがあるが、いずれも浅く、深さ10cm前後しかない。

出土遺物（第82図）：平安時代の遺物はないが、弥生土器と考えられる1・2が床面から出土している。1は、口縁部が外反し、内外面ともに丁寧にミガキが施される。2は、平行沈線が施したのち、縄文を充填するもので、内面は丁寧に磨かれる。両者とも弥生時代中期後半～後期と考えられる。

時期：概要で述べたとおり平安時代であるが、詳細な時期は不明である。

3号竪穴住居跡（第80図）

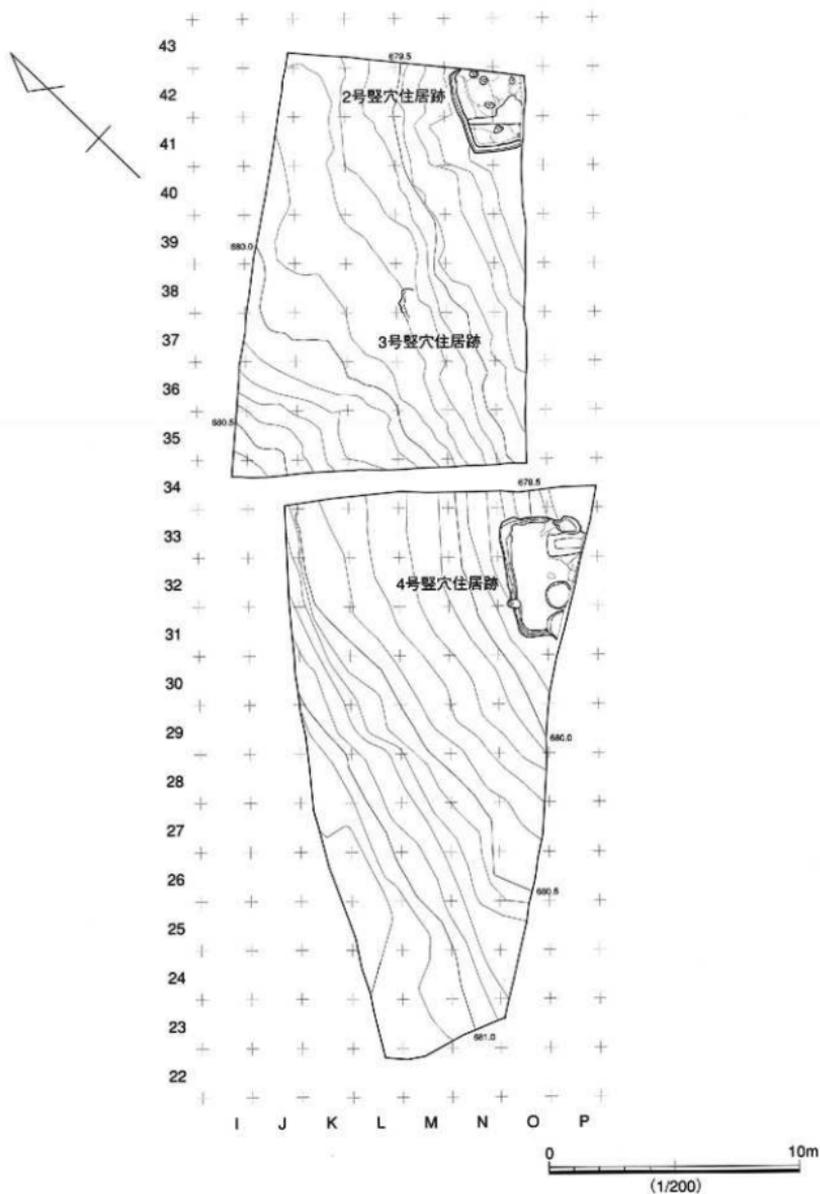
位置：B区北東部（M-37・M-38グリッド）

確認面：基本土層5層上面

形状：方形（未調査部分多いため、詳細は不明）

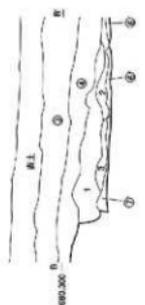
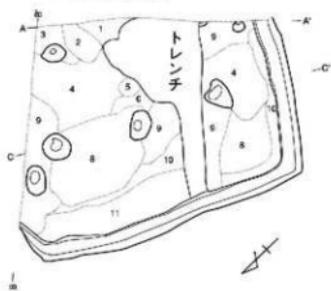
規模：南北2.9m、東西1.2m、深さ30cm（調査部分のみ）

床：削平が及んでいたため、明確な床面は確認できなかった。

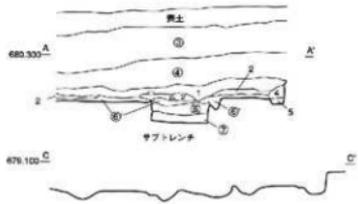


第79図 平安時代遺構配置圖

2号竪穴住居跡

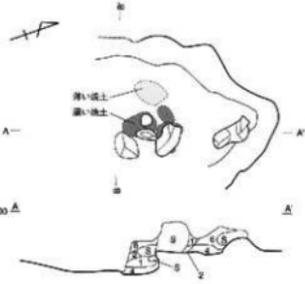


- 床1 著しく硬化
- 床2 著しく硬化 径100mmの黄褐色土多く含む
- 床3 やや硬化
- 床4 ごく強く硬化
- 床5 ごく強く硬化 径30~50mmの褐色土含む
- 床6 ごく強く硬化 径30~50mmの黄褐色土含む
- 床7 やや硬化
- 床8 強く硬化
- 床9 強く硬化
- 床10 普通
- 床11 強く硬化

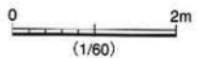


- 1 Hue10YR7/2 にふい黄褐色 しまり強い 基本土層4多い
- 2 Hue10YR7/2 にふい黄褐色 しまりやや弱い 黄褐色土中量
- 3 Hue10YR7/2 にふい黄褐色 しまりやや弱い 径5mmの黒色スコリア少量
- 4 Hue10YR6/1 褐灰 しまり普通 径5mmの褐色スコリア少量
- 5 Hue10YR6/1 褐灰 しまり強い 径5mmの褐色スコリア少量
- 6/7 基本土層6が硬化
- 7/ 基本土層7が硬化

3号竪穴住居跡



- 1 Hue 5 YR7/8 橙 焼土純量
- 2 Hue7.5YR7/6 橙 焼土ごく多い
- 3 Hue7.5YR7/3 にふい橙 焼土多い
- 4 Hue10YR5/1 褐灰
- 5 Hue10YR7/3 にふい黄褐色 径1~3mmの褐色スコリア少量
- 6 Hue10YR7/2 にふい黄褐色 焼土中量・径5~20mmの炭化物中量



第80図 2・3号竪穴住居跡実測図

カマド・炉：富士山の溶岩を構築材とするカマドを1基検出する。削平が及んでいたため、形状や軸線は不明な点が多いが、カマドの構築材や焼土の分布から、北西-南東方向がカマドの主軸になり、竪穴住居跡の北西壁に位置すると考えられる。

柱穴：なし

出土遺物（第82図）：カマド内から2が、カマド周辺から1が出上した。いずれも平安時代の甲斐型甕で、2は胴下半～底部で、外面は縦方向の、内面は横方向のハケ調整を施し、底部には木葉痕がある。1は、胴部破片で、特徴は2と同じである。

時期：甕の胴部～底部破片のみのため、詳細な時期は不明だが、甲斐型甕が成立する山梨県史編年Ⅲ期（8世紀後半）以降と考えられる。

4号竪穴住居跡（第81図）

概要：2軒の竪穴住居跡が重複している。最初に4号竪穴住居跡（旧）を構築した後、その拡張を兼ねて4号竪穴住居跡（新）を構築したと考えられる。

位置：B区南西部（O-31～33・P-31～33グリッド）

重複関係：4号竪穴住居跡（旧）→4号竪穴住居跡（新）

確認面：基本土層5層上面

形状：方形

規模：4号竪穴住居跡（旧）-南北4.0m、東西2.8m（調査部分のみ）、深さ35cm

4号竪穴住居跡（新）-南北4.9m、東西3.4m（調査部分のみ）、深さ35cm

床：基本土層6～8層を床面とする。硬化の度合は第81図のとおりだが、旧・新ともに住居中央部分の硬化が著しい。

カマド・炉：

4号竪穴住居跡（旧）-地床炉1基

4号竪穴住居跡（新）-カマド1基を検出。ただ、当初、単独の焼土跡として調査を進めていたため、カマドとしての調査をおこなえなかった。カマド上で大型の溶岩が1点検出されたため、溶岩を構築材としたものと考えられる。また、床8・9は、ローム層由来の黄褐色土・焼土・炭化物を多く含み、カマドの構築材や廃土と考えられる。

柱穴：

4号竪穴住居跡（旧）-P1（深さ19cm）、P2（深さ22cm）、P3（44cm）が柱穴の可能性ある。

4号竪穴住居跡（新）-床面にはなく、壕溝内のP1（深さ90cm）、P2（深さ15cm）があるのみである。

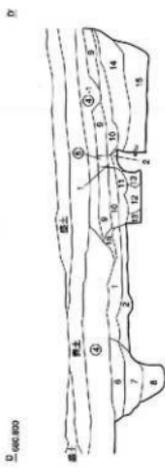
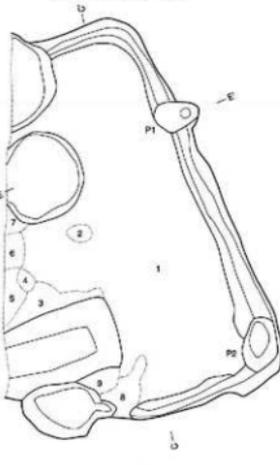
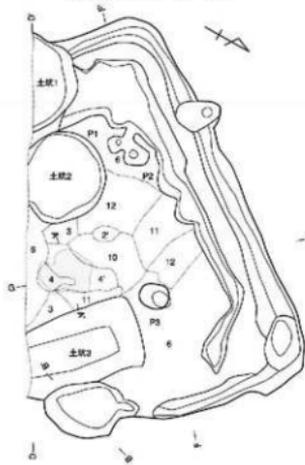
その他の遺構：土坑1～3を検出する。いずれも竪穴住居跡廃絶後に構築されたものであるが、確認面が基本土層5層上面で、覆土も竪穴住居跡と類似することから、極めて近い時期に構築されたものと考えられる。

出土遺物（第82図）：カマド内から坏の口縁部破片2点が出上したが、1点は小片のため、図化しなかった。いずれも口縁部が外反し、暗文はない。2は、矢羽根状に沈線を施すもので、弥生時代中期後半と考えられる。覆土下層から出土したが、混入であろう。

時期：出土遺物は、その特徴から山梨県史編年Ⅴ期（9世紀後半）～Ⅵ期（10世紀前半）と考えられるため、本住居も同時期と考えられる。

4号竪穴住居跡(旧・新)

4号竪穴住居跡(新)



カマド

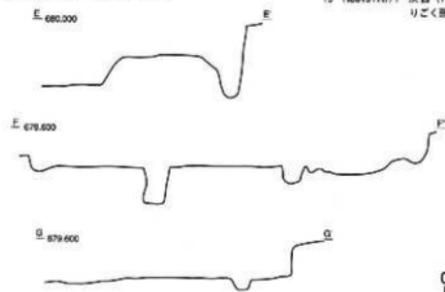
678.400 A 683.000 C



- 1 Hue12YR7/6 煙 赤土焼層 灰溜り層
- 2 Hue2.5YR7/6 煙 赤土焼層
- 3 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 焼土層下なし



- 1 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 焼土多量
- 2 Hue2.5YR7/5 煙 径10~30mmの炭土ブロック含む
- 3 Hue12YR8/1 灰緑 径5~10mmの褐色スコリア中量
- 4 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 焼土多量
- 5 Hue12YR8/5 黄褐色 灰・焼土含む
- 6 Hue12YR8/5 黄褐色 炭化物少量
- 7 Hue2.5YR7/6 煙 赤土焼層 径100mmの灰ブロック多量
- 8 Hue12YR5/1 桃灰 焼土少量



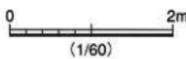
- 1 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 しまりやや強い
- 2 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 1層よりしまり強い
- 3 Hue12YR7/3 にぶい黄褐色 しまり弱い
- 4 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 しまりごく弱い
- 5 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 しまり弱い・2層と感似
- 6 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 しまりやや弱い
- 7 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 しまり弱い
- 8 Hue12YR7/3 にぶい黄褐色 しまりやや弱い
- 9 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 (5層より強い) しまりやや弱い
- 10 Hue12YR7/2 にぶい黄褐色 (5層より強い) しまりやや弱い
- 11 Hue12YR7/1 灰白 しまり弱い
- 12 Hue12YR7/1 灰白 (11層より強い) しまり弱い
- 13 Hue12YR7/1 灰白 (11層より強い) しまりごく強い

床(新)

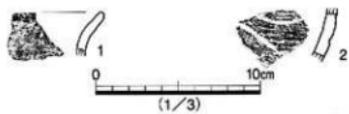
- 床1 強く硬化
- 床2 強く硬化 炭化物中量
- 床3 ごく強く硬化 黄褐色土多量
- 床4 強く硬化 焼土多量 1~5mmの炭化物中量
- 床5 弱く硬化 黄褐色土少量
- 床6 強く硬化 黄褐色土多量
- 床7 ごく強く硬化
- 床8 ごく強く硬化 黄褐色土ごく多量 径1~5mmの炭化物多量
- 床9 弱く硬化 黄褐色土多量 赤土中量

床(旧)

- 床2' 強く硬化 径5~10mmの炭化物中量
- 床3' 強く硬化
- 床4' 強く硬化 焼土中量 1~5mmの炭化物中量
- 床6' ごく強く硬化
- 床10' ごく弱く硬化 径10~30mmの炭褐色ブロック含む 1~5mmの炭化物中量
- 床11' 弱く硬化 径10~30mmの黄褐色ブロック含む 1~5mmの炭化物中量
- 床12' 弱く硬化 1~5mmの炭化物中量



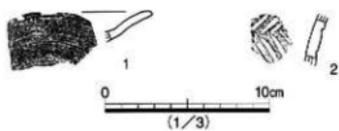
第81図 4号竪穴住居跡実測図



【2号壑穴住居跡】



【3号壑穴住居跡】



【4号壑穴住居跡】

第82図 2～4号壑穴住居跡出土遺物

第6章 自然科学分析

第1節 富士吉田市上暮地新屋敷遺跡の降下火山砕屑物層序(その1)

上杉 陽 (都留文科大学)

はじめに

2008年5月26日に本遺跡南西側トレンチにおいて、同年12月22日には北東側トレンチにおいて、各上層と模式地の富士系降下火山砕屑物層(以下、テフラ層と略)との対比を試みた。巻頭図版2-1は北東側トレンチ(北緯35°30'55.2"・東経138°49'42.5"・高度690m)の写真柱状図である。地層番号、推定標準テフラ層番号が記入されている。第13表は富士系の模式的なテフラ層と本遺跡の各テフラ土層との対比表(試案)である。左側1~9列は、晩氷期以降(縄文時代草創期以降?)の富士系標準テフラ層番号やその降下期等をまとめて表示したものである。10列目は本遺跡北東側トレンチの地層番号(テフラ土層番号)、11列目は篠原武氏の本遺跡全体の考古学的土層番号、12列目は同じく本遺跡全体の各層に包含される主要な遺物遺構である。1~9列目と10~12列目は、正確には対比できない。

本遺跡は御坂山地東縁山地斜面下の崖傾斜上にあるため、ルーズな富士系テフラは、もともと重力の作用で堆積後も斜面下方に移動しやすい。さらに本地点が桂川断層(上杉1999)直近に位置するため、地震時の層面沁りや地割れによる移動も起こりやすい。根茎による上下への擾乱や冬季の凍結擾乱による上下方向・水平方向への移動も激しく、地層上面まで消えている場合は、層位区分も明確にはできない。便宜的な区分になってしまう。今後、実体顕微鏡~偏光顕微鏡による観察段階での特徴記載を付加すれば、より正確な対比ができる可能性がある。以下、1で本遺跡の地学的な立地環境を、2で各層の主たる火山灰層序学的な諸特徴を記載する。

1 本遺跡の地学的立地環境

(1) 日当たりが良く、風が穏やか

本遺跡は甲府盆地と桂川渓谷を区切る御坂山地南東部を構成する三ツ峠山地東縁の日当たりが良い崖傾斜面上に立地する。三ツ峠山地は御坂山地第二の高峰であり、かつ、切れ目が少ないので、諏訪湖方面から釜無川を吹き下る冬季の北西季節風が直接に本遺跡を襲えることはない。そのうえ、本遺跡の南東方には角閃石安山岩体で構成される小山地が張り出しているため、南東方に位置する日本一の高峰富士山から冬季に吹き下る寒気が本遺跡を直撃することもない。夏季には富士山が暖まり、上昇気流を起こして、日本一の大平野である関東平野に溜まった暖気塊が桂川を通じて、吸い上げられる。そのため、本遺跡は寒冷な時期でも、相対的に生活環境が良かった。

(2) 溶岩流流下のために、多数の湖沼~湿地が誕生し、生物環境が多彩豊富となった。

縄文早期前半に当たる概略8500年前には桂川渓谷を猿橋溶岩が大月市藤崎まで流れ下った。当時の桂川本流の位置が桂川渓谷内の南東側(丹沢山地側)に偏っていたため、北西御坂山地側に位置する本遺跡は、この大規模な溶岩流の直接の襲撃を受けることがなかった。猿橋溶岩流下に伴い、御坂山地側からの支流諸河川も南側の丹沢山地側支流諸河川も、本流との合流点に猿橋溶岩裂の天然のダムがあるため、排水できず、一時的に多数の堰止湖が形成された。このため、本遺跡を含む桂川渓谷地域は山の幸ばかりではなく、湖や湿地の幸にも恵まれた生産性の高い地域となっていたと思われる。

概略8000～8500年前に富士山から流下した柱岩岩は都留市田原の滝一帯まで流下した。この溶岩流は、柱川本流が猿橋溶岩で埋め尽くされていたため、その後には猿橋溶岩の西側に発生していた新柱川筋を埋めて流下した。つまり、本遺跡側を流下したので、御坂山地側の諸支流（数見川、翁沢川、殿入川、杓子川など）は、排出地点（本流との合流点）に溶岩ダムが形成されていたために、再び、湖沼や湿地が発生した。こうして、再び、豊かな生物環境が保証される地点となった。以上のように、本遺跡は縄文早期から弥生時代にかけての長期間、他地域に比して、生活環境・生産環境に恵まれた。

概略1700年前の古墳時代初期には、檜丸尾第一溶岩流が柱岩のさらに西側を、即ち、本遺跡直近南側を流下する事態となり、人々は一時的に退去していた可能性がある。しかし、この檜丸尾第一溶岩の流下により、再び、諸支流の出口には湖沼～湿地が発生し、また、生物環境が豊かとなったため、本遺跡は奈良平安期には復活した。この頃には湿地での稲作が可能となっていた可能性がある。

2 各層の火山灰層序学的な諸特徴

(1) 模式地のテフラ層と本遺跡のテフラ土層との違いについて

本遺跡の各土層の構成物質は大半が富士系テフラである。一部に溶岩塊や背後の山地からの基盤岩（緑色凝灰岩）を含んでいる。富士山から降下堆積し、そのまま地層として固定した一次堆積のテフラ群で構成され、その表層部あるいは上半部が風化帯や土壌帯となっていれば、現場でテフラ層本体も地層の上面も容易に認定できる。しかしながら、本遺跡は平坦面上にあるのではなく、背後に山地急斜面を持つ崖線性緩斜面上にあるため、ほとんど全ての時期において、各テフラ粒子が斜面下方に移動を繰り返している。そのため、一次堆積テフラ粒子や一次堆積遺物と二次・三次堆積のテフラ粒子や遺物が混在しやすい。たとえ、斜面の安定期（風化帯や土壌帯ができやすい時期）を示すテフラ層の上面を識別できたとしても、テフラ粒子・遺物は様々な時期のものであるから、テフラ粒子中の一次堆積粒子を特定できない限りは、あるテフラ土層（ある考古学土層）の最初のあるいは本来の年代を特定できない。風化帯や土壌帯の諸特徴から、概略の末期年代を推察することはできるが、正確には決まらない。まして、人為的な削削～住居址等遺構の掘り込み、地震動による層面滑り～地割れ落ち込み～地下物質の地表への吹き出し、冬季の凍結擾乱や根害による擾乱により上層上面（風化帯～土壌帯上面）が破壊削削された場合は、本来のテフラ層の認定はほとんど不可能である。暫定的に設定された「テフラ上層」に包含される遺物もテフラ粒子同様に上下方向～水平方向に移動しているのであるから、様々な時期のものが混在してしまう。

以下に示す本遺跡の北東側のトレンチ断面での「テフラ上層（地層番号0～21）」は、風化帯～土壌帯が残存する部分をつなぎ合わせて地層区分をし、主として粗粒テフラ粒子中の一次堆積と肉眼で判定したものを中心に、模式地のテフラ層との対比を行ったものである。本遺跡全体の考古学的な基本土層を見渡したうえで、トレンチ設定ではないので、他の地点ではあるはずのテフラ土層が、このトレンチでは消失しているというケースも現実確認されている。

なお、あるテフラ層中の他火山起源の細粒火山灰粒子（たとえば、数分の1ミリ程度の火山ガラス片など）は、上下方向にも水平方向にも広範囲に拡散してしまうので、テフラ土層の認定には付随的にしか寄与できない。いわゆる広域テフラのみに頼った編年は広域テフラの純層が残っている場合はともかく、一般にはローカルな細かい層区分やローカルな対比（例えば、富士系テフラ層間の対比）には、あまり有効ではない。ローカルな層区分や対比は、あくまでも、移動が少ない近隣火山の粗粒一次堆積テフラ粒子による層位認定が原則である。

以下、各テフラ上層について、上位より、主たる特徴と問題点を記載する。なお、標準テフラ層の概略の諸特徴は表1を、ガラスの形態分類などの詳しい記載は上杉編著（2003）を参照していただきたい。

(2) 本遺跡各テフラ土層の諸特徴

1) 第0層

トレンチ断面山側で層厚10cm。乾燥してばさばさの褐灰色土層で、草根が多く、ビニール片を含む。戦後の耕作上と思われる。

2) 第1層

層厚10～20cm。ほろほろ～ばさばさした締まりがない淡褐色土層で、草根が多い。最上部は踏み固められた表土である。粗粒テフラとしては、溶岩片（直径15mm前後）や気孔が少なく厚皮膜のスコリア片が多いが、一次堆積と思われる確実な粗粒テフラはない。

3) 第2層

層厚40～50cm。表面はややしまりのある褐色腐植質土壌帯で、内部はばさばさで締まりが弱い。上下2層に分かれ、上部は褐色腐植土であり、微細気孔厚皮膜スコリア（20～10mm）を多数含む。これらの一部は、富士の北側山体内で、「ボール球スコリア」と仮称されてきた最新期のスコリアに類似する。下半部は全体として泥っぽく、特にその最上部は泥質である。最下部にやや円磨された河原から採集したと思われる御坂山地起原の緑色凝灰岩礫（最大径30cm、並みの粒径7cm）や溶岩角礫を多数含む。これらの一部は遺物であると思われるが、本層下半部全体が泥っぽいので、場合によっては、この層は、泥流堆積物～粉塵堆積物起源である可能性もある。今後の検討課題である。

4) 第3層

層厚15cm前後。上位層ほどではないが、依然として、ほろほろとしまりが弱い土層であり、粗粒物が少ない。粒径10～5mmの黒灰色～黒褐色の脆いスコリアが目立つ。最下部に炭化木片が多い。

5) 第4層

層厚40cm。褐色腐植質でやや湿り気～粘り気があるが、依然として、まだまだ、ばさばさ粗鬆である。かろうじて4層に区分可能で、最上部には青灰色の溶岩片（13mm前後）がある。最下部層にある赤褐色の大気孔のある硬い大粒スコリア（最大粒径3cm）は、湯船第2スコリア層（テフラ番号S-22）であろう。下面に炭化した茎が多い。この下面が奈良平安期の遺構の確認面となる。

6) 第5層

層厚15～10cm。やや赤みがあるばさばさの褐色土で、赤褐色～青黒色のスコリア片やスパター片（溶岩滴片）が目立つ。本層は富士山体内で、ほぼ連続する20層前後の相対的に赤みが強い山頂火口からの一連のテフラ群（S-15～21層）に相当する。この時期のテフラ層中からは確実な土器は発見されていない。従来は縄文晩期のテフラ層と想定されてきたが、弥生時代最初期とするべきかもしれない。

7) 第6層

層厚20cm。暗褐色腐植が増して粘り気が強くなるが、粗粒スコリアが多いために、層全体としてはほろほろと崩れやすい。本遺跡内の他地点では本層最上部にS-12'期（大室スコリア層期）が残存するが、本トレンチでは、削剥されて存在しない。本層中には気孔が多くて脆い黄褐色スコリア粒（粒径10mm前後）と気孔が小さく少ない硬いやちョコレート色の丸みのあるスコリア粒（粒径10mm前後）が混在している。本層は湯船第1スコリアの上部を構成するS-11番テフラの中上部に多い軽いスコリア群（忍野スコリア）と一般に微細気孔が多く重いS-11～12期スコリア群（その一部は富士山西麓方面で大沢スコリアと呼ばれている）であると判断した。なお、篠原武氏は、本層を本遺跡の弥生時代中期後半から後期にかけての土器包含層に対比している。この場合は、本層はS-22層（湯船第2スコリア層）でなければならない。

8) 第7層

層厚10～8cm。黒味の強い暗褐色腐植土層で、特に上半部に閉局面で囲まれた破片状の岩片（粒径

20mm前後)が含まれる。全体に、ほとんど気孔がないとも思える微細気孔で構成される閉鎖性強い黒紫色スコリア（粒径10-15mm前後）が多数含まれる。本層は湯船第1スコリア層の下半部を構成するS-10番テフラ層と思われる。なお、篠原氏は本層も弥生時代中期後半から後期にかけての土器の包含層に対比している。この場合は、本層はS-22層（湯船第2スコリア層）直下のS-18～21層でなければならない。もし、第6層から7層がS-10～12層ならば、本層中からは南方天城火山カワゴ平火口からの多量の長柱状気孔に富む透明ガラス（pPtc型ガラス片）を多数含むこととなる。今後の課題である。

なお、pとはピンク色のガラス、Pとは屈折率が1.54以下の安山岩質～デイサイト質～流紋岩質のガラス、Tとは多孔質ガラス、cとは長柱状気孔を意味している。Hは気泡が少ないガラス、CはTとHとの中間のある程度の気孔がプレバート上で確認できるガラスである。

9) 第8層

層厚5～8cm。上位層に比してやや締まりがきつくなる暗褐色腐植土層で、黒褐色スコリア（5mm前後）、黒色～黒青色の大きな岩片（最大径15mm、並みの粒径は5mm前後）を含む。

10) 第9層

第8層下底ないしは中部下底で多少切られている箇所がある。層厚は10cm。最上部に僅かに黒色腐植土が着くことがあるが、多くの地点では、上位層に切られていて、上面風化帯～土壌帯がない。本層の上部はスコリアの純層であり、下半は最大径5～3cmの牛糞状で薄い皮膜を持つ赤褐色スコリアである。気孔は球形で大きく、気孔内壁は赤褐色に二次的に溶融している。上半は牛糞状～多角形状のやはり気孔が大きい赤褐色スコリアで、最大径は5～2cmである。最上部はやや細粒化し、並みの粒径が5～1mmとなる。本層は上下関係からも、スコリア純層の諸特徴からも、模式地の縄文中期指標層であるS-5もしくはS-6であるが、本来は二枚組セットで発見されるべきものが一枚しか確認できないのは、第8層下底ないしは中部下底で第9層上部が切られている箇所が多いためと推定する。この場合、本層はS-5層とするのが妥当である。

11) 第10層

層厚10cm。全層が締まった暗褐色腐植土層で、最上部に表面が緑黒色に風化した溶岩片がある（15～10mm）。下半にはやや黄粉色に見える火山灰が斑紋状に残っている。

12) 第11層

層厚は15cm。全層が締まった暗褐色腐植土で、上半には青黒色スパター（15mm）があり、上半部には脆い黄褐色スコリア（5～1mm）がある。最下部に大きな気孔がある丸くて重い表面が赤褐色となるスコリア（40～10mm）がある。このスコリアに焼かれて、第12層表層上に繁茂していたと思われる茎が立ったまま炭化している。

13) 第12層

層厚は15～12cm。全層が暗褐色腐植土で、ふかふかしている部分がある。母材である火山灰が黄粉色に見える箇所もある。粗粒物としては、赤褐色の脆いスコリア（5～1mm）や青緑色に表面が風化した岩片や灰色岩片、黒色→褐色→白黄色と風化が進む気孔の大きい脆いスコリア（最大径10mm）がある。篠原氏は、本層は縄文前期中葉の諸織a式及びb式土器包含層に当たるとしている。

14) 第13層

層厚10cm。全層ふかふかの暗褐色腐植土層である。上半に無気孔～微細気孔の丸い橙色スコリアがある（最大径10mm、並みの径で5～1mm）。中央部に土器片があり、下底部に土器製作時の石屑と思われるものが散在する。篠原氏は、本層を本遺跡の考古学基本土層の12層とし、早期末の打越式土器包含層とした。

15) 第14層

層厚14～6cm。上位層に比して粘性が強まり、ややチョコレート色がかつた暗褐色腐植土層である。

中央部に黄粉色を呈する部分がある。上半部には黄褐色～橙桃色のスコリア（最大径10mm 前後）が、下半部には芯は赤褐色で周辺部は灰白色に脱色風化した気孔の多い脆いスコリア（最大径30mm、並みの粒径で10mm）がある。篠原 武氏は、本層は本遺跡全体の縄文早期末葉の打越式土器包含層に当たるとしている。

16) 第15層

層厚は20～15cm。ふかふか～ねたねたした土層で、縄文早期末以前の新富士黒土層の典型的な層相を呈している。緑色に風化した岩片（10～5mm 前後）、青黒色溶岩片（25～20mm）、赤褐色の細かいスコリア片（5～1mm）が含まれる。

篠原武氏は本層および第16層を本遺跡の縄文早期末葉の打越式～早期中葉の田戸上層式土器包含層に對比している。

17) 第16層

層厚は10cm 前後。最上部に縄文早期後半の土器片や基盤岩の角礫片がある。この部分だけは黒味の強いチョコレート色である。それ以外は、ふかふか～ねちゃねちゃの典型的な新富士黒土層型の暗褐色腐植土層である。

18) 第17層

層厚10～5cm。本層は新富士火山噴出物の最初期のもので、上位層と同じく、ふかふかネタネタした典型的な新富士黒土層型の暗褐色腐植土層である。下位の古富士火山最末期のスコップで削る際に、てかてかと光沢のある締まった断面が残る古富士型富士黒土層を切って堆積している。赤く焼けた基盤緑色岩片（最大径5～3cm）や炭化木片を多数含んでいる。また、下位層起源と思われる特徴的なベンガラ色のスコリアも多く含む。

19) 第18～20層

層厚40～27cm。しっかりと締まった風化帯～土壌帯である。最上部から上部にかけては第18層で、黒色腐植土化している。この部分には赤紫色～黒紫色のスパター片（3～2cm）を含む。黒色に腐植化していない上部から中部にかけてが、第19層で、いわゆる「汚れローム」的な色彩を帯びている。その下位の第20層には、青黒色→赤橙色と風化し、ややベンガラ色に見える特徴的なスコリア（最大径3～1cm）がある。これは、東京都西郊で、立川ローム層最上部を構成する晩水期の「青柳ローム部層」と呼ばれてきたものの最上部のY-141-1スコリアに相当する。

20) 第21層

層厚は30cm 以上である。上半部は締まった黄褐色ローム層で青灰色岩片（5mm 前後）を含んでいる。下半部にはほぼ2層に区分できる赤褐色で気孔が大きいスコリア（ともに最大径1cm）がある。この二枚組の特徴的なスコリア層は晩水期の「青柳ローム部層」の中部を構成するY-139とY-138テフラ層と思われる。Y-138テフラ層最下部層準に13500年前頃の浅間火山板鼻黄色軽石（As-YP）が挟在する地域がある（上杉、2000a）。本地域でも確認できる可能性がある。この点は、今後の課題である。なお、伊豆大島などでは、この下位のY-137テフラ層（表1参照）以下まで、チョコレート色に腐植土化している例がある。あるいは、縄文草創期最初期はこの時期からかもしれない。概略で、1.4～1.5万年前である。

(3) 今後の課題

本遺跡のテフラ土層を0層から21層に区分し、それぞれの肉眼的な諸特徴を記載した。しかしながら、

粗粒物が一次堆積物であったかどうかは、筆者の経験に頼ったもので、実体顕微鏡や偏光顕微鏡下での諸特徴をも踏まえた確認ではない。今後は各層の粗粒物質の鏡下での諸特徴の確認および同一層内の細粒物質 (特に他火山起源物質) の偏光顕微鏡下での諸特徴の把握が欠かせない。また、本遺跡全体の考古学土層区分との大きなギャップがあるかに見える第6~7層 (3200~2800yrs.BP: 包含遺物からは弥生時代中期後半~後期) に関しては、再確認調査が必要である。今後、明確に一次堆積のテフラより構成されるS-10~21層の各層から、様式の明確な土器を検出する必要がある。

第13表 富士系模式テフラ層と新屋敷遺跡テフラ土層との対比試案

標準テフラ名・テフラ層番号	模式テフラの層・特徴	模式層序***	風化帯・土壌学的特徴	他火山起源テフラ等	年代 (同位体測定のみ、暦年校正せず)	歴史年代	関連自然現象	関連社会現象	層番号	土層	包含遺物等
S-25 完末スコリア層	上部に新長石の非枝・多角形決壊結晶の多いスコリア層・中部に斜長石針状物・黒雲を含むスコリア層・下部に凝結屑石・白色黄頁片質/凝下層に白色~灰白色粒石	新屋敷土層 作土~凝土	風化帯不明	粗粒物多量			西暦1707年噴火 12月噴火開始	慶応期 1707年本末東大噴火 大噴火 1705年 宝永東大噴火	0	表土層 上	ビーニール等
S-24-10H (深二) 河川行末スコリア層	スバナー~重いスコリア片が多い。斜長石結晶多量。完末スコリア層の凝結屑石と隣接しやすい。	新屋敷小宮土層 河で噴火か?	風化帯不明	粗粒物多量			西暦1569年噴火	慶応期 北陸濃信洪水暴発	1	武士層 土	武士層 土
S-24-10A 西小宮土層	上部は赤紫色火山粉~岩粉、下部は黒灰色~褐色の軽いスコリア片	北山斜削で噴火 発生か?	風化帯不明	粗粒物多量			西暦1511, 1433 ~1438年等、 西暦13~14世紀噴火?	宝永期 北陸濃信洪水暴発	1	武士層 土	武士層 土
S-24-9 西小宮土層 ウツクサ層	新長石・かんらん石類を含む立つ短角柱状多角形~準球状スコリア多し。赤褐色岩屑多し。	新屋敷小宮土層 火砕岩?	褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量			西暦13~12世紀以降? 1083年噴火? 1003年噴火? 399年噴火?	吉田大沢形成? 志野村~山中 山村に第九尾形 西側入。山中噴 出か?	2	3	鎌倉住居 遺跡?
S-24-8 シヤクナゲ 積スコリア層	赤褐色~黒色球状火山粉が混入 スバナー~ ウツクサ層	第九尾形土層 河~水砕岩 層1~第九尾形 土層1/火砕 流、火砕サージ	褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量	1030 ± 100yrs.BP [†] 1000 ± 60yrs.BP [†]		西暦937年、永 平年間 西暦927年白濁 山 西小牧火山 噴?	第九尾形土層 噴火中に多数の 溶岩塊・粗粒 物噴出後 (洞 窟型噴火の 形態形成)?	2	3	
S-24-7 火砕岩スコリア層	粗粒物塊状スコリアが下層に多い。粗小火山毛や火山灰を含む	青木ヶ原溶岩 層1~水砕岩 層2	褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	上部と下部に精 火 山 粉 質 の pH10 型ガラス多し。 下部本層ガラス はほとんど粒色 混片状ガラス			西暦846年貞 観年間北西側 で大規模噴射の 発生 西暦828年善 高天山山噴火	第九尾形土層 噴火中に多数の 溶岩塊・粗粒 物噴出後 (洞 窟型噴火の 形態形成)?	3	3	
S-24-7B トゲクダ長粒状火山 長粒状スコリア多し	黒雲で火砕屑土 石を包巻、定数 でウツクサ層の 噴火後第2期形 状態	黒雲で火砕屑土 石を包巻、定数 でウツクサ層の 噴火後第2期形 状態	褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量			西暦802 延暦年間	足柄遺一時期 噴火~短尾段 噴火後再燃 か?	3	3	
S-24-7A 下層はトゲクダ長粒 状スコリア	下部はトゲクダ長粒 状スコリア	前記同上既述/ 中部に火砕流、	褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量			西暦803年 延暦年間	足柄遺一時期 噴火~短尾段 噴火後再燃 か?	3	3	
S-24-6 丸屋スコリア層	上部層に岩片入り 火山粉/下部に壁内 丸屋ごみとしたスコ リア多し	北麓で上部に火 砕岩、一部溶結 状態	褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量	1183 ± 100yrs.BP [†] 1200 ± 110yrs.BP [†]		西暦761年 天応元年	後醍醐天皇土 器?	3	3	
S-24-5A II	丸屋スコリア層中心/ 凝下層に灰白色粒石 状岩屑	前記同上既述1、 火砕屑サージ、火 砕岩	褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量	1560 ± 80yrs.BP [†] 1590 ± 90yrs.BP [†]	5世紀 古墳前期	小規模な山 中噴火か?	後醍醐天皇土 器?	4	4	
S-24-4 二ツ噴出 物	極めて細い土層片状 ~不規則スコリア質 上部に熱水電質頁片 や大粒スコリア層の 火山の少ないスコリア	前記同上既述1、 火砕屑サージ、火 砕岩	黄褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量			4世紀中頃 古墳中期		4	4	
S-24-3-1 ~4	全体に赤褐色岩片の 多い、重いスコリアの 多い。鏡下には濃赤 色を含みることが多 く/凝下層に熱水電 質多し。	北麓で土流噴 射、第九尾形土 層噴火?	黄褐色風化帯 ~暗褐色粘りのある土層	粗粒物多量	1716 ± 110yrs.BP [†]	4~3世紀中頃 古墳前期	第九尾形土層 噴火~第九尾形 西側入噴火		4	4	

第 6 章 自然科学分析

標本番号 名・ナマフ 種番号 ¹⁾	地質式テラフの 特 徴 ²⁾	地質式 ³⁾	風化帯・ 土壌 ⁴⁾ の 特 徴	他火山起源 テラフ等	年代 (年代 補正のみ、暦年換 算せず)	歴史年代	関連自然現象	関連社会現象	測年 番号	土層 番号	包含遺物 等
S-21-2	上部に一部溶結した 火砕流→土石流あり /下部に流柱状気孔具 柱状スコリア ⁵⁾	東麓で線状に 遊	黄褐色風化 帯→土壌帯		1830 ± 40ys BP ⁶⁾ 1860 ± 100ys BP ⁷⁾ 1960 ± 100ys BP ⁸⁾	弥生中期～後葉	北宮十重岩海内 で風刺(発生?)		4	4	
S-24-1	上部に黒褐色丸籠 スコリア / 中部に赤 褐色火山砂 / 下部に 赤→黒褐色スコリア	上部に火砕流→ 土石流 / 中部に 黒色→赤褐色サ ーシ層	黄褐色風化 帯→土壌帯		2000ys BP±	弥生中期?			4	4	
S-22-2	角柱状赤いスコリア	東麓で厚い火砕 流	黄褐色風化 帯→土壌帯			弥生時代前期?			4	4	
S-23-1	上部に赤褐色岩片 / 下部に黒色トゲテ グスコリア		黄褐色風化 帯→土壌帯			弥生時代前期?			4	4	
S-22-1	風孔の多い硬く硬 い黒褐色風化赤褐色 スコリア ⁹⁾	山頂部一面の帯 状火砕流帯	黄褐色風化 帯→土壌帯		2230 ± 110ys BP ¹⁰⁾	弥生時代前期?	富士山白濁火口 から大噴火、火 山崩落	赤富士崩落	4	4	
S-21	黒褐色トゲテグ スコリアあり	東麓に遊動帯 古田沢1、新 田沢2	黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-20	丸籠状細気孔スコ リア	上ノ丸 岩 砕 流 遊	黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-19	平盤状スコリアの上 に赤褐色火山砂→火 砕流	黄褐色風化帯 遊	黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-18 ¹⁾	上半部は赤褐色火 砕流の岩片 / 黒褐色 トゲテグスコリア	北麓で上部に火 砕流→土石流あり	黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-18	硬い黒褐色土砕片 →柱状スコリア		黄褐色風化 帯→土壌帯		2350ys BP±	縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-17 ¹⁾	赤褐色スコリア	東麓で上部に火 砕流	黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-17-1-4	角柱状赤いスコリア 等	東麓で火砕流あり	黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-16-1-3	丸籠状赤いスコ リア	西上流部は 一部は溶結帯や 晶子が少ない、 層厚が約1.54以 下	黄褐色風化 帯	50 ~ 20 μ の pH ₁₀ ~ pH ₁₀ あり		縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-15-1 ¹⁾ -3	赤褐色高風化トゲ テグスコリア多し	火 砕 流 → 火 砕 サージ	黄褐色風化 帯→土壌帯		pH ₁₀ ~ pH ₁₀ ガラ スあり、空母 タマ	2580 ± 100ys BP ¹¹⁾ 2590 ± 120ys BP ¹²⁾	縄文晩期～弥生 時代最初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧	5	5	
S-15-1-2	竹片の多い黒色 スコリア		黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期後葉～ 弥生時代最 初期?	富士山山頂火口 からの噴火噴霧		5	5	
S-14-1 ¹⁾ -3	最上部に黒水浸潤 の多い黄褐色粘土 質火山砂、黒色火山 砂、黒色火山 砂	東麓で溶結帯 遊動→土石流、 北麓で三層 岩崩落	黄 褐 色 → 赤 褐 色 風化帯→土 壌帯			縄文晩期後葉～ 晩葉	冷涼深潤期 / 気 候激変→地殻変 動期		6	6	
S-14	厚皮状大気孔赤 土スコリア	北麓で遊動帯	黄褐色風化 帯→土壌帯		2880ys BP?	縄文晩期後葉～ 晩葉	冷涼深潤期 / 気 候激変→地殻変 動期		6	6	
S-13	下部中部に風孔の少 ない黄褐色→黒色 トゲテグスコリア、 下部に柱状質火山 砂	上部に熱水浸潤 帯の多い溶結 土石流	黄褐色風化 帯→土壌帯		2850ys BP?	縄文晩期後葉～ 晩葉	冷涼深潤期 / 気 候激変→地殻変 動期		6	6	
S-12 ¹⁾	黒色トゲテグで風 孔の少ない黒い スコリア	北麓で大噴 落	黄褐色風化 帯→土壌帯		2880 ± 140ys BP ¹³⁾	縄文晩期後葉	冷涼深潤期 / 気 候激変→地殻変 動期		6	6	弥生時代 中葉以降 から後期 にかけての 遺物包含 層
S-12	大気孔スコ リア O ₂ ¹⁴⁾	上部に火砕流→ 土石流	黄褐色風化 帯→土壌帯	天城火山カワ ゴ平盤石 KGF ¹⁵⁾ 多し	3000ys BP±?	縄文晩期後葉	冷涼深潤期 / 気 候激変→地殻変 動期		6	6	
S-11	上部部に軟いスコ リア (高野スコリア) ¹⁶⁾ 針葉石高野砂、 黒水浸潤帯→緑 褐色→黒褐色 風化帯、黒い 柱状風化気孔スコ リア	上部に火砕流	黄褐色風化 帯→土壌帯		2900 ± 100ys BP ¹⁷⁾	縄文晩期後葉	冷涼深潤期 / 気 候激変→地殻変 動期		6	6	
S-10-2	赤褐色スコリア	上部に白色柱石 片	黄褐色風化 帯→土壌帯	天城火山カワ ゴ平盤石 KGF 1 ¹⁸⁾ 多し	3100 ± 90ys BP ¹⁹⁾	縄文晩期後葉	冷涼深潤期 / 気 候激変→地殻変 動期		7	6	
S-10-1	熱水岩片入り硬い 黒褐色スコリア / 下部 に流柱状風化帯多し	下部及び上部に サージ層	黄褐色風化 帯→土壌帯	山頂山頂噴 れ物 ²⁰⁾	2000ys BP±?	縄文晩期後葉中 葉付 8 式	噴火火山大噴 火砕流 / 冷涼 深潤期		7	6	
S-9	黒色スコリアの上部 にサージ層岩片	上部にサージ層 岩片、熱水浸潤 帯	緑まった 黄褐色風化 帯	上部に天城火山 カワゴ平盤石 KGF ²¹⁾	2000 ± 180ys BP ²²⁾	縄文晩期後葉 中葉付 8 式	噴火火山大噴 火砕流 / 冷涼 深潤期		8	7	
S-8	軟い黄褐色スコ リア		黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期後葉 中葉付 8 式	噴火火山大噴 火砕流 / 冷涼 深潤期		8	7	
S-7	上部に緑色風化岩 片 / 赤褐色スコ リア		黄褐色風化 帯→土壌帯			縄文晩期後葉 中葉付 8 式	噴火火山大噴 火砕流 / 冷涼 深潤期		8	7	

第1節 富士古田上巻地新屋敷遺跡の降下火山砕屑物層序 (その1)

標準コア番号、コア番号	地味地層の名称	噴火履歴等	風化等への評価	他火山起源コア等	年代 (同位体測定のみ、暦年校正せず)	歴史年代	関連自然現象	関連社会現象	地層番号	土層番号	包含物等
S-0*	最下部に黄褐色上部灰白色スコリア	上部にサージ状噴物	黄褐色風化層～暗色土壌帯			縄文中期後半	やや強磁化		8	7	
S-6-3	黒色～赤褐色炭質火山スコリア		黒褐色風化層～暗色土壌帯		2800 ± 100 yrs. BP ¹⁾	縄文中期後半	やや強磁化		8	7	
S-6-2	黒色スコリア	上部に酸化木片入り固結黒火山砂	黄褐色風化層～暗色土壌帯	pPH3・pPHw・黒炭屑片		縄文中期後半	やや強磁化		8	7	
S-6-1 (R1)	上方に酸化化・赤褐色厚炭質スコリア	上部に赤褐色土層多し	黄褐色風化層～暗色土壌帯	最上部に pPFC 黒ガラス伊勢タテラシ ²⁾		縄文中期後半	やや強磁化	古 暦 2-5 日	8	7	
S-5*	黒色スコリア	上部に赤褐色土層多し	赤褐色風化層～暗色土壌帯		4510 ± 140 yrs. BP ³⁾ 5640 ± 130 yrs. BP ⁴⁾	縄文中期後半	やや強磁化		9	8	
S-5 (R1)	最上部に黒褐色スコリア、中部に黒色スコリアと赤褐色土層、下部に赤褐色スコリア	セメントをまじり、下部に赤褐色土層多し	赤褐色風化層～暗色土壌帯		樹皮炭片(山鹿発見) 炭 8000-6500 yrs. BP ⁵⁾	縄文中期後半	やや強磁化、東京湾で海道開闢		9	8	
S-4	中部に黒色スコリア、下部に赤褐色スコリア、最下部にスコリア質火山砂	最上部にサージ状噴物、火山灰、二石層	黄褐色風化層～暗色土壌帯	pPH1	4340 ± 130 yrs. BP	上部にサージ下部に中層後半	弱磁化		10	9	前期中層～中期後半の包含物
S-3*	上部に火山砂や岩片、下部に黒褐色火山灰火山スコリア		黄褐色風化層～暗色土壌帯	pPH1	5920 ± 230 yrs. BP ⁶⁾ 6070 ± 170 yrs. BP ⁷⁾		弱磁化		11	10	
S-3	火山砂や岩片、黒褐色火山灰火山スコリア		黄褐色風化層～暗色土壌帯				弱磁化		11	10	
S-2	中部にセメントまじり、黒色火山砂、下部に赤褐色スコリア、最下部に赤褐色スコリア質火山砂	中上部にサージ状噴物	赤褐色風化層～黒色土層	pPH1		上部に前期後半	弱磁化		12	11	前期中層～中期後半の包含物
S-1	上部に酸化木片が混入する黒褐色土層、下部に厚炭質火山灰火山スコリア	最上部に噴発角礫入り火山灰、上部にサージ状噴物	黒褐色風化層	pPH1, pPC	5120 ± 150 yrs. BP ⁸⁾	前期中層前半	弱磁化、御油津の灰下で河口深層発生?		13	12	中期後半～打越式包含物
S-0-6	強い赤褐色火山灰入り火山砂～黄褐色～灰色火山灰	船津遺跡	ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層			縄文早期末	弱磁化、西浜遺跡		14	13	
S-0-5	強い赤褐色火山灰入り火山砂～黄褐色～灰色火山灰		ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層		4400 yrs. BP ⁹⁾	縄文早期末	弱磁化		14	13	
S-0-4	上部はスコリア質火山砂～火山灰、中部に赤褐色スコリア、下部に強い赤褐色スコリア	上部に白灰色岩片入り	ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層		7480 ± 140 yrs. BP ¹⁰⁾ 7520 ± 190 yrs. BP ¹¹⁾	縄文早期	弱磁化 古志野 遺跡 150 ± 100 yrs. BP ¹²⁾		14	12	
S-0-3-3	上部に火山砂～火山灰中に黒褐色～白色酸化土質、下部に赤褐色スコリア	最上部に船津系白色火山灰、火山灰、石、石 (OCP-16)	ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層	船津系 pPH10 ~P10 オラス入 (船津火山砂)	7560 ± 190 yrs. BP ¹³⁾ 7580 ± 130 yrs. BP ¹⁴⁾ 7720 ± 110 yrs. BP ¹⁵⁾	縄文早期	柱川谷津に多数の礫土層発生、古志野遺跡 ¹⁶⁾		15	13	柱川谷津に多数の礫土層発生、古志野遺跡 ¹⁶⁾
S-0-3-2	強い赤褐色火山灰入り火山砂～火山灰	船津遺跡	ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層	pPH1, pPHw		縄文早期	弱磁化、柱川谷津に多数の礫土層発生、古志野遺跡、古田遺跡		15	13	
S-0-3-1	強い赤褐色火山灰入り火山砂～火山灰	船津遺跡、志野遺跡	ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層	pPH1, pPHw	8620 ± 190 yrs. BP ¹⁷⁾ 9190 ± 200 yrs. BP ¹⁸⁾	縄文早期	弱磁化、黒の灰		15	13	
S-0-2	最下部に黒色火山灰、下部に強い赤褐色火山灰	北西側に大日火口 ¹⁹⁾	ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層	pPH10 有り		縄文早期前半	弱磁化		15	12	
S-0-1	強い赤褐色～赤褐色火山灰入り火山砂	二島 遺跡 10430 ± 230 yrs. BP ²⁰⁾ 船津火山砂火山灰 ²¹⁾ 丘で発見 ²²⁾	ふかふかした黄褐色風化層～黒褐色土層	pPH10w, Hc, 黒炭屑片、大日火口 O55-2 白色火山灰 ²³⁾	9770 ± 220 yrs. BP ²⁴⁾ 10380 ± 230 yrs. BP ²⁵⁾ 10440 ± 280 yrs. BP ²⁶⁾	縄文早期前半	弱磁化、柱川谷津		17	14	
Y-141-2-1	黒色～赤褐色長柱状～球状火山灰、中部に黒褐色土層		黒まっただかてかた丸な黒褐色風化層、スコリアはベンガラ色		大日火口 O58 土層に白色砂 ²⁷⁾ 11580 ± 140 yrs. BP ²⁸⁾	縄文早期後半			18	14	
Y-141-2-1-2	上部は黄褐色～赤褐色火山灰火山スコリア、下部にトゲトゲで反膜のない層状スコリア		黄褐色風化層～暗色土層 (内、ローム層)	最上部に pP10 黒ガラス		縄文早期後半			19	14-1層	

第6章 自然科学分析

標準年代 名・テラ 編番号 ¹⁾	地質年代学的 層 位 群 ²⁾	噴火履歴等 ³⁾	風化帯- 上層部の 諸 特 徴	富士山起源 テフラ等	℃年代 (同位体 補正のみ, 暦年 正せず)	歴史年代	関連自然現象	関連社会現象	地質 番号	上層 番号	包含遺物 ⁴⁾
Y-141-1- 3	上方に赤褐色-赤紫色-黒紫色層状スコリア・下方にブルー灰色スコリア質火山砂		明赤褐色風化帯	融上部にガラスpH50有り		縄文早期		稲垣邸			20
Y-140	トゲトゲ大穴赤褐色スコリア入り火山灰	土石礫層目立つ	黄褐色塊まった風化帯	pH70 ガラス存在							21
Y-126	下部に大気灰で封じやすい良好なスコリア・最下部は黄褐色小粒スコリア	上部で土石流目立つ	風化してベントナイトを呈する	pH50型ガラスあり				相模野 L1H			21
Y-138 ⁵⁾	長柱状気孔状スコリア	上部で土石流目立つ	風化してベントナイトを呈する					相模野 L1H			21
Y-138	褐色の長い長柱状気孔状スコリア		風化してトナリ層にまだらに風化	融下部に溶融火山灰集積黄色軟石 As - YP 13500 ±				相模野 L1H			21
Y-132-1- 12	上層部 (6-12) は土石礫層?下部に黒色炭質片多し上層部 (1-4) は山内内で層厚が5mに達する顆粒大スコリア層	基岩原岩 OMR6	風化してベントナイトを呈する	pH50, アルカリ流石				相模野 L1H			地史期美濃川西段で深淵層 12000 ± 60 yrs.BP古妻湖湖再生
Y-136	上部に青白色切片を含む細粒火山砂・下部は黒褐色スコリア		暗褐色の塊まった層積帯		14000-15000 yrs. BP ⁶⁾			相模野-暗色帯上部 (B1U)			橋先形尖頭部
Y-135	上部に黒色切片を含む火山砂・下部は褐色スコリア		黄褐色-暗褐色風化帯		14000-15000 yrs. BP ⁶⁾			相模野-暗色帯上部 (12U)			橋先形尖頭部
Y-134	球形気孔状スコリア		黄褐色-暗褐色風化帯		14000-15000 yrs. BP ⁶⁾			相模野-暗色帯上部 (B1U)			橋先形尖頭部
Y-133	上部は黒色赤紫色スカーを含む火山灰・下部は赤い黒褐色-黄褐色スコリア	上半部に土石流									

1) 同一噴火層は研究場所、異なる噴火層は上部が風化帯-上層部となるテラ編番号。ここで言う土石流には雪崩堆積物-半融雪洪水堆積物を含む。上層番号と包含遺物などは後述 式による。

2) 1) 上層編番号 (1965), 2) 上層 (1968), 3) 上層・層田 (2006), 4) 小池 (1998), 5) 砂防壁すべり技術センター (2002), 6) 宮地 (1988), 7) MIYAJI et al (1992), 8) 小山編番号 (2002), 9) 湯子川大規模噴射中継観測で堆積物を含むスコリアあり (深田 (2007), 上野達二氏私信), 10) 上層・本郷 (1996), 11) 上層14分 (1992), 12) 渡部・村井 (1978), 13) 上層14分 (1999), 14) 上層14分 (1979), 15) 上層 (2002a), 16) 上層 (2002b), 17) 上層 (1999), 18) 深田 (1995), 19) 深田ほか (2002), 20) 大木・野目 (1975), 21) 深田ほか (1977), 22) 野田 (1964), 23) 渡部・小杉 (1993), 24) 野田・新井 (2003), 25) 宮地・鈴木 (1985), 26) 上層 (1986), 27) 野田 (1977), 28) 千塚ほか (2007), 29) 藤山 (1982), 30) 上層 (1989), 31) 上層14分 (1994), 32) 上層14分 (1985), 33) 坂本・中村 (1993)

<引用文献>

千葉達朗・富田陽子・鈴木雄介・荒井健一・藤井紀綱・宮地直道・小泉市朗・中島幸信 (2007) 航空レーザー計測に基づく青木が原岩の微地形解析。荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編「富士火山」, 490頁, 349-363頁, 山梨県環境科学研究所。

遠藤邦彦・小杉正人 (1990) 海水準変動と古環境。総合地誌研究叢書, 20, 93-103頁。

遠藤邦彦・村井公一 (1978) 山梨県大月市における猿橋溶岩直下の腐植上の℃年代。地球科学, 32, 107-108頁。

藤山家徳 (1982) 富士山北東麓の古忍野湖の地質と化石。国立科学博物館専報, (15), 37-49頁。

泉 浩二・木越邦彦・上杉 陽・遠藤邦彦・原田昌一・小島泰江・菊原和子 (1977) 富士山東麓の沖積世ローム層。第四紀研究, 16, 84-87頁。

小山真人 (1998) 噴火堆積物と古記録から見た延暦十九年-二十一 (800-802) 年富士火山噴火-古代東海道は富士山の北麓を通過していたか?。火山, 43 (5), 349-371頁。

小山真人編著 (2002) 富士を知る。199頁。集英社。

町田 洋 (1964) Tephrochronology による富士火山と周辺地域の発達史。地学雑誌, 73, 293-308頁。

町田 洋 (1977) 火山灰は語る。249頁。双樹書房。

町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス [日本列島とその周辺]。336頁。東大出版会。

宮地直道 (1988) 新富士火山の活動史。地質学雑誌, 94 (6), 433-452頁。

宮地直道 (1993) 新富士火山の噴火史。文部省科学研究費自然災害特別研究。計画研究 (火山災害の規模と特

- 性) (代表者荒牧重雄) 報告書, 59-285頁。
- 宮地直道 (2007) 過去1万1000年間の富士火山の噴火史と噴出率, 噴火規模の推移, 荒牧重雄・藤井敏嗣・中田節也・宮地直道編「富士火山」, 490頁, 79-95頁, 山梨環境科学研究所。
- MIYAJI Nomichi, ENDOKumihiko, TOGASHI Shigeko and UESUGI Yo (1992) Tephrochronological History of Mt. FUJI. 29th IGC Field Trip C 12. 1-35頁。
- 宮地直道・鈴木 茂 (1986) 富士山東麓, 大沼壺沢湖成層のテフラ層序と花粉分析, 第四紀研究, 25, 225-233頁。
- 大木靖衛・袴田和夫 (1975) 箱根芦ノ湖誕生の謎を探る, 国土と教育, (30), 2-9頁。
- 砂防地すべり技術センター。(2002) 平成13年度富士山火山砂防基本計画検討業務委託報告書(地質調査編)。財団法人砂防地すべり技術センター。
- 坂本 享・中村俊夫 (1993) 富士山, 大濁熔岩に関連した加速器質量分析計C14年代, 富山県地学地理学研究論集, (10), 55-58頁。
- 田島靖久・阿部徳和・児玉 浩・久保 尚・宮地直道・小泉市郎・小野弘道 (2002) 富士山北東麓における新富士火山テフラ年代の再検討, 地球惑星科学関連学会合同大会2002年講演予稿集, V032-P018。
- 上杉 陽 (1989) 新期ローム層中に残された突発事象の跡, 関東の四紀, (15), 11-24頁。
- 上杉 陽 (1990) 富士火山東方地域のテフラ標準柱状図-その1: S-25~Y-114, 関東の四紀, (16), 3-28頁。
- 上杉 陽 (1998) 第三章地史, 富士吉田市史資料編第一巻自然考古, 809頁, 139-399頁, 富士吉田市。
- 上杉 陽 (1999) 西桂町の地形と第四紀地質, 西桂町町誌編纂委員会編「西桂町史資料編第一巻自然 地質・原始古代」517頁, 147-183頁, 西桂町教育委員会。
- 上杉 陽 (2000a) 南側調査区CトレンチD棚沢層上部層のテフラ層位, 早稲田大学文化財整理室編「下柳遺跡—早稲田大学東伏見校地における総合合宿所・総合体育館建設に伴う調査—」, 715頁, 21-27頁, 早稲田大学。
- 上杉 陽 (2000b) 富士吉田市史及び周辺地域の古地理の変遷, 富士吉田市史通史編 第一巻, 原始古代中世, 694頁, 1-74頁, 富士吉田市教育委員会。
- 上杉 陽編著 (2003) 地学見学案内書「富士山」, 117頁, 日本地質学会関東支部発行。
- 上杉 陽・遠藤邦彦・原田昌一・小島泰江・泉 浩二 (1979) 富士山, 北・東麓の完新世テフラ累層中の斜交関係, 第四紀研究, 17, 207-214頁。
- 上杉 陽・池田京子・須田明了・柳沢唯佳・岡本真砂夫・鈴木 聡 (1995) 富士山北東麓の霧丸尾溶岩類, 関東の四紀, (19), 3-21頁。
- 上杉 陽・木越邦彦 (1986) 富士黒土層の¹⁴C年代, 火山, 31, 265-268頁。
- 上杉 陽・小沢 清・長瀬和雄・上本進二・山本幸子 (1998) 神奈川県伊勢原断層トレンチで検出された縄文中期軽石質火山灰, 日本第四紀学会講演要旨集, (28), 78-79頁。
- 上杉 陽・新川和範・木越邦彦 (1994) 伊豆大島火山下崎崎地層切断面露頭群のテフラ—標準柱状図—第四紀研究, 33 (3), 165-187頁。
- 上杉 陽・砂田佳弘 (2008) 「富士河村城スコリア Fj-KW」(仮称)の発見について, 神奈川県山北町文化財調査報告書2「河村城」, 62頁, 22-28頁, 山北町教育委員会。
- 上杉 陽・米澤 宏・宮地直道・千葉達朗・肥田木 守・細田一仁・米澤まどか・由井将雄 (1992) 富士系火山記述のテフラ年代, 関東の四紀, (17), 1-19頁。

第2節 黒曜石製遺物の原産地推定

明治大学文化財研究施設運営委員 杉原重夫

明治大学文化財研究施設 金成太郎

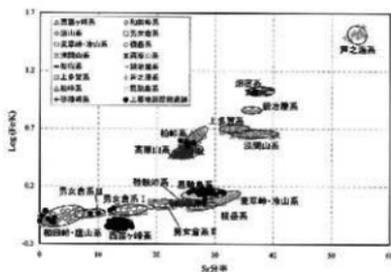
明治大学文学部 RA 弦巻千品・弦巻賢介

明治大学学術フロンティア推進事業 RA 佐藤裕亮・金木利志

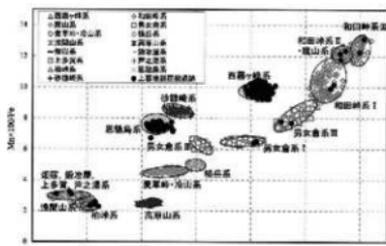
山梨県富士吉田市上墓地新屋敷遺跡（縄文時代早期中葉～中期前葉）から出土した黒曜石製遺物について、蛍光X線分析装置を用いて分析をおこなった。なお、分析方法や原産地の詳細は、『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定—基礎データ集（1）—』を参照いただきたい（明治大学学術フロンティア推進事業事務局 2009）。測定した遺物は300点であり、原産地が判別できた遺物は247点である。

原産地推定の結果は、霧ヶ峰地区西霧ヶ峰系が169点（68.4%）と半数以上を占め、神津島地区恩馳島系が58点（23.5%）で大半を構成している。その他、霧ヶ峰地区和田峠・鷹山系が7点、同地区男女倉系Ⅰが2点、男女倉系Ⅲが2点、箱根地区畑宿系が3点、天城地区柏峠系が6点であった。今回分析した遺跡は、遺跡形成期間が長いため多様な原産地構成となっている。

層別別では、西霧ヶ峰系が主体を占め、恩馳島系の割合が1～4割程度と持続的に変化する原産地構成であった。遺構別では、西霧ヶ峰系と恩馳島系で構成される。



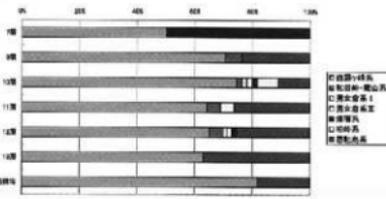
第83図 上墓地新屋敷遺跡の判別図（Rb 分率図）



第84図 上墓地新屋敷遺跡の判別図（Sr 分率図）

第14表 上墓地新屋敷遺跡における層別別集計結果

層別	時期	土器形式	新交点	高野	日野	男女倉Ⅰ	男女倉Ⅱ	男女倉Ⅲ	神津島	西霧ヶ峰	恩馳島	合計
2層	縄文時代		3	2	1				1			7
3層	縄文時代中期	十二節殻式～五節+台子式	20	12	1							33
10層	縄文時代中期	十二節殻式～五節+台子式	69	16	1	1	1	3	4	6	14	108
11層	縄文時代前期	三節殻式～三節+台子式	49	42	2							93
12層	縄文時代早期	打輪式	79	53	4	3	1	1	1			153
13層	縄文時代前期	打輪式～四式+打輪式+台子式	53	46	29							127
遺構別	縄文時代	前期～中期	28	22	18							68
合計			200	247	159	7	0	5	6	6	6	583



第85図 上墓地新屋敷遺跡における層別別原産地構成

第15表 上幕地新屋敷遺跡出土黒曜石製造物の原産地推定結果

試料No.	Si 分率	Zr 分率	Mn ²⁺ (ppm)	Log (Fe) (ppm)	鉄補1	備考	距離	鉄補2	備考	距離	採国番号	採地番号	製造物番号	製造物形状	粒度(μm)	重量(g)	特徴
KKCI-002	26.8663	16.4235	3.0721	1.9196	珪砂系	1.0000	8.3056	珪砂系	0.00	219.95	11	7	L 40 3	2.9	石炭系成岩		
KKCI-001	12.2976	26.4511	9.7921	-0.1274	西洋石+珪砂	1.0000	3.7676	和印砂+珪砂系	0.00	58.33	8	7	M 40 1	0.2	石炭系		
KKCI-003	28.7983	34.3029	7.5209	-0.0560	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	7	N 33 3	2.9	珪片	
KKCI-004	13.6044	28.1191	9.6882	-0.1296	西洋石+珪砂	1.0000	8.8163	和印砂+珪砂系	0.00	73.25	16	9	J 26 2	1.2	石炭系		
KKCI-005	14.3512	27.7918	10.1105	0.1625	西洋石+珪砂	1.0000	9.3645	和印砂+珪砂系	0.00	101.15	22	9	K 26 1	2.1	珪片		
KKCI-006	27.8257	35.9452	7.6190	0.1527	西洋石+珪砂	1.0000	7.2982	砂礫系	0.00	165.24	25	1	K 26 2	2.1	石炭系		
KKCI-209	13.2552	27.8827	10.2093	-0.1310	西洋石+珪砂	1.0000	10.1923	和印砂+珪砂系	0.00	78.91	58	1	K 40 4	2.3	石炭系(成岩)		
KKCI-007	1.4758	19.9063	11.7982	-0.2019	西洋石+珪砂系	0.9251	3.4833	和印砂系	0.07	16.51	36	9	L 33 1	2.5	砂礫(成岩)		
KKCI-008	16.2824	25.0474	10.6420	-0.1298	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	182	9	L 37 3	3.8	石炭系
KKCI-025	14.6393	27.4836	10.2261	-0.1772	西洋石+珪砂	1.0000	12.7845	和印砂+珪砂系	0.00	97.60	145	9	L 37 3	3.2	石炭系		
KKCI-009	13.9436	27.6226	9.7491	-0.1985	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	47	9	L 36 2	2.2	石炭系
KKCI-010	13.9784	25.7477	9.7355	-0.1845	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	59	9	L 40 2	6.2	石炭系
KKCI-011	27.7723	24.1853	7.4266	-0.1347	珪砂系	1.0000	8.9270	砂礫系	0.00	116.48	62	9	L 40 4	2.9	石炭系		
KKCI-012	11.8676	26.1200	8.4728	-0.1242	西洋石+珪砂	1.0000	12.8308	和印砂+珪砂系	0.00	48.42	60	1	L 41 3	3.8	砂片(珪片+成岩)		
KKCI-014	12.8096	26.9747	9.5860	-0.1918	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	70	9	M 32 1	1.4	石炭系
KKCI-015	12.5331	24.0210	9.4094	-0.2875	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	72	9	M 33 3	5.1	石炭系
KKCI-016	13.0951	27.5647	10.3168	-0.1768	西洋石+珪砂	1.0000	13.7604	和印砂+珪砂系	0.00	81.84	73	9	M 35 1	0.4	石炭(成岩)		
KKCI-022	29.2657	32.3796	7.2175	0.1304	珪砂系	1.0000	8.5045	砂礫系	0.00	217.77	174	9	N 32 2	4.2	石炭系		
KKCI-023	12.8099	26.6597	10.2957	-0.1261	西洋石+珪砂	1.0000	7.4740	和印砂+珪砂系	0.00	74.07	175	9	M 37 4	5.5	珪片		
KKCI-017	12.8074	25.9136	9.7773	-0.1274	西洋石+珪砂	1.0000	2.3856	和印砂+珪砂系	0.00	63.86	185	9	M 38 2	2.1	珪片		
KKCI-020	12.4822	26.8657	9.3085	-0.2355	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	189	9	M 40 4	7.6	砂礫系
KKCI-026	13.4126	26.3997	9.8486	-0.1315	西洋石+珪砂	1.0000	4.2211	和印砂+珪砂系	0.00	80.51	67	149	9	M 41 2	26.9	石炭系	
KKCI-024	14.0507	26.9378	9.5714	-0.1121	西洋石+珪砂	1.0000	3.5897	和印砂+珪砂系	0.00	74.16	128	9	N 41 2	4.1	石炭系		
KKCI-018	12.3826	25.1951	9.6662	-0.2561	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	146	9	N 42 4	0.4	石炭系
KKCI-019	12.9184	26.4486	9.8089	-0.1729	西洋石+珪砂	1.0000	3.7161	和印砂+珪砂系	0.00	65.71	163	1	O 38 3	3.6	石炭系		
KKCI-021	16.5419	26.7332	9.7333	-0.0639	西洋石+珪砂	1.0000	17.8947	和印砂+珪砂系	0.00	77.46	164	9	O 38 2	0.7	石炭系		
KKCI-027	28.9953	31.9972	7.2342	-0.0979	珪砂系	1.0000	17.8947	和印砂+珪砂系	0.00	77.46	163	1	O 38 3	3.6	石炭系		
KKCI-028	13.4801	25.8752	9.9779	-0.1380	西洋石+珪砂	1.0000	2.1009	和印砂+珪砂系	0.00	72.84	197	10	L 21 2	3.3	石炭系		
KKCI-028	13.5644	24.9502	9.8987	-0.1297	西洋石+珪砂	1.0000	10.1133	和印砂+珪砂系	0.00	72.07	214	1	K 36 1	4.0	石炭系		
KKCI-029	25.9480	31.4769	9.4286	-0.5833	砂礫系	1.0000	3.1623	成炭系	0.00	82.65	221	1	K 37 2	8.4	石炭系		
KKCI-030	13.7931	25.8750	10.1308	-0.1480	西洋石+珪砂	1.0000	4.3371	和印砂+珪砂系	0.00	87.25	221	2	K 37 2	4.7	石炭系		
KKCI-031	11.9807	27.3079	9.7511	-0.1277	西洋石+珪砂	1.0000	8.8776	和印砂+珪砂系	0.00	95.73	221	3	K 37 2	4.7	珪片		
KKCI-021	15.0707	23.1678	9.2406	0.5854	砂礫系	1.0000	2.4114	成炭系	0.00	60.63	68	200	K 40 3	13.4	石炭系		
KKCI-032	16.8973	26.7089	9.0921	-0.2931	珪砂系	1.0000	2.5495	成炭系	0.00	233.03	237	10	L 26 4	0.5	石炭系		
KKCI-033	12.4367	27.8405	10.1347	-0.1365	西洋石+珪砂	1.0000	7.0788	和印砂+珪砂系	0.00	58.77	241	19	L 31 1	4.2	石炭系		
KKCI-034	14.1807	26.5104	9.8289	-0.1837	西洋石+珪砂	1.0000	2.1152	和印砂+珪砂系	0.00	80.60	244	10	L 33 2	3.1	珪片		
KKCI-035	12.1490	26.7905	9.6662	-0.1288	西洋石+珪砂	1.0000	11.6339	和印砂+珪砂系	0.00	60.91	253	10	L 36 2	6.2	石炭系		
KKCI-036	11.1749	24.8608	9.2020	-0.3808	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	256	10	L 36 2	5.9	石炭系
KKCI-037	12.9730	23.5337	10.0674	-0.3039	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	258	10	L 36 3	3.7	石炭系
KKCI-038	14.4047	24.8526	10.3117	-0.1908	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	263	10	L 37 2	0.6	石炭系
KKCI-039	12.6497	26.8743	9.7077	-0.3337	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	275	10	L 38 3	3.1	石炭系
KKCI-040	13.2628	25.6596	9.6674	-0.1233	西洋石+珪砂	1.0000	1.9599	和印砂+珪砂系	0.00	74.43	58	2	279	10	L 38 3	3.7	石炭系
KKCI-041	28.2584	33.7745	7.2664	-0.1252	砂礫系	1.0000	1.0561	砂礫系	0.00	71.63	224	10	L 41 3	0.5	石炭系		
KKCI-023	13.9992	26.4049	9.8097	-0.1231	西洋石+珪砂	1.0000	0.9618	和印砂+珪砂系	0.00	80.82	58	3	293	10	M 23 3	1.2	石炭系
KKCI-042	25.1899	31.3433	9.5429	-0.5429	砂礫系	1.0000	10.7334	成炭系	0.00	83.38	298	10	M 28 2	4.1	砂礫		
KKCI-043	12.9076	25.4022	9.6429	-0.1605	西洋石+珪砂	1.0000	15.3474	和印砂+珪砂系	0.00	83.28	306	10	M 33 3	4.4	石炭系		
KKCI-044	15.0966	25.8012	9.9130	-0.1603	西洋石+珪砂	1.0000	6.3037	和印砂+珪砂系	0.00	56.92	311	10	M 35 2	2.7	珪片		
KKCI-045	27.8218	33.4231	7.2671	0.1402	珪砂系	1.0000	1.8347	砂礫系	0.00	114.27	315	10	M 35 4	1.5	砂礫		
KKCI-046	28.7468	34.5182	7.5613	0.1601	珪砂系	1.0000	3.3786	砂礫系	0.00	173.57	330	10	M 38 3	0.5	砂礫		
KKCI-024	13.4011	27.4712	9.7960	-0.1331	西洋石+珪砂	1.0000	0.1850	和印砂+珪砂系	0.00	73.52	58	4	331	10	M 38 3	2.5	石炭系
KKCI-047	13.0128	27.3397	7.7461	-0.0993	西洋石+珪砂	0.9996	3.0025	和印砂+珪砂系	0.00	18.47	422	10	M 39 2	8.3	石炭(成岩)		
KKCI-048	16.3381	26.9017	9.6529	-0.0929	西洋石+珪砂	1.0000	15.1685	和印砂+珪砂系	0.00	71.25	342	10	M 40 2	6.3	石炭系		
KKCI-049	12.8627	26.0818	9.3765	-0.1175	西洋石+珪砂	1.0000	3.9449	和印砂+珪砂系	0.00	61.83	355	10	M 41 2	2.1	珪片		
KKCI-026	12.0079	27.3638	9.7964	-0.1537	西洋石+珪砂	1.0000	6.2913	和印砂+珪砂系	0.00	77.36	513	10	N 29 4	2.6	石炭系		
KKCI-050	18.8976	26.4458	9.8291	-0.1403	西洋石+珪砂	1.0000	2.2198	和印砂+珪砂系	0.00	77.49	362	1	N 31 4	5.1	珪片		
KKCI-051	27.0483	32.1029	7.2805	-0.1551	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	363	10	N 31 4	6.2	珪片
KKCI-052	12.8361	24.8663	9.7978	-0.3412	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	364	10	N 31 4	4.1	珪片
KKCI-053	13.5789	25.5699	9.2861	-0.2443	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	365	10	N 32 3	2.9	石炭(成岩)
KKCI-053	13.9527	25.2277	9.6959	-0.1185	西洋石+珪砂	1.0000	7.1792	和印砂+珪砂系	0.00	77.12	368	1	N 33 2	1.7	砂礫		
KKCI-054	12.3045	27.1827	10.0566	-0.1537	西洋石+珪砂	1.0000	4.4575	和印砂+珪砂系	0.00	82.82	369	10	N 33 2	5.3	石炭系		
KKCI-055	0.0000	19.8027	12.3546	-0.1053	和印砂+珪砂系	0.9969	9.6003	和印砂系	1.00	20.21	371	10	N 31 1	4.0	珪片		
KKCI-056	12.2749	27.3938	9.9439	-0.2163	西洋石+珪砂	1.0000	0.9083	和印砂+珪砂系	0.00	76.96	385	10	N 30 3	2.9	石炭(成岩)		
KKCI-067	12.2708	26.4541	9.5617	-0.0892	西洋石+珪砂	1.0000	19.2542	和印砂+珪砂系	0.00	66.82	395	10	N 30 1	6.6	石炭系(成岩)		
KKCI-058	14.5068	26.6148	9.9813	-0.2000	西洋石+珪砂	1.0000	3.3084	和印砂+珪砂系	0.00	102.62	399	1	N 36 3	2.2	石炭(成岩)		
KKCI-059	14.6384	25.9584	9.8890	-0.1310	西洋石+珪砂	1.0000	2.6117	和印砂+珪砂系	0.00	96.97	395	1	N 37 3	2.4	石炭系(成岩)		
KKCI-068	25.4648	34.3425	8.2356	-0.3747	砂礫系	1.0000	2.8511	成炭系	0.00	62.63	1075	10	N 37 3	3.3	石炭系		
KKCI-060	12.0785	23.7852	7.8463	-0.0703	珪砂系	-	-	-	-	-	-	-	405	10	N 38 2	2.9	砂礫(珪片+成岩)
KKCI-061	14.3508	26.8221	10.1001	-0.1181	西洋石+珪砂	1.0000	12.1273	和印砂+珪砂系	0.00	85.08	412	10	N 39 2	5.5	石炭系		
KKCI-062	13.4788	26.1319	8.7190	-0.1282	西洋石+珪砂	1.0000	9.2395	和印砂+珪砂系	0.00	73.05	422	10	N 39 2	6.0	石炭系		
KKCI-063	14.8277	25.9933	9.8062	-0.1471	西洋石+珪砂	1.0000	5.1193	和印砂+珪砂系	0.00	86.70	424	10	N 41 1	6.2	石炭系		
KKCI-064	13.4261	26.8561	9.8135	-0.1230	西洋石+珪砂	1.0000	2.5089	和印砂+珪砂系	0.00	72.07	427	1	N 41 1	6.1	石炭系(成岩)		
KKCI-065	15.3880	26.8964	10.3690	-0.1291	西洋石+珪砂	1.0000	14.5799	和印砂+珪砂系	0.00	83.78	436	1	N 42 1	5.1	珪片		
KKCI-066	13.3523	26.9012	10.3880	-0.1392	西洋石+珪砂	1.0000	10.6287	和印砂+珪砂系	0.00	86.77	441	10	N 42 3	5.7	珪片		
KKCI-067	13.6797	28.0941	9.8036	-0.1439	西洋石+珪砂	1.0000	1.8036	和印砂+珪砂系	0.00	78.42	442	10	N 42 3	4			

第 6 章 自然科學分析

試料No	Se 分析	分析年	Mo ⁹⁹ 100%	Log (DRC)	検体 1	標準 1	標準 2	標準 3	標準 4	評価 番号	国産物 番号	検査 番号	分析 番号	分析 項目	重量 (g)	容 積	
KRC1-069	13.3215	26.7145	13.1930	-0.1367	西宮 + 海浜	1.0000	6.4834	和歌山・真山系	3.00	82.95	446	1	10	O 30 1	3.9	薄片	
KRC1-070	12.5403	25.9254	8.7859	-0.2384	伊勢不可	--	--	--	--	--	467	1	10	O 34 4	0.0	薄片	
KRC1-071	12.3078	26.7239	4.8317	-0.1361	伊勢不可	--	--	--	--	--	472	1	10	O 36 1	5.9	石核	
KRC1-072	14.2482	26.7008	10.9474	-0.1303	西宮 + 海浜	1.0000	4.6552	和歌山・真山系	3.00	85.85	473	1	10	O 36 1	1.1	石核未成品	
KRC1-073	12.5845	27.2487	9.0995	-0.1293	西宮 + 海浜	1.0000	3.9723	和歌山・真山系	3.00	85.41	477	1	10	O 37 3	2.5	石核	
KRC1-074	12.7717	26.4440	8.2356	-0.1003	西宮 + 海浜	1.0000	15.8440	和歌山・真山系	3.00	81.06	481	1	10	O 38 3	4.7	石核	
KRC1-075	12.6130	28.1294	5.5029	-0.3431	伊勢不可	--	--	--	--	--	485	1	10	O 39 3	3.1	石核(鑑定)	
KRC1-076	12.0580	28.4507	6.5781	-0.0098	西宮 + 海浜	1.0000	6.7403	男女倉系	6.00	20.54	488	1	10	O 40	7.9	薄片	
KRC1-077	13.1857	26.4750	9.9205	-0.1218	西宮 + 海浜	1.0000	1.5242	和歌山・真山系	6.00	76.43	495	10	10	O 42 4	3.6	薄片	
KRC1-078	12.7580	27.9041	8.2275	-0.0681	西宮 + 海浜	1.0000	17.8031	和歌山・真山系	6.00	51.89	498	10	10	O 42 4	6.7	石核(鑑定)	
KRC1-079	14.0799	26.5221	9.0688	-0.1415	西宮 + 海浜	1.0000	4.3088	和歌山・真山系	6.00	81.11	503	10	10	P 31 2	6.2	石核	
KRC1-080	27.1306	23.2180	7.4007	-0.1242	伊藤島系	1.0000	7.9562	伊藤島系	6.00	115.87	504	1	10	P 31 2	2.0	石核	
KRC1-081	12.5890	28.6103	6.1511	-0.1146	西宮 + 海浜	1.0000	7.1892	和歌山・真山系	6.00	84.31	507	10	10	P 36 2	6.6	石核未成品	
KRC1-082	13.4533	28.9999	9.9797	-0.1750	伊藤島系	1.0000	18.8105	和歌山・真山系	6.00	92.39	508	10	10	P 36 4	7.5	石核	
KRC1-083	13.7379	27.3649	8.9368	-0.1113	伊藤島系	1.0000	8.7333	和歌山・真山系	6.00	74.23	513	10	10	P 41 4	6.6	薄片	
KRC1-084	14.1397	28.2134	10.2115	-0.1037	西宮 + 海浜	1.0000	6.4936	和歌山・真山系	6.00	85.59	569	10	10	O 38 1	7.3	薄片	
KRC1-084	12.0860	28.9639	10.0167	-0.1187	伊藤島系	1.0000	14.5790	和歌山・真山系	3.00	35.45	511	2	10	O 40 1	3.4	石核	
KRC1-087	12.7684	27.4817	10.3977	-0.1556	西宮 + 海浜	1.0000	2.5291	和歌山・真山系	3.00	84.46	1648	1	11	--	--	2.6	薄片
KRC1-088	12.8119	28.4186	8.9920	-0.0271	西宮 + 海浜	1.0000	5.7929	和歌山・真山系	3.00	80.13	526	1	11	K 35 1	4.2	石核	
KRC1-087	27.6437	23.4174	7.7589	-0.1291	伊藤島系	1.0000	2.2031	伊藤島系	6.00	101.12	523	1	11	K 37 1	4.7	石核	
KRC1-091	13.1832	28.4933	8.2391	-0.2282	伊藤島系	1.0000	7.6776	和歌山・真山系	6.00	78.66	527	1	11	K 37 1	2.7	石核未成品	
KRC1-088	12.8626	28.1881	8.4842	-0.1193	西宮 + 海浜	1.0000	4.3331	和歌山・真山系	6.00	87.44	535	1	11	K 38 2	4.7	石核	
KRC1-089	13.2171	27.8586	9.9115	-0.1252	伊藤島系	1.0000	2.5798	和歌山・真山系	6.00	78.53	539	11	11	K 38 3	6.7	石核(鑑定)	
KRC1-090	14.7790	26.3289	13.9542	-0.1538	西宮 + 海浜	1.0000	5.1607	和歌山・真山系	6.00	86.04	542	11	11	K 39 2	9.0	石核	
KRC1-091	26.4951	23.5099	7.2397	-0.1158	伊藤島系	1.0000	5.8462	砂礫系	6.00	180.28	543	11	11	K 39 4	6.3	石核(鑑定)	
KRC1-092	12.3161	27.7307	10.9915	-0.1293	伊藤島系	1.0000	9.0521	和歌山・真山系	6.00	83.31	546	11	11	L 32 2	3.6	石核	
KRC1-093	13.2333	27.3631	10.4437	-0.2007	伊藤島系	--	--	--	--	--	549	1	11	L 32 1	2.6	薄片	
KRC1-095	13.9107	25.9840	9.5205	-0.2027	伊藤島系	--	--	--	--	--	566	11	11	L 41 1	1.9	薄片	
KRC1-096	12.6382	27.4945	9.7982	-0.1204	伊藤島系	1.0000	3.4771	和歌山・真山系	3.00	86.37	568	11	11	M 02 4	3.0	石核	
KRC1-097	11.6121	26.7861	5.2584	-0.1228	西宮 + 海浜	1.0000	10.6338	和歌山・真山系	3.00	81.39	570	11	11	M 04 4	3.8	石核	
KRC1-098	12.7829	28.9888	16.3561	-0.1482	伊藤島系	1.0000	2.9729	和歌山・真山系	3.00	75.12	572	11	11	M 32 4	4.9	石核	
KRC1-099	30.1599	23.9988	7.5887	-0.1396	伊藤島系	1.0000	2.4019	伊藤島系	3.00	194.90	571	1	11	M 33 1	5.9	薄片(鑑定)	
KRC1-100	13.4393	27.5023	8.7673	-0.1252	西宮 + 海浜	1.0000	1.1364	和歌山・真山系	3.00	71.94	576	1	11	M 33 1	0.2	石核未成品	
KRC1-101	12.7341	28.7827	9.6679	-0.1088	西宮 + 海浜	1.0000	7.2223	和歌山・真山系	6.00	69.19	576	1	11	M 33 1	0.2	石核未成品	
KRC1-102	13.1519	27.3326	8.9386	-0.1237	西宮 + 海浜	1.0000	1.9704	和歌山・真山系	6.00	71.45	577	1	11	M 35 2	2.7	石核	
KRC1-103	27.5421	23.2079	8.2373	-0.1754	伊藤島系	1.0000	5.2287	砂礫系	6.00	128.83	577	4	11	M 35 2	6.5	石核未成品	
KRC1-104	13.2283	27.3870	8.0259	-0.1089	伊藤島系	--	--	--	--	--	580	1	11	M 36 4	6.5	砂礫	
KRC1-105	13.8479	27.5903	10.9166	-0.2286	西宮 + 海浜	1.0000	5.5237	和歌山・真山系	6.00	81.39	583	11	11	M 37 3	6.6	石核(鑑定)	
KRC1-277	14.5163	27.3088	9.7886	-0.1311	西宮 + 海浜	1.0000	2.9221	和歌山・真山系	6.00	81.61	58	9	184	11	M 37 3	0.7	石核
KRC1-278	13.1016	28.4594	8.9090	-0.1174	西宮 + 海浜	1.0000	4.9054	和歌山・真山系	6.00	73.65	58	10	189	11	M 37 2	3.2	石核
KRC1-279	9.5851	17.9153	12.5569	-0.6130	和歌山・真山系	1.0000	11.7991	男女倉系	6.00	279.71	62	64	987	11	N 31 1	13.2	石核
KRC1-106	26.0947	35.3883	7.3132	-0.6045	伊藤島系	--	--	--	--	--	599	1	11	N 31 1	3.1	石核	
KRC1-107	17.2628	27.0292	9.5289	-0.2565	伊藤島系	--	--	--	--	--	602	1	11	N 32 3	5.5	石核	
KRC1-108	27.2611	24.6691	7.5119	-0.1371	伊藤島系	1.0000	1.0609	砂礫系	6.00	199.59	605	1	11	N 33 4	3.8	石核未成品	
KRC1-109	26.7896	22.6371	7.4011	-0.1418	伊藤島系	1.0000	8.4337	砂礫系	6.00	118.67	605	2	11	N 33 4	2.9	石核	
KRC1-280	14.7103	28.1961	10.3664	-0.1551	西宮 + 海浜	1.0000	11.7115	和歌山・真山系	6.00	104.95	58	11	694	11	N 33 4	2.9	石核
KRC1-119	27.1405	24.7997	7.5941	-0.1511	伊藤島系	1.0000	4.6265	砂礫系	6.00	156.26	606	1	11	N 35 1	6.3	石核(鑑定)	
KRC1-112	13.2396	27.8897	10.1912	-0.1215	西宮 + 海浜	1.0000	8.0483	和歌山・真山系	6.00	82.72	60	48	908	11	N 35 1	1.4	薄片
KRC1-281	13.7157	28.6690	9.9550	-0.1591	西宮 + 海浜	1.0000	6.8530	和歌山・真山系	6.00	88.23	908	1	11	N 35 1	1.2	薄片	
KRC1-113	24.134	26.1296	7.5718	-0.1029	伊藤島系	1.0000	6.5102	砂礫系	6.00	159.22	611	1	11	N 36 6	0.9	薄片	
KRC1-114	12.9386	28.6382	8.8306	-0.1149	西宮 + 海浜	1.0000	5.7951	和歌山・真山系	6.00	77.29	618	11	11	N 42 3	3.0	薄片	
KRC1-115	11.5015	28.2520	10.0832	-0.1491	西宮 + 海浜	1.0000	18.9631	和歌山・真山系	6.00	35.21	624	11	11	O 33 2	3.6	石核	
KRC1-116	14.9595	50.7120	2.2747	-0.3948	砂礫系	1.0000	13.2987	浅間山系	6.00	85.79	627	11	11	O 33 2	3.6	石核	
KRC1-117	12.2114	28.7395	9.8023	-0.1418	西宮 + 海浜	1.0000	8.4969	和歌山・真山系	6.00	83.41	628	11	11	O 34 1	4.6	薄片	
KRC1-118	13.2980	28.6950	9.9713	-0.1537	西宮 + 海浜	1.0000	11.2355	和歌山・真山系	6.00	90.46	629	11	11	O 34 4	3.3	石核	
KRC1-119	13.4023	27.2359	9.5174	-0.1277	西宮 + 海浜	1.0000	4.7888	和歌山・真山系	6.00	83.57	632	11	11	O 37 3	0.5	石核未成品	
KRC1-120	13.8699	26.2096	8.8421	-0.1831	伊藤島系	--	--	--	--	--	638	1	11	O 38 4	2.2	薄片	
KRC1-282	14.1409	25.9850	8.8317	-0.1794	伊藤島系	--	--	--	--	--	58	12	643	11	O 40 2	0.8	石核未成品
KRC1-121	28.4414	34.4440	7.9380	-0.1505	伊藤島系	1.0000	3.3892	砂礫系	6.00	151.08	645	1	11	O 42 3	6.5	石核未成品	
KRC1-122	13.2321	26.6742	10.1970	-0.1508	西宮 + 海浜	1.0000	4.3834	和歌山・真山系	6.00	86.24	647	11	11	P 31 3	3.4	石核	
KRC1-123	8.1636	21.7219	9.9179	-0.1194	伊藤島系	1.0000	10.1150	和歌山・真山系	6.00	136.03	648	2	11	P 32 1	2.5	伊藤島系	
KRC1-124	28.6070	32.7389	7.3436	-0.1486	伊藤島系	1.0000	3.7186	砂礫系	6.00	140.57	648	2	11	P 32 1	1.7	石核未成品	
KRC1-125	26.7396	31.4968	7.2964	-0.1603	伊藤島系	1.0000	10.6193	砂礫系	6.00	186.26	652	11	11	P 36 2	4.2	石核	
KRC1-126	13.0577	28.7020	8.7267	-0.1643	西宮 + 海浜	1.0000	9.1550	和歌山・真山系	6.00	62.62	657	1	11	Q 37 3	9.9	石核未成品	
KRC1-127	26.5166	50.1102	2.5603	-0.3796	砂礫系	1.0000	6.5791	和歌山・真山系	6.00	89.29	658	1	11	P 36 2	4.2	石核	
KRC1-128	11.7540	28.9751	8.6760	-0.1481	西宮 + 海浜	1.0000	16.0495	浅間山系	6.00	82.32	659	11	11	Q 41 2	10.7	伊藤島系	
KRC1-129	2.2429	23.6139	16.1650	-0.2759	伊藤島系	1.0000	2.9932	和歌山・真山系	6.00	93.46	665	1	11	K 28 2	1.4	薄片(鑑定)	
KRC1-130	30.8041	33.8426	7.5731	-0.1546	伊藤島系	1.0000	8.8255	砂礫系	6.00	175.71	665	1	11	M 35 4	2.7	石核	
KRC1-121	13.1420	25.8443	8.5644	-0.3952	伊藤島系	1.0000	17.6807	和歌山・真山系	6.00	55.75	664	1	12	T 25 2	3.7	石核	
KRC1-140	27.8894	35.3182	7.5022	-0.3439	伊藤島系	1.0000	5.1968	伊藤島系	6.00	145.25	677	1	12	H 1 1	11.3	石核	
KRC1-132	13.8510	26.4299	9.9382	-0.1259	西宮 + 海浜	1.0000	6.5748	和歌山・真山系	6.00	74.32	687	1	12	T 26 1	1.2	薄片	
KRC1-133	13.9033	28.5314	9.7183	-0.1332	西宮 + 海浜	1.0000	6.6677	和歌山・真山系	6.00	71.69	692	2	12	T 26 1	0.6	石核未成品	

第3節 放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

山梨県富士吉田市上暮地新屋敷遺跡(北緯35°30'55", 東経138°49'43")の測定対象試料は、縄文時代早期包含層出土土器付着炭化物(3:I AAA-101554・第32図258)、弥生時代中期後半包含層出土土器付着炭化物(341-①-4:I AAA-101555・第78図623)、3号集石遺構出土炭化物(No.151:I AAA-101625)、100号土坑(焼木痕)出土炭化物(No.213:I AAA-101626)、基本土層9層のI-14-4炭化物集中出土炭化物(No.203:I AAA-101627)、2号竪穴住居跡床J:9-3出土のイネ胚乳(No.22:I AAA-101628)、4号竪穴住居跡出土のオオムギ胚乳(No.89:I AAA-101646)の合計7点である(第1表)。2点の土器付着炭化物は、口縁部外面より採取され、「オコゲ」と判断されている。

2 測定の意義

試料3、341-①-4の測定では、付着炭化物を採取した土器の年代を特定する。No.151の測定では出土した遺構の年代を明らかにする。No.213、No.203の測定では、試料となる木を炭化させたと考えられる火山灰の降下年代を検討する。No.22、No.89の測定では、住居跡から出土した炭化物(種子)が住居に伴うものかどうかを確認する。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

3MVタンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH-2)をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁵N濃度(¹⁵N/¹⁴N)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(第1表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0 yrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、 $\pm 1\sigma$ を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第1表に、補正していない値を参考値として第2表に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、 $\pm 1\sigma$ を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第2表に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

土器付着炭化物の ^{14}C 年代は、3が $6550 \pm 30\text{yrBP}$ 、341-①-4が $2120 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は3が $5525 \sim 5479\text{cal BC}$ 、341-①-4が $192 \sim 105\text{cal BC}$ の範囲で示され、3は縄文時代早期末葉頃、341-①-4は弥生時代中期頃に相当する年代値となっている。3は縄文時代早期包含層から出土し、打越式と認定された土器から採取された炭化物、341-①-4は弥生時代中期後半包含層から出土し、弥生時代中期後半 (栗林式併行) と見なされた土器から採取された炭化物であり、測定結果はこの所見におおむね整合的と考えられる。

3号集石遺構出土炭化物 No. 151の ^{14}C 年代は $4540 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は $3359 \sim 3121\text{cal BC}$ の間に3つの範囲で示される。縄文時代中期前半頃に当たる。

100号上坑 (焼木痕) 出土炭化物 No. 213の ^{14}C 年代は $4210 \pm 30\text{yrBP}$ 、基本土層9層I-14-4炭化物集中出土炭化物 No. 203の ^{14}C 年代は $4180 \pm 30\text{yrBP}$ で、2点の年代値は誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で重なり、近い年代を示す。暦年較正年代 (1σ) は、No. 213が $2891 \sim 2760\text{cal BC}$ 、No. 203が $2878 \sim 2701\text{cal BC}$ の間に各々複数の範囲で示され、縄文時代中期後葉頃に相当する。これらの値は、木を炭化させたと考えられる火山灰の降下年代を示す可能性がある。

2号竪穴住居跡出土炭化種子 No. 22の ^{14}C 年代は Modern、4号竪穴住居跡出土炭化種子 No. 89の ^{14}C 年代は $170 \pm 20\text{yrBP}$ である。No. 89の暦年較正年代 (1σ) は $1670 \sim 1944\text{cal AD}$ の間に4つの範囲で示される。2点は平安時代と考えられる住居跡から出土しているが、表土直下に当たるため、混入が疑われており、測定結果は後世の混入を示すものとなった。

試料の炭素含有率は全て50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

第16表

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-101554	3	縄文時代早期包含層出土土器	炭化物	AaA	-26.20 ± 0.63	6,550 ± 30	44.25 ± 0.19
IAAA-101555	341 ①-4	弥生時代中期包含層出土土器	炭化物	AaA	-22.01 ± 0.66	2,120 ± 30	76.83 ± 0.26
IAAA-101625	No. 151	3号集石遺構	炭化物	AAA	-27.54 ± 0.38	4,540 ± 30	56.85 ± 0.19
IAAA-101626	No. 213	100号土坑 (焼木炭)	炭化物	AAA	-25.95 ± 0.75	4,210 ± 30	59.18 ± 0.22
IAAA-101627	No. 203	基本土層9層の1-14-4炭化物集中	炭化物	AAA	-25.68 ± 0.49	4,180 ± 30	59.42 ± 0.21
IAAA-101628	No. 22	2号竪穴住居跡床19-3	炭化物	AaA	-25.78 ± 0.48	Modern	108.73 ± 0.32
IAAA-101646	No. 89	4号竪穴住居跡カマド3層	炭化物	AaA	-25.44 ± 0.57	170 ± 20	97.92 ± 0.30

[# 3850, 3868, 3875]

第17表

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-101554	6,570 ± 30	44.14 ± 0.18	6,548 ± 33	5525calBC-5479calBC(68.2%)	5607calBC-5595calBC(2.8%) 5561calBC-5472calBC(92.6%)
IAAA-101555	2,070 ± 30	77.31 ± 0.24	2,116 ± 27	192calBC-105calBC(68.2%)	336calBC-331calBC(0.7%) 204calBC-51calBC(94.7%)
IAAA-101625	4,580 ± 30	56.55 ± 0.19	4,537 ± 27	3359calBC-3328calBC(20.1%) 3218calBC-3177calBC(25.3%) 3160calBC-3121calBC(22.8%)	3364calBC-3309calBC(26.0%) 3301calBC-3283calBC(3.1%) 3276calBC-3263calBC(2.5%) 3240calBC-3104calBC(63.8%)
IAAA-101626	4,230 ± 30	59.06 ± 0.20	4,214 ± 29	2891calBC-2865calBC(29.5%) 2806calBC-2760calBC(38.7%)	2902calBC-2852calBC(37.1%) 2814calBC-2743calBC(46.9%) 2727calBC-2696calBC(11.4%)
IAAA-101627	4,190 ± 30	59.34 ± 0.20	4,181 ± 28	2878calBC-2859calBC(13.2%) 2810calBC-2751calBC(41.4%) 2722calBC-2701calBC(13.6%)	2887calBC-2836calBC(21.6%) 2816calBC-2670calBC(73.8%)
IAAA-101628	Modern	108.56 ± 0.30	Modern		
IAAA-101646	180 ± 20	97.83 ± 0.28	168 ± 24	1670calAD-1682calAD(11.0%) 1735calAD-1780calAD(40.4%) 1799calAD-1806calAD(5.6%) 1930calAD-1944calAD(11.2%)	166calAD-1695calAD(17.3%) 1726calAD-1814calAD(54.8%) 1837calAD-1844calAD(0.9%) 1852calAD-1868calAD(2.4%) 1873calAD-1876calAD(0.4%) 1917calAD-195calAD(19.5%)

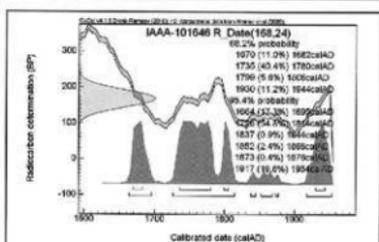
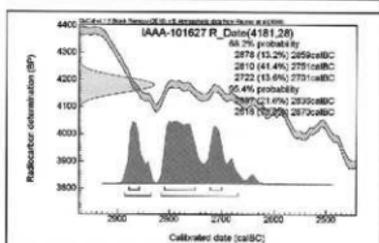
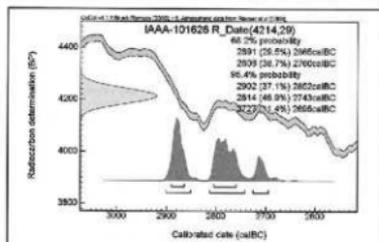
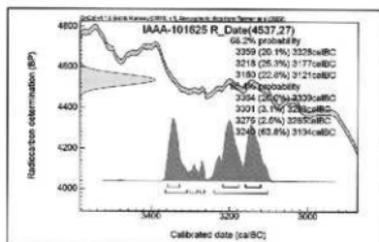
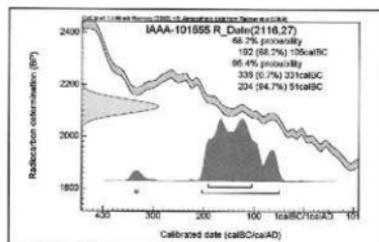
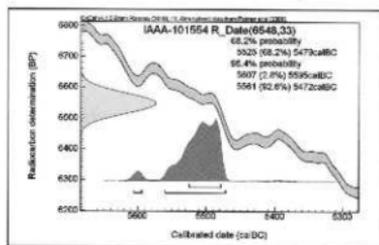
[参考値]

<文 献>

Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal 09 and Marine 09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150



【参考】 暦年較正年代グラフ

第4節 種実遺体と炭化材の同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上幕地新屋敷遺跡（山梨県富士吉田市上暮地内）は、三ツ峠・笹子山地から派生する丘陵の緩傾斜地に立地し、桂川の支流である数見川の右岸側に位置する。本遺跡の発掘調査の結果、縄文時代早期～中期後葉、弥生時代中期後半～後期、平安時代の遺構や遺物が確認されている。

本報告では、各時期の遺構より出土した炭化物（炭化種実、炭化材）を対象に自然科学分析調査を実施し、古植生や植物利用について検討した。

I 種実遺体分析

1 試料

試料は、縄文時代早期の住居跡・集石遺構・土坑、縄文時代中期の焼土跡および土坑、弥生時代中期後半～後期の焼土跡、平安時代（9～10世紀）の竪穴住居跡などから出土した炭化物、および遺構埋積物（覆土）の水洗選別（浮遊選別法）によって回収された大型植物遺体である。

発掘調査時に取上げられた炭化物や浮遊選別法により回収された大型植物遺体は、それぞれ No. が付され、さらに、後者の大型植物遺体は形状や状態の観察により「木片」、「種」、「他」に仮分類された状態にあった。これらの仮分類された試料の確認および概査の結果、「木片」や「種」には炭化種実のほか、後代の混入とみられる炭化していない種実が認められたことから、本分析では炭化種実の抽出と同定を中心に行うこととした。また、同定作業の過程で、「他」試料の概査を行った結果、微細な炭化種実が確認されたため、当初分析対象外とした「他」試料についても、炭化種実の抽出と同定を実施した。なお、「他」試料については、基本的に全量を対象としたが、多量ある場合は、試料の状態を踏まえ分析量を調整している。分析対象とした試料の詳細は、別途所収した付表に示す。

2 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて炭化した種実遺体を拾い出す。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、結果を一覧表に示す。分析後は、検出された分類群を容器に入れて保管する。

3 結果

結果を第18～20表に示す。縄文時代早期～平安時代の各遺構より出土した炭化物および回収された大型植物遺体からは、木本6分類群（オニグルミ、クリ、マタタビ属、キハダ、ミズキ、ニワトコ）、草本9分類群（イネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、キビ、タカキビ？、イネ科、マメ類、マメ科？）の炭化種実が検出された。栽培種ではイネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、キビ、タカキビ？、マメ類が確認された。

一方、炭化していない分類群では、針葉樹のマツ属樹脂管束亜属の葉、スギの葉や種子、ヒノキの枝条や種子、広葉樹のヒメコウソウ、ウメ、キイチゴ属、キブシ、タラノキ、草木のイネ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、カナムグラ、カラムシ属、ミズ属、ギシギシ属、イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、スベリヒユ科、ナデシコ科、アカザ科、キケマン属、タケニグサ、キジムシロ属～ヒイチゴ属～オランダイチゴ属、カタバミ属、エノキグサ、ヒメミカンソウ、スミレ属、オ

ドリコソウ属、イヌコウジュ属、エゴマ、シソ科、キク科の種実などが検出され、栽培種ではウメの核、イネの穎、エゴマの果実が確認された。これらの分類群は、調査地周辺に生育していたものに由来すると思われるが、保存状態から後代の混入の可能性が高く、炭化種実と由来が異なると想定される。そのため、本報告では、検出状況を付表に示すに留め、記載および考察からは除外した。なお、100号土坑(No. 218)から検出されたエゴマ、3号竪穴住居跡(No. 29)から検出されたウメは、各遺構の帰属時期で検出事例があることから、参考として結果表に示した。以下に、時期別の炭化種実の検出状況を記す。

(1) 縄文時代

縄文時代早期～中期後葉の試料からは、落葉広葉樹5分類群(オニグルミ、クリ、キハダ、ミズキ、ニフトコ)472個、草本2分類群(イネ、マメ科?)5個、計477個の炭化種実が確認された。

1) 縄文時代早期末葉(第18表)

1号竪穴住居跡からオニグルミの核(1個)、6号集石遺構からミズキの核(2個)、3号集石遺構からイネの穎(3個)が確認された。現段階では当該期におけるイネの検出事例が殆どない点や、他の試料から炭化していないイネの穎が検出されている状況から、確認されたイネは後代からの混入の可能性が高い。

2) 縄文時代中期前葉～後葉(第19表)

炭化種実の検出状況は、4号焼土跡が327個、8号焼土跡が129個、5号焼土跡が7個、7号焼土跡が6個と、4号焼土跡と8号焼土跡試料が多数を占める。土坑試料では、100号土坑から炭化していないエゴマの果実(1個)が検出されたのみで、炭化種実は確認されなかった。多数の炭化種実が検出された2基の焼土跡の炭化種実構成は、4号焼土跡では、ミズキ(ミズキ?を含む)が190個、キハダの果実・種子が計86個、オニグルミが47個、キハダが13個、クリの子葉が1個、ニフトコが1個、マメ科?の種子が2個と分類群が多い。一方、8号焼土跡ではクリの果実・子葉(125個)とミズキのみであり、4号焼土跡と検出状況が異なる。この他に、5号焼土跡からは種類不明の果実の破片(15個)が確認された。

(2) 弥生時代中期後半～後期(第20表)

10号焼土跡では、上層からイネ科の穎・胚乳(1個)、下層から同一種と思われる不明の果実・種子が各1個検出された。

(3) 平安時代(第20表)

2号竪穴住居跡および3号竪穴住居跡からは、落葉広葉樹のマタタビ属1個、草本9分類群(イネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、キビ、タカキビ?、イネ科、マメ類、マメ科?)240個、計241個の炭化種実が検出された。

1) 2号竪穴住居跡

床上試料から栽培種のイネの胚乳(8個)と穎(3個)、アワ近似種の胚乳(88個、このうち3個が穎付着)、キビの胚乳(1個)、マメ類の種子(3個)と、落葉樹木のマタタビ属(1個)、草本のイネ科の穎・胚乳(1個)が確認された。なお、床土9(No. 22)のイネ胚乳につて、放射性炭素年代測定をおこなった。詳細は第6章第3節のとおりである。

2) 3号竪穴住居跡

焼土外からイネの胚乳(2個)、マメ類の種子(2個)が確認された。

3) 4号竪穴住居跡

床土試料から栽培種のオオムギの胚乳(1個)、コムギの胚乳(5個)、アワ近似種の胚乳(37個、うち6個が穎付着)、キビの胚乳(2個)、タカキビ?の胚乳(1個)、マメ類の種子(4個)と、草

第18表 種実遺体分析結果（縄文時代早期末葉）

時期	遺構名	土壌名	No	重量(g)	ミズキ	タリ	キハダ	ミズキ	ニワトコ	イネ	ワメ科?	不明	備考	
					炭化 破片		炭化 破片							
早期末葉	4号型穴状遺構	段 2	44	-	1									
	1号型穴住居跡	硬化面	234~240	45,800										7
		焼土	241~245	38,400										2
	1号集石遺構	上面	146	-										
	2号集石遺構	M-53-2 13層	148	-										
	4号集石遺構	東壁 最下層	179, 180	-										
		2面下	229, 232, 233	15,250										
	3号集石遺構	3面	226	-										
		3面下	173, 223, 226, 228	5,780										
		4面	174, 224~227	11,670										
			230, 231	8,900										3
		S-57の下	151	-										
5号集石遺構	最下層	163	-											
6号集石遺構	13層	181, 185	-				1	1						

第19表 種実遺体分析結果（縄文時代早期末葉・中期前葉～後葉）

時期	遺構名	土壌名	No	重量(g)	ミズキ	タリ	キハダ	ミズキ	ニワトコ	イネ	ワメ科?	不明	備考		
					炭化 破片		炭化 破片								
中期前葉	1号焼土跡	焼土 上	93	1,840											
	1号焼土跡	焼土 下層	91, 92, 96	10,540											
		11層	91, 95	9,420											
	2号焼土跡	焼土	97~102	8,600											
	3号焼土跡	焼土	103~120	80,971										1	
			73~75	-											
	4号焼土跡	焼土	121~126, 172~212	186,190			2	18	17	36	45	9	1	2	14
			76~99, 100	-	47	1	3	7	1	2	5	6			
	5号焼土跡	焼土	127~134	41,380										2	
	6号焼土跡	焼土	102, 103	-			3		4					15	
焼土		135~149	68,300					1					1		
7号焼土跡	焼土	130~153	13,380					2	4				1		
		104	-												
8号焼土跡	焼土	154~160	23,730					5							
		165, 167	-		123	2									
中期後葉	46号土坑	1層, 下層	110, 111	-											
	100号土坑	炭化物集中	213, 216	11,630										炭化はミズキ 炭化完形(?)	
		上層	215~217	15,140											
			112, 214, 219	11,270										3	
	118号土坑	上層	113	-											
	124号土坑		221	6,380									1		
	135号土坑	上層	115	-											
	141号土坑	下層	132	-											
	154号土坑	下層	116	-											
	160号土坑	上層	117	-											
	163号土坑		118	-											
	174号土坑	上層	119	-											
	192号土坑	下層	122	-											
	212号土坑		123	-											
	225号土坑		125	-											
271号土坑	西壁の底	127	-												
300号土坑	上層	128	-												
310号土坑	1層	129	-												
329号土坑	最下層	130	-												
337号土坑	L-37-3	131	-												
349号土坑		134, 136	-												
早期末葉	361号土坑	M 41-3 下層	138	-											
中期後葉	362号土坑	1層	139	-											
早期末葉	364号土坑	最下層	143	-											
中期後葉	炭化物集中	9	1-14 4ダリット	203	-										

第20表 種実遺体分析結果(弥生・平安)

遺構名	土層名	No	重量 (g)	マ	イ	オ	コ	ア	キ	イ	マ	マ	小	小	備考	
				タ ク シ ノ ミ	ネ	ム ギ	ム	ワ シ ノ ミ	キ	イ ネ	マ メ	マ	小	小		
				炭化 完形	炭化 破片	炭化 完形	炭化 破片	炭化 完形	炭化 破片	炭化 完形	炭化 破片	炭化 完形	炭化 破片	炭化 完形	炭化 破片	
10号出土層	焼土上層	169-171	6,750							1						
	下層	70, 196, 158	4,140										1	1	不明果実・種子は同一種か?	
		2	157, 159	3,289 920												
2号竪穴住居跡	床土	1	5,100													
		2	2, 18	9,460				1								
		3	3	1,900												
		4	4~8	29,890	1	1	2		1	9		1				
		5	9	1,300												
		6	10	1,530												
		8	11-16	43,530			1			32					2	
		9	19-22	20,120			4			19	1		2		マメ類:半分, 総合し1個体	
		10	23-28	35,150	1	1	1			22	1		1	2	マメ類:半分	
		3号竪穴住居跡	カマド跡	焼土	188-190	-										
外	29			6,610												
4号竪穴住居跡	床土	30-33	19,660	2								2			焼残存, 3.33×2.17×2.20mm, 7.06×4.41×3.37mm	
		34	4,900													
		2	36	1,430												
		3	37, 38	7,850												
		4	39	1,680					1			1				
		4'	40-42	12,640					2	17		2			22	
		4''	43	4,660											1	マメ類?
		5	44, 45	13,270				5	7	2	1				10	
		6	46-61	92,250						6			3		13	マメ類:半分
		8	62-64	17,040						3				1	1	
		9	65-67	8,520											2	
		10	68-71	22,720									2	2	2	
		11	72-76	28,870				1							2	
		12	77-85	43,730					1				1		2	マメ類:半分
		1	86, 87	13,070		1			1	6		15	3		24	
		カマド跡	3層	88	6,180					2		20	2		5	マメ類:半分, 計0.01g
			焼土周囲	161-166	33,330			1	1	7	2	8			7	
床土	炭化物	259	850										24			
	下層	29	-											炭化:ウメ類完形(1) 18.22×13.08×11.06mm		

本のイネ科の胚乳5個、マメ科?の種子3個が確認された。カマド跡試料からは、栽培種のイネの胚乳(1個)、オオムギの胚乳(2個)、コムギの胚乳(1個)、アワ近似種の胚乳(19個、のうち2個が頭付着)、キビの胚乳(2個)、マメ類の種子(2個)と、草本のイネ科の穎・胚乳(44個)、マメ科?の種子(3個)が確認された。この他に、南東下層(No.29)から炭化していない栽培種のウメの核(1個)が確認された。なお、カマド跡(No.89)のオオムギ胚乳について、放射性炭素年代測定をおこなった。詳細は第6章第3節のとおりである。

以下に、炭化種実および一部の炭化していない種実の形態的特徴等を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura) クルミ科クルミ属

核は炭化しており黒色。完形ならば、長さ3-4cm、径2.5-3cm程度の広卵形。頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。破片の最大個体の大きさは1cm程度。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果実、子葉は炭化しており黒色。径2-3.5cm、厚さ1-2cm程度の三角状広卵体で一面は偏平、反対面は丸みがある。頂部は尖り、基部は切形。基部全面を占める着点は別組織で、灰褐色、粗く不規則な粒状紋様がある。果皮外面は平滑で微細な縦筋がある。果皮内面は灰褐色の内果皮(渋皮)がある。子葉は硬く緻密で、表面には内果皮(渋皮)の斑痕の縦筋が走る。また、2枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って半分に割れた空洞部がみられる。子葉合わせ目の表面は平滑で、正中線上は横かに窪み、頂部には小さな孔(主根)がある。果実と子葉の破片の大きさは、最大で9mm程度。

・マタタビ属 (*Actinidia*) マタタビ科

種子は炭化しており黒色。長さ1.8mm、幅1.3mm程度の両凸レンズ状楕円体。基部は斜切形でやや突出する。種皮は硬く、表面には凹-槽円形の凹点が密布し網目模様をなす。大きさからマタタビ (*A. polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Maxim.) と考えられる。

・ウメ (*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.)バラ科サクラ属

核(内果皮)は灰褐色、長さ18.22mm、幅13.09mm、厚さ11.06mmのやや偏平な楕円体。頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した跡がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背向正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面には円形の微小凹点が分布する。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Rupr.) ミカン科キハダ属

果実、種子は炭化しており黒色。果実は径8mm程度の球体。外果皮は薄く、中果皮は肉質。5室があり、種子が各1個人入る。種子は長さ4.5-5.5mm、幅2.5-3mm、厚さ1-1.5mm程度のやや偏平な半横広卵体。破片の大きさは1.4mm程度。種皮は薄く、表面には浅く微細な縦長の網目模様が配列する。

・ミズキ (*Swida controversa* (Hemsl.) Sojak) ミズキ科ミズキ属

核(内果皮)は炭化しており黒色。径4-5mm程度の偏球体。基部に大きく深い孔がある。内果皮は硬く、表面には一周する1本のやや幅広く深い縦溝と、やや深い縦溝が数本走る。内部には正中線上に隔壁があり、2室がみられる。

・ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. sieboldiana (Miq.) Hara) スイズラ科ニワトコ属

核(内果皮)炭化しており黒色。長さ2mm、幅1mm程度のやや偏平な広倒卵体。背面は丸みがあり、腹面の正中線には鈍稜をなす。基部はやや尖り、腹面正中線に小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳、穎(果)は炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は長さ3.5-4mm、幅2mm、厚さ1-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。胚乳を包む穎(果)は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の籼粒を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

・アワ近似種 (*Setaria cf. italica* (L.) P. Beauv.) イネ科エノコログサ属

胚乳、穎は炭化しており黒色。胚乳は長さ1.3-1.5mm、幅1.0-1.3mm、厚さ0.8-1.0mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中線に径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面はやや平滑で穎(果)が付着している個体がみられる。果皮表面には横方向に目立つ微細な顆粒状突起が配列する。

・キビ (*Panicum miliaceum* L.) イネ科キビ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ2.4mm、幅2.2mm、厚さ1.5mm程度のやや扁平な広卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線には、径0.3mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面。なお、アワ、キビより小型で細身の胚乳をイネ科 (Gramineae) としている。

・タカキビ (*Sorghum bicolor* L. Moench) ? イネ科モロコシ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ2.7mm、幅2.2mm、厚さ1.5mm程度のやや扁平な広卵体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部正中線には、径1.8mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面でやや発泡している。

・オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

胚乳は炭化しており黒色。胚乳は長さ4.5-5mm、径2-2.5mm程度のやや扁平な紡錘状長楕円体。両端は尖る。腹面は正中線にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で微細な縦筋がある。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ3mm、径2mm程度の楕円体。腹面は正中線にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縦筋がある。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子は炭化しており黒色、楕円体。H1号住居跡カマド跡 (No. 31, 33) から検出された種子2個は、腹面の子葉合わせ目上に細長い長楕円形の臍と臍の中央に縦溝が残存する。大きさは、No. 31が長さ3.33mm、幅2.17mm、厚さ2.20mm (重量は0.01g未満)、No. 33が長さ7.06mm、幅4.41mm、厚さ3.37mm (重量は0.02g) である。子葉の合わせ目から半割した個体も確認された。H2号住居跡のカマド (No. 88) から検出された種子は、長さ3.28mm、幅2.10mm、半分の厚さ1.42mmと、長さ2.67mm (欠損)、幅2.30mm、半分の厚さ1.44mmで、接合して完形1個体となる。子葉内面に北大基準 (古崎, 1992) の「アズキグループ (幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」と思われる幼根や初生葉が確認される。この他、No. 47が長さ5.24mm、幅2.87mm、半分の厚さ1.86mm、No. 50が長さ5.56mm、幅3.43mm、半分の厚さ1.95mm、No. 52が長さ4.48mm、幅2.66mm、半分の厚さ1.53mm、No. 77が長さ5.21mm、幅3.92mm、半分の厚さ2.22mmである。種皮表面はやや平滑で、表面が崩れている個体もある。なお、小型で臍や幼根、初生葉が不明瞭な個体はマメ科にとめている。

・エゴマ (*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. japonica Hara) シソ科シソ属

果実は灰褐色、径1.8mm程度の倒広卵体。基部に大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

4 考察

縄文時代の遺構から検出された炭化種実とは、縄文時代中期前葉とされる焼土跡から多量検出された。焼土跡から検出された分類群のうち、オニグルミ、キハダ、ミズキは川沿いなどの湿潤な肥沃地に、クワは丘陵から山地にかけて生育する落葉高木である。ニフトコは、森林の林縁部などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する落葉低木である。本遺跡の立地を踏まえると、焼土跡から検出された炭化種実とは当時の遺跡周辺の森林に生育した樹木に由来すると考えられ、縄文時代早期末葉の集石遺構から検出されたミズキも同様に遺跡周辺の森林に生育した樹木に由来すると考えられる。

植物質食糧として有用な分類群では、オニグルミが非可食部である核の破片のみが確認されたのに対して、クワは果皮の破片とともに可食部である子葉も確認された。遺構の性格や炭化した状態で検出さ

れている点から、可食部を取り出した後の残渣の処理、あるいは利用後の痕跡の可能性がある。また、縄文時代早期の住居跡から検出されたオニグルミも核の破片であったことから、当該期における植物質食糧としての利用が推定される。

一方、平安時代の竈穴住居跡では、2号竈穴住居跡の床土から栽培種のイネ、アワ近似種、キビ、マメ類、3号竈穴住居跡カマドからイネ、マメ類、4号竈穴住居跡の床土からオオムギ、コムギ、アワ近似種、キビ、タカキビ?、マメ類、同カマド跡からイネ、オオムギ、コムギ、アワ近似種、キビ、マメ類が確認された。このうち、アワ（近似種）には穎付着個体が確認されることから、穎がついた状態で火を受けたことが推定される。なお、3軒の住居跡における栽培種の検出状況は、アワ（近似種）が多数を占め、イネ、ムギ類、キビ、マメ類は少量検出される程度であった。

山梨県内の炭化種実分析結果の集成（棚原、1999）によれば、9～10世紀の穀類比は、甲府盆地の遺跡ではイネが比率が高い、およびイネとムギ類が同程度となる組成、八ヶ岳・茅ヶ岳山麓の遺跡ではムギ類主体、およびムギ類とアワの比率が高く、イネが伴う組成、富士川右岸の遺跡ではイネとアワの比率が高く、アワ、キビが伴う組成、およびムギ類の比率が高く、イネを伴う組成を示している。本地域（桂川流域）では、御所遺跡（大月市）の事例について触れており、イネがほとんど検出されされていないとしている。今回の分析結果は、桂川流域を含む郡内地域の平安時代の穀類および雑穀類の利用の一端を示す資料として注目される。

栽培種を除く分類群では、マタタビ属、イネ科、マメ科?が確認された。マタタビ属は、森林の林縁部などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する落葉雑木であり、イネ科やマメ科は（栽培種の可能性を含む）、明るく開けた草地環境に生育する草本である。これらは周辺の林縁や近傍の草地に生育していた分類群に由来すると考えられる。弥生時代中期後半～後期の10号焼土跡（上層）から検出されたイネ科も、同様に周辺に生育したものに由来すると考えられる。

II 炭化材同定

1 試料

試料は、火山灰層（基本土層8層）下位より検出された縄文時代中期後葉の上坑および縄文時代早期の上坑から出土した炭化材である。分析試料は、各土坑から出土した炭化材と浮遊選別法により回収された炭化材（仮分類「木片」）の観察結果などから、土坑8基（100号土坑、135号土坑、154号土坑、192号土坑、310号土坑、146号土坑、362号土坑、364号土坑）の試料中で比較的大型の破片を対象とした。分析対象とした試料数は、多量の炭化材が認められた100号土坑（炭化物集中；No. 213、No. 218）が1試料あたり5点、その他の土坑は1～2点である。

なお、本分析では、別途実施されている放射性炭素年代測定に供された炭化材2点（3号集石遺構S-57の下；No. 151、炭化物集中T-14-4グリッド 基本土層9層；No. 203）も分析対象としている。試料の詳細は、結果とともに第4表に示す。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

第21表 炭化材同定結果

No	遺構名	地点/層位	時期	樹種
213	100号土坑	炭化物集中	縄文時代中期後葉	クリ(4)、オニグルミ(1)
218	100号土坑	炭化物集中	縄文時代中期後葉	クリ(5)
115	135号土坑	上層	縄文時代中期後葉	オニグルミ(1)
116	154号土坑	下層	縄文時代中期後葉	クリ(2)
122	192号土坑	下層	縄文時代中期後葉	クリ(2)
129	310号土坑	1層	縄文時代中期後葉	クリ(2)
136	346号土坑		縄文時代中期後葉	クリ(2)
139	362号土坑	1層	縄文時代中期後葉	クリ(2)
143	364号土坑	最下層	縄文時代早期末葉	エノキ属(1)
203	炭化物集中	F-14-4グリッド 基本土層9層	縄文時代中期後葉	クリ(1)
151	3号集石遺構	S-57の下	縄文時代早期末葉	コナラ属コナラ亜属コナラ節(1)

3 結果

結果を第21表に示す。土坑、集石および炭集中から検出された炭化材は、落葉広葉樹4分類群(オニグルミ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、エノキ属)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属
散孔材で、道管径は比較的大径。単独または2-3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1-3細胞幅、1-40細胞高。
- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科
環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。
- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属
環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。
- ・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科
環孔材で、孔圈部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で精細胞が認められる。

4 考察

縄文時代早期の集石・土坑、および縄文時代中期後葉の土坑、炭集中から出土した炭化材からは、落葉広葉樹のオニグルミ、コナラ属コナラ亜属コナラ節、クリ、エノキ属が確認された。これらの分類群のうち、コナラ節は前述したクリと同様に丘陵から山地にかけて生育する落葉高木であり、エノキ属は谷沿いなどの水分条件の良い場所に生育する落葉高木である。炭化材の樹種構成は、100号土坑(炭化物集中; No. 213)と135号土坑(No. 115)にオニグルミ、364号土坑(No. 143)にエノキ属が認められたほかは全てクリであった。

クリは、子葉が植物質食糧として、木材が重硬で強度の高いことから建築材や土木材などに有用であ

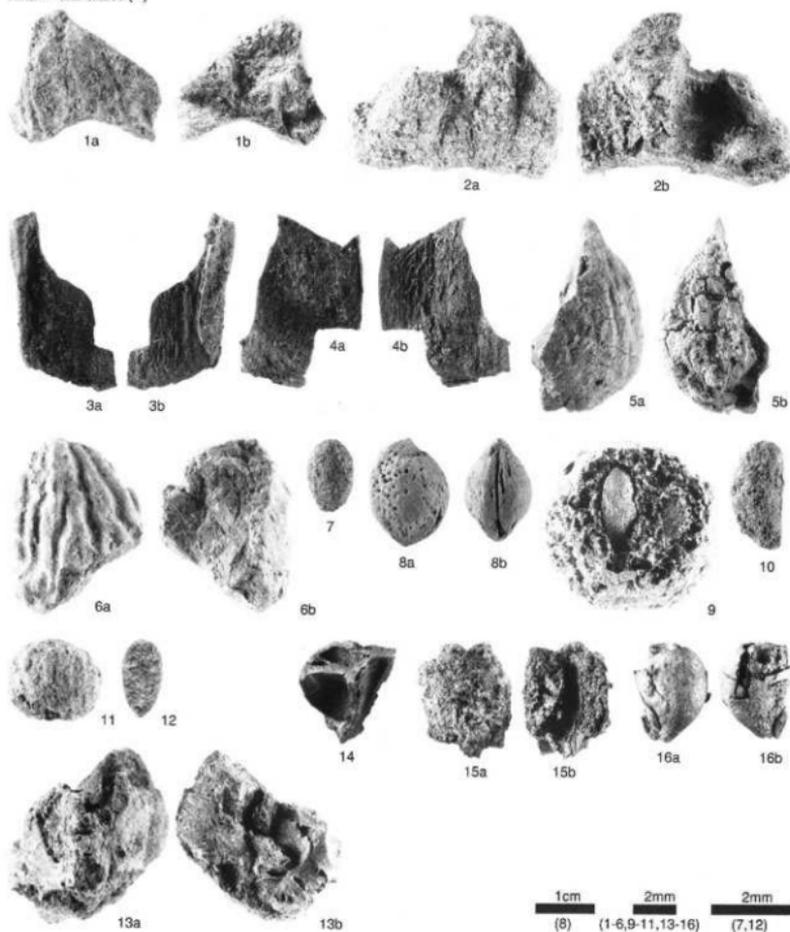
る。本遺跡では、土坑と同時期とされる焼土跡より、果皮や子葉の破片が確認されている。また、郡内地域では、大月遺跡（大月市）や中谷遺跡（都留市）の縄文時代中期～後期の住居跡から出土した炭化材にクリが確認されており（バリノ・サーヴェイ株式会社、1996・2000）、当該期にはクリが利用されていたことが確認できる。

なお、縄文時代中期後葉の十坑群は、分布や土坑底面の形状、覆土の状況から、林地であった場所に火山灰が降下した際に樹木が焼失した痕跡と想定されている。クリは、落葉広葉樹林中に点在し、純林を形成することはないが、上記したように有用植物であることから、縄文時代には人為的な管理が行われていた可能性が指摘されている（千野、1983）。また、三内丸山遺跡では、花粉分析やDNA分析から人為的なクリ栽培の可能性も指摘されている（岡田・NHK青森出版局、1997）。発掘調査所見および本分析結果を考慮すると、調査地内にクリが生育したことが推定される。ただし、クリを主体とする林地であった可能性や人為的関与（管理、栽培）については、調査対象外とした炭化材の樹種構成や付近の古植生に関わる調査事例を蓄積し、評価することが望まれる。

〈引用文献〉

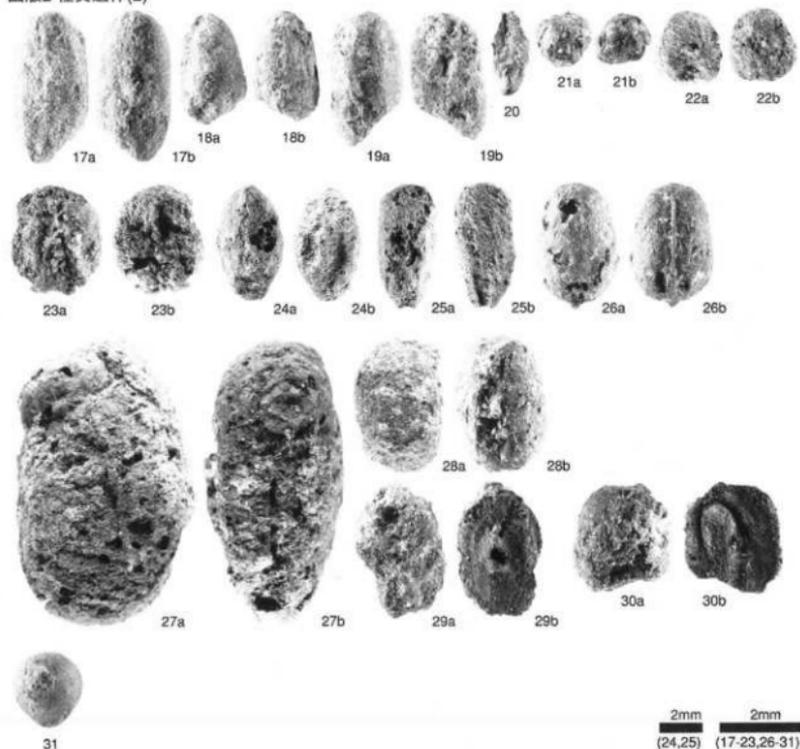
- 千野裕道、1983、縄文時代のクリと集落周辺植生、東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅱ、27-42。
- 林 昭三、1991、日本産木材 顕微鏡写真集、京都大学木質科学研究所。
- 石川茂雄、1994、原色日本植物種子写真図鑑、石川茂雄監行委員会、328p。
- 伊東隆夫、1995、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ、木材研究・資料、31、京都大学木質科学研究所、81-181。
- 伊東隆夫、1996、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ、木材研究・資料、32、京都大学木質科学研究所、66-176。
- 伊東隆夫、1997、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ、木材研究・資料、33、京都大学木質科学研究所、83-201。
- 伊東隆夫、1998、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ、木材研究・資料、34、京都大学木質科学研究所、30-166。
- 伊東隆夫、1999、日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ、木材研究・資料、35、京都大学木質科学研究所、47-216。
- 藤原功一、1999、炭化種実から探る食生活 一古代～中世を中心に一、藤原功一（編著）、帝京大学山梨文化財研究所研究集会報告集2 食の復元 遺跡・遺物から何をよみとるか、株式会社岩田書院、81-98。
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志、2000、日本植物種子図鑑、東北大学出版会、642p。
- 岡田康博・NHK青森放送局（編）、1997、縄文都市を掘る 三内丸山から原日本が見える、日本放送出版協会、245p。
- バリノ・サーヴェイ株式会社、1996、中谷遺跡における自然科学分析、「中谷遺跡 山梨ニア実験線建設に伴う発掘調査報告書」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集、山梨県教育委員会・日本鉄道建設公団、180-183。
- バリノ・サーヴェイ株式会社、2000、大月遺跡10次調査の自然科学調査、「山梨県大月市 大月遺跡（第10次調査）一県立都留高等学校校体育館周辺整備に伴う発掘調査報告書一」、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第174集、山梨県教育委員会、14-23。
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編)、2006、針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）、海青社、70p。[Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫、1982、同視木材組織、地球社、176p。
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編)、1998、広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト、伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）、海青社、122p。[Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
- 吉崎昌一、1992、古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナル、No. 355、2-14。

図版1 種実遺体(1)



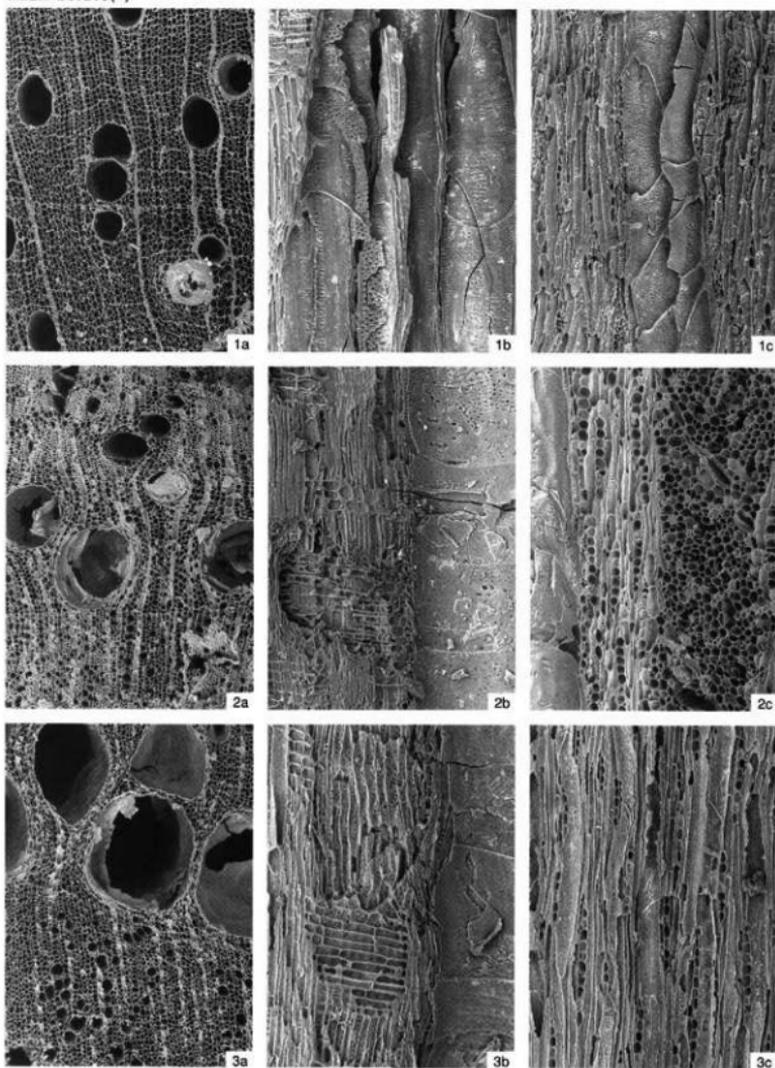
- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 1. オニグルミ 核 (No. 44; 4号壁穴住居跡) | 2. オニグルミ 核 (No. 78; 4号焼土跡) |
| 3. クリ 果実 (No. 107; 8号焼土跡) | 4. クリ 果実 (No. 107; 8号焼土跡) |
| 5. クリ 子葉 (No. 107; 8号焼土跡) | 6. クリ 子葉 (No. 86; 4号焼土跡) |
| 7. マタタビ属 種子 (No. 24; 2号壁穴住居跡) | 8. ウメ 核 (No. 29; 4号壁穴住居跡) |
| 9. キハダ 果実・種子 (No. 88; 4号焼土跡) | 10. キハダ 種子 (No. 197; 4号焼土跡) |
| 11. ミズキ 核 (No. 188; 4号焼土跡) | 12. ニワトコ 核 (No. 194; 4号焼土跡) |
| 13. 不明果実 (No. 102; 5号焼土跡) | 14. 不明果実 (No. 102; 5号焼土跡) |
| 15. 不明果実・種子 (No. 70; 10号焼土跡) | 16. 不明種子 (No. 70; 10号焼土跡) |

図版2 種実遺体(2)



- | | |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 17. イネ 胚乳 (No. 21; 2号竪穴住居跡) | 18. イネ 胚乳 (No. 22; 2号竪穴住居跡) |
| 19. イネ 胚乳 (No. 22; 2号竪穴住居跡) | 20. イネ 穎 (No. 8; 2号竪穴住居跡) |
| 21. アワ近似種 穎・胚乳 (No. 19; 2号竪穴住居跡) | 22. キビ 胚乳 (No. 19; 2号竪穴住居跡) |
| 23. タカキビ? 胚乳 (No. 45; 4号竪穴住居跡) | 24. オオムギ 胚乳 (No. 89; 4号竪穴住居跡カマド) |
| 25. オオムギ 胚乳 (No. 163; 4号竪穴住居跡カマド) | 26. コムギ 胚乳 (No. 45; 4号竪穴住居跡) |
| 27. マメ類 種子 (No. 33; 3号竪穴住居跡カマド) | 28. マメ類 種子 (No. 31; 3号竪穴住居跡カマド) |
| 29. マメ類 種子 (No. 88; 4号竪穴住居跡カマド) | 30. マメ類 種子 (No. 88; 4号住居跡カマド) |
| 31. エゴマ 果実 (No. 216; 100号土坑) | |

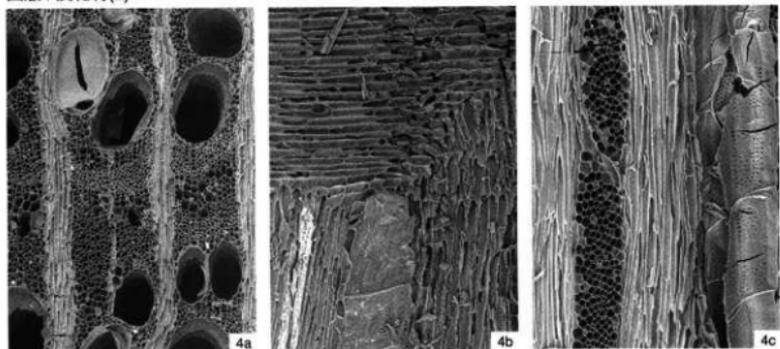
図版3 炭化材(1)



1. オノグルミ (No.115)
 2. コナラ属コナラ亜属コナラ筋 (No.151)
 3. クリ (No.136)
- a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m a
200 μ m b,c

図版4 炭化材(2)



4. エノキ属 (No.143)

a: 木口, b: 板目, c: 板目

200 μ m.a

200 μ m.b,c

第7章 富士山の火山活動と遺跡の消長・分布について

1 はじめに

本遺跡の調査では、上杉氏の分析により、富士山の火山噴出物を多数確認することができたが、なかでも、富士山の火山灰降下により焼失した焼木痕を検出できたことは、今回の大きな成果であった（第4章第5節）。この焼木痕は、火山噴火による周辺環境への具体的な影響を考えるうえで、貴重な事例となるものであるが、このような火山灰による災害の直接的証拠は、富士山麓においても決して多くはない。そのため、火山活動の人間活動への影響を考えるためには、こういった事例を今後も積み重ねていくことが重要となる。

本章では、富士山の火山災害の一例となる焼木痕が形成された曾利式期を中心に、本遺跡だけでなく、周辺域における富士山火山活動の影響を考えるために、富士山麓の遺跡の消長と分布について基礎データを提示し、今後の課題と問題点をまとめていきたい。

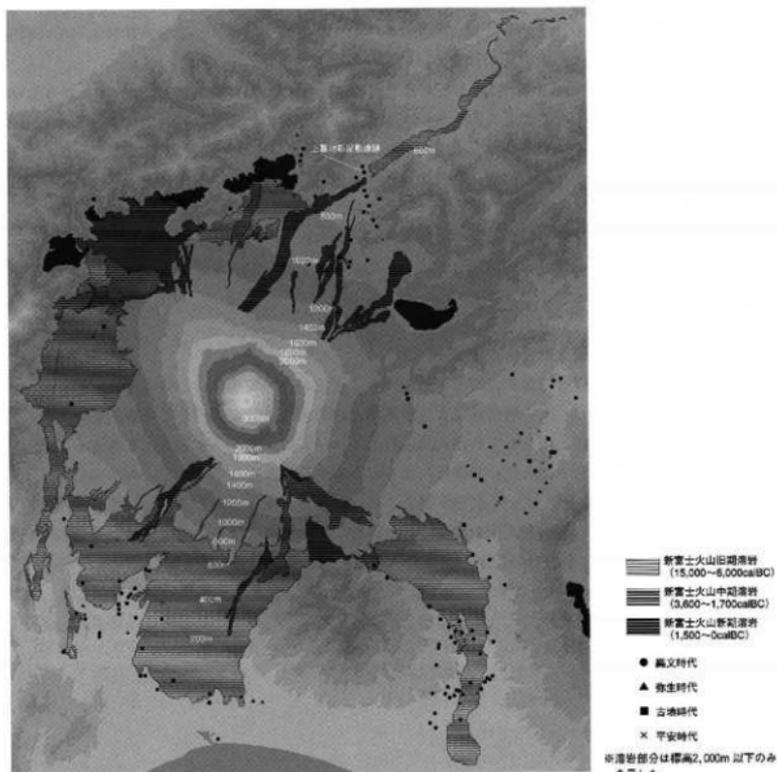
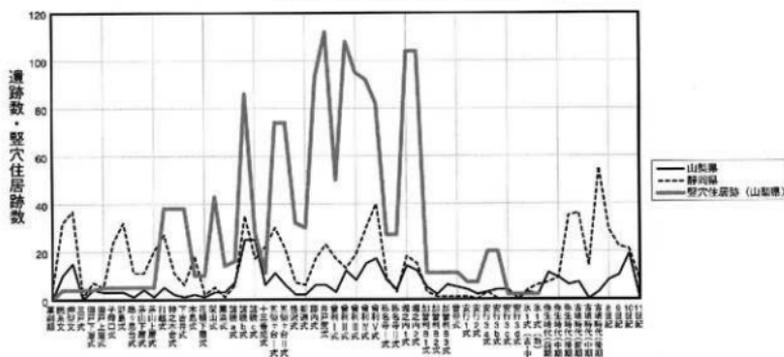
2 遺跡の消長

富士山の火山活動は、山麓において最も大きな影響を及ぼすと考えられるため、富士山周辺の遺跡の消長は、従来から注目されてきた（奈良 1984・長岡 1989）。今回もこの考えに則り、富士山麓の遺跡の消長を上器型式別に見ていくことにしたい。その対象は、富士山の火山活動の影響を受ける範囲となるが、火山灰降下範囲とすると西関東地方一帯といった広範囲に及ぶため、岩渕の流下範囲を元に範囲を定めた。山梨県側は、山中湖村・忍野村・富士古田町・西柱町・都留市・富士河口湖町・鳴沢村の301遺跡とし、静岡県側は、小山市・御殿場市・裾野市・長泉町・清水町・三島市・沼津市・富士市・富士宮市の315遺跡とした。各市町村自治体史及び発掘調査報告書を基にデータを作成したが、清水町・三島市・沼津市については、全遺跡を対象とすることはできず、その一部に留まる。また、型式区分についても、各資料の記述に基づいたため、統一した基準によるものでない。このように、その精度は高いものではないが、概略を把握するには十分と考えている。その成果が第22表になるが、富士山麓外と比較するため、山梨県全体の竪穴住居跡数のグラフも合成した（榊原 1999b 第3-19図）。

この表中の曾利式期に注目すると、曾利Ⅱ・Ⅲ式は、山梨県全体の竪穴住居数に比べて富士山麓の遺跡数は低調であり、曾利Ⅳ・Ⅴ式になると山梨県全体では減少するのに対し、富士山麓は増加傾向に転じる。個々の遺跡の火山灰堆積状況・型式別の遺構数の変化・土器型式の様相を調査していないため、山梨県全体と富士山麓のこの相反する傾向が、曾利式期に降下したとされる富士山の火山噴出物の影響の現れとは、現段階では言えないが、従来から指摘されていたように、富士山起源の火山灰と遺構の共伴事例が確認されている曾利Ⅲ～Ⅳ式期には、改めて注日していく必要があるだろう。

なお、本表では、これも従来から指摘されていた富士山麓の加曾利B1式以降の遺跡数の激減を再確認できる。ただ、少数の遺跡に限られるが、中谷遺跡・尾咲原遺跡・大中里坂下遺跡のように、その後も継続していく遺跡はあり、遺跡立地の低地化に起因する未発見遺跡の存在や八ヶ岳山麓等で指摘されている同時期における遺跡数の減少と連動した限られた地域への遺跡の集中化の現れである可能性も考慮の必要がある（榊原 1999b、新津 1992）。また、暦年較正年代で3,500calBC以降に富士山の爆発的噴火が顕著となり、湯船第1スコリア（S-10・S-11）などが噴出されること（宮地 2007）、3,800～3,730calBCとされる加曾利B1式以降の遺跡数の減少には、年代親のズレも大きく、曾利式期のように火山灰と遺構の共伴という直接的証拠も、問題となる堀之内2式後半～加曾利B1式については得られておらず、唯一、加曾利B2式末～加曾利B3式前半とされる中谷遺跡の竪穴住居跡中で、湯船第

第22表 富士山麓の遺跡数の変化



第86図 富士山麓の遺跡分布 (溶岩分布は、津屋 1968b より作成し、その年代は山元 2005より引用した。)

1スコリアとされる火山灰が、現在までに得られているのみである(奥・奈良 1981、百瀬 1999b)。そのため後晩期の遺跡数減少の原因に、富士山の火山活動の活発化のみを挙げることはできず、複数の要因を視野に入れていく必要がある。

3 遺跡の分布

次に、本来の遺跡分布と見かけ上の遺跡分布の齟齬の問題について指摘したい。第86図は、津屋氏の富士山火山地質図(津屋 1968b)及び1/25,000数値地図を元図に、富士吉田市・忍野村・富士河口湖町・鳴沢村・富士宮市・富士市・長泉町・裾野市・御殿場市・小山町の一部の遺跡分布を時代別にプロットしたもので、複数の時期に跨る遺跡については、古い時代を優先して示した。富士山麓の遺跡分布の問題は、従来から指摘されてきたところであるが、富士山麓は大量の火山噴出物に覆われているため、その遺跡分布も特異なものとなっており、以下に要点を列記したい。

- ① 遺跡は、水が地下へ浸透してしまう溶岩上には少なく、湧水が多い溶岩末端に多い。
 - ② 新富士火山旧期溶岩などの古い溶岩で、土壌が発達した溶岩上には、遺跡が分布する。
 - ③ 各溶岩下は調査が及ばないため、本来の遺跡分布が不明である。
 - ④ 新富士火山新期溶岩が、遺跡分布地に大量に流下している富士北麓は、富士南麓に比べて、縄文時代～平安時代の遺跡分布の空白地が目立つ。
 - ⑤ 御殿場岩屑流が940～890calBCに流下した富士東麓は、縄文時代以前の遺跡の空白地となっている。また、これほど大規模でなくても、富士大沢・吉田入沢に代表されるように、火砕流及び土石流は頻発しており、本市の上中丸遺跡のように厚さ1mの火砕流若しくは土石流の層で埋没している遺跡もあるため、遺跡の空白地の中には、同様の堆積物で遺跡が埋没している事例も多いとみられる。
 - ⑥ 富士山起源の火山灰は、偏西風の影響を強く受けるため、富士山西麓や南麓に比べて北麓や東麓で、火山灰に埋没する遺跡が多く、未発見の遺跡も多いとみられる。
- 富士山麓での各時代の遺跡分布の解釈は、こうした点をふまえておこなう必要があることを、改めて強調しておきたい。

4 火山災害の一事例—縄文時代中期後葉—

最後に、本遺跡で確認できた曾利式期の焼木痕から、火山災害の実態について考えたい。この焼木痕の存在から、富士山麓では、火山噴出物により自然環境が大きな影響を受けたことを垣間見ることができた。これは、今まで漠然と語られてきた火山災害のイメージに、実データをもって答えることができたという意味で大きな成果であった。今後は、こうした事例を積み重ねることで、火山噴出物による自然環境への影響の実態を把握していく必要がある。また、今回、遺跡の消長をデータ化した結果、火山噴出物が大量に降下している曾利式期や縄文時代後晩期においても、富士山麓における遺跡の断絶という状況はなく、火山災害と折り合いながら当時の人間社会が営まれていたことは否定できない。今後は、「火山災害=社会の断絶」といったイメージでなく、火山災害による自然環境の変化を通して、人間社会がどのような影響を受け、それに人間社会がどのように対応したかを、具体的な発掘事例を積み重ねつつ、解明していく必要がある。

引用・参考文献

著者・編者機関	刊行年	論文名	書 名
山本亨一郎	1966	「土器を使う人々が住みはじめたころの遺 瀬戸時代」	『山口県史』
津田弘彦	1968	「富士山の地形・地質」	『富士山 富士山総合学術調査報告書』
津田弘彦	1968	「富士山 富士山地質図」	『富士山 富士山総合学術調査報告書』別冊
山田正久・宇野五郎	1969	「神奈川縣巻野字平沼町遺跡の調査」	『古代』52
中野隆雄	1969	「第1章 富士山のあけぼの—百年前物の遺跡と人々の生活」	『富士山史 上巻』
橋本京六	1971	「第1章 『高遠町や月の輪町遺跡—ふると富士山のあけぼの』」	『富士山史 上巻』
橋本京六	1972	「富士山 山影遺跡と遺跡—縄文時代中期後半を中心に—」	『研究』10-1
『縄文遺跡』	1974	『中流中流遺跡編纂委員会』	『中流中流遺跡編纂委員会』
曾大造遺跡発掘調査団	1976		『中流中流遺跡』
西宮隆三・山田哲夫	1977	「瀬古吉野之木台遺跡出土の縄文時代遺物—とくに早期米—前期初期の土器を中心として—」	『調査研究』2
富士山総合学術委員会	1978		『富士山見聞文化財報告1(打越遺跡)』
津田弘彦	1978	「第6章 時論 第2. 関原遺跡の火山灰層と遺物について」	『前掲地の文化財調査報告 第2編 前掲地発掘遺跡』
町田洋	1978	「第6章 時論 第1. 関原遺跡の火山灰層」	『前掲地の文化財調査報告 第2編 前掲地発掘遺跡』
加藤孝隆考古学研究所	1979		『修善寺大塚』
山内清男	1979		『日本元史上巻の編纂』
森山隆雄	1980		『藤島貝塚の研究』
町田洋	1980	「『富士テツタと古代遺跡』」	『考古学ジャーナル』17年
橋本京六	1981		『心谷・宮島遺跡』
森山隆雄	1981	「山形県赤松—根川流域—の大型土器遺物と遺跡—」	『考古学ジャーナル』17年
竹野直吉	1982	「考古学」	『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
曾大造	1982	「早期米類の貝殻類雑文土器の調査とその編年」	『人間・遺跡・遺物』わが国考古学編 1
野中研吉古岡人会縄文研究グループ編	1983		『縄文時代より早期米・前期初期の諸問題 土器調査報告集』
中内隆雄	1983	「貝殻文」	『縄文文化の研究 第5巻 縄文土器』
『貝文』	1983	『縄文』	『縄文文化の研究 第5巻 縄文土器』
堀部孝男	1984	「藤原遺跡出土の縄文土器」	『加多古文化研究』1
津田弘彦考古学同人会	1984		『神奈川考古 シンポジウム縄文時代前期米・宮原遺跡の縄文土器調査報告』18号
『縄文』	1984		『縄文』
山形県教育委員会	1984	「山形県東部(根川流域) における縄文時代遺跡群の調査—富士山の火山灰層と遺跡—」	『山形考古』14
津田洋	1984	「『八ヶ岳遺跡における縄文遺物・戦前の遺跡について』」	『手塚考古』47
津田洋	1985	「第1章 瀬戸時代」	『上九一色村誌』
中山誠二	1985	「早期における弥生文化の成立」	『研究』2 山形県立考古博物館・山形県縄文文化センター
上村隆	1985	「考古」	『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
岡本秀一・渡辺行・倉田忠久	1985	「考古」	『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
小寺正久・田代孝・森山隆雄	1985		『山形県立考古博物館・山形県縄文文化センター調査報告第17巻 秋田遺跡1』
山形県立考古博物館	1986		『山形県立考古博物館・山形県縄文文化センター調査報告第18巻 西山遺跡1』
山下隆雄	1987	「『高遠町や月の輪町遺跡—ふると富士山のあけぼの』」	『加多古文化研究』1
大井俊夫・藤井正樹	1988		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
前代孝・中内隆雄・森山隆雄・曾大造	1988	「第3編 村の歴史 第1章 考古学より見た過去・歴史時代」	『修善寺村誌』1
高橋直道	1988	「『前富士山の活動史』」	『縄文学』34-5
山下隆雄	1988	「『前水ノ上貝塚で発見されたアコナキ火山灰層と縄文土器』」	『加多古文化研究』4
大井俊夫・藤井正樹・渡辺忠久	1989	「『第3編 村の歴史 第1章 史時代より中世まで』」	『修善寺村誌』1
『村の歴史』	1989		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
高橋直道	1989	「『前高遠町や月の輪町遺跡群—見かけの分布と真の分布—』」	『神奈川考古』25
山下隆雄	1989	「『前高遠町や月の輪町遺跡群—見かけの分布と真の分布—』」	『加多古文化研究』5
渡辺忠久	1990		『山形県立考古博物館・山形県縄文文化センター調査報告第19巻 中法遺跡』
岡田孝男	1990		『前14古岡市土器調査報告 古岡遺跡発掘調査報告書』
小山町歴史文化専門委員会	1990	「『第1章 考古』」	『小山町史 第1巻 原始古代中世資料編』
藤田泰	1990	「『高遠町や月の輪町遺跡群—見かけの分布と真の分布—』」	『富士山史 別巻1 考古』
藤田泰	1990		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
前代孝・藤井正樹	1991		『二枚貝類』
藤田泰	1991		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
小西隆雄・中村清道	1991		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
小宮山孝	1992	「『中部高遠町や月の輪町遺跡群—見かけの分布と真の分布—』」	『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
中野隆雄	1992	「『第2章 瀬戸時代の縄文』」	『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
中野隆雄・渡辺忠久・石田明男	1992		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
新井隆	1992	「『縄文時期遺物の調査と調査—八ヶ岳東麓—金生遺跡を中心に—』」	『縄文時代』3
町田洋・新井河大	1992		『山形県立考古博物館・山形県縄文文化センター調査報告第20巻 下栗田遺跡』
中山誠二	1993	「『早期米土器の調査と調査—時期の確定—』」	『研究』9 山形県立考古博物館・山形県縄文文化センター
曾大造・小寺正久・藤井正樹・土著美穂・藤田泰	1993		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
山下隆雄	1993	「『前水ノ上貝塚・八ヶ岳式土器の再検討—加多古二枚貝類出土土器を中心とした縄文前期後半の土器群の再検討—』」	『加多古文化研究』7
岡本孝二・小原忠孝	1994		『手塚大学文学部 考古学研究所編第1巻 前編/前編 前掲地出土報告書』
小田忠孝	1994		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
金田直道	1994		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
小原忠孝	1995		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』
小野正文	1996		『前掲地出土 別巻1 考古・民俗』

引用・参考文献

著者・編者機関	刊行年	論文名	書名
白根武二	1996	「第2章 砂原郡の自然災害史 第1節 暴風・古代・中世 1 白根にみる自然災害(2) 尾越の記録にみる自然災害」	『静岡県史 第8巻 自然災害史』
長沢武志・笠原ゆき	1996		『山形県歴史文化財センター調査報告書 第115集 中津湖跡 湧久尾遺跡』
岡田浩志	1997	「第1章 山ノ西遺跡集土器の分類と編年」	『シラカケ 採集と研究 本報』
濱土市田史学研究会	1997		『池之木遺跡発掘調査報告書』
飯沼伸博	1997		『山形県歴史文化財センター調査報告書 第120集 津田遺跡』
河部朝樹・水木舞	1998	「第4章 まとめ 第2節 富士山の火山活動と遺跡」	『富士山初見史 史料編 第1巻 自然・考古』
上杉尚	1998	「第3章 地質 第4節 富士山時代」	『富士山初見史 史料編 第1巻 自然・考古』
上杉尚	1998	「第3章 地質 第5節 幸市岡遺跡域の富士山時代史跡物(アツト)と南谷遺跡」	『富士山初見史 史料編 第1巻 自然・考古』
上杉尚	1998	「富士山噴出地帯第四紀地質図」	『富士山初見史 史料編 第1巻 自然・考古』
水木舞	1998	「第1章 富士山の遺跡と遺物」	『富士山初見史 史料編 第1巻 自然・考古』
水木舞	1998	「第2章 発掘された市内の遺跡 第3節 西丸尾遺跡」	『富士山初見史 史料編 第1巻 自然・考古』
長沢武志・菅田学	1998		『山形県歴史文化財センター調査報告書 第146集 津田遺跡調査報告書』
中野順雄・水木舞	1998		『清水史誌 資料編2(考古)』
菅田学・三田村美奈	1998		『山形県歴史文化財センター調査報告書 第154集 大津湖跡 湧久尾遺跡』
山形県	1998		『山形県史 資料編1 原始・古代1』
河部朝樹	1999	「縄文時代早期後半土器編年における北関東地方の係属—基本瓦片群(山形県)と出土器の型式学的検討—」	『総合考古学』166
今泉保史	1999	「山形県内の縄文土器」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
今泉保史	1999	「山形県内の縄文土器」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
今泉保史	1999	「第2章 山形県の考古学編年 2 縄文時代の編年 前期前半(溝敷式土器)」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
今泉保史	1999	「第2章 山形県の考古学編年 2 縄文時代の編年 中期前半(五葉式土器)」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
今泉保史	1999	「第2章 山形県の考古学編年 2 縄文時代の編年 中期後半(磐城式土器)」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
上杉尚	1999	「西尾見及び西尾城の地形分析」	『西尾見集 資料編1巻 自然 地質 原始・古代』
上杉尚・中田尚	1999	「第1章 地質」	『西尾見集 資料編1巻 自然 地質 原始・古代』
小野正文	1999	「第1章 山形県の考古学編年 2 縄文時代の編年 早期」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
小柳哲明・奈良幸夫	1999	「第3編 原始・古代」	『西尾見集 資料編1巻 自然 地質 原始・古代』
河内学	1999	「第2章 遺物・遺物と自然科学 1 年代・年代の決定」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
藤原浩一	1999	「史前研究から見る食生活—古代—中世を中心—」	『食の文化—遺物・遺物から何を学ぶか— 香取大学山形文化財研究所 研究報告集第10巻』
藤原浩一	1999	「第2章 作図と編年 2 縄文時代の住居と遺物」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
藤原浩一	1999	「第3編 村の歴史 第1節 原始時代」	『湯山史誌』
外山芳一	1999	「第2章 遺物・遺物と自然科学 2 歴史の復元」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
外山芳一	1999	「第2章 遺物・遺物と自然科学 3 人間活動の解明(1) 生活の解明」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
中山武二	1999	「第3章 山形県の考古学編年 3 弥生時代の編年」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
中山武二	1999	「第3章 住居と農具 3 弥生時代の住居と農具」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
中山武二	1999	「第3章 住居と農具 3 弥生時代の住居と農具」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
宇野静	1999	「第3章 住居と農具 3 弥生時代の住居と農具」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
細田壽	1999	「東関東における縄文式土器の様相」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
細田壽	1999	「東関東における縄文式土器の様相」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
松田史太郎	1999	「神奈川における縄文・b式土器の様相」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
松田史太郎	1999	「神奈川における縄文・b式土器の様相」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
百澤五寿	1999	『清水天皇山式の入形文(上)』	『長野県考古学』81
百澤五寿	1999	『清水天皇山式の入形文(下)』	『長野県考古学』82
山下静子	1999	「1. 阿場における縄文土器式様研究の成果と展望 東海地方系土器」	『縄文時代』10
山下幸二・藤田正明	1999	「第1章 山形県の考古学編年 3 弥生・平安時代の編年」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
阿部浩史	2000	「第2章 縄文時代」	『富士山初見史 史料編 第1巻 原始・古代・中世』
上杉尚	2000	「富士山初見史 遺跡集 第1巻 原始・古代・中世」	『富士山初見史 史料編 第1巻 原始・古代・中世』
飯舟孝	2000	「農業考古学1(遺跡10巻の解説)」	『風土文化財ニュース』95 奈良県文化財研究所歴史文化財センター
早坂真人	2000	「埼玉における縄文・行徳式土器」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
早坂真人	2000	「埼玉における縄文・行徳式土器」	『第12巻 縄文とミナ— 前期後半の再検討—』
有馬光敏	2000	「埼玉における縄文・行徳式土器」	『山形県史 資料編2 原始・古代2』
高田賢二・内島かおり	2001		『長野県史 資料編2 原始・古代2』
石原日出志	2002	「磐城式土器の形成過程」	『長野県史 資料編13 大正昭和編年』
大月幸徳研究委員会	2002		『長野県考古学』99、100
渡瀬晋己・滝沢誠・奥村秀夫	2002	「第2巻 縄文時代 第3章 弥生時代 第4章 古墳時代 第5章 原始時代」	『長野県史 資料編 考古』
野崎浩	2002		『山形県史 資料編 考古』
山下静子	2002	「松浦式と上ノ山式について— 柳子氏の論文に答える—」	『伊勢湾考古』16
上杉尚	2003		『地学見聞案内「富士山」』
長野県教育委員会	2003	「長野県歴史文化財センター調査報告書」	『長野県歴史文化財センター調査報告書』
長土文雄	2003		『長野県歴史文化財センター調査報告書』
柳立雄生等発掘班	2003		『歴史を語る会「オレン」』
柳立雄生	2003	「富士山初見史の自然環境史に就いて」	『山形県地質学研究会報告』8
小山西人・松尾英志・村上公久	2003	「第1編 日本の歴史にみる自然災害 2. 噴火 2.1 富士山の噴火発生」	『ドキュメント災害史 1700-2000』
中西寛	2003	「武蔵野分室遺跡北方地区における早期新石器— 信濃—」	『東京都歴史文化財センター調査報告書 第130集 武蔵野分室遺跡北方地区 第3分室』
三田村美奈	2003	「総見遺跡土層文化層から推定した縄文早期土器について」	『長野県歴史文化財センター調査報告書』

著者・編集機関	発行年	論文名	書 名
三村典孝	2003	「山梨の縄文時代早期の土器と土器製作技術の検討」	『研究紀要』19 山梨県立考古学博物館、山梨県縄文文化センター
白土善利	2003	「大神山土器の経路と東段式土器の成立」	『伊勢湾考古』17
宮岡誠二	2003		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 宮の前進路』
山梨県縄文文化センター	2003		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第206集 武蔵国分寺遺跡北方区』
平塚由真由、北谷正哉編撰委員会	2003		『平成9年山梨・北谷正哉縄文発掘調査報告書』4 (D-K)、6 (A-D)、13、14、15 (A-C)、25、28A (C)。
宮原一夫	2004		『多摩川流域縄文時代前期の土器』
宮原一夫	2004		『第17報 縄文セミナー 晩期後の再検討』
山下静枝	2004		『第17報 縄文セミナー 晩期後の再検討(記録集)』
小笠原本勝	2005		『伊勢湾考古』18
小笠原本勝	2005		『第17報 縄文セミナー 晩期後の再検討(記録集)』
小笠原本勝	2005		『第18報 縄文セミナー 早期後の再検討』
静岡市教育委員会	2005		『静岡市縄文文化センター調査報告書』
浜ヶ木剛	2005		『第17報 縄文セミナー 晩期後の再検討(記録集)』
多摩市教育委員会	2005		『第17報 縄文セミナー 晩期後の再検討(記録集)』
中沢謙一	2005		『第17報 縄文セミナー 晩期後の再検討(記録集)』
東京大学考古学委員会	2005		『第17報 縄文セミナー 晩期後の再検討(記録集)』
山梨県縄文文化センター	2005		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
三田村美穂	2005		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
白土善利	2005		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
白土善利	2005		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
山元孝哉、高田高、石塚吉治、中野俊	2005		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
香取会社アムナリサークル編	2005		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
ふとん展覧会	2006		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
物産生活立派土器展覧会	2006		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
初木忠雄	2006		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
新藤大輔	2006		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
山下静枝	2006		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
館山幸彦、正木孝行	2006		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
上野信	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
清水達四	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
小川真人	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
高田純博	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
野瀬洋子	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
野田正人、藤田正一、及川司、宮城大輔二	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
高田純博	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
アノノウェイ株式会社	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
新藤大輔	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
山元孝哉	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
山元孝哉	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
小林隆一	2007		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
阿部俊、酒匂しお	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
大田区郷土博物館	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
小畑二十代	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
藤原浩一	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
清水孝子、宮名太郎、及川司、高田純博	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
高田純博	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
関和女子大学人間文化学部歴史文化学持中史学部総合学術センター	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
伊本悠希	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
田代孝	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
片岡紀之	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
山元孝哉	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
高田純博	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
矢島隆一、小沢悠	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
矢野隆一	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
須原三治	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
阿部孝志	2008		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
田代孝	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
後谷信之	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
後谷信之、澤川洋	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
金子直行	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
小嶋智	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
早田謙平	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
早田謙平	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
藤原浩一	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
藤原浩一	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』
伊藤信之、後谷信之	2009		『山梨県縄文文化センター調査報告書 第207集 厚木遺跡』

引用・参考文献

著者・編集機関	発行年	論文名	書 名
明治大学学術フロンティア推進事業事務局	2009		『旧石器と人類』 第4巻 近世X線分析装置による湖沼石製遺物の起源地域定一施設ゲータ集(1)―』
福田晋治・渡木勉介	2009	『縄文早期土器の住居跡と遺構―富士見市内の事例から―』	『打縄式土器とその時代 資料集』
福田弘美	2009	『中部高地における縄文中期初期の様相』	『第22回 縄文セミナー― 中期初期の再検討―』
福田弘美	2009	『中部高地における縄文中期初期土器群』	『第22回 縄文セミナー― 中期初期の再検討―』
吉本一男	2010	『山を越え、川に沿う、家集：瀬南系土器群式部群系系土器の分布』	『全国縄文考古学会2010年度研究会 中部高地南部における縄文系土器の分布』
阿部芳彦	2010	『縄文木土器式土器の研究―中部地方における縄文時代早期後遺土器群の発見』	『考古学雑誌』 6
橋本真由	2010	『平野遺地における後生中期末から後期の縄文系土器』	『山形県考古学協会2010年度研究会 中部高地南部における縄文系土器の分布』
今村清爾	2010		『上野から見る縄文人の生活』
金子美行	2010	『縄文早期土器の集積と社会』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
小池広史	2010	『新設遺構地域の後期後生土器』	『日本縄文考古学会2010年度研究会 中部高地南部における縄文系土器の分布』
小嶋晋	2010	『遺・屋遺跡と下ノ大塚遺跡から出土した打縄式について』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
小嶋晋	2010	『東海地方における早期後生―中期初期の住居と土器』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
小嶋晋	2010	『東海地方における早期後生―中期初期の住居と土器』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
佐藤純樹	2010		『新設遺構』
伊村信也ほか	2010		『河内町遺跡発掘報告書(2004-04.01立-2004-05.01立)』
早坂真人	2010	『打縄式土器の範囲、流通、年代』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
早坂真人	2010	『論議：打縄式土器』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
森島三男	2010	『「打縄式」への研究史』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
森島三男	2010	『巨形・大型は存在するか。』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』
文化庁文化財部記念物課	2010		『全国調査のびきり―整理・報告書編―』
福田晋治	2010	『縄文早期土器の住居跡と遺構―富士見市内の事例から―』	『考古学リーダー18 縄文前期の考古学―早期土器、埼玉県打縄遺跡とその時代―』



1 1号整穴住居跡



2 1号整穴状遺構



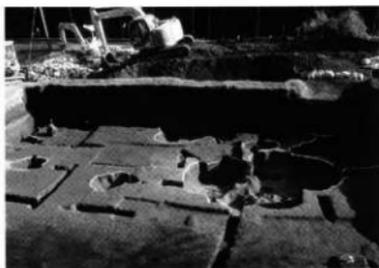
3 2号竖穴状遗構



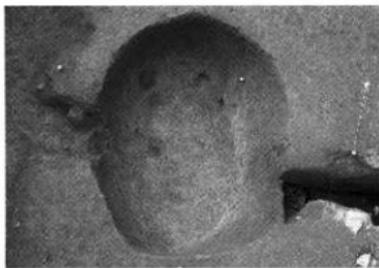
4 3号竖穴状遺構



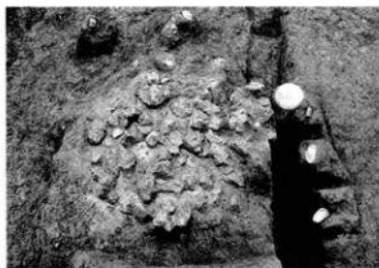
5 4号竖穴状遺構



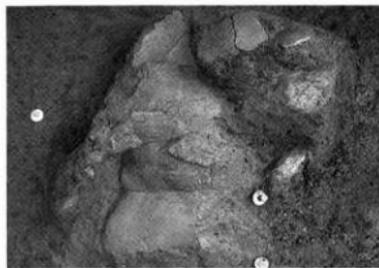
6 B区北東部13層上面 (北西から)



7 367号土坑



8 3号集石遺構



9 3号土器集中



10 3号焼土跡



11 焼木痕断面



12 A区10層上面焼木痕(北東から)



13 弥生土器(No.623)出土状況



14 A区7層上面土坑群(南西から)



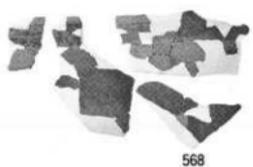
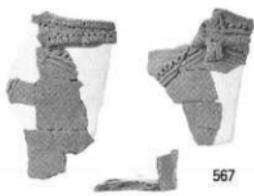
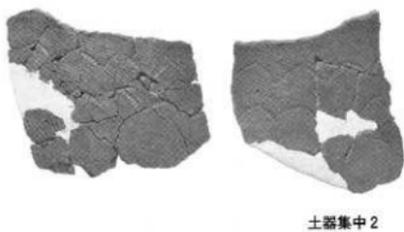
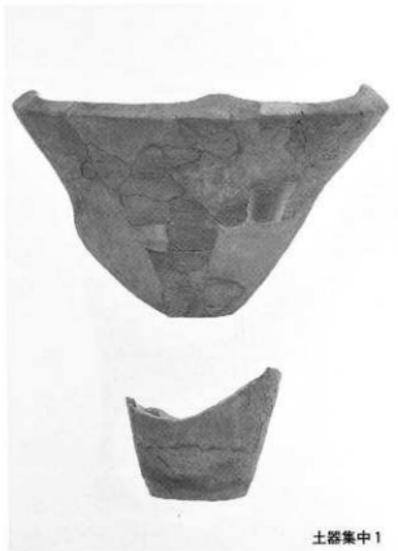
15 2号竪穴住居跡

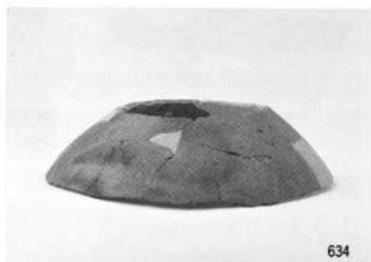


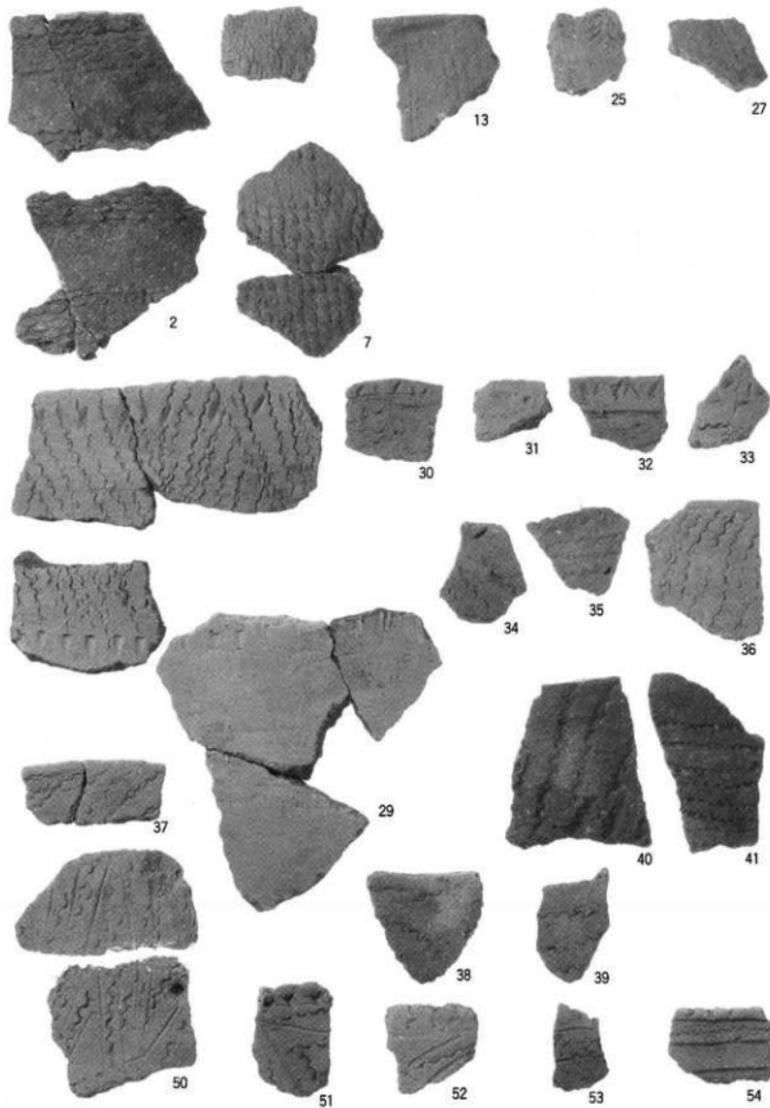
16 4号竪穴住居跡

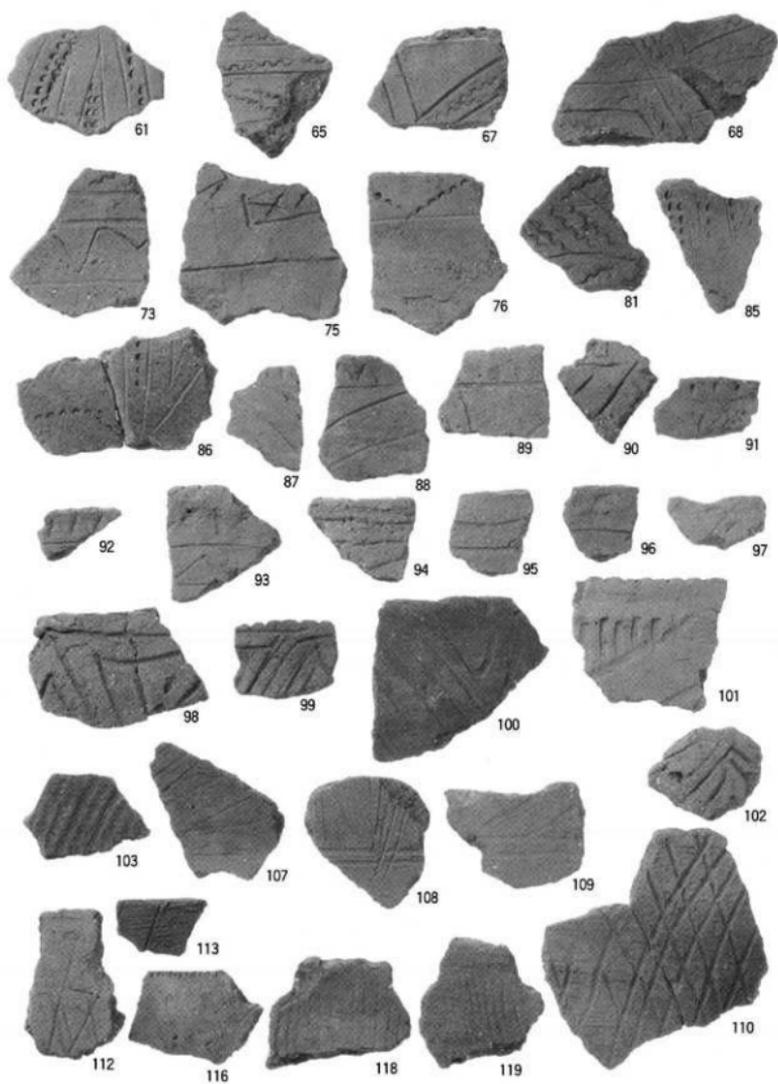


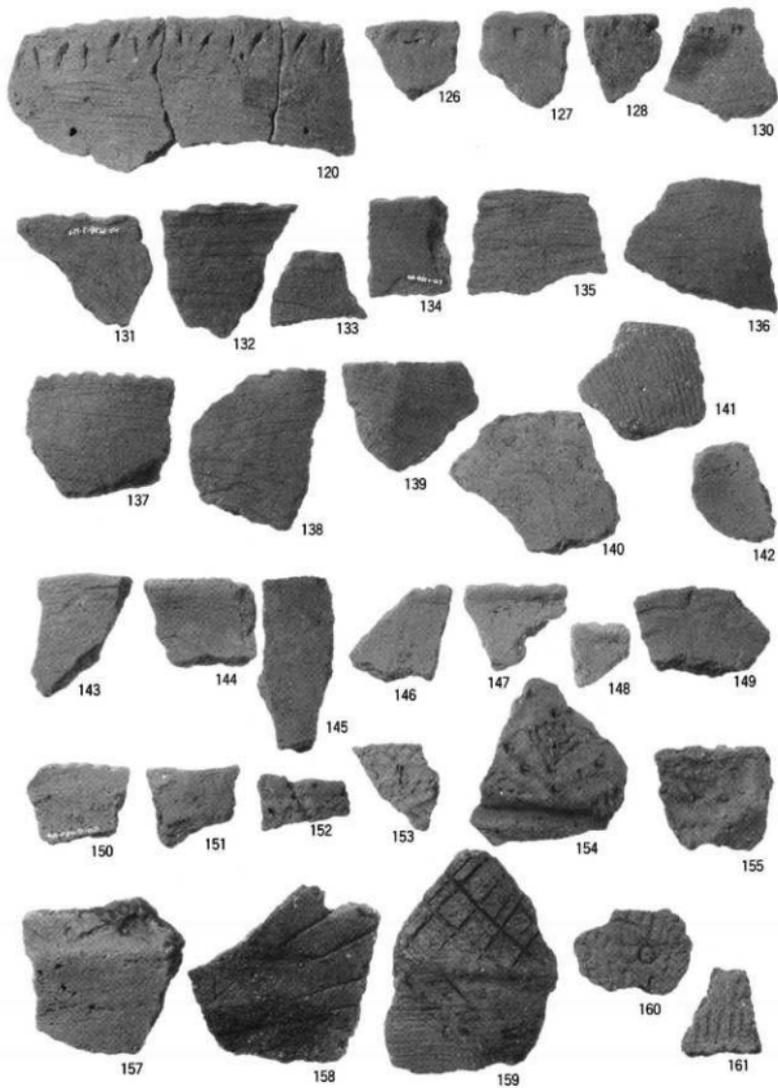
17 3号竪穴住居跡

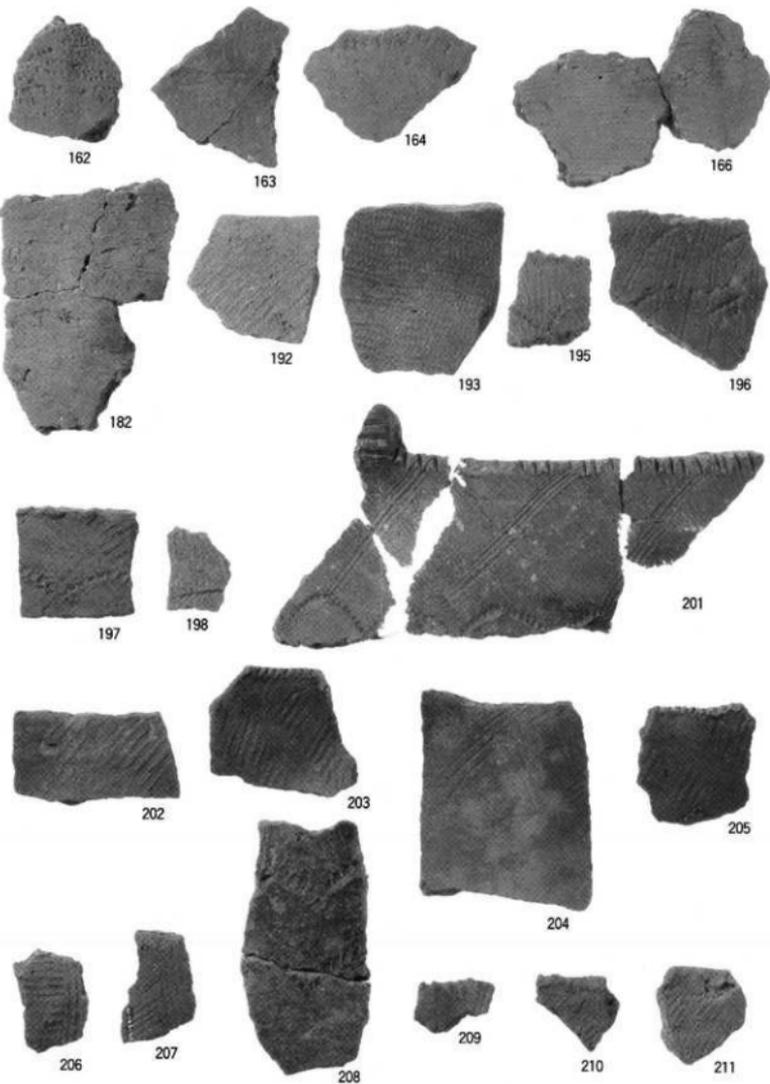


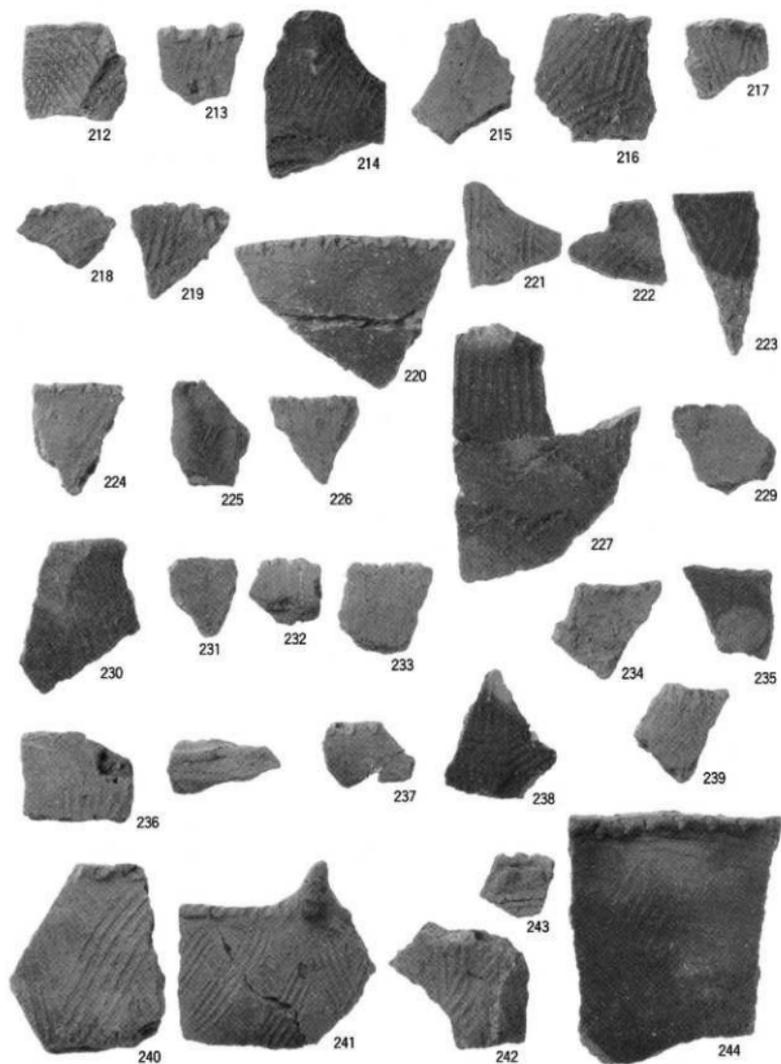


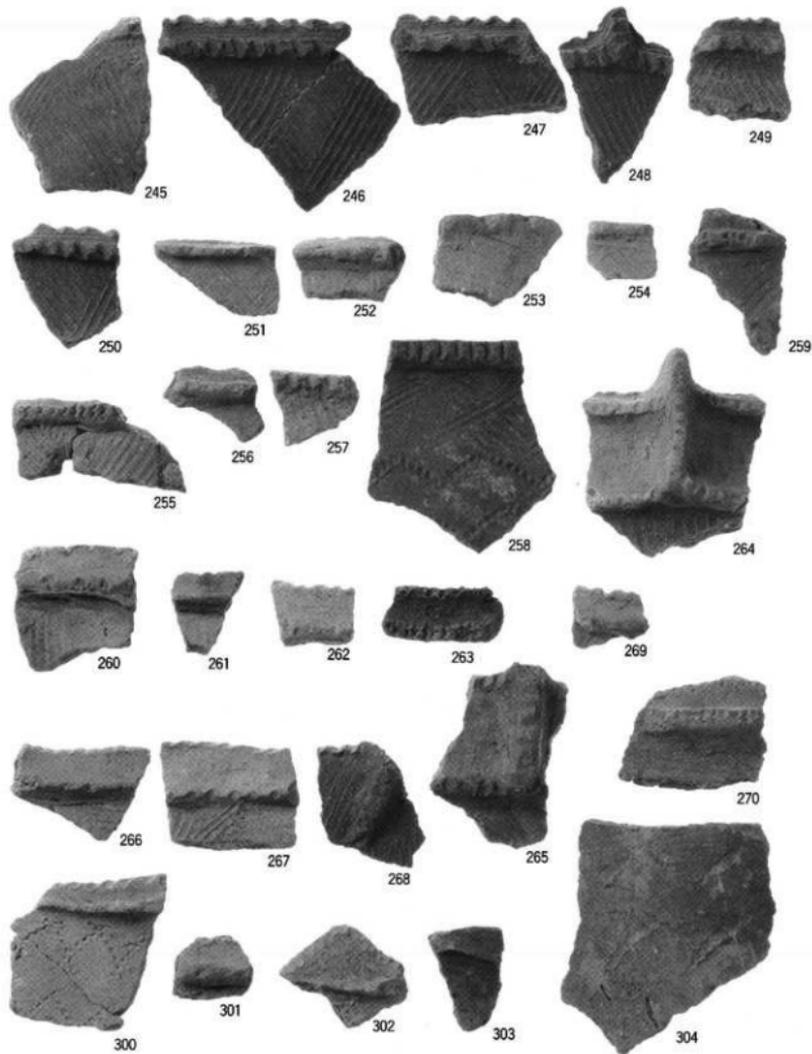














305



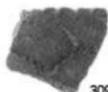
306



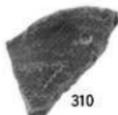
307



308



309



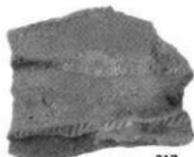
310



311



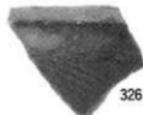
312



317



318



326



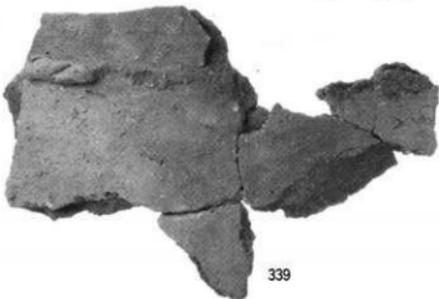
335



320



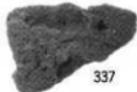
321



339



336



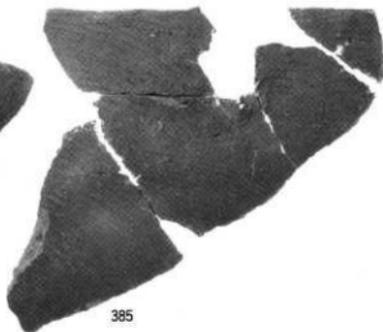
337



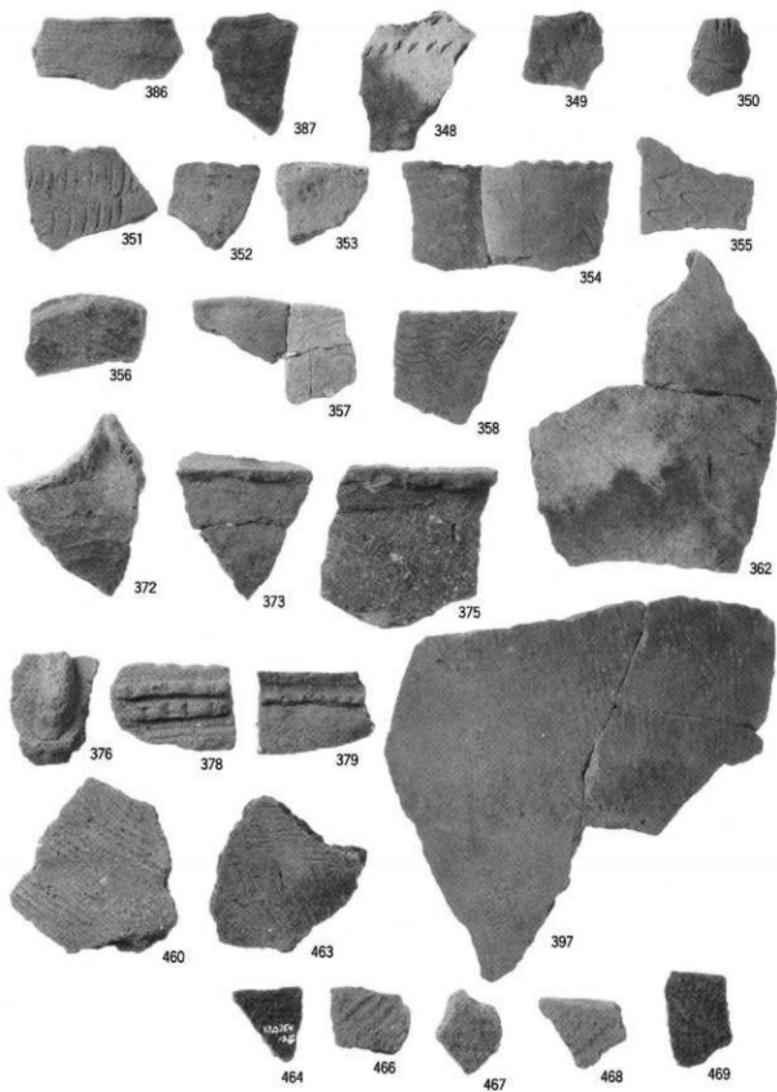
340

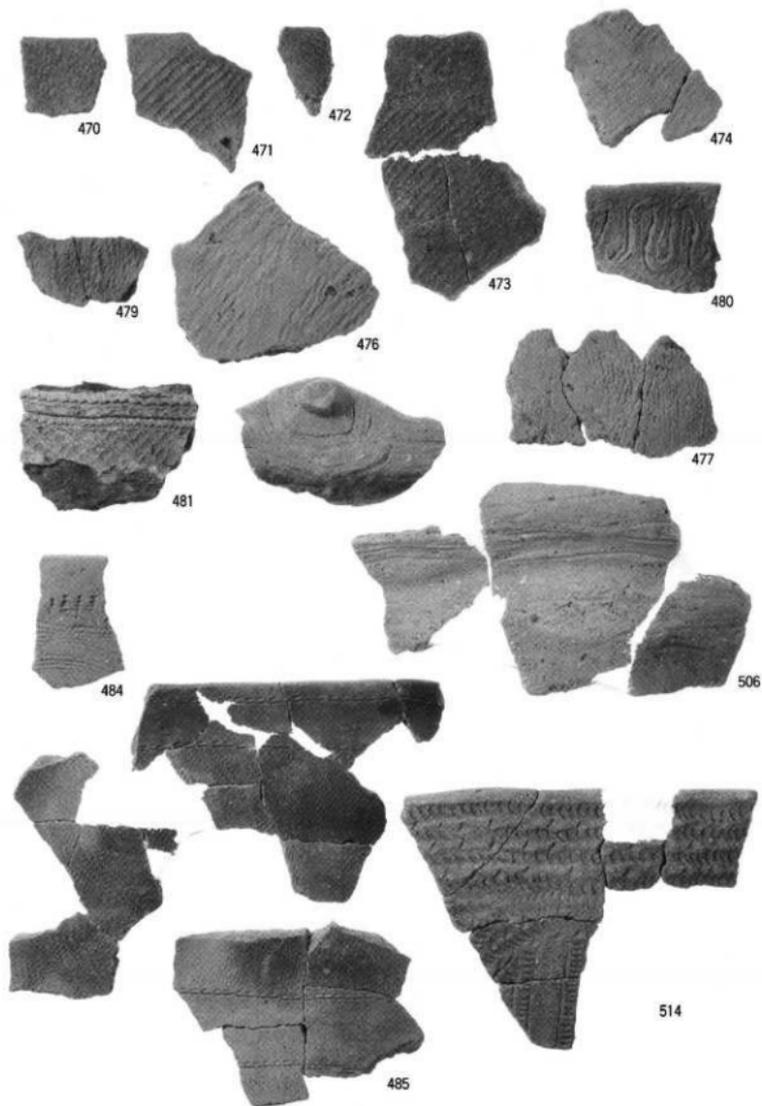


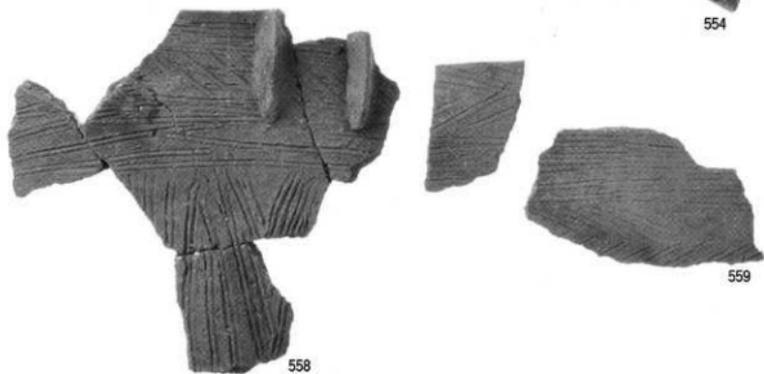
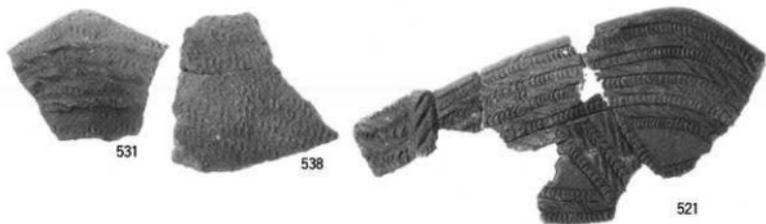
396



385









571



570



572



583



573



586



589



591



593



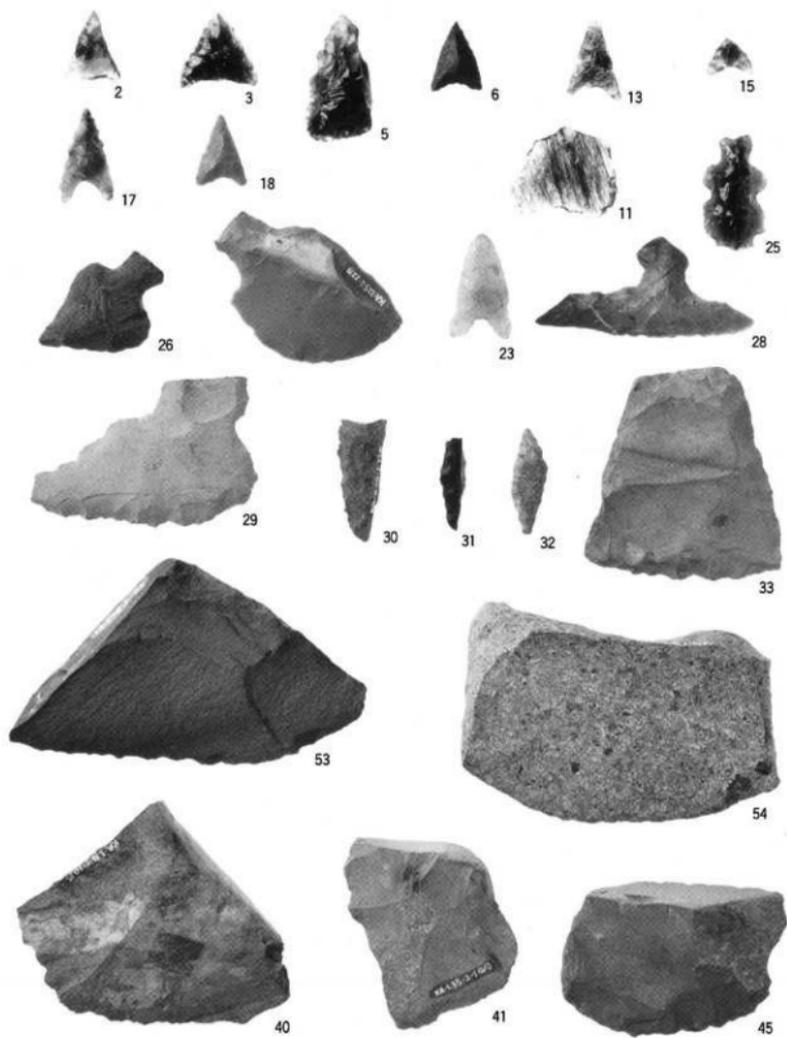
595

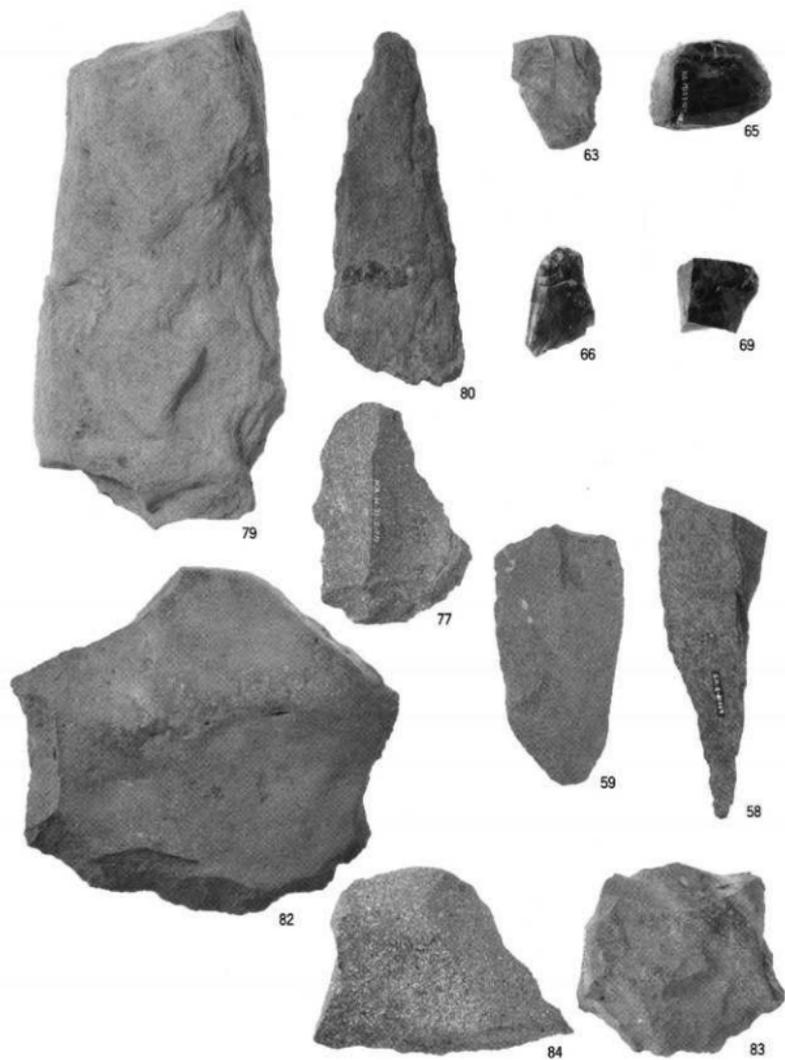


621



620







87



88



109



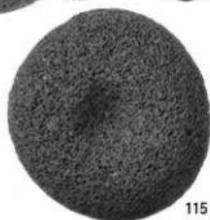
102



112



97



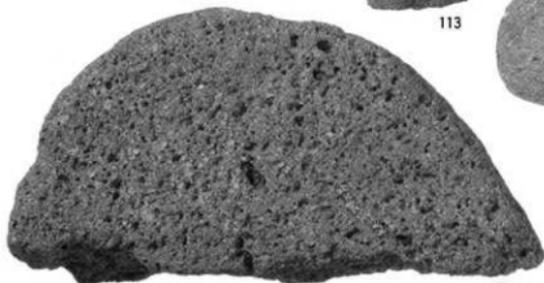
115



113



117



116

報告書抄録

ふりがな	かみくれちんやしきいせき							
書名	上幕地新屋敷遺跡							
副書名	農業集落遺建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	富士吉田市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	篠原 武							
編集機関	富士吉田市教育委員会歴史文化課							
所在地	〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1 富士吉田市歴史民俗博物館 TEL 0555-24-2411							
発行年月日	2011年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
上幕地新屋敷遺跡	富士吉田市 上幕地字 新屋敷	19202		35° 30′ 55.28″	138° 49′ 42.45″	2008.7.3 ～ 2009.3.18	1,300㎡	農業集落 遺建設工 事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
上幕地新屋敷遺跡	集落	縄文時代早期	竪穴住居跡1軒・竪穴状遺構 4基・炉穴2基・土坑9基・ 集石遺構9基・土器集中3基		土器・石器・ 焼礫	田戸上層式併行と打越 式がまをもって出土。 打越式の遺構も多数検 出。		
	散布地	縄文時代前期	土器集中1基		土器・石器・ 焼礫	諸儀a～b式が多数出 土		
	集落	縄文時代中期 前葉	焼土跡9基・土坑1基		土器・石器・ 焼礫	十三舌提式～五領ヶ台 I式が多数出土。		
	森林	縄文時代中期 後葉	焼木痕217基			富士山の火山灰により 焼失した樹木の痕跡を 検出。		
	集落	弥生時代中期 後半～後期	土坑90基		土器	列状に連なる土坑群を 検出。底部穿孔された 赤彩の甕が出土。		
	集落	平安時代中期	竪穴住居跡3軒		土器	竪穴住居跡3軒を 検出。		
要約	富士山から噴出した大量の火山灰により覆われているため、縄文時代の包帯層が良好に遺存し、各時代の遺構や土器のまとまりを層位別に検出することができた。また、この火山灰により焼失したと考えられる樹木の痕も大量に検出でき、火山災害と人間社会の関係を考えていく上で、貴重な事例を得ることができた。							

富士吉田市文化財調査報告書 第8集

上暮地新屋敷遺跡

—農業集落遺建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成23年3月31日発行

編 集 富士吉田市教育委員会 歴史文化課

山梨県富士吉田市上吉田2288-1

TEL 0555-24-2411

発 行 富士吉田市教育委員会

山梨県 富士・東部農務事務所

印刷所 株式会社 サンニチ印刷

〒400-0058 山梨県甲府市宮原町608-1

TEL 055-241-1111

